
月の姫と英雄たち

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の姫と英雄たち

【Nコード】

N6881U

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

湿気が支配していた6月から猛暑が支配する7月。

夜となつても誰もがハンカチか日傘を片手に歩く中を一人の娘が歩いていた。

茶色の髪に白い肌と黒より若干だが色の薄い紺色の瞳をした娘・・・
織姫夜姫。

都内の公立大学に通う2年生で劇団員でもある。

そんな彼女はある日、夢を見た。

三国志の時代に行き、英雄たちから求婚されるといふ夢。

そして自分が戦闘をしている夢だった。

幼い頃からそんな夢は両手で数え切れないほど見て来たが、今回はハッキリと風景などが見えた。

ただの夢だと思っていたが、英雄達に求婚される所は女として憧れる所であった。

そして翌日、彼女は次の劇で着る着物などを一人、徹夜で仕立て上げた。

それを着て着心地などを確かめると……光に包まれた。

『ついに見つけました……我らが姫君』

誰かの声と共に夜姫は意識を失った。

序幕：探し求めた姫君（前書き）

彼女と初めて創作した物語です。

傭兵の国盗り物語とは逆に女性が主人公の逆ハーレムがメインで、三国無双をベースにしていますが、ハッキリ言って「どうなんだろう？」と思う程物語が滅茶苦茶です。（汗）

私生活が未だに収集できない状況ですが、今日が投稿する約束の日なのでしますが更新は何時になるのか分かりません！！

破綻擦れ擦れですが・・・頑張って完結させたいと思います！！

序幕：探し求めた姫君

湿った霏雨気だった6月が終わり猛暑の季節とも言える7月に入った。

今日の気温は34 とかなり高めで、誰もがハンカチや日傘を片手に暑い中を歩いていた。

夜になってもそれは変わらなかった。

そんな大勢の中に織星夜姫という娘が居た。

時刻は午後9時。

今まで自分が居る劇団の事務所に居たのでこの時間に帰る途中だ。

今年で20歳になる夜姫は首都郊外の築年50という古いアパートで一人暮らしをしている公立の大学生2年生。

容姿は茶色の長い髪を腰までストレートに伸ばしており肌が白く黒に近い紺色の瞳と言うのが特徴であるがそれ以外は何の特徴も無い。顔立ちも際立って整えられた訳でない。

丁寧と言うなら平凡で失礼に言うなら平凡過ぎるのだ。

大学での専攻科目は文系であるが、主に古代歴史を題材にしたレポートを提出している。

古代歴史でも彼女が好きなのは三国志演義などで有名な“三国時代”だった。

この時代は“後漢が滅亡してから黄巾の乱、そして西晋によって統一”されるまでの時代の事を言う。

最初に夜姫が三国志と出会ったのは幼い頃に見た三国志演劇だった。幼いながらも劇団の華麗なる演技に眼を奪われたのを夜姫は未だに覚えている。

その時から三国志に興味を抱き始めて読書を初めて部活動に関しても中学、高校、大学と演劇をやってきた。

ただし、高校時代は部員が少ない事もあり事実的に休部という形になったので代わりに弓道部に所属していたが。

いま舞台上で演劇をしているのは彼女が長年の間、やりたいと夢見ていた三国志演劇だった。

だが、中身はまるで違っておりオリジナルの演劇となっているが、何だかんだ言っても三国志を演じる事に変わりは無い。

しかし、人生というのは本当に欲しいと願った物ほど手に入らないのが常だった。

心からやりたいと思っていた演劇だったのに役は与えられず裏方に回されたのが良い証拠と言える。

「一番やりたいと思っていた演劇で裏方なんて最悪……」

一人で愚痴を零しながら夜姫は借りているアパートへと帰った。

本当ならば都内にあるアパートを借りたかったが、学費の節約なども考えるとそれも出来ず郊外で安目のアパートを探してここを借りる事にしたのだ。

見た目は築50年の歴史を表す程ボロボロだが、夜姫自身は思いの他にも気に入っている。

人との交流があるからだ。

今の時代、隣人が誰で何の仕事をしているのか？も知らない者が多いのだがここはそんな事もなく困っていれば助ける。

古き良き時代の生き残りと言姫は思っており、そこが気に入っているのだ。

アパートの錆び付いた階段を上り一番端の部屋に行く。

床板がギシギシと鳴るのが最初は怖かったが、慣れてしまえば問題などない。

鍵をポケットから取り出して部屋の中に入った夜姫は畳の上に身体を横たえると溜め息を吐いた。

「バイトも無いし、寝ようかな」

今日は掛け持ちのバイトが全て休みだから、このまま眠るのも悪くは無い。

風呂は帰り道の銭湯で入って来たから問題は無かった。

だから、直ぐに夜姫は眠る事にした。

現実という厳しい世界から一転し、甘美で優しい夢の世界へと逃げたのだ。

翌日、目を覚ました夜姫は変な夢を見た。と大学へと行く道を歩きながらぼやいた。

「変な夢を見たな……………」

何処かの戦場に自分は立つており、敵と戦う夢が最初でそこからタイムスリップして三国志の時代へと行き、そこで三国の英雄たちから求愛されるという夢が次だった。

魏、呉、蜀、そして何との董卓などの武将達までもが現れて自分に求婚してくるといふ荒唐無稽な夢物語だった。

以前からそれこそ幼い頃から、似たような夢は両手では数え切れなほど見た事はあったが昨夜の夢は以前の夢よりもハッキリと見えたのだ。

風景から人物の顔まで、全てが…………

以前ならばやけて見えていたのに、昨夜はハッキリと見えたのが以前とは違う所だ。

「何だか不思議な感じだったわね…………でも、過去にタイムスリッ

プするなんて夢物語よ」

夜姫は小さく苦笑した。

その苦笑は何処か諦めの印象を受けた。

自分が三国の英雄に求愛されるような美人かと言われたら答えは否。

茶髪は地毛だが、美容院に通う様な金も無ければ暇も無いし化粧品も必要最低限の物しか買えない。

だから、艶を出したりする事も出来ないし、綺麗な衣服も買えない。

それに姫なら当たり前とも言える事を何一つ出来ない。

歌も出来ないし踊りも出来ない。

夫を陰で支えるなんて力もない。

ましてや自分が剣を取り相手を倒すなど考えられない。

そんな自分に三国の英雄が求愛する訳がないのだ。

「でも、良い夢だったわね」

三国の英雄から求愛されて自分を巡って争いを起こすなど人としては道から外れるが女としては少し懂れてしまう。

男は美女を侍らせたいが女も逆に美男を侍らせたいものなのだ。

「また見れるかしら？」

出来るなら見たいなと夜姫は思いつつ今日の予定を頭に浮かべた。

今日は午前中で終わるが、そこからレストランのバイトと演劇の練習だと軽く落ち込んだ。

アパートを出て歩いて30分。

大学へ到着した夜姫は何時も通り勉強を開始してノートに重要事項を書きながら過ごした。

大学を終えた後はレストランでウエイトレスとして働いて7時に劇団へと足を運びセットの準備を始めた。

これが彼女の日常だった。

劇団の事務所は大学から歩いて10分の距離にあるビルの3階にある。

団員は全員で30人とそれなりに多い方だ。

張りぼてなどが立てられた舞台では数人の男女が台本を片手に演技をしている。

その傍らで夜姫は布と針を持ち衣服を作っていた。

今、彼女が作っているのは絹に似せた古代中国の衣装で女が着る物だ。

裁縫は得意な方だったので全て任されてしまった事に夜姫は内心で泣きながらも針を動かした。

『何で他人が着る服を私が………』

心の中で愚痴を零しながら夜姫は糸を布に通して縫い続けた。

これを今日中に仕上げなければならぬから大変だ。

数日かけてやっと半分が完成したが、このままだと………

『徹夜を覚悟した方が良いわね』

今日中に仕上げないと団長に怒鳴られるし、他の団員からも色々と言われる。

それは……一番、嫌だった。

結局、彼女が服を作り終えたのは午前2時だった。

他の団員は既に帰っていて居るのは夜姫だけ。

「はぁー、やっと終わった」

夜姫は満足気に溜め息を吐いた。

周りを見ても直す所はない。

完璧な仕上がりだった。

「・・・一回だけ着てみようかな」

本来ならこれを着る相手が着て確認するのだが、元を正せば自分で作った物だし着心地は大丈夫なのかも知りたい。

夜姫は着ていた洋服を脱いで縫い終わったばかりの衣服を着た。

モデルは北方民族の満州族と漢民族の民族衣装だ。

色は高位の者が着る事とされていた濃紫だ。

衣服に袖を通して首に掛けたネックレスを下げた。

元はシルバー色だったのだろうが、永い時の中で色あせて鈍った光を放っていた。

次に薄紫の帯、桃色の簪を垂れ下げた茶色の髪に差し、最後に薄い透き通った色の羽衣を肩に掛けた。

「後は扇を持って」

夜姫は最後に羽扇を持った。

「これを昔の姫は着てたんだ」

資料を元に考えて試行錯誤の末に作り出した服を着て夜姫は、自分の出来に満足しながら満足するまで衣装を着ていた。

そしてそれを脱ごうとした時だ。

突然、部屋中が光に包まれた。

「え？な、なに」

突然の光に夜姫は怯えたが身体が動かずに光に飲み込まれた。

意識が薄れて行き、強制的に手放してしまう時だった。

『やっと見つけましたぞ・・・“我らが姫様”……………』

□

誰かの声がしたがそれを夜姫は聞けずに意識を完全に失い光に飲み込まれた。

暫く光は輝いていたがやがて小さくなって行き、最後には消えてしまった。

光が消えて無くなると夜姫の姿は何処にも見当たらなかった。

序幕：探し求めた姫君（後書き）

主人公の年齢が20歳だったのを2歳も年上にしてしまいました。
（汗）

彼女に見つからなかったから、今の内に直します！！

第一幕・三国志の英雄（前書き）

えー、長らくお待たせしました。

とは言っても、何だか自信がありません。（汗）

傭兵の国盗り物語もやっと書き始めたのですが、こちらが先に出来たので載せて置きます。

しかし・・・急展開過ぎたかな？

第一幕：三国志の英雄

劇団の事務所で光に包まれて意識を失った夜姫だったが額に感じる冷たい感触で目を覚ました。

「あれ？」

眼を開けたのだが、周りは見えずに暗い。

「……どういうこと？」

眼が見えない事に疑問を感じながら下から来る感覚でベッドに寝ていると理解できた。

そしてまた幼い頃から見ていた夢をみたな、と思い出す。

何処かの戦場と思わしき場所に自分は立っていた。

姿形はボヤけて見えなかったが、言葉だけは覚えている。

『我は神々にも名を知られる者。』

行く手を阻む者は何人たりとも殲滅し灰も残さず焼き払う。

その眼に、その耳に、我が名を刻め。

死に逝く者よ。

我が名をその胸に刻み、死出へと旅立つが良い。

我が名は………。

月国の主にして、月国の舞姫なり。

さあ、参れ。死に逝く者達よ。

一撃で骨も残さず楽にして進ぜよう』

この言葉を夢の中で自分は口ずさんだ。

まるで台本を暗記したかのようにスラスラ口にしていた。

だが、ただ台本を暗記して言うのは簡単とも言える。

台本の内容の場面に応じて感情を露わにしたりする事が難しいのだ。

時には唾を吐き、時には涙を流して台本に書かれた言葉を言い相手に訴える。

それが演劇をする者なのだ。

あの台詞を言っている自分は威厳を持ち、相手に自分の事を知らせるように言っていたのだ。

正しく演劇をする者だった。

しかし、そこからは覚えていない。

名前の部分も覚えていない。

だが、今回もハッキリと見えたのだ。

それだけは言える事だった。

『何て名乗ったんだろう？いや、その前にどうして目の前が暗いの？眼は開いているのに……』

一度に二つの事を考えて夜姫は混乱し始めた。

「おお。気が付いたのですか？」

そこへかなり歳をとった男の老人の声が聞こえた。

夜姫は声がする方向を振り向く。

「御気分はどうですか？ “天の姫”」

「天の姫？」

夜姫は理解できずに首を傾げた。

「はい。ん？眼をどうかしましたか？」

老人が歩み寄る気配を感じ夜姫は身を構えた。

誰だって目も見えない状況で誰かが近づけば、それこそ男なら身構えをする。

「何もしません。わしは典医です」

安心させるように言いながら老人は夜姫の両眼を見て、完全に視覚が無い事を瞬時に悟った。

「……少し待っていて下さい。直ぐに戻って来ますから」

夜姫に言くと老人……典医は部屋を出て行った。

一人となつた夜姫は耳を澄ませた。

外の様子が聞こえて来る。

何やら騒がしく男たちだけの声だった。

『どつしたんだらう？』

自分の眼もそうだが、この騒がしい状況は何なのだろうか？

劇団の事務所は都内から離れているからそんなに騒々しくはないし、夜姫が仕事を終えた時間は既に皆、寝ている時間帯だ。

こんなに騒々しかったら近所迷惑だと誰かが怒鳴るだらう。

『というか、急いで帰って衣装を戻さないと団長に怒られちゃう』

夜姫が所属する劇団の団長は劇に対しての情熱は半端ではない。

だが、お世辞にも演技が上手いのか？と問われると……

それを本人も分かっている事だ。

それでも演劇に対する情熱は冷めないから性質が悪いと言えば良いだらうか？

その苛立ちを劇団員にぶつけるのだ。

特に夜姫は格好的らしく、何かしら理由を付けては怒って来る。

仕立てた服を着るのだって本来ならご法度だ。

もし、知られたらどんな事を言われるか分かった物じゃない。

最悪の場合・・・劇団を追い出される可能性だってある。

それは避けたい。

そのため夜姫が慌てるのも無理は無かった。

そんな事を考えていると、天幕が開けられて誰かが入って来る気配を感じた。

そしてその誰かは近づいてきた。

「目が覚めましたか？天の姫」

先ほどの典医と名乗った老人より、20から30は声が若い声だった。

「あの、どちら様でしょうか？」

夜姫は戸惑いながらも男に名を訊ねた。

「これは失礼いたしました。私の名前は劉備。字は元徳です」

劉備元徳と言う名前を聞いて夜姫は驚愕した。

『三国志の英雄じゃない!?!』

幼い頃から蜀の劉備を尊敬していた夜姫は驚いた。

蜀の劉備と言えば演技では主役だ。

滅亡した漢王朝を復興させる為に立ち上がり魏・呉に比べれば国力が遥かに劣る蜀を守り続けた英雄中の英雄だ。

そして義理などにも厚い人物だからこそ、彼の下に關羽を始めとした者達が集まったのだ。

「どうかなさいましたか？天の姫」

劉備が夜姫の驚いた表情に、どうしたのだと訊ねてきた。

「あ、い、いえ。あの、天の姫とは………?」

「貴方の事です。空から落ちて来たので」

「空から落ちて来た?」

夜姫は首を傾げた。

「ええ。我らの陣まで迫った敵を追い払って戻ろうとした時です。突然、光が周りを囲みました。何の事か分かりませんが、光が消えると空から貴方が落ちて来たのです」

「………」

どういふ事だと夜姫は思うが劉備は話を続けた。

「空から落ちて来た貴方を受け止めると、見た事も無い生地で作られた宮廷衣装を着ていました」

きつと天の姫が我々を応援に来たのだと諸葛亮が言い手厚く看病するようにと言ったそうだ。

今いる場所は“反董卓連合軍”の陣にある劉備達が居る陣だと説明を受ける。

反董卓連合軍・・・三国志の中では稀代の悪人と称される董卓を討伐する為に組織された連合軍だ。

董卓は字・・・実名以外の名前は仲穎ちゆうえいと言い、辺境の將軍でしかなかったが後に軍事を強め政治混乱に乗じて漢王朝第12代目の“靈帝”の息子である“少帝”を排除し少帝の異母兄弟である“獻帝”を擁護し政治を牛耳った男だ。

中国では最大の罪である墓荒らしをした、と歴史書には書かれているがそれは魏を建国した曹操もやった事だ。

少帝を排除し獻帝を擁護したのも彼なりの考えがあったからだろうと夜姫は推測している。

だからと言って彼が清廉潔白だったとは言い難い。

捕虜を皆殺しにした、長安の女中を陵辱したなど数えたら切りが無い悪行を彼はして来た。

演技でも正史でもボロクソのように蔑まされている・・・されるだけの事はして来たし野心もあっただろうが、彼だけがまるで悪者

のように書かれるのは余り良い気持ちではない。

話を戻すと、稀代の悪人として後世では知られている董卓を討伐する為に組織されたのが反董卓連合軍だ。

董卓の非道ぶりに反発した橋瑁が各地に兵を起こすように手紙を出して集まったのが始まりとされている。

袁紹、袁術、曹操、孫堅などを始めとした者達が軍を率いてその数は正確には不明だが十数万はあったとされている。

「本来なら総大将の陣が良いと思ったのですが、まだ気絶している貴方様を動かすのはどうかと思ひまして……………」

「……………」

劉備の説明を夜姫は無言だったが、その間考えていたのだ。

顔が見れないし、声だけで全て判断しなければならぬ。

劇団の悪戯か？と思ったが、夜姫が知る限りこんな声の持ち主は劇団員には居ない。

それにどうも雰囲気が違う。

ハッキリとは言えないが、何かが違うのだ。

それに反董卓連合軍には目の前の人物……劉備玄德は参加していない。

しかし、目の前の人物は嘘を吐いているような口調ではない。

となれば・・・・・・・・・・短い思考の末、一つの答えに導かれた。

『タイムスリップ・・・・・・・・じゃなくてパラレル・ワールドに来たの?』

小説や映画でよく地球とは違う別の世界に主人公が行く設定がある。

それが自分に起きたと夜姫は思った。

それとも夢に見た事が現実と化したのか?

眼が見えない以上、信じられない。

しかし、もしも本当だとしたら大変な事だ。

「如何なされたのですか?天の姫。先ほどから黙っておりますが?」

劉備は心配そうに夜姫に話し掛けてきた。

「い、いえ。私も突然の事で気が動?してしまいました・・・・・・・・・・」

夜姫は咄嗟に言い訳をした。

言い訳をした所で事態が回復したり打開できる訳など無い。

「左様ですか。先ほど会いました典医から眼が見えないと聞きました。大丈夫ですか?」

「眼が見えていたのに突然、見えないので少し不便です」

正直に夜姫は答えた。

何故、眼が見えないのかは不明だが何れは戻るだろうと楽観的に考えていた。

「お察し致します。ですが、安心して下さい。きっと眼は見えるようになっていきます」

『この人は本当に優しい人ね。だから、色々な人たちが集まったのも理解できるわ』

目の前の人物が本物かどうかはさておき、とても心が優しい人物と言ふ事は確信できた。

本物でないにしろ、この人物の下には色々な人物が集まるだろうと夜姫は思いながら劉備の気持ちが籠った暖かい言葉に礼を言った。

「ありがとうございます。劉備様」

「天の姫から礼を言われるとは・・・この上ない名誉です」

劉備が笑った気がした。

「まだ、自己紹介がまだでしたので名乗らせて頂きます。私は織星夜姫と言います。劉備様。次からは夜姫と呼んで下さい」

尊敬している劉備から名前を呼ばれたいと夜姫は思い自分の名を口にした。

「・・・織星夜姫。良い名ですね。分かりました。恐れ多い事ではありますが、夜姫様と呼ばせて頂きます」

「はい。劉備様」

夜姫は笑って見せた。

上手く笑えたか分からない。

それに欲を言えば様付けで呼ばれたくはなかったが・・・

劉備は夜姫の純粋な笑みに心が癒されるような気持ちになった。

今は乱世だ。

誰もが己の名を、地位を、高めようと躍起になり戦争を引き起こして民達を苦しめている。

劉備自身、この乱世を利用して名を上げたいという気持ちはある。

しかし、それ以上に滅亡した漢王朝を復活させて民達を護りたいという気持ちの方が遥かに強い。

だが、現実はいかにも厳しい物だ。

黄巾の乱の時も義勇軍として自分は参加したが、何処に行っても蔑まされた。

ここへ来てもそれは変わらなかったが諸葛亮の機転が働き追い返さ

れる所を、やっとの思いで一陣を任せられた。

とは言っても、陣とは名ばかりで大して価値の無い場所を任せられただけだ。

それが劉備には悔しくて我慢ならなかったが、それを兵達に悟らるゝては士気に係わる事を懸念して必死に押し隠した。

それが原因で心が荒んで行つたが、夜姫の純粹な笑顔を見ると・・・不思議と胸の中で燻っていた物が綺麗に洗い流された気がした。

『・・・この方の笑顔は不思議な力があるな』

劉備は眼が見えない夜姫を見ながらそう思った。

「おお。玄德殿。居たのですか？」

そこへ先ほどの声の主、典医が入って来た。

「はい。いけませんでしたか？」

「とんでもない。貴方様なら天の姫に不埒な真似はしないと確信しておりますから。それはそうと先ほど諸葛亮様に天の姫が目覚めた事を伝えました」

時期に各々くると典医は劉備に告げた。

「そうですね。夜姫様。もう直ぐ、私の仲間が来ます」

「と言うと、諸葛亮孔明様達ですか？」

「ええ。皆、心優しい人物達ですので安心して下さい」

劉備は安心させるように優しい声で言ったが、ドスドスと大きな音を立て近づく音が無数に聞こえて来ると、やはり不安になって来る。

「あ、あの劉備様」

「如何しました？」

「あ、あの、手を……」

劉備は夜姫に言われるままに手を出す。

夜姫は勘を頼りに劉備の手を握った。

「そ、傍に居て下さい」

大勢の者が来ると聞いて怖がっていると思った劉備は優しく夜姫の手を握ってやった。

「ご安心ください。誰も夜姫様を傷つける者はありませんから」

「殿は天の姫に氣に入られたようですね」

典医が笑う声が聞こえた。

その時、バサツと大風が吹いたように夜姫の髪が靡いた。

「天の姫が眼を覚ましたって本当か？兄者！！」

大きな声がして夜姫は思わず劉備の手を強く握った。

「益徳つ。大声を出すな!!」

劉備は夜姫の様子を見て来た人物に厳しい声で叱咤した。

『益徳は張飛の字だったから・・・張飛様か』

夜姫は劉備の手を握り背中に隠れながら、来た人物の字を聞いて張飛と推測した。

劉備の義兄弟の一人である張飛。

義兄として慕う関羽と並び名立たる武将として有名ではあるが酒癖が悪い上に部下の扱いも些か不慣れな事もあり最後は部下に寝首を掛けて殺された。

「わ、わりい。兄者」

益徳と呼ばれた声の主は怯んだ声を出して謝罪した。

「兄者の言う通りだ。少しは声を抑える」

益徳と呼ばれた男の声より幾分か落ち着きがあり貫禄もある声が聞こえた。

「雲長よ。諸葛亮はどうした？」

『雲長って事は関羽ね』

劉備の義兄弟であり、類い稀なる武勇と義理堅さから曹操など敵側の人間からも称賛された人物だ。

その半面で学問にも精通していた事もあり学問の神としても崇められている。

また髭が立派な事もあり「美髯公」と演技では呼ばれている。

劉備は雲長と名を呼び蜀の軍師、諸葛亮孔明の名を言った。

「あの、劉備様。いま話しているのは、関羽様ですか？」

夜姫は眼が見えない事に苛立ちを少し感じながらも確認する為に訊いた。

「ええ。今いるのは、私の義弟で張飛と関羽です」

「兄者。天の姫はどうしたのだ？」

関羽が劉備に夜姫の様子に何かを感じ訊いた。

「それは私が説明します」

典医が関羽の質問に答えようと口を開いた。

典医から夜姫の眼が見えない事を聞かされた二人は驚いた。

しかし、夜姫にはその表情も分からない。

「前までは、見れていたんですけどね」

夜姫は小さく苦笑した。

その笑みが何処か儂げであるのを二人は見逃さなかった。

「失礼します。ご気分は如何ですか？天の姫」

部屋の中に、もう一人だれか入って来た。

声は関羽、張飛より弱いが男の声であった。

「来たか。諸葛亮」

劉備が言った人物に夜姫は、諸葛亮孔明が来たかと判断できた。

諸葛亮孔明は、劉備亡き後の蜀を支えた人物とされており天才軍師と言われているが、どちらかと言うと後方支援などの官僚的な面で力を発揮している、と夜姫は調べた事を思い出した。

「初めまして。天の姫。私は諸葛亮孔明です」

諸葛亮が羽扇を仰ぎながら頭を下げる音が聞こえた。

「は、初めまして。織星夜姫です」

緊張しながら夜姫は声のする方向に頭を下げた。

「夜姫様ですか。良い名前ですね」

諸葛亮が羽扇を仰ぐ音を聞きながら夜姫は顔を上げた。

「っ！！まさか、貴方様、眼が……………」

「そつだ。諸葛亮。夜姫様は眼が見えない」

劉備の言葉に諸葛亮も二の次が繋げなかった。

「典医殿。失礼ですが夜姫様の眼は」

諸葛亮は、典医の方に視線を向けて訊ねた。

否……彼だけでなく、その場に居た者達全員が典医に視線を向けた。

「本人の前では言い難いのですが、恐らく……………」

最後まで典医は言わず口を閉じた。

「……………」

夜姫は無言になった。

典医の無言は先が言えないのだ。

つまり……………」

「もう、眼が見えないのですね」

夜姫の言葉に典医はまた無言で答えた。

眼が見えない。

それは大好きな劇も見れないし出来ない事を言われたようなものだった。

誰もが口を開けなかった。

特に劉備は、必ず眼が見えるようになると励ました。

それなのに眼が見えないと典医が無言で言った以上、哀しみが倍になった。

誰もが何と言えば良いか分からずに無言で居た。

やがて重い空気が場を支配し始めたが、思わぬ人物がその空気を吹き飛ばした。

「大丈夫です。眼が見えなくても、人は生きていけます」

本当は絶望の淵に陥っていたが、敢えて明るい口調で夜姫は言った。

「夜姫様……………」

劉備達は眼が見えないのに明るい声を発した夜姫に視線を向けた。

空虚な瞳でありながらも声は何処までも前向きな声だった。

「劉備様は先ほど言ったではないですか。必ず眼が見えるようになる」と

「ですが……………」

「眼は見えるようになります。根拠は、ありませんが見えるようになります」

典医が言ったとしても、この世は不思議な事がある。

奇跡という不思議な事が……………」

だから、眼が見える可能性は決して捨てられない。

夜姫はそう言った。

誰もが、その言葉に言葉を失った。

ここまで前向きに生きようとする女性を見た事がない。

眼が見える者が何も言えないのに、眼が見えない者がこんな言葉を言うのだから言葉を失うだろう。

『なんて健気な』

劉備はギョツ、と夜姫の手を握った。

「そうですね。必ず眼は見えるようになります」

夜姫の手を握り締めながら劉備は自分の心に叱咤し、また夜姫を励ますように言った。

「わしも出来る限り眼が見えるように努力いたしましょう」

典医は己の諦めの速さを恥しながら夜姫の眼を治してみせると誓った。

まだ自分が知らない薬や治療法があるかもしれない。

それを見つけて出して治すのだ。

「・・・天の姫。この私も及ばずながら、力を貸しましょう」

諸葛亮が夜姫に近付き膝を着いた。

「天下に名を轟かす諸葛亮様が力を貸してくれるのは、心強いです」

夜姫は頬を綻ばせて笑った。

その笑顔は、儂くて、脆い笑顔だった。

『この娘を汚してはいけない。何かあるうと、助けなくてはならない』

誰もがそれを思い、決意した。

ここから、織星夜姫の人生は大きく変わる事になった。

幕間：義勇軍と連合軍（前書き）

長らくお待たせしました……

どうも、実在した人物を描く事が難しいと言う事を嫌なほど痛感します。

本当に完結できるのか不安です。

とは言え、頑張りたいと思います!!

幕間：義勇軍と連合軍

私は典医殿に後の事を任せて諸葛亮達を伴い陣から出た。

もう既に空は暗くなり兵たちは炊き出しをしている所だ。

「・・・殿。これからどうなさいますか？」

諸葛亮が何も言わずに前を進む私の背に控え目な声で話し掛けて来た。

「夜姫様の事か」

「はい。夜姫様には言いませんでしたが・・・先ほど袁紹様達から催促が来ました」

天の姫は目を覚ましたのか？ 覚ましたのなら会わせる・・・・・・・・

「どうせあいつ等の腹は同じだぜっ。天の姫を自陣に入れて他の奴等に対して牽制する腹だ！ そうに決まっている！！」

益徳は夜だというのに大声で断言した。

それを聞いた兵たちが驚きこちらを見てきた。

「益徳。大声を出すな。我々は何処から見られているか分からない」

私はそれを見てから益徳を戒めた。

我々、義勇軍は他の将達から見れば「お荷物」と見られている。

義勇軍とは聞こえが良いだろうが、所詮は寄せ集め。

装備もバラバラだ。

士気だって高いとは言えないし連携も取れていない。

追いつく事も出来たが、それでは何かと面倒だと思い……こんな何の価値も無い場所を任されたのだろう。

そして何かしら問題……そうでなくても、内通者が居る可能性も捨て切れない。

こんな事を言われてはどんな言い掛かりを付けられるか分からないからこそ、益徳を素早く戒めたのだ。

何の価値も無い陣を任されたが……夜姫様が来てから事態は一変した。

3日前まで誰も来なかったこの陣だが、今では大勢の将達が来るのだ。

手には色取り取りの絹や酒、黄金などを持って……………

理由は簡単だった。

天の姫に会い……自陣に引き込む為。

天の姫を自軍に引き込めば、連合軍の中でも顔が効く。

連合軍とは名ばかりの存在で誰もが何かしらの欲を持っており、誰かしらを敵視している。

そんな中に夜姫様は降り立ったのだから・・・不幸としか言えない。

だからこそ・・・私が・・・私たちが護らなければならないのだ。

改めて自分に言い聞かせると、今も遠くからでも分かる程の人数が近づいて来ているのが暗闇でも見えた。

「・・・総大将、勢ぞろいか」

まさか全員が来るとは思いもしなかったから私は少なからず驚いた。なぜ全員が総大将と分かるのだ？と言われたら贅が掛った鎧と駿馬に乗っているからだ。

「殿。どうなさいますか？」

「まだ夜姫様は起きたばかり。あんなに大勢で来られては迷惑だ。追いつ返す」

「しかし、それでは・・・」

諸葛亮は何かを言おうとした。

この男もまたあの場で決意した筈だが、あくまで立て前として言ううとしていいのかもしいし確認の為かもしれない。

「構わん。もし、これで出て行けと言つのなら出て行く。ただし、夜姫様を護るのは変わらない」

「へっ。昔の兄者みたいだ」

益徳が愉快そうに笑った。

「それでこそ兄者です」

雲長もまた私の態度を称賛した。

「どうやら、今の私は腑抜けだったのかもしれない」

昔なら・・・相手が誰だろうと一歩も引かずに・・・寧ろ気に入らなければ首を切り落としていた。

だが、今は相手の顔色を窺うようになっていた。

しかし、今は違う。

私は目の前まで来た人物達を見上げた。

「劉備よ。天の姫は目を覚ましたか？」

4人の中で一番歳若い袁術様が馬上越しに訊いてきた。

袁術様・・・字は公路（くわじ）だ。

名家である“汝南袁氏”の当主であった袁逢（えんほう）様の息子。

同じ父を持ちながら母親は違う袁紹様とは異母兄弟になるが兄弟仲は決して良いとは言えない。

そして性格も俠人である私から言わせれば最悪だ。

それでも私は目の前に立つ袁術様の質問に答えた。

「目は覚ましました」

それを聞いて4人は馬を進めようとしたが雲長と益徳によって止められた。

「何の真似だ？」

袁術様が今にも剣を抜く勢いで私に訊ねてきた。

私の話を最後まで聞かないで行こうとしたからそうなるのだ、と内心で思いながら私は別な事を言った。

「まだ起きたばかりです。ですから通す訳には参りませんし天の姫は突然の事で気が動？しております。そんな所へ大勢で行っては身体に障ります」

「確かにそうだな」

袁術殿の異母兄弟であり、袁家の現当主である袁紹様が頷いた。

袁紹様の父は袁術様と同じだが、母親は違うし身分も袁紹様の方が低かった。

しかし、彼の育ての親である叔父の袁隗えんかい様に才能を見込まれ袁家の当主となられた。

この方は私と同じく遊侠の道歩んだ事がある為か私に何かと目を掛けてくれる。

実際この陣もこの方の力で与えられたものだ。

もし、この方が居なければそのまま追い返されていた事だろう。

「時に劉備。天の姫は先ほど目を覚ましたと言うが、何か言っていたのかな？」

「名前を名乗りました」

私は袁紹様の質問に答えた。

織星夜姫。

「それが名か」

「はい。字は言っておりません」

「それは仕方のない事だ。字を教えるのは極親しい者だけ。まして天の姫ともなれば尚更の事だろう」

おいそれと他人に字を教えるは一大事だ、と袁紹様は言い私もそれに納得した。

「確かに」

「その通りだ」

曹操殿、孫堅殿も袁紹殿の言葉に同意した。

曹操殿とは面識が以前からあったが・・・どうも腹が読み切れないので警戒している。

袁紹殿と曹操殿は知り合いらしく仲も良さそうに見えるが腹の中はどうか分からない。

今もお互いに剣を抜かせないように牽制しているように私には見えなかった。

孫堅殿とはここで初めて会うが流石は孫呉の当主だけあって威厳があると思う。

「名が分かっただけでも良い。今日は帰るとしよう」

「それが良いな」

「また日を改めて」

袁紹様が帰ると言う残り2人も帰ろうとしたが、袁術様だけは違っていた。

「天の姫は目を覚ましたのだ。ならば、会っても問題ない」

「袁術様。失礼ですが、貴方様は耳が聞こえないのですか？」

「貴様・・・たかが義勇軍の分際で私を愚弄するか」

「いいえ。しかし、私は先ほど目が覚めたばかりで身体に障ると言いました。それなのに貴方様は行こうとする」

耳が聞こえないと訊いても可笑しくはない、と私は言った。

以前なら・・・苦言を漏らした事だろうが無理に止めたりはしなかった。

止められなかった。

だが、今は違う。

今、下手に合わせては余計に夜姫様の気は乱れ混乱してしまう。

ただでさえ眼が見えないというのにこんな男を会わせたら・・・

「貴様の意見など知った事かつ。私は行くぞ」

「でしたら、私も・・・力づくでも止めます」

私は腰に差していた剣に手を掛けた。

「この私に刃を向けるのか？」

「如何に総大将の一人と言えども、ここは私が任された陣。その陣で身勝手な行動は許しません」

「ほおう。では・・・貴様を殺してでも行かせてもらおうぞ」

袁術様は剣を鞘から抜いた。

そしてその剣先を私に向けた。

「これが最後だ。そこを退け。そうすれば、今回の事は見逃してやる」

「お断りします」

他の3人は止めようとしたが、私たちの方も引くに引けない。

一触発の・・・もはや何かが起これば戦う気が場を支配していた。

「・・・劉備様。どうかなさいましたか？」

私は声がして振り返った。

そこには典医殿に伴われて居る夜姫様が居た。

暗い中でも分かる程・・・綺麗に輝く“清流のような・・・しかし、妖し気な印象も与える紫が薄く掛った銀の髪”と透き通るような・・・雪のように汚れ一つない白い肌・・・青天のような蒼い瞳は空虚ながらも透き通っている。

そして、その身を包む濃紫の服と装飾品もまた美しい。

だが、そんな物は夜姫様の美しさをただ飾るだけの物であって無くても良い代物に見えてしまう。

「夜姫様。お身体は……………」

諸葛亮が夜姫様に身体の具合を訊ねた。

「少し気持ち悪いので夜風に当たろうと思ったんですが……………お客様、ですか？」

夜姫様の声は透き通った……瑠璃のように壊れ易い印象を受ける声だった。

その声と容姿に4人は何も言わなかった……言えなかったのだ。

この世の者とは思えぬ容姿と声。

その身体から放たれる気に……………

ただ一人だけは違った。

「おお、貴方様が天の姫ですか!!」

袁術殿は馬から降りて近づこうとした。

しかし、剣は抜いてあるし掴んだまま。

その声に夜姫様は身を堅くして足を後ろに引いた。

雲長と益徳は直ぐ様、夜姫様に近付いて護るようにして立った。

「貴様らそこを退け。私は天の姫と話がしたいのだ」

「てめえ……どの面でそんな事が言えるんだ？」

益徳が仁王立ちで袁術様を見下しながら訊ねた。

しかし、訊ねるような口調ではなく馬鹿にしている声だった。

「貴様！この私の顔を愚弄するか！！」

「……ッ」

夜姫様の小さな悲鳴が聞こえた。

恐らく袁術様の殺気に気付いたのだろう。

「あ、いや。これは驚かせて申し訳ありません。天の姫」

袁術様は夜姫様が怖がった事に今更気付いたのか取り繕う様に温和な声で喋り出した。

その様子を見て3人は吐き気がする顔をした。

袁家の嫡男である袁術様だが……当主としての器は袁紹様には及ばない証拠だと私は思った。

袁紹様の母君は身分が低い故に本来ならば日の当らない生活を余儀なくされた。

しかし、袁紹様の器に気付いた叔父であり育ての親でもある袁隗様の眼に付き嫡男である袁術様を押し退けて袁家の当主になられた。

それが袁術様には気に入らないのだろう。

連合軍として、同じ総大将でありながら、互いに協力はしないし隙あらば寝首を掻こうとしている。

その為ならどんな手も使うから、他の将達からは好かれていない。

見た目こそ立派だが・・・中身はどす黒い。

夜姫様は眼が見えない・・・しかし、心の眼でこの方の本性が分かったのだろう。

先ほど以上に身を堅くしている。

「その様に怖がらないで下さい。私は袁術。反董卓連合軍の総大将を務めております」

「袁術・・・では、袁紹様の御兄弟ですか」

夜姫様が何故、それを知っているのか？とは皆思わなかった。

天の姫ともなれば下界の事など全て知っている、と私たちは考えていたからだ。

妾の子である袁紹様と腹違いではあるが兄弟という事実。

袁術様は事の他この事実を嫌っているが夜姫様の言葉には嫌な顔せ

ずに答えた。

「左様です。それにしても・・・お美しいですね。いやはや、眼も奪われるとはこの事だ」

袁術様は2人を押し退けて更に近づこうとしたが、典医殿がそれを阻止した。

「恐れながら姫様は些か気分が悪いのです。ですから、これで失礼します」

「すみません・・・」

夜姫様は典医殿の後ろから僅かに頭を下げて謝罪の言葉を口にした。

「いえ。こんな夜遅くに来る我々もまたどうかしておりました。天の姫・・・いえ、夜姫様。大変失礼しました」

袁紹様が馬上から降りて夜姫様に近付いて謝罪した。

曹操殿に孫堅殿も同じく馬から降りた。

「あの、失礼ですが貴方は？」

「これは失礼した。私は袁紹です。字は本初ほんしよと言います」

「では、袁家の当主様ですか。私は織星夜姫と言います」

「私ごときに名を名乗って頂き光栄に思います」

袁紹様は心から嬉しそうな顔をしてみせたが、夜姫様は見えない。

「それはそうと、この度は我が異母兄弟が夜姫様を怖がらせてしまい大変申し訳ありません」

「いえ。．．．私も、些か気が動？していましたので．．．．．」

「貴方様が気にする必要はありません。突然こんな所へ来ては気が動？するの無理はありません。今夜はゆっくりお休みください。また日を改めて会いに参ります」

「．．．はい」

それだけ言うと夜姫様は典医殿に連れられて戻って行った。

曹操殿と孫堅殿は自己紹介をしなかったが、何か意図があるのか？と私は思った。

その一方で夜姫様が消えてから袁紹様は袁術様を責め立てた。

「袁術。貴様は私に恥を搔かせる気か？」

もうその顔は笑顔ではなく激しい怒りが宿っていた。

「ふん。妾腹の子である貴様など恥で一杯であろうに．．．何を言うか」

「貴様っ」

「お二人とも、ここは双方共に抑えて」

孫堅殿が二人の間に割って入って喧嘩腰の二人を抑えた。

その間、曹操殿はじつと夜姫様の消えた方角を見つめていたが、不意に私に視線を移した。

「劉備殿。失礼だが、天の姫は・・・眼が見えないのか？」

「・・・はい」

私は曹操殿の言葉に頷いた。

このご仁には、どういう訳か素直に従わざる得ない力がある。

そして合理的な考えと敵であろうと実力があればそれに似合う報酬などを与える為、人が集まる。

だからこそ、魏という巨大な国を作り上げる事が出来た上に袁紹様と肩を並べられるのだ。

「そうか。何か可笑しいと思っていたが、眼が見えんとは・・・
・戻るのか？」

「・・・戻りません」

私はこれも正直に答えた。

「以前は見えていた、と言つのですがここに来てからは見えなくなつたと」

「何と・・・・・・・・・・」

私の言葉に曹操殿達は愕然とした。

「しかし、夜姫様はこう仰いました」

世の中には不思議な事がある・・・奇跡という不思議な事が。

「その時、私は誓ったのです。どんな状況であろうとあの方を御守りすると」

「なるほど。だから、何時もなら引き下がる所でも引かなかったのか・・・・・・・・・・？」

「はい」

「惚れたか？」

曹操殿は何処か面白がる顔で訊ねてきたが私は毅然とした態度で答えた。

「惚れたとは違います。ただ、純粹に弱い娘を護りたいという気持ちからです」

「そうか」

意外にも曹操殿はそれから何も言わなかった。

だが、その何も言わなかった事に対して・・・嫌な予感がした。

それが何なのかは分からないが。

「では、今日は失礼する。後日また窺うとしよう」

そう言つて4人は帰つて行つた。

「殿。厄介な事になりましたね？」

諸葛亮が扇で顔を覆いながら私に言つて来た。

「ああ。しかし、我々の決意は変わらん。そうであるう？」

「ええ。ですが・・・何か策を打たなければなりませんね」

あの様子では4人揃つて何か一物抱えている、と諸葛亮は言った。

「ふんつ。あんな奴等、俺が全員皆殺しにしてやるよ」

益徳が息も荒々しい感じで断言したが、私を咎めたりはしなかった。

もし、夜姫様に害を与えるなら・・・皆殺しも辞さない。

それが私の気持ちだった。

第二幕：総大将の提案

天の姫こと織星夜姫が来てから既に7日が経過した。

総大将の4人が直接、対面した事で噂・・・真実は広まった。

天の姫が降り立った。

この真実は瞬く間に広がり興味本位で訪れる兵達が続出した。

夜姫が居る陣内も例外ではなかった。

ただし彼等は他の兵達と違って興味本位ではない。

夜姫は眼が見えない。

それを典医は皆に伝えた。

普通なら伏せて置くのだが何れは知られる。

それを理解していた典医は先手を打ち教えて要らぬ揉め事などを先に解決させたのだ。

それと同時に皆の協力を期待した。

これは当たりだった。

典医の説明を受けた兵達は出来る限りの物を用意した。

ここで手に入る眼が治る薬や魚などを用意しては夜姫に差し出し始めたのだ。

それ以外にも前以上に勇敢に戦うようになった。

前まではただ敵が来たら追い払うだけだったが、今は敵が来なくてもこちらから攻めて行く。

その真意はただ同じ。

眼が治って欲しい……………

自分達は義勇軍。

お荷物と言われ馬鹿にされている。

その証拠がこの陣だ。

何の価値も無い不毛な場所。

こんな所を護れと言われても、やる気もへったくれも無い。

だが、そんな自分達の陣に天の姫は来た。

それは自分達を励ます為。

それなのにここに来たせいで盲目となった。

それは自分達が情けないから。

ならば勇敢に戦えば眼は戻る。

戻してみせる！！

これが兵達の心理だった。

根拠がまるで無い。

だが、彼等はそう思う事で自分達を叱咤したのだ。

甘んじていたこの環境に……ぬるま湯に浸かり切って腑抜けとなっていた自分達に。

場所は変わり、天の姫こと織星夜姫が居る天幕。

本来なら白い天幕だが、急ごしらえで用意された為かあちらこちらに綻びがあるし薄汚れているが、義勇軍の陣ではこれでも良い方なのだから文句は言えない。

元々は義勇軍の総大将である劉備玄德の天幕ではあるが、今は夜姫だけの為に使われている。

その天幕を劉備の両腕とも言える関羽と張飛が仁王立ちで護っている。

こうでもしないと変な輩が来るからだ。

つい先ほど袁術の使者と名乗る者が勝手に入り込んで夜姫を連れて行くこうとした例があるから尚更とも言える。

だが、この二人が立つと変な輩は来なくなったから効果は抜群と見て良いだろう。

そんな天幕に夜姫は居た。

「夜姫様。今日はこれを試してみましよう」

典医は簡単に作られた寝台の上に腰を降ろす夜姫に魚の肝を差し出した。

魚の肝は難病に効くという噂がある。

それを聞いた兵の一人が苦勞して手に入れ差し出してきた。

しかし、この肝はとても臭いがきつく簡単に食せる物ではない。

特に歳若い女子などからは嫌悪されている。

それを典医は知っていたので臭いを和らげる薬を使った。

そのため臭いは強くない。

典医はレンゲでスープ状にした魚の肝を夜姫の口に運んだ。

夜姫は口を開け魚の肝を口にした。

そして飲んだ。

「……良薬、口に苦しですね」

一口飲んだ夜姫は言った。

その顔は歪んでいた。

「その通りです」

典医は夜姫が見せる歳若い娘の表情に苦笑した。

「いえ。私みたいな者の為にこんな事を……」

「何を言います。貴方様がここに来てからというもの皆は活気づいております」

貴方様が来る前は誰からも相手にされない事で士気は低下していた、と典医は語った。

「私ごときで役に立てたなら嬉しいです。でも、どうして義勇軍をこんな所へ配置したのですか？」

夜姫自身は既に歴史などを調べてある程度の事は分かっていたが、この時代に生きる典医の口から説明を聞きたいと考えたので敢えて疑問を投げ付けた。

「義勇軍は先に起きた“黄巾の乱”で活躍したのは分かりますか？」

「ええ。劉備様も参加したんですよ？」

「左様です」

典医は夜姫の質問に頷いた。

黄巾の乱とは、中国後漢末期の184年に大平道と呼ばれる宗教の教祖をしていた“張角”が農民達を先導して起こした反乱である。

張角は自身を天公將軍と称し政治腐敗で民衆に対する苛性政を正す為に兵を起こした、と触れ回った。

何故、黄巾と呼ばれるのか？

それは目印として黄巾と呼ばれる黄色い頭巾を頭に巻いた事からこう名付けられた。

この反乱により後漢は衰退し三国の時代へ行く事になるという歴史的にも重大な反乱と言えるだろう。

しかし、反乱途中で張角は死亡し後漢も押し戻して来たので反乱は治まったように一時は見えたが張角が死んでからも自らを張角と名乗り反乱を続ける者が続出した。

これによって後漢の権力は地に落ちたのだ。

話を戻すと、張角亡き後の黄巾は散り散りになって山賊などに身を落とす者まで続出した。

その者達は・・・ここ劉備玄德が指揮する義勇軍にも居ると言う。

「・・・それで、こんな所を？」

「それもあります但实际上の所は皆が自分達の力を誇示する為にここを任せた、とも言えます」

夜姫の言葉に典医は付け足すように言った。

反董卓連合軍は一枚岩ではない。

いや、岩などではなく人々の思惑が嫌と言うほど混ざり合い出来あがった組織だ。

そして少しでも亀裂が入ればあつと言う間に崩れてしまう危うさを持つ。

「つまり、皆は自分の力で董卓を倒し世間に自分の力を見せつけた。だけど、一人では倒せないから連合軍を作った。でも、皆が疑心暗鬼に陥って役に立たない。そこへ義勇軍と称する・・・押し掛け軍が来た」

ただでさえ前の状態でも難しかったのに、更に義勇軍と称する押し掛け軍まで来た。

しかも黄巾の者も居る。

そんな者達をおいそれと自分の陣へ入れる訳にはいかないし使う訳にもいかない。

だからと言って、下手に追い返すと後々面倒な事になる可能性も捨て切れないから、こんな場所を任された・・・

「その通りです」

「・・・酷い話ですね」

夜姫は余りの現実に吐き気を覚えた。

黄巾の乱に参加した者を入れている劉備が指揮する義勇軍だけではない。

曹操や孫堅だって、他の群雄達も同じ事。

それなのにどうして劉備だけがこんな目に遭っているのだ？と問われたら……何も無いから、としか言えない。

劉備は王朝の血筋を引いていると言われているが明確な証拠は無い。曹操や孫堅などは家柄もそうだが身分もある。

袁術と袁紹は名家の出身。

そこが劉備と違う所だ。

「それが現実という物です。天の姫である夜姫様には……我慢できない事でしょうが」

典医は自分のように顔を歪ませる夜姫を諭すように言うと、レンジで再びスープ状にした魚の肝を夜姫の口へと運んだ。

「これを食べたら少し歩きますか？」

「はい。じっと部屋の中に居るのは余り好きではないので……」

それに典医は頷いた。

魚の肝を腹に収めた夜姫は右手を典医に預けると左手に棒を持った。

何の変哲もないただの棒だが、夜姫にとっては宝物だった。

何せ劉備玄德が自ら木を削り作った棒なのだから。

左手に棒を持つ夜姫。

その手首には白い布……包帯が巻かれていた。

だが、典医はそれを知らなかった。

典医に手を引かれて天幕を出た夜姫は太陽の眩しい光に見えない眼を細めた。

そしてその後を関羽と張飛が無言で付いて行く。

「太陽の光が気持ち良いですね……」

「そうですね。私のような老人には些か強い気もしますが」

「そうなんですか？」

「ええ。どうも歳をとると色々な事に対して強いと思うのです」

若い頃は出来た事も今は出来ない事は多々ある、と典医は言った。

「夜姫様のご両親はそんな事を言わないですか？」

「・・・私、両親が居ないんです」

夜姫は僅かに間をおいて・・・心を落ち着かせるように答えた。

「両親が居ないとは？」

典医は踏んではいけない所を踏んでしまったと直ぐに悟ったが、下手に話題を変えるのはもつと不味いと思ったのか続きを言った。

関羽と張飛に到っては僅かに顔を曇らせたが、ここは典医に任せようと考えたのか無言になった。

「私、産まれた時・・・一人で泣いていたんです」

雨が降っていた夜、誰も居ない路地で白い布に包まれて泣いていた所を保護された。

それから親と暮らせない子供などが居る施設へ連れて行かれ育てられた、と夜姫は言った。

「でも、周りの子供達は何時もあると両親が来るんです」

手には玩具などを持って子供達に渡して抱き締めたり抱き上げる。

「それを羨ましく思いました。何で私にだけ両親が居ないの？って思いました」

ある時、その長に訊ねた。

『どうして夜姫にはお父さんもお母さんも居ないの？』

これに長は何も言えなかったらしいが夜姫はそんな長にこう言い続けた。

『夜姫が神様にお願いしたらお父さんと母さん来てくれる？夜姫を抱き締めてくれる？』

それを聞いた長は何も言わずに夜姫を抱き締めたらしい。

夜姫を抱き締める長は僅かに身体を震えさせていたらしく、それに夜姫は気付かなかった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

3人は何も言えなかった。

幼い頃に夜姫が言った言葉は子供だからこそ純粹なのだ。

純粹ゆえに罪を知らない。

それゆえ長は何も言えなかった。

何も言わなかった代わりにその時は自分が親代わりとして抱き締めたのだからと3人は推測した。

「・・・今にして思えば、子供の我儘でした」

夜姫は自嘲した。

その歳の娘にしては余りに痛々しい自嘲であり、典医は不味い事を訊いてしまったと自分の不覚に憤りを覚えた。

張飛などは僅かに瞼を赤くさせたが、それを関羽は堪えるように眼で合図した。

「典医様。今日は少し遠くへ行きたいです」

夜姫は典医にお願いした。

「もう少しこの場所を知りたいんです」

「・・・分かりました。夜姫様の望みのままに」

典医は深く一礼した。

夜姫は自分の気持ちを知ったのだろう。

知ったからこそ敢えて遠くへ行こうと言い場を和ませようとしたのだ。

それが典医は痛い程理解できた。

だからこそ夜姫の気持ちを無下にせず敢えて頷き歩き出した。

そんな4人を太陽はまるでこれからの未来を暗示するかのよう神々

しく輝きを放ち続けた。

その一方で劉備玄德と諸葛亮孔明は総大将の陣に呼び出されていた。総大将の陣は全部で4つで、その内の1つ・・・袁紹の天幕に居た。袁紹の天幕は流石は名家と謳われるだけの出だけあって贅が凝らされていった。

自分の天幕とは豪い違いだ、と劉備は思いながら何故呼び出されたのか？と考えたが答えは直ぐに見つかった。

理由は一つしか無い。

夜姫の事についてだ。

「夜姫様を、移動させる？」

劉備は袁紹から放たれた言葉を訊き返した。

「うむ。そなたの陣では何かと不便であろう。それに前のように敵軍が気紛れで来ないとも限らない」

袁紹は至極、当たり前のように言っていた。

的を射ている言葉でもあったため劉備は何も言えなかった。

「そこで考えた結果、総大将の陣に移動させようと考えたのだ」

ここまでが良いか？と袁紹は劉備に確認を取った。

「・・・はい」

劉備は間をおいてから袁紹の言葉に頷いた。

『・・・突然の事で動？しているのだろうか。私も彼の立場だったらそつだからな』

袁紹は劉備の態度を分析しながら、了承するかどうか考えてみた。

夜姫を総大将の陣に移動させる。

これは自分の異母兄弟である袁術が提案した事だった。

『天の姫をあんな馬小屋のような場所に何時まで置いておく気だ？直ぐにでも我が陣へ移動させるべきだ！！』

珍しく現実的な提案だ、とその時袁紹は思ったが改めて考えてみると胡散臭い。

この隣に居る異母兄弟は己が為なら何でもする。

それこそ仇敵とさえ手を結ぶ可能性だつてある位に。

更には自分より目立つ・・・戦功を上げた者に対しては凄まじい嫉妬を抱く。

そんな異母兄弟がこんな提案をするのだから何かしらの思惑があると疑ってしまうのは自明の理と言える。

同じ総大将の曹操、孫堅に関してもそれは同じ事だが少なくともこの二人に関しては袁術よりはまだ遙かに理性的な行動を取ると袁紹は思っている。

曹操とは知り合いであるが、明らかに自分と同じく天下を狙っているのは分かっている。

ただし、まだその時期では無いのか？

力が足りないと自覚している為か余り表立った行動はしていないが油断は禁物だ。

孫堅は袁術の配下にあるが、何時までもこの男が異母兄弟の下に居る訳が無い。

近い内に何かしらの行動を起こす事だろうと、袁紹は見ていた。

他の群雄達にしたって何かしらの考えはある。

『天の姫も厄介な時に、場所に來た物だ』

今の状況は非常に危うい状態だった。

相手は勇名と悪名を同時に馳せた董卓だ。

しかも配下には天下に名を轟かせている呂布まで居る。

こちらは誰もが腹に一物抱えており少しでも亀裂が入ればあつという間に全壊する恐れがある連合軍。

そんな所へ夜姫は降り立った。

それも義勇軍の陣へ。

どうせなら自分を含めた4人の何処かに降りてくれたら良かった、と袁紹は思ったがそんな事を想った所で何も始まらない。

「で、劉備よ。どうだ？」

袁紹はもう一度、劉備に訊ねた。

「私の一存では決められません。如何に私の陣へ降りたと言っても、あの方の意思を無視して移動させるのは……」

「ふん。そんな事を言っただけはいるが、本音では自分が夜姫様を物にしようと考えているのではないか？」

袁術が人の悪そうな笑みを浮かべながら劉備を見た。

「お言葉ですが袁術殿。そのような考えはこの劉備玄德。一度も考えた事はありません」

毅然とした態度で劉備は答えた。

この身は全て漢王朝の為に、夜姫様の為にある。

この戦いに参加したのも全ては漢王朝の為。

「その私を侮辱しますか？貴方様は」

「侮辱だと？たかが義勇軍風情がこの私に偉そうに」

「止めんか」

袁紹は熱くなり始めた二人を早々に止めた。

「袁術。劉備の気持ちは本心だ。その本心を侮辱するのは私が許さん。もし、またこんな真似をしたら容赦せんぞ」

「ほおう。貴様に出来るのか？」

「出来るとも。使者を装い夜姫様を強引に自陣へ引き込もうとした男なら、な」

「っ！！」

袁術はなぜ知っている？と顔をしたが見れば皆は知っている顔だった。

夜中ならまだしも昼間に行くのだから、どうぞ見て下さいと言って
いるような物をこの男は気付いていないらしい。

異母兄弟ではあるが情けない、と袁紹は落胆を隠せなかった。

「・・・・・・・・」

袁術は暫く袁紹と劉備を睨んでいたが、孫堅に宥められて怒りを必
死に抑えた。

「劉備よ。そなたは夜姫様の意思を尊重すると申したな？」

ここで何も言葉を放たなかった曹操が初めて口を開いた。

「はい」

劉備は曹操に視線を移して頷いた。

「ならば、夜姫様をここに連れて来て意見を言わせてはどうだ？ 皆の前で言えば納得もすると思うが」

これに劉備は頷いた。

「確かにそうですね。分かりました。直ぐに呼んで参ります」

「では、殿。私が夜姫様を呼んで参ります」

諸葛亮が自分で行くこととする劉備を留めた。

「では頼む」

「分かりました。失礼します」

諸葛亮は一礼してから天幕を出て行った。

天幕を出た諸葛亮は夜姫を探しに向かったが、その心中は穏やかではなかった。

『不味いですね。こつも早く動いて来るとは……………』

諸葛亮の考えではまだ自陣へ引き込もうという行動は取らずに気を

引こつとする、と予想していた。

だが、実際はもう動いていた。

『・・・不覚です。ですが、まだ挽回できます』

曹操は夜姫の意思を皆に言わせようとしている。

つまり実力行使はせず夜姫の気持ちを尊重するという事。

これなら天幕に戻るまでに夜姫に予め言えば問題ない。

しかし、それは出来なかった。

「諸葛亮殿。我々も行きます」

後ろから声がして振り返れば総大将の部下達が4人いた。

別々の主人だが。

「どういう事です？私が夜姫様に何か言おうと考えているのですか？」

諸葛亮は足を止めて4人に訊ねた。

「そうは言っておりません。ですが、念には念を入れろと言いますからね」

明らかに自分を疑っている、と直ぐに察する事は出来た。

『敵も馬鹿ではない、という事ですか。まあ、ある程度の予想はしておりますが手際が良いですね』

4人揃って抜け目が無い、と諸葛亮は感心を覚えながらも5人で夜姫を探し始めた。

第三幕：英雄達と対面

天幕を出た夜姫は典医に連れられて劉備の陣を歩いていた。

眼が見える訳ではないので、何がどんな形をしているのかは分からないが典医は簡単に説明してくれるので想像は簡単だった。

夜姫が来る度に義勇軍の兵たちは皆、動きを止め眼の具合などを訊ねた。

その度に夜姫は変わらない、と答えたが兵たちの気持ちは有り難いと礼を律儀にも一人ずつしていた。

それを関羽と張飛は感心しながらこれからどうなるのか一抹の不安を覚えた。

現在、董卓軍とまともに戦っているのは自分達義勇軍と曹操軍、孫堅軍の3軍だけだった。

誰もが董卓と戦うのを怖がっている。

董卓自身若い頃は武勇を馳せし、配下の将達もまた実力者ぞろいだ。

そんな董卓軍の中でも一際目立つのは養子である“呂布”の存在だ。字は奉先で元々は遊牧民の出だと言われているが明確な出自は不明である。

ただし、常人とは思えない腕力を誇り弓術・馬術共に優れている事。

また主人を平気で裏切る事は分かっている。

元の主人を董卓に唆されて首を切り持って行ったのが良い例だ。

前の主人は彼を親愛していた、というのに………

そんな敵軍と進んで戦おうとする者達は殆ど居ない。

しかし、夜姫が来てからは大きく変わった。

皆が夜姫に良い所を見せようと……自軍を頼るように仕向けている。

彼等は金銀などを差し出しながら自分の勇敢さなどを夜姫に言っ
て聞かせ売り込んでいる。

もちろんそんな事は全て退けているが、これからどうなるかは誰に
も分からない。

「なあ、関兄。義兄者はどうしているんだ？」

張飛は小声で関羽に訊ねた。

「分からん。だが、嫌な予感はするな」

関羽は自慢の髭を撫でながらも義兄である劉備が総大将の陣へ呼び
出された事に不安を感じていた。

「まったく。どうしてこころも俺らには運が無いんだか」

「そう言うな。必ず我々にも運は向いて来る。天の姫である夜姫様が来たのが証拠だ」

「そうだけだよ……ん？」

張飛は関羽の言葉に納得したが、何かを見たのか眼を細めた。

「どうした？」

「諸葛亮が来るぜ……しかも、総大将の部下4人と一緒に」

「……夜姫様、私の背に隠れて下さい」

関羽は典医と夜姫を自分の背中に隠すと張飛と共に仁王立ちして近づいて来る5人を見た。

他の兵達も現れた諸葛亮を除く4人に不審な視線を送った。

「関羽様。張飛様。夜姫様は？」

諸葛亮は扇で顔半分を隠しながら関羽に訊ねた。

だが、その仕草で2人は何か遭ったのだ、と理解した。

諸葛亮が扇で顔半分を隠すという事は何かが起こった、という事を意味している。

「私は、ここです」

大きな関羽の背中から夜姫が僅かに顔を出した。

「夜姫様。実は、殿が呼びしているのですが大丈夫ですか？」

「劉備様が？」

「はい。詳しい事は行きながら説明しますので宜しいですか？」

「分かりました」

夜姫も諸葛亮の声に何かを感じたのか僅かに身体を堅くしながら頷いた。

「では行きましょう」

諸葛亮と4人は夜姫たちを先導して歩き出した。

「典医様。劉備様に何か遭ったのでしょうか？」

夜姫は典医に不安そうな声で訊ねた。

「恐らくは。ですが、殿なら大丈夫ですよ」

典医は夜姫を安心させるように言ったが、その心は不安だった。

恐らく夜姫の事でまた問題が発生したのだろう。

しかし、それを夜姫に言えば彼女の心は痛むだけ。

それは眼の治療にも負担が掛るから敢えて言わなかった。

天幕に行くまで諸葛亮は夜姫に大まかな説明をした。

夜姫は自分を置いてそんな話に進んでいる事に驚いていた。

同時に自分の意思は？と思った。

「私の意思は・・・無いんですか？」

「それは問題ないと思います」

諸葛亮は夜姫の疑問を打ち消すように断言した。

「夜姫様は天の姫。貴方の意思を蔑ろにするという事は天に弓を引くも同然。誰もそこまで愚かな真似はしません」

これには総大将の部下4人も頷いた。

「・・・・・・・・・・」

夜姫はこれに何も言えなかった。

自分は天の姫などではない。

ただの大学生だ。

それなのにこんな状況になるとは・・・・・・・・・・

『どうなるのかしら・・・・・・・・・・？』

夜姫は自分の人生はどうなるのか、と自問自答したが明確な答えは見つけられずに黙るしかなかった。

それから歩き続けて暫く経つと袁紹の天幕に着いた。

眼で確認する事は出来ない夜姫だが、劉備の陣に比べてかなり規模は大きいという事だけは人の声や馬の蹄音で確認できた。

天幕の左右には槍を持った屈強な兵2人が立っていた。

しかし、夜姫を見ると直ぐに天幕へと案内された。

「殿。夜姫様をお連れしました」

諸葛亮が直立不動で立っていた劉備に報告した。

「ご苦労であった。夜姫様、貴方の足を煩わせて申し訳ありません」

劉備は諸葛亮を労いながら夜姫に詫びた。

「いいえ。私のような者を劉備様は面倒を見ているのですから、この程度は……」

典医に右手を預けた夜姫は僅かに曇った顔をした。

「びびり……」

「いやー、流石は天の姫だ。こんな義勇軍の長に対しても優しいですね」

劉備が訊こうとしたが、それを押し退けるように袁術が割って入った。

そして劉備を侮辱した。

「んだとこらー!」

張飛が袁術の言葉に怒りを露わにしながら掴み掛ろうとした。

それを関羽は思い留ませたが、厳しい視線を袁術に送り牽制した。

「袁術様……………」

夜姫は袁術の名を呼んだ。

「何でございましょうか？夜姫様」

袁術は夜姫に名を呼ばれて嬉しそうに訊ねてきたが、夜姫自身の顔は強張っていた。

「どうなされたのですか？そのように顔を強張らせて……………」

袁術は夜姫がなぜ顔を強張らせているのか理解できずに訊くと夜姫は小さな声で、しかし、ハッキリと言った。

「…………劉備様に謝って下さい」

「劉備に謝れとは？」

袁術を始めその場に居た者達は夜姫が何を言いたいのか解からなかった。

「劉備様は確かに義勇軍の長です。貴方様のように名門の出はありません。ですが、それでも軍を率いてこの戦いに参加しました」

それは少しでも貴方様達の役に立ちたいが為。

「それを蔑むのは道理に反しておりますし相手に失礼です。謝って下さい」

「い、いや、しかしですね……」

「私は謝って下さい、と“お願い”しているんです」

尚も食い下がろうとする袁術に夜姫は強い口調で言った。

しかし、言葉はお願いとしていた。

「それとも袁術様は……私のような小娘のお願いは聞けないのですか？私を小生意気な女だと思えますか？それで御不快な思いをなさったなら、私を鞭で打つなり剣で斬るなりして下さい」

夜姫は本心で言っているかのように悲しそうな顔をしてみせた。

しかも、追い打ちを掛けるように怒りたいなら罰を与えろとまで言ってみせた。

この言葉は嘘であるが、袁術に謝罪をさせる為にと夜姫は演技をした。

“流石は劇団員。裏方とは言え良く出来た演技だぜ。おまけに絶妙なスパイスを効かせている所が何とも……”

誰かが言ったが、それは誰にも聞こえなかった。

「い、いえっ。そんな事はありません！ですから、どうかそのような御顔をなさらないで下さい！！」

袁術は汚い唾を吐きながら夜姫に取り繕った。

夜姫が言った言葉は袁術から言わせれば侮辱に近い。

もし、夜姫がただの小娘なら言う通りその場で斬り殺すなり鞭で叩いていただろうが、夜姫は天の姫だ。

そして美人でもある。

そんな女性を悲しませたとあつては男としての面子に係わる上に印象も悪くなってしまう。

現に自分を除く男性全員から非難の眼差しを受けているのが良い証拠だ。

『な、何としてもこれ以上の事は避けなければ！！』

袁術は心の中で慌てふためいたが、夜姫はそれに追い打ちを掛けた。

「では、劉備様に謝って下さるんですか？私の願いを叶えて下さるんですか？」

夜姫は悲しそうな顔で袁術に訊ねた。

「勿論ですっ」

袁術は背に腹はかえられないとばかりに答えつつ顔を歪めた。

「……劉玄德殿。軽はずみな発言お許してください」

袁術は齒ぎしりしながらも夜姫の願いを叶える事にした。

「いえ。私是一向に気にしておりませんから」

劉備は当たり障りのない言葉を言ったが、視線は袁術を真っ直ぐに睨んでいた。

袁術も彼を睨み激しい火花を散らした。

『必ず……この屈辱を貴様の首で払ってもらおうぞ』

『何があろうと夜姫様を貴様のような男には渡さない』

二人は火花を散らしていたが、それを止めると言わんばかりに袁紹が咳払いをした。

「夜姫様は心優しいですね。それに引き換え、我が異母兄弟は何と情けない事か……。またしても我が異母兄弟が失礼な真似を致しまして申し訳ありません」

袁紹は袁術を睨みながらも夜姫に謝った。

「私は気にしておりません」

夜姫は興奮していたが、それを抑えて平静な口調で言った。

「そうですか。では、ここにお呼びした訳を言います」

袁紹はまたしても咳払いをした。

そして訳を話した。

「夜姫様はただ今、劉備殿の陣に居りますね？」

「はい。それが一体？」

「劉備殿の陣は失礼な言い方ですが義勇軍の陣。天の姫である夜姫様の事を考えると、もっと安全で快適な場所に移動させるのが良いのではないか？と思いました」

「というと袁紹様の陣へ来い、という事ですか？」

「いえいえ。私の陣に来いとは言っておりません。ただ、やはりもう少し安全な誰かの陣へ来るのが貴方様の為になるのでは？と思いました」

袁紹は出来る限り言葉を選び夜姫を刺激しないように努めた。

先ほど異母兄弟が馬鹿な発言をしたせいで夜姫は興奮している。

これでまた怒らせては堪らない。

そのため強くは言わなかった・・・曖昧とも取れる言い方をした。

「どうでしょうか？夜姫様」

袁紹は夜姫に訊いたが、こつも続けた。

「ですが、直ぐに決めろとは言いません。先ずは我々4人の陣に1夜ずつ泊り、それで気に入った場所に来て下されば良いかと思いません。それで決められないなら最初と同じ通りにしても構いません」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夜姫は袁紹の申し出に困惑した。

別に劉備の陣が住み辛いとは思わない。

それ所か自分などの為に色々と工面している事を考えると・・・迷惑を掛けているのではないかと夜姫は思っていた。

「劉備様。私は、私は・・・貴方様の陣に居ても迷惑ではないでしょうか？」

劉備に質問した夜姫。

その声は否定して欲しいという色が含まれているのを劉備は感じ取った。

「貴方様は私の為に色々と苦慮しております。その事で迷惑を掛けていますか？いるのでしたら出て行きますので正直に申して下さい」

夜姫は劉備に顔を向けて言い続けたが・・・やはり否定して欲しいという色が含まれていた。

「何を言います。貴方様を迷惑など誰も思っておりません。寧ろ貴方様を迎えられて光栄に思っております。貴方様へ良ければ何時までも我が陣に居て結構ですよ」

それを聞いた夜姫は安堵の息を吐いた。

まるで否定されるのを怖がっているように劉備には見えだが、安堵するのを見て彼自身もまた安堵した。

これで夜姫の気持ちは分かった。

夜姫はどの陣にも行かない、という事。

劉備は夜姫の意思を伝えようと思いき口を開こうとしたが、ある人物がそれを遮った。

「天の姫。我が名は曹操と言います」

唐突に一人の男が名乗った。

「・・・曹操・・・曹孟徳様ですか」

夜姫は唐突に自己紹介されて困惑したが、直ぐに一人の人物を思い出した。

「左様。この前は自己紹介ができませんでしたので、この場を借り

て名乗らせて頂きました」

曹操と名乗った男の方角は声から察するに袁紹の左だった。

曹操・・・字は孟徳もつとくと言い“乱世の奸雄”と謳われ三国演技では劉備の宿敵でもあり魏の地盤を築き上げた人物だ。

曹操の祖父は宦官だったが、袁紹と袁術が起こした宦官皆殺しで失った。

その事もあってか二人の仲は決して良いとは言えなかった、と夜姫は調べた資料を頭の中で思い出した。

「曹操殿に従う形ですが・・・孫堅と申します。夜姫様」

今度は孫堅という男が夜姫に名乗った。

「孫堅様・・・海賊退治で武勇を馳せた方ですね？」

孫堅は呉の礎を築いた男で字は文台ぶんたいと言う。

17歳の時に智謀を駆使し海賊を追い払った逸話があるほど智謀に優れているが勇敢な男でもあり優れた善政も敷いたのか民達からは慕われていた。

この董卓連合軍にも参加し曹操と共に勇敢に戦った筈、と夜姫はまた資料を頭の中で広げて思い出す。

「はい。17歳の時です」

「17歳の若さで海賊を退治するなんて凄いですね」

17歳と言えば夜姫の世界では高校2年生だ。

そんな歳で海賊たちを追い払ったのだから素直に凄いと夜姫は思い口にした。

「いえ。ただ少し頭を使って追い払っただけの事です」

しかし、孫堅は謙虚なのかそれを苦笑して受け止めた。

「それでも凄いですよ。誰にも出来ない事ではありません」

尚も夜姫は彼を褒め称えた。

「天の姫に褒められるとは光栄に思います」

孫堅は夜姫と笑顔で会話をした。

そこへ曹操が割って入って来た。

「それにしても夜姫様は・・・お美しいですね。銀糸と薄紫糸が混ざり合った髪などこの世の者とは思えない美しさだ。いや白絹のような肌にその瞳も美しい・・・誠に美しい・・・実に美しい」

曹操の言葉に夜姫は僅かに眉を顰めた。

『銀と薄紫が混ざった髪？私・・・茶色なんだけど・・・どうなっているの？』

夜姫の髪は茶色だ。

それを銀と薄紫などというとはどういう事だ？

しかし、それ以前に曹操には何故か言い知れない恐怖を感じた。

「・・・・・・・・・・」

夜姫は僅かに下がり劉備の後ろへと立った。

それを見た曹操は苦笑いをして夜姫に優しい声で語り掛けた。

その声はまるで罪に誘う悪魔のようだ。

「そのように怖がらなくても私は何もしませんよ」

今は、な・・・・・・・・・・

何処からともなく夜姫の脳内に声がした。

曹操の声だ。

『これが曹操の本心？』

彼の心が見えた錯覚を夜姫は覚えた。

「どうなされたのですか？顔が青白いですが？」

尚も曹操は語り掛けてきた。

その怯えた子兔のような顔もまたそそののう・・・・・・・・・・
『やだ。この男ひと・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・
ここに居たくない。この男の傍に居たくない・・・・・・・・・・!!』
夜姫はどうしようもない恐怖に襲われた。

そして一刻も早くこの場から逃げたいと思った。

「・・・・・・・・私、何処にも行きたくありません。・・・・・・・・劉備様の陣へ置いて下さいっ」

我を忘れたかのように夜姫は劉備の裾を掴むと懇願した。

それに皆は一様に驚いた。

先ほどまでの態度とは違う。

どういう事だ？と皆が首を傾げる中で劉備だけは冷静だった。

「夜姫様・・・・・・・・」

劉備は夜姫の様子が可笑しい事に気付いた。

まるで何かに怯えているかのように・・・・・・・・

「夜姫様。どうなされたのですか？御気分でも悪いのですか？」

典医が夜姫を安心させるように言うが夜姫は怯え続け誰の声も聞かないかのように言い続けた。

「ここは嫌です。ここに居たくないです。・・・早くここを出たいです。・・・早く陣に帰りたいつ」

夜姫は典医の言葉を無視して早くここを出たいと言い続け震え始めた。

「・・・・・・・・・・」

典医は夜姫がここに居ると不味いと判断した。

今の状態は尋常ではない。

「御気分が優れないのでしたら、薬師を・・・・・・・・・・」

袁紹が夜姫の様子を見て薬師を呼ぼうとしたが既に夜姫は典医を引き摺るようにして天幕を出て行った後だった。

「・・・我々もこれで失礼します」

関羽と張飛も夜姫の後を追う為に天幕を出て行った。

「どうなさったのだろうか？天の姫は」

皆が茫然としている中で曹操だけは涼しい顔で言った。

「・・・・・・・・・・」

劉備は曹操を見た。

夜姫は曹操の言葉を聞くなりあの様に急ぎ足で出て行った。

その曹操は涼しい顔でいるが。

「殿。私達も失礼しましょう」

諸葛亮が劉備に言うと言劉備は頷いた。

「では、私も失礼します」

4人に一礼して2人は天幕を出て行った。

残された4人は夜姫の態度に些か驚いていた。

初対面の時は初々しいと言えば良いのか？

とにかく大人しい印象を受けたが、先ほど袁術に謝るように言った時は憤怒の印象を受けた。

そして今度は、まるで何かに怯えたかのように足早に去っていく姿は・・・保護欲を誘うと同時に滅茶苦茶にしたいという破壊願望に誘われた。

「一体、天の姫は何に怯えていたのだ？」

袁紹は訳が分からないとばかりに溜め息を吐いた。

それは他の者達も同じだった。

ただ一人を除いて・・・・・・・・・・

『あのよつに怯える姿もまた愛おしいのう・・・そなたが欲しくな
ったぞ。夜姫』

第三幕：英雄達と対面（後書き）

何だか思い付く限り書いた気がしましたので、少々手直しをしました。
た。

幕間：道化と茨の道（前書き）

お待たせしましたー。

やっと更新です。（汗）

もう少し、出すのは遅めにしようと考えていたんですが彼女と協議した結果、少しずつキャラを出そうという結論に至りました。

幕間：道化と茨の道

袁紹殿の天幕を出た私は諸葛亮を伴い急いで夜姫様の後を追い掛けた。

夜姫様は速足で私の天幕に急いでいた。

典医殿が先導しているのだが夜姫様の方が速い。

それを雲長と益翼は追いかけて呼んでいるが夜姫様は足を止めない。

「何故あんなに怯えたのでしょうか？」

諸葛亮が呟き私は考えた。

夜姫様は何か怯えていたのは確かだ。

・・・尋常じゃない位に。

それが何なのかは分からない。

分からないが余りに怯えている。

何だ？

分からない。

夜姫様は何に怯えていたのだ？

諸葛亮が更に足を速めた。

思考を止めて視線の先を見ると夜姫様が倒れていた。

それを典医殿達が介抱し様とする所だった。

「夜姫様!!」

私は走った。

諸葛亮もまた続いて走った。

急いで夜姫様の所へ行くと典医殿に身体を起こされながら泣いていた。

空虚な瞳からは留めなく真珠のように綺麗な涙が零れ落ちて行く。

まるで本当の真珠だ、と私は不覚にも見惚れてしまったがそれ所ではない。

「夜姫様。大丈夫ですか？」

私は話し掛けたが、夜姫様は答えない。

「怖い・・・怖い・・・誰か助けて・・・助けて・・・」

夜姫様は身体を起こされながら誰に言うまでもなく助けを求めた。

傍には典医殿達が居るのに、だ。

「・・・夜姫様。大丈夫ですか？」

私はもう一度、夜姫様に話し掛けたが駄目だった。

ひたすら怯え助けを求め続ける。

一体どうなされたのだ？

もう一度、考えてみる。

夜姫様が怯え始めたのは何時だ？

一つの答えに導かれた。

・・・曹操殿。

あの方が夜姫様の容姿を褒めてから怯え始めた。

・・・あの方が、原因か。

・・・曹孟徳。

乱世の奸雄と言われ、その通り数々の失礼な言い方だが悪知恵などを働かせて魏という大国を支配している。

あの方は天下を虎視眈々と狙っている。

だが、帝からの信頼は厚い・・・

祖父であった曹騰そうとう様が“中常侍”ちゅうじょうじ・“大長秋”だいちようしゅうを務めていた事も理

由として上げられるだろう。

中常侍とは皇帝の傍で様々な取り次ぎなどを行う役職で大長秋は皇后府を取り仕切る宦官の最高位だ。

この2つの役職を曹操殿の祖父は務めていた。

この方はもうこの世に居ないが、その孫に当たる曹操殿を帝は厚く信頼している。

だからこそ、漢王朝の衰えを間近で曹操殿は感じて天下を狙い始めたのだろう。

いや・・・曹操殿だけではない。

皆が天下を狙い・・・天の姫である夜姫様を利用しようとしている。

恐らくその中でも曹操殿の気が強く・・・当てられたのだろう。

「いあ・・・来ないで・・・誰か・・・誰か・・・」

夜姫様は尚も助けを求め続けている。

誰が何を言っても聞こえていない・・・

くそ・・・くそっ・・・くそ!!

たった一人・・・目の前で苦しんでいる娘を助けられないで・・・
漢王朝復興など出来るかっ

私は何も出来ない自分に激しい怒りを覚え拳を握り締めた。

血が滴り落ちるのを感じたが……こんな痛み……夜姫様の怯えに比べれば屁でも無い。

何か手は無いのか？

私は誰でも良いから助けを求めたかった。

『おお、随分と苛立ってるな？劉備殿』

頭の中に誰かの声が聞こえてきた。

ある程度歳を取った男の声だ。

誰だ？

私は頭の中に話し掛けてきた男に訊ねた。

『男に名乗る名前は持ち合わせてない。それより今、俺はお前さんの頭の中に話し掛けている。周りには気を付けろ』

言われた私はそれに頷いた。

『それよりそこのお姫さんを助けたいか？』

出来るのか？！

私は藁をも掴む勢いで声に訊ねた。

『ああ。ただし・・・代償が必要だぜ？』

代償だと？

『俺はただ働きが嫌いだ。だから、あんたに代償を求める』

代償とは何だ？

私に払える物なら払ってやる。

『威勢の良い台詞だな。あんたが俺に対して払う代償は“茨の道”だ』

茨の道？

どういう事が分からず私は訊ねた。

『そのままの意味だ。お姫さんを助ける代わりにあんたには茨の道を歩んでもらうだけだ』

茨の道を歩む・・・

・・・具体的にどういう事になるんだ？

『そうだな。世界を・・・国中を敵に回す事になる』

国中を敵に回す・・・だと？

『ああ。割に合わないかもしれないが・・・どうする？』

.....

無言になる私になおも男は質問してきた。

今、苦しんでいる娘を捨て未来を楽しむか？

娘を助け苦しい未来を歩むか.....

『さあ、どうする？劉備玄德様』

男は何処か楽しんでいる口調だった。

私は一度、夜姫様を見た。

夜姫様の顔は青白くなり始めた。

更には熱も出てきたと典医殿は告げた。

苦しそうな息をする夜姫様を見て私は決断した。

愚問・・・一人の娘も助けられず漢王朝復興など有り得ない！！

夜姫様を助ける。

そして私は茨の道を歩もうではないか。

例え世界を敵に回しても構わん！！

『それじゃあ契約成立だな』

だから、早く夜姫様を助けてくれ。

『そう焦るな。先ず姫さんの額に手を置きな』

私は言われた通り夜姫様の額に手を置いた。

皆は私の行動に視線を釘付けにするが私は構わなかった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

何やら呪文を唱え始めた声の主。

私にはまったく分からない呪文だ。

怪術者か？

だが、今は夜姫様の方が先決だ。

私は考えるのを止めて夜姫様の容態を見続けた。

夜姫様の顔色が良くなり始めた。

そして・・・眠った。

『これで大丈夫だ。後は寝かせておけ』

声の主は息を吐いて私に告げた。

礼を言おう。

『礼なんか要らん。契約に従い俺はやったただけだ』

声の主はどうしても良さそうに言ってきた。

『本当に良かったのか？』

国中を敵に回すかもしれないのに……………

構わん。

夜姫様を助けられるなら私がどうなるうと構わない。

『大した度胸だ。気に入ったぜ。劉備玄德』

また会おう、と声の主は言ってきた。

また？また会えるのか？

『ああ。会えるさ。今度はお姫さんと会話をするが、な』

それじゃ、と言って私の中から何かが抜ける気がした。

だが、今は……………

「雲長。直ぐに夜姫様を寝台に寝かせろ」

「御意に」

雲長は頷くと夜姫様を抱き上げて天幕へと走って行った。

「殿。一体あれは……………」

諸葛亮が私に話し掛けてきたが私はそれを遮った。

「後で話す。今は夜姫様の身が心配だ」

「……………」

諸葛亮は私の言葉に頷き、皆で夜姫様が連れて行かれた天幕へと向かった。

天幕に行く間、兵たちが私に訊いてきた。

『夜姫様は大丈夫ですか？』

皆……………心から心配していた。

私はそれに対して大丈夫だ、と答えた。

「ですが、お顔の色が……………」

「もう良くなった。どうやら、慣れない環境で疲れたらしい」

「そうですか……………俺達に出来る事って無いでしょうか？」

「そうだな……………」

私は考えてみた。

夜姫様を心配する彼等に何も無い、などと言うのは酷過ぎる。

かと言って何かあるのか？と言われると困る。

『それだったら、風呂にでも入れてやりな』

そなたは……………

『また会おう、なんて格好付けたが直ぐに来た。まったく世話が掛る姫さんだ』

その声には昔を懐かしむような色合いがあった。

失礼だが、夜姫様を知り合いか？

『男の質問には答えない主義だ』

随分と男に厳しいのだな。

私は微かに笑みを浮かべた。

『男に優しくしても嬉しくないからな。それより風呂は出来るか？』

風呂？

『ああ。お姫さんは女だぞ？しかも、毎日…………とは言わないが2、3日に1回は湯に浸かる』

風呂…………我々は湯に浸かる事は滅多にない。

水が足りないのだ。

それは宮廷でも同じではある。

濡れた手ぬぐいで身体を拭く程度だ。

だが、夜姫様はどうやら2、3日に1回は湯に浸かるらしいが・・・
ここは戦場だ。

何処も水は欲しいし無駄遣いは控えている。

『水が足りないなら俺が用意してやる。お前さんは風呂を作れ』

分かった。

風呂を作るのは出来なくはない。

ただ、木材を集めるのに時間が掛る。

『どれ位だ？』

明日の朝まで、と思う。

『なら明日の朝まで姫さんを寝かしつけておくから用意しろ。水は風呂が出来次第用意する』

分かった。

しかし、そなたは何者だ？

水を用意するなど簡単ではないぞ？

『何度言えば分かる。男の質問には答えないんだよ。しつこい男は嫌われるぞ。まあ、度胸に免じて答えてやる』

何処までも尊大な言い方だったが不思議と腹は立たなかった。

『一言で言えば道化。人を笑わせて楽しませる奴だ』

楽しませる？

私は楽しくないぞ。

『俺は女専門だ。野郎の笑いなんて反吐が出る』

そうか。

では、夜姫様の事を頼む。

ただし、何かしてみろ？

そなたを見付けだして首を刎ねてやる。

『おお、怖いねー』

斬られては堪らない、と男……道化は言つと私の頭から消え去った。

「諸君。夜姫様はこの地に来てから一度も湯に浸かっていない。風呂を用意できぬか？水は私が用意する」

私は兵達に道化から言われた事を伝えた。

「風呂なら出来ますっ」

「では、それを頼む。夜姫様は我々と違い女性だからな」

分かりました、と威勢よく言うと兵たちは風呂の準備をした。

「さあ、急いで天幕に行くぞ」

私は再び天幕へと急いだ。

天幕に到着した私達は直ぐ中に入った。

寝台には夜姫様が寝かされていた。

もう顔色は悪くない。

「義兄者。一体、あれは何をしたのだ？」

雲長が振り返り私を見てきた。

他の者も同じだった。

「うむ。実は……」

私は皆に道化の事を話した。

最後まで聞き終えた皆の反応は同じだった。

「流石は義兄者だつ。夜姫様を助ける為に茨の道を歩むんだからな
!!!」

益翼が声を大きくして私を褒めたが、直ぐに雲長に叱られた。

「しかし、義兄者。その道化という者は何者でしょうか？」

雲長が訊いてきたが私は分からない、とだけ答えた。

「だが、少なくとも夜姫様の敵ではない気がする」

敵なら私に話し掛けず黙って夜姫様が死ぬのを見ていれば良いだけだ。

それを敢えて助ける事を考えると敵ではない気がする。

「それに夜姫様とは知り合いの気もする」

あの声から察するに知り合いだと察する事は出来た。

「しかし、水を用意するなんて仙人じゃあるまいし……」

益翼は道化を仙人では？と言ったが確証は無い様子だった。

「殿。その者は殿の頭の中に話し掛けたのですよね？」

諸葛亮が扇を弄りながら私に訊ねてきた。

「うむ。突然、私の頭の中に話し掛けてきた。そして夜姫様を治した」

仙人・・・そうでなくても人間ではない。

「私にも分かりませんね。ですが、夜姫様の容態が治ったのなら良いです。しかし、国中を敵に回すとは・・・・・・・・・・・・・・・・」

「諸葛亮よ。私は漢王朝を復興する夢がある。それには茨の道も歩む事だろう。それが確実になったただけだ。そう気を落とすな」

「ですが、国中を敵に回すという事は漢王朝も敵に回すと思いますか？」

「そうだとしても、一時の誤解だ。誤解は解ける。案ずるな」

言葉では楽観的に言ったが、心では不安だった。

道化は国中を敵に回す、と言った。

それは漢王朝もまた敵に回るという事を意味している。

それでも私は夜姫様を助けたかった。

漢王朝と戦う気は毛頭ない。

私は漢王朝にこの身を捧げている。

殺されるのならそれで本望だが・・・夜姫様の安全を見るまでは死ねない、と思う自分が居る。

しかし、悪い気はしない。

漢王朝復興と同じ位・・・いや、それ以上に私は夜姫様を護りたかった。

それが今の私の正直な気持ちだ。

夜姫様の方へ視線を向けると・・・可愛らしい天女の寝顔が見えた。

純粹な寝顔・・・まるで赤子だ。

この笑顔を汚してはならない。

汚す者は誰であろうと力の限り退けてみせる。

私は夜姫様の寝顔を見て改めて決意を固めた。

第四幕：姫への送り物

何やら良い香りが鼻を攪り夜姫は目を覚ました。

眼を開けているのに視界は暗い。

最初こそ深い絶望に見舞われたが、今はもうそれを覚えない。

寝台に寝かされていると知った夜姫は上半身を起こした。

「私……………」

夜姫は袁紹の天幕で自分が何を……………どんな事をしたのか思い出した。

曹操の本心と思われる声を聞いて恐怖に駆られたのだ。

そして取り乱した。

……………あの気は曹操の気だ、と夜姫は思った。

まるで燃えるように熱い気だった……………自分を燃やし尽くすほど熱い気で思い出すと頭が痛くなった。

「頭、痛い……………」

夜姫は額に手を当て、曹操の事を考えるのを止めた。

すると頭痛は止み元に戻った。

「……曹孟徳……」

夜姫は、出来る限り曹操と会わないようにしようと思った。

「おお、目が覚めましたか。夜姫様」

天幕を開け典医が入って来るのを夜姫は気付いた。

「はい。あの、私……」

「それは後でお話しましょう。ですが、今はどうぞ外へ」

典医は夜姫の質問を保留にし、夜姫の手を取った。

「外に何かあるのですか？」

「ええ。夜姫様が喜ぶ物です」

『私が喜ぶ物？』

夜姫は典医の言葉に首を傾げるしかなかった。

典医に連れて行かれて外に出た夜姫を太陽の光が照らす。

その光で夜姫の紫が少し掛った銀髪が怪しい光を放ち遠い所まで照らす気がした。

「典医様。一体何処へ？」

天幕からかなり離れた場所に連れて行かれる気がしたので夜姫は不安になり始めた。

「もう直ぐ着きますからご安心を」

典医は夜姫を安心させるように言いながら歩き続けた。

どれくらい歩いたのかは不明だが、だんだん心落ち着く香りが強くなってきた。

『何の匂いかな？花の香りに似ているけど……………』

夜姫はまったく分からずにいた。

こんな時に眼がみえれば、と思うが……………

「夜姫様。ご気分は如何ですか？」

思考している夜姫に劉備の声がした。

「劉備様……………」

夜姫は劉備の声を聞くと心が落ち着くを感じた。

「ご気分は如何ですか？」

もう一度、彼は訊ねた。

「あの、私……………」

「昨夜の事なら大丈夫ですよ」

些か驚きましたが、と劉備は言い夜姫の言葉を遮った。

「すみません……どうしてかは分からないんですが、急に怖く
なつて……」

「それは……曹操殿が話して来てから、ですか？」

「……はい」

夜姫は劉備が出した人物の名に頷いた。

「あの人の声が聞こえたんです。頭の中に……」

外では安心させようとしていたが、内では自分に何かしようとして
いる、と夜姫は言った。

「大丈夫ですよ。この劉備がお傍に居りますから」

劉備は夜姫に優しい声で語り掛けて安心させようとした。

「それより湯の準備が出来ましたよ。夜姫様」

「湯の準備？」

夜姫は首を傾げた。

この時代、湯に浸かるのは極稀の筈だ。

何よりここは戦場だ。

そんな所で湯など用意できるのか？と疑問を抱かずにはいられない。

「あのどうやって湯を？」

「雨が昨夜、降り始めたんです」

自分に湯に浸かせようと思いついた矢先に雨が降り急いで作り上げて溜めた、と劉備は答えた。

これに嘘は無い。

昨夜、風呂を作っていた途中に雨が降った。

その雨は普通の雨と違い劉備達が作った風呂にだけ降っている。

これには茫然としていたが道化と名乗る者の声がした。

『雨を降らせてるだろ？』

劉備は直ぐに良く出来るな、と言ったが道化はそれを鼻で嗤いこつと言った。

『湯を沸かす時間が惜しいから温めておいたぞ。姫さんが好む温度だ』

そこまでするとは、しかも夜姫が好む湯の熱さまで知っているのだから些か引いてしまつのは言つまでも無い。

話を戻すと、あつというまに温かい湯が風呂に溜まったので典医が夜姫を呼びに行ったという訳だ。

「私のような娘の為に……ありがとうございます」

夜姫はここまでしてくれる劉備に感謝の念を伝えた。

「いえ。これも皆、夜姫様の人徳が成した事です。それから生憎と女性は居ないので不便だとは思いますが、お一人でお願いします」

劉備は申し訳なさそうに言ったが夜姫は少なからずそれに安堵した。羞恥心もあったが……それ以上に見られたくない理由があったから……

「さあ、どうぞ。夜姫様」

そんな夜姫に気付かず劉備は彼女を風呂へと案内した。

「周りを布で隠しておりますからご安心ください」

布を上にあげる音で確認しながら夜姫は言葉に頷いた。

布を潜り、中に入ると適度な熱さの湯気を感じた。

「では、ゆっくりと身体を癒して下さい」

「ありがとうございます」

夜姫は劉備に礼を述べて、彼が出て行くのを音で確認してから服を

手探りで脱ぎ始めた。

と言っても夜姫がデザインした服は脱ぎ易いようにしてある。

演劇では常に同じ服を着て演技するとは限らない。

時には直ぐに着替えたりする事だつてある。

今回の演劇に関してもそうだ。

だから、直ぐに脱げるように帯一枚で直ぐに脱げるようにした上に直ぐに着替えられるようにもした。

『我ながら良い出来だと思つわ』

自分で言うのもなんだが、それなりに出来ているなと夜姫は感心した。

帯を解き、服を脱いだ夜姫は手探りで丁寧に畳んで左腕に巻いていた包帯を解いた。

それから首に掛けていたネックレスを取り手探りで風呂を探した。

直ぐに手に堅い木の部分が当たつて、風呂だと判った。

足を上げて中に入ると温かい・・・夜姫が好きな温度だった。

「はー・・・・・・・・」

肩まで浸かり夜姫は軽く息を吐いた。

「夜姫様。湯加減はどうですか？」

劉備の声が布越しに聞こえてきた。

「……ちょうど良いです。おまけに香水みたいに綺麗な香りが出て……気持ち良いです」

劉備の質問に答えながら夜姫はまた息を吐いた。

「気持ち良い……」

夜姫は湯の中で身体を洗いながら空虚な眼差しを閉じた。

風呂に入れるなど夢にも思っていなかった。

実際、風呂に7日間も入れなかった夜姫としては嬉しかった。

『……眠くなってきたな』

このまま寝てしまいたい、と夜姫が思った時だ。

「劉備！何だ？この布は?!」

聞き覚えのある声があった。

この声は……

『袁術様ね』

彼に対する夜姫の第一印象は一言で表すなら「傲慢」だった。

誰振り構わず侮蔑するくらいがある。

実際、名家の血筋を自慢していたし色々と腹黒い話にも事欠かない人物だったから何とも言えないが。

「袁術殿。あまり近づかないで下さい」

劉備が袁術を押し留めるように言った。

諸葛亮、関羽、張飛の3人は生憎と出払っており典医は用事が出来たので居ない。

『不味い時に来たな』

劉備は内心で舌打ちを漏らした。

彼等が居れば何とかだったが、今は一人だけ。

この男を一人で相手にするには些か荷が重い。

「黙れ！！昨夜は夜姫様にお願いをされたから謝ったが、私は貴様を・・・貴様等を認めんぞ！！」

「別に貴方様に認められたいとは思っておりません」

劉備は袁術の言葉を涼しい声で受け流してみせた。

「ふんつ。夜姫様を自分の懐に入れて強気か？まったく夜姫様も憐

れな方だ。そなたのような男の陣に来たのだからな」

「・・・・・・・・・・」

夜姫は改めて袁術に怒りを覚えた。

昨夜の事もそうだが、この男は言う事が人の神経を逆撫でにする。

「私を悪く言うのは勝手ですが、夜姫様を憐れむのは止めて下さい」

劉備は布を背中にして袁術に言った。

夜姫は憐みを何よりも嫌う。

それは7日間と言う短い付き合いで学んだ事だ。

直ぐ後ろに彼女が居る。

聞いている事は間違いない。

なら、ここは早々に帰ってもらい何も無かった事にするのが一番だ。

そう思つて何とか送り帰そうとするが、お坊ちゃん育ちの彼にはその真意など分かる訳も無い。

「眼も見えない上にそなたのような貧乏武将の下へ来たのだ。憐れと言わず何と言う？それはそうとこの布は何だ？何の意味があつてこれを四角に囲んでいる？」

「それは・・・・・・・・・・」

劉備が答えようとした時だ。

「……袁術様」

布越しに夜姫は声を掛けた。

「や、夜姫様ツ。そこに居られたのですか？」

袁術は夜姫の声を聞いて不味い、とばかりに慌てた声を出した。

「昨夜に続いて……また劉備様を侮辱しましたね」

「あ、いや、これには……」

「もう謝って下さい、とは言いません。貴方と言う人物がどんな方なのか改めて認識しました」

名家と言う事を鼻に掛け相手を見下す嫌な男。

「や、夜姫様……」

「私……そういう方は一番嫌いなんです」

これに袁術は言葉が言えなかった。

劉備はここまでハッキリと嫌い、と言われた袁術に少なからず男として同情を禁じずにはいらなかった。

『ま、不味い……』

袁術は心の中で何とかこの状況を打開しなくては、と焦りを覚えた。今日ここに来たのは、夜姫に会う為だ。

昨夜の件について改めて謝り印象を良くしようとして浅い考えを持ち来たが、当の夜姫が居ない。

探し歩いていると布に囲まれた部分が見えた。

そこには自分に屈辱を与えた劉備玄德が居たので昨夜の意趣返しとばかりに言い掛かりを付けたのだが……………

運の尽きと言えた。

「夜姫様……………」

袁術は跪き、布越しに謝罪した。

心からの謝罪だ。

「この袁術。貴方様の御心を汚す積りは毛頭ございません。ですから、どうかお許し下さい」

「…………嫌、と言ったら？」

夜姫はここは強く出るべきと思い、敢えて冷たい口調で言ってみせた。

「夜姫様ッ」

「私は、劉備様を恩人と思っております。その恩人を侮辱する方を許せるほど寛大な心は持ち合せておりません」

「ど、どうか、この袁術に寛大な御心を！そのお姿を見せて下さい！！」

「お願いします、と言いつち上がって近づこうとしたが石に躓いてしまった。」

そして盛大に転んだ。

劉備がそれを抑えようとしたが、重い鎧を着ている方は袁術だから重さに負けて後ろに倒れて行く。

“ あーあ、やつちゃった ”

誰かの声があったが誰にも聞こえない。

布が夜姫の居る風呂に倒れた。

「きゃっ」

夜姫は頭に何か掛るのを覚えて軽く悲鳴を上げた。

「夜姫様！！」

袁術は押し倒す形となった劉備には眼も向けず布を退かそうとした。

そして……

「ん？これは……………」

布越しに掴んだ手に柔らかい感覚が来る。

もしや……………」

「き……………きゃああー!!」

夜姫の悲鳴がすると同時にパチンツと乾いた音が木霊した。

第五幕：姫君の言葉

「……申し訳ありません！」

劉備が指揮する義勇軍の天幕の中では袁術が地面に頭を擦りつけて何度も謝っていた。

謝っている相手は言わずとも分かるが夜姫だ。

夜姫本人は典医に背中を撫でられながら俯いていた。

その傍らに劉備と諸葛亮が控え、夜姫を護るように関羽と張飛が仁王立ちで土下座する袁術を睨んでいる。

「や、夜姫様が、風呂に入っているとは知らず……」

袁術は土下座していた顔を上げた。

その顔には……赤い紅葉が咲いていた。

それを見て張飛は笑いそうになったが、それを必死に抑え我慢した。

先ほどの出来事は不可抗力と言えば不可抗力だ。

だが、物事そんなのは言い訳に過ぎないと断罪されるのが世の常と言える。

夜姫の悲鳴は陣内に広がり、皆が一斉に駆け付け泣く夜姫と赤い紅葉を咲かす袁術が居るのを見た。

それで直ぐに皆は袁術を吊るし上げようとしたのは言つまでも無い。

しかし、仮にも総大将である袁術を吊るし上げにするのは不味いという事で、この事は他言無用と劉備が緘口令を敷き陣内で事を治めた。

だからと言ってそれで袁術が何の罪も問われないということそうではない。

現在、袁術は夜姫に平謝りをしている。

袁術としては人生最大の失態と言えた。

あろう事か天の姫の胸を掴むなど布越しとは言え言語道断だ。

本来な極刑と言われても文句一つ言えない。

「夜姫様ツ。誠に申し訳ありません。で、ですが、誓ってこの袁術。決して貴方様の・・・その、あの・・・」

「もう・・・良いです」

夜姫は静かに袁術の謝罪を遮った。

「あれは・・・不可抗力だと割り切ります。袁術様も・・・反省しているようですし、私も・・・お返しをしましたから・・・」

これには皆が驚いた。

普通こんな真似を幾ら不可抗力とは言え、怒り浸透で極刑を与えても良い筈なのに。

「や、夜姫様……………」

袁術はまるで罪を許す聖母を前にした罪人のように夜姫を見上げた。

「…………今度からは気を付けて下さい。それから他の人たちと協調性を持って下さい」

さもないと何れその性格が仇となり誰も助けてくれない、と夜姫は断言した。

「私の知り合いも貴方のような性格で身を滅ぼしました」

それが嫌なら改めろ、と夜姫は続けた。

「それに私はその性格が嫌いです」

袁術は罪を許されたとばかり思っていたが、性格を改めると説教をされて頭を垂れた。

「…………努力します」

「そうして下さい。そうすれば、貴方自身の為になります」

そう言った夜姫の声には厳しく接し成長させようとする母親のような温かさがあると彼は知った。

彼の母親は自分をこの世に産み落とした存在で俗に母親と言える立場にある。

だが、愛情という物は何一つ与えられていない。

だから、どんな物が愛情なのか？と幼い頃は考えたものだ。

もし、夜姫のこの温かさが愛情と言ふのなら……………

『貴方様は……………女神です』

皆を産み、その広い心で優しく抱き締めてくれる地母神という名の女神だ。

母親の愛情を得ずに育ち、何一つ困らずに生きて来れたが愛情には飢えていた。

人一倍。

だからこそ、ああいう性格になったのか？と問いたくなるが。

袁術はたった一言の言葉で夜姫に心奪われた。

初めこそ天の姫であり外見も申し分ない夜姫に心奪われたが、それは利用価値があるからというだけの事。

ただ美しいから心奪われただけ。

一時の感情で、だ。

しかし、今は違う。

堪らなくこの娘が愛おしくなった。

この娘の為ならば、どんな事も成し遂げようとさえ袁術は想っていた。

たった一言の言葉で……………

「夜姫様……私は……………」

袁術は何かを言おうとした。

その時……………

「敵襲!!」

兵の一人の叫び声がした。

「!!」

この叫び声に誰もが気を張り巡らせた。

「夜姫様ッ。ここに居て下さい」

劉備は夜姫に天幕から出ないように言うと急いで天幕から出て行った。

袁術はどうすべきか迷った末に夜姫の傍に居る事にした。

ここは自分の陣ではないから部下は誰も居ない。

そしてここには誰も居なくなったのだ・・・夜姫だけを除いて。

「夜姫様・・・この袁術が傍に居ります」

袁術は夜姫に近付き、安心させるように語り掛けた。

「袁術様・・・」

夜姫は袁術の名を口にした。

先ほどまでの態度とは打って変わり怯え切っている。

「貴方様は私がお護りします」

「でも、私は、貴方を・・・」

「貴方様に対する償いとも取れますし、天の姫であるからとも取れる事でしょう」

夜姫が言いたい事は分かる。

自分を嫌っているし、そんな自分に酷い台詞を投げた。

そんな自分を護ってなどと言える訳が無い。

袁術自身も夜姫を利用しようと言う後ろめたさの気持ちがあったのは否定できない。

事実、夜姫には自分を助けて株を上げようとしているのでは？という疑惑の色が僅かに込められていた。

「……今はこの袁術に何も言わず、その手を差し出してもらえませんか？」

私を嫌っていても構わない。

利用しようとしていると思っても構わない。

しかし、この場だけはどうかその嫌っている男に手を委ねて下さい。

そうしなければ貴方を護る事は叶わない。

「お願いします」

袁術は彼女に頼んだ。

懇願に近い頼み方だった。

「……私を護って下さい」

夜姫は袁術の言葉に動かされる形で右手を差し出した。

「命を掛けて貴方様をお護りすると約束します」

夜姫の手を握り袁術は堅い声で告げた。

「……貴方様を護り死ねるのであれば、それもまた本望と言えます。最後になつてからですが……貴方は私に、温もりという物を・

・愛情という物を教えて下さった』

その貴方を護り死ねるのなら価値はある。

戦う価値はある。

この娘を護り討ち死にすれば死後は英雄として祀られるだろう・・・
などという下種な考えは思い浮かばなかった。

天幕の外では槍などが交わる音と悲鳴と叫び・・・血の臭いがする。

『・・・本当に戦場、なんだ』

改めて自分の来た世界に戦慄を覚えた。

だが・・・何故か懐かしい気持ちも覚えた。

『・・・わたしは、この場を・・・知っている・・・感じている・・・
・・・』

幼い頃から見ると。

そこは戦場だった。

そこに自分は居た。

それを懐かしんでいる。

『私は、一体・・・』

天幕が引き裂かれる音と共に大勢がなだれ込む音がした。

「夜姫様ッ」

袁術が夜姫を背に隠し剣を抜く音がする。

一斉に襲い掛かる気配を感じると同時に刃がぶつかる音がする。

眼が見えない夜姫は誰が敵で味方なのかも判らずただそこに居るしか出来ない。

だが・・・・・・・・・・

「ぐわっ」

聞き覚えのある声がした。

斬られる音と共に・・・・・・・・

・・・・“頃合いだな”

誰かの声がすると同時に夜姫は目の前の光景が見えた。

ここに来てから初めて眼に入ったのは血を流し倒れる男の姿・・・・・・・・

「や、夜姫、様・・・・・・・・お逃げ、下さい・・・・・・・・」

男は鎧から血を流しながらも夜姫に逃げるように言った。

「袁術様……………」

声で袁術だと判り夜姫は彼に近付き、血で濡れた鎧に手を当てた。かなり深く斬られており息も荒い。

血で手が、服が汚れるのも構わず夜姫は袁術の血を止めようと必死になった。

「ほおう……上玉じゃねえか」

下種のように薄汚い笑い声が聞こえて振り返れば兵士が一人いた。手には血を吸った剣が握られている。

「……貴方が、袁術様を……………」

「ああ。そいつの首とあんたを持ち帰れば報酬は思いのままだ」

兵士はケタケタと笑いながら夜姫に近付いた。

身体が熱くなるのを夜姫は感じると同時に頭に幾つもの光景が浮かんで消えて行く。

『……様ッ』

男が自分の名を叫ぶと同時に槍で貫かれた。

背後を見せていた自分の不手際で……………

それでも彼は自分の名を呼び、逃げるように言った。

自分はそれに対して逃げずに彼を傷付けた敵を睨み据えた。

その光景が今の光景と重なる。

「よくも・・・さない・・・さない・・・さない・・・」

夜姫は聞き取れない声を発しながら立ち上がった。

「ん？どうした？今度はお前さんが相手でもするのかい？」

兵士は夜姫に向かって左手を伸ばした。

“己が犯した罪を知らないまま死ね”

また誰かの声がした。

それと同時に兵士の首が宙を舞い、地面に転がり落ちた。

首を無くした身体からは血が大量に噴き出し夜姫を全身に掛ける・・・

まるで赤い雨だ。

袁術は自分を切った敵兵の首を見たが、その顔に驚いた。

自分が死んだ事に気付いていない顔だった・・・

つまり自分が斬られたという感覚を与えない速さで斬ったという事

だ。

「夜姫……様……」

袁術は彼女の名を呼んだが、彼女はそれに反応しない。

そんな夜姫の手には大きな両刃の剣が握られていた。

柄は錆ついた銀で鍔の部分は平行に伸ばされただけという極めてシンプルな剣だった。

だが、剣からは炎が出ている上に柄の下には鎖があった。

「……さない……さない……さない……許さない」

柄を力強く握り締める夜姫は顔を上げた。

……金色に瞳が輝いていた。

「……よおおおくううううもおおおおお“私の家族”を傷付けたなああああ!!」

地面を揺らすほどの大声に誰もが戦う事を止めた。

声の方向は夜姫の居る天幕からだった。

『夜姫様ッ』

劉備は敵兵を剣で斬り伏せると急いで向かおうとした。

しかし、その前に天幕が弾け飛んだ。

まるで紙切れのように散り散りとなり宙を舞ったが・・・燃えて無くなった。

消えた天幕には血を流す袁術と炎を宿す剣を握る夜姫が居た。

夜姫の身体は青白い炎に包まれており、瞳には怒りが宿されていた。

誰もが夜姫の姿に眼を奪われ見つめていた。

「貴様ら・・・よくも私の部下を・・・家族を傷付けたな・・・許さない。何人たりともこの場から生かして帰さん。全員・・・我が剣の錆にしてくれる。さあ、参れ！我が首を取れば報酬は思いのままぞ！！」

夜姫の声に敵兵はまるで砂糖菓子を見つけた蟻のように走り出した。

それを劉備達は止めようとしたが、皆、一瞬にして消し飛んだ。

たった一振りですべてが塵と化したのだ・・・夜姫が剣をたった一振りしただけで・・・敵だけ綺麗に消滅させたのだ。

「夜姫様・・・！！」

それに啞然とした劉備だが急いで夜姫の傍へ走り寄ったが、他の者もまた同じだった。

急いで夜姫に近付くと、彼女は袁術に跪いていた。

「……どうして、こんな馬鹿な真似をしたのよ……」

夜姫は劉備達には眼もくれず袁術に質問を浴びせた。

真つ直ぐに袁術を見つめる夜姫の……月の瞳は哀しんでいた。

「や、夜姫、様を、護れるのなら……死んで本望です……
……ご無事で、何よりです」

袁術は血を大量に吐きながらも笑ってみせた。

皆はその笑みを見て、もう長くないと思った。

『美しい……』

袁術は夜姫を見て嘆息した。

己が血で汚れているのに、彼女は美しかった。

剣を一振りしただけで目の前の敵を一掃してみせた夜姫。

その姿は、戦いの女神と言える程までに凄烈にして苛烈……しかし、今は自分に手を差し出す慈悲深い女神に見えた。

「馬鹿。何が死んで本望よ……死んだら終わりでしょ？……生きて、私を護ってこそ本望と言いなさいよ。馬鹿……」

夜姫は袁術の言葉を否定した。

二度も馬鹿と言われた袁術だが……それでも嬉しかった。

こんな言葉にも温かさが含まれていたから……

「は、ははははは……今度、また生まれ変わったら、そのように言いましょう……」

もし、人間に生まれ変わり夜姫と出会えたら、の話だが。

「貴方が生まれ変わる必要は無いわ……私“だけ”で良いのよ」

貴方達を護れなかった私だけが輪廻転生を行い苦しみを味わうので十分。

その言葉に誰もが耳を傾けた。

尚も彼女は語り続けた。

貴方は……貴方達は生きて、私の帰りを待っていて……

「そうすれば、またこうして巡り逢えるのだから……違うわね。私が、貴方に……貴方達に逢いに来たのね」

今度は誰も……全員を救って幸せになりましょう。

夜姫はそう言うと言術の傷口に手を伸ばすと何かを流し込んだ。

身体から放たれるそれは……

「気だ……」

典医は夜姫の行っている所を見て呟いた。

「気ですと？」

諸葛亮が典医に訊ねた。

「はい。気を相手に流し込む事で傷を癒すんです」

しかし、それが出来るのは極僅かな者だけ。

その者達は仙人などと謳われる者達だ。

気を流し込まれた袁術はみるみる傷口を癒し生気が満ちてきた。

反対に夜姫は汗を流し倒れそうだった。

“まだ早過ぎたか”

誰かの声がしたが、誰も聞こえずに終わった。

袁術の傷が癒えると夜姫は倒れた。

剣もまた消え、夜姫の気も消えてしまった。

「夜姫様ッ。しっかりして下さい」

劉備は夜姫を抱き起こし名を呼んだが、夜姫はグッタリとして眼を開けない。

対称に袁術は身体を起こし、傷が癒えている事に驚いた。

「こ、これは……………」

自分は敵に深く斬られて死のうとしていた。

それを助けたのは目の前で眼を開けようとしないう夜姫だ。

「何をしている直ぐに夜姫様を寝かせて薬師を呼べ。私の代理と言つて呼べ。速くしろ!!」

袁術は近くに居た義勇軍に向かって命令をすると急いで寝かせられる準備を始めた。

その様子を見て劉備達も做った。

『夜姫様、どうか眼を開けて下さい……………』

袁術は夜姫に語り掛けながら、夜姫の言葉を思い出した。

今度は……………全員を救い、幸せになりましょう……………
……………

第六幕：眠る姫君

夜姫が気を失ってから数刻ほど経過した。

燃え去った天幕は袁術が用意した天幕で解決したがまだ問題はあった。

現在、劉備並びに袁術は彼の異母兄弟であり同じ総大将である袁紹の天幕に居た。

目の前には袁紹、曹操、孫堅の3人が椅子に座り2人を見ていた。

なぜ2人が居るのか？と言えば袁紹から訳を話すように呼び出されていたのだ。

あれから敵が義勇軍の陣を攻撃したという事が知れ渡り急いで駆け付けたのだが、死体が少ないのだ。

報告では軽く見積もっても千人は居たというのに死体は僅か数百。

退却したという報告も聞いていないし、したとしても何人かはやられている筈……

それが無いという事に疑問を感じて劉備とその場に居た袁術に訳を言う様に呼び寄せたのだ。

だが、劉備も袁術も口を閉ざしたままだ。

袁術に到っては致命的な傷痕が残る鎧を着ているのに生きている。

それを訊ねたが無言で答えない。

「……劉備。なぜ話さんのだ？」

袁紹はもう何度目か忘れた言葉を口にした。

それに対して劉備は口を貝の様に閉ざしたままだった。

「私はそなたを買っている積もりだ。力も貸している積もりだ」

その私が質問しているのになぜ答えない……

「夜姫様に何か遭ったのか？」

曹操が袁術の質問に答えない劉備に鋭い視線を寄こして質問した。

「……お答え出来ないと言うより私にも分からないのです」

劉備は曹操の質問に初めて口を開いたが、答えにはなっていないかった。

「分からないとは？」

曹操はどういう事か、と訊ねたが劉備は首を横に振った。

「何が、どうなったのかです。何も……理解できなかったんです」

『……………』

3人は無言で劉備を見つめた。

真意を確かめる積もりだが本当に何も分からない顔だった。

「では何か気が付いたら教えてくれ」

袁紹はこのまま訊いても駄目だと判断したのだろう。

一度、帰るように言った。

「はい……」

劉備は一礼して天幕を出て行き袁術も同じだった。

残された3人も目撃者があれではどうしようもないと溜め息を吐かずにはいらなかった。

天幕を出て陣を後にした袁術は劉備より少し遅く歩きながら考えていた。

『夜姫様………』

……彼女は自分を助けてくれた。

否。

あれは自分ではない別の人物に放った言葉だ。

誰なのかは分からない。

部下、家族と言っていたから部下か？

それとも家族か？

もし、部下なら……

『良い主人を持ったな』

部下の為にあれほど激昂する主人はそう居ない。

戦ともなれば誰が死ぬか分からないし死んで当たり前だ。

それに一々……付き合っていたら身が持たない。

だが、夜姫は部下が傷つけられた事に怒り悲しんだ。

部下を愛している証拠だ。

そんな主人の下で戦える武将や兵はどれだけ幸せだろうか？

しかし……分からない事もある。

『私“だけ”で良いの。輪廻の苦しみを味わうのは……』

だけ……どういう意味だ？

『貴方達は待っていて。そうすれば巡り逢えるから』

しかし夜姫は否定した。

『違うわね・・・私が貴方“達”に逢いに来たのね』

そして、こう言った。

今度は皆で幸せになりましたよ・・・

今度は・・・

『何か遭ったのか？』

袁術は絞れるだけ絞った知恵で考えた。

「・・・・・・・・」

自分の知恵など高が知れているが答えを見つけた。

夜姫は過去に何か遭った・・・・・・・・

安直な答えでしかないが、それでも何か遭ったのだという事は見つける事が成功した。

「袁術様。貴方は、夜姫様をどう思いますか？」

唐突に劉備は袁術に問いを投げた。

「・・・この身に代えても護らなければならぬ方と知っている」

自分でも驚くほど袁術は劉備の問いに答えた。

以前なら質問など鼻で嗤い答えなかっただろう。

「あの方は私を助けてくれた。そして私に温もりを教えてくれた・
・恩人だ」

その恩には何があるかと返さなければならぬ。

「そなたはどうだ？あの時の夜姫様を見て恐怖を感じたのか？」

「いいえ。断じてそのような事はありません」

これに劉備は直ぐに否定した。

「夜姫様は敵をたつた一人で、たつた一振りで、殲滅しましたがそれで恐怖など感じません。ただ・・・・・」

「ただ、何だ？」

「ただ・・・夜姫様は、何か深い過去を持っている、と思いました」

「私もだ。あの方は過去に何かある」

知りたいが、当の本人が眠り続けている以上は分からない。

それに無理やり訊く気にもなれない。

それでも言える事が一つだけある。

『何があるかと護らなければならぬ存在』

「私は・・・そなたが嫌いだ」

袁術は足を止めて言った。

劉備もまた足を止めて袁術を真正面から見た。

「義勇軍だからではない・・・そなたが夜姫様を安心させられる心を持っていくからだ」

私ではあの方を安心させられる心は持っていない。

「だから嫌いだ。だが、夜姫様を護りたいと願うそなたの気持ちは理解出来る」

手を組もう・・・

「私には夜姫様が過ごし易いようにできる“力”がある。そなたには夜姫様を安心させられる“心”がある」

お互いに必要な物だと袁術は言った。

「それではどうなさるお積りですか？」

劉備は続きを促した。

「今日から私の陣へ来い。全員連れてな」

「それでは他の総大将に妬まれますよ？」

「元より覚悟の上だ。それに私を蔑む者は多い。そなたもまた私を嫌っているだろ？」

「はい。貴方は名家という生い立ちから他人を蔑む悪癖がある上に性格も陰険で最悪です」

「言ってくれるな。だが、良い気持ちだ」

“お前はマゾか？”

また誰かの声がした。

しかし、誰にも聞こえない。

ただ彼の言葉だけが空に漂っているだけだ。

「そなたと夜姫様位だ。そのように真正面から言うのは」

「袁紹様も言うのではないですか」

「あの男とは違うのだ。それよりどうだ？」

「お言葉に甘えさせてもらいます」

劉備も今の状況では駄目だとは痛感していた。

夜姫を安心させられる事は出来る。

出来るが、自分達は義勇軍で金も無いし必要な兵力も無い。

袁術には自分達に足りない物がある。

自分と目の前に立つ袁術が手を組めば夜姫をもっと安心させられる上に快適に過ごせられる。

だから、貴方と手を組む。

「ですが、夜姫様に害なすとなれば容赦しませんよ」

「その言葉そっくり返す」

お互いに暫く見つめ合ったが、やがては歩きを再開した。

自分の陣へと戻った劉備は袁術に仕えている薬師と会った。

「夜姫様の具合はどうですか？」

劉備が薬師にそれを訊ねると薬師は問題ないと答えた。

「気を使って疲れているのでしょう。恐らく寝ていればその内目を覚まします。ですが、衣服などは血で汚れているので交換した方が宜しいかと」

「それなら直ぐに用意する」

袁術が薬師の言葉に返事をした。

「劉備。私は陣へと一時戻る。それまでは頼む」

「分かりました」

袁術は劉備が頷くのを確認してから薬師を伴い自分の陣へと戻って

行った。

袁術と薬師が消えてから劉備は皆を集めた。

「明日から我々は袁術殿の陣に入る」

事の顛末を言つと皆は渋々ながらも納得した。

夜姫の事を考えればここよりもつと環境の良い場所に移すのが良い。

しかも、向こうは自分達も来いと言つてきた。

これならまだ納得が行く。

自分達の力不足を痛感しているからこそ渋々納得したのだ。

張飛は袁術が気に入らないと言つていたが夜姫の事を考えると仕方なく従うしか無かった。

それから少し時間が経ち袁術が数人の部下を引き連れ戻つて来た。

「劉備。夜姫様はまだ覚めないか？」

「はい」

「そうか。先程、部下達に説明したが了承した」

当たり前のように思えたが簡単ではなかったようだ。

なぜ自分達が義勇軍と陣を共にしなければならぬのだ？と憤りの

声が上がったようだ。

それを袁術は説得し、何とか了承させた。

「申し訳ない」

「そなたの為ではない。夜姫様の為だ」

袁術は劉備の言葉に素っ気なく答えた。

「それから夜姫様の衣服は用意した。渡してくれ」

彼が渡してきたのは黄緑色の着物だった。

高そうな代物に違いないのだが、夜姫が着ているのに比べると見劣れする。

「流石にあれほどの物は用意できなかった」

誰もが袁術のように名家の者でも用意できない物があるのかと驚いた。

場所が場所だけなのも理由だがあれ自体が凄いのだ。

「助かります」

劉備が礼を述べると同時に典医が来た。

「夜姫様が目を覚ましました」

簡潔に典医は言った。

しかし、それだけで十分だった。

典医の言葉は簡潔だったが、眼が何か遭ったと告げていた。

急いで夜姫の所へと行くと夜姫は急ごしらえで用意された寝台から上半身を起こし虚ろな眼差しで何かを見ていた。

「夜姫様。お目覚めですか」

劉備が夜姫に語り掛けたが、何か様子が変と感じた。

額に髪の毛が張り付いているのだ。

しかも、息も些か荒い気がした……………

「劉備様……………」

夜姫は声がする方向に虚ろな眼を向けた。

「何か、悪い夢でも見ましたか？」

「……………はい」

頷くだけで夜姫は軽く息を吐いた。

「私が来た時には悲鳴を上げていました」

典医が小声で劉備に告げた。

「夢を見たんです。何処か分からない部屋に私は、鎖で繋がれていてそこに一人の男が来るんです」

背はそれほど高くはないが、傲岸とも言える態度に高そうな服を着て自分を……汚す夢。

「大丈夫です。この劉備がお傍に居ります」

劉備は優しく夜姫の髪を撫でて安心させた。

「すみません……こんな話をして」

「いいえ。悪い気は話す事で抜けると言います。それで良いのです。そう言っつて劉備は夜姫をある程度、落ち着かせてから要件を切り出しました。」

「夜姫様。お目覚め早々に悪いと思つのですが、新しい衣服をご用意しました」

「新しい衣服？」

「はい。流石に同じ服を何日も着ているのは不便でしょうから袁術様をご用意して下さいました」

「袁術様は、無事……なのですか？」

「ええ。無事ですとも」

劉備は夜姫の言葉から……袁術が斬られた後の記憶が無いのだと察した。

敢えて言わないでおいた。

言ってしまうえば、夜姫は混乱するだろう。

それは避けたかった。

「袁術様は何処ですか？」

「ここに居ります」

袁術は寝台に近付き、肩膝を着いた。

「袁術様。傷は、大丈夫ですか？」

「はい。幸い劉備殿が駆け付けてくれたので助かりました」

夜姫様もご無事で何よりです。

袁術は夜姫が無事である事を改めて喜んだ。

「貴方が命がけで私を護って下さったからです」

お礼を言うのはこちらだ、と夜姫は言い返した。

「有り難き御言葉………尽きましては今後の事についてお話があるのです。御身体は大丈夫ですか？」

「はい」

袁術は劉備に視線を移し「話しても良いか？」と訊ねた。

それに劉備は頷き確認してから袁術は話し始めた。

「・・・・・・・・・・」

夜姫は最後まで無言で聞き続けた。

「夜姫様の事を考えるともっと安全な場所に移動させるべきと判断しました。もちろん劉備殿達も一緒です」

最後の言葉には・・・何処か嫉妬が込められていた。

自分ではない男が夜姫を安心させられる。

それが狂おしくて我慢できなかった。

声を上げて言いたかった。私が貴方を安心させたい・・・護ってみせる。

だが、その気持ちを袁術は抑えた。

自分はその時、敵に斬られ死ぬ所だった。

助けたのは夜姫だ。

そんな相手に護るなどおこがましいにも程がある。

もつと強くなり・・・改めて言おう。

袁術はそう言って自分を抑えた。

「夜姫様。私共も参りますから行きましよう」

劉備は沈黙している夜姫に説得するように話し掛けた。

「・・・劉備様はご迷惑ではないのですか？袁術様はご迷惑ではないのですか？」

夜姫は2人に訊ねた。

「ご迷惑など・・・貴方様を迎えられて光栄です」

「でも、私は何も出来ませんし・・・眼も見えないんですよ？」

夜姫は自分は迷惑以外の何でも無い、という口調で語った。

「夜姫様。失礼ですが貴方様はご自分を卑下し過ぎます」

袁術は夜姫に跪いたまま叱り付けるような口調で話し始めた。

「貴方様は何も出来ないと言いましたが、それは違います。貴方が居るお陰で劉備殿達は今も奮戦しておられる。そして私もまた貴方様に出会い諭された事で眼が覚めたんです」

貴方様には人を良い方向へと導く力がある。

それはとても大事な事だ。

「私は貴方様を迷惑などと思った類いはありません」

利用価値がある、とは思ったと正直に袁術は語った。

「それは私が天の姫、だからですよね？」

「はい。ですが今はそのような気持ちはありません。この身は全て貴方様の為に捧げます」

「どうして、私に……」

「貴方様を……」

そこまで言ったが、袁術は止めた。

いま言うのは駄目だ。

もつと自分を磨いてから改めて言おう。

そんな気持ちは出たから言わなかった。

「いえ。何でもありません。それで夜姫様。御答えは？」

「……」迷惑……いえ。どうか、私を連れて行って下さい

お願いします、と夜姫は頭を下げた。

「畏まりました。尽きましては、私の方から送った衣服を着て下さい」

血が付いたそれでは兵たちの眼があるから、と心の中で言いながら頼んだ。

「分かりました。時間が掛りますが、よろしいですか？」

「勿論です。女性が着飾るのは時間が掛りますからね」

「袁術様は・・・女性の扱いに長けていますね」

夜姫は僅かに笑みを浮かべて言った。

「え？あ、いや、その・・・」

「冗談ですよ」

「夜姫様・・・」

袁術はあんまりだと顔をした。

その笑みを見て皆が破顔して笑い出した。

「では夜姫様。こちらへ」

典医は夜姫の手を取り人目を離れた。

劉備達はその場で夜姫が帰って来るまでこれからの事を話し合う事にした。

「では、夜姫様は一番奥の天幕へ移動するという事で」

劉備は確認するように袁術に訊ねた。

「ああ。あそこなら一番、安全な地帯だ。そなた達義勇軍はその天幕の近く。無論私も一緒だ」

「孫堅殿は？」

孫堅は総大将の一人だが袁術の部下だ。

そのため陣は袁術の近くもとい中にある。

「孫堅にも伝えておいたが、快く受け入れてくれた」

「そうですか」

「うむ。それからこれは部下からの要望なのだが・・・夜姫様と宴を共にしたいと言っている」

仮にも陣へ招き入れるのだから、今の内に諸々の将達と交流を深めようというのが建て前らしい。

「それは夜姫様に訊かないと何とも言えませんね」

劉備の言葉に袁術は頷いたがこつも言った。

「だが、夜姫様の性格を考えると話せば出ると言つのではないか？」

自分が迷惑を被っていると言っている夜姫だ。

それで皆が満足できるなら、と考えるのは当たり前かもしれない。

「ですが、夜姫様はまだ起きたばかりですよ」

「それでもあの方の事だ。体調など大丈夫と言って聞かんだろう」

「そうですね……」

2人はどうするべきか、と思い悩んだ。

それから暫くして夜姫が典医に連れられて帰ってきた。

袁術の渡した衣服を身に纏った夜姫は2人の前に立ち謝罪した。

「時間を掛けてすいません……」

「いえ。それでは参りましょう」

袁術に言われた夜姫は小さく頷いた。

そして皆でその場を去った。

幕間：総大将の気持ち（前書き）

幕間を入れ忘れたので足しておきます！！

幕間：総大将の気持ち

私は自陣に帰ると直ぐに腹心達を集めた。

腹心達は私の傷を見て尋ねてきたが大丈夫と答え要件を伝えた。

「夜姫様と義勇軍を我が陣に入れる」

腹心達はこれに驚いたが直ぐにこう言ってきた。

『なぜ夜姫様だけではないのですか？』

当然と言えば当然だ。

義勇軍など入れた所で意味など無い。

寧ろ彼等から言わせれば要らない荷物を押し付けられたような物だ。

しかし、私は続けた。

「私では夜姫様を安心させられない」

私ではなく・・・私達では夜姫様を安心させる事が出来ない。

部下達は夜姫様が安心できない、と聞き何も言えなかった。

「夜姫様は、ここに誰も知っている者・・・親しい人物が誰も居ない」

そしてやっと知り合えたのが劉備達だ。

そんな夜姫様を一人ここに連れて来たらまた混乱し動揺するだろう。
.....

「私は夜姫様の為には劉備達も連れて来るのが良いと考えている」

悔しい事だが、我々では“今”は夜姫様を安心させる事が出来ない。

「もし、私の考えに賛同できない者は.....ここから出て行って構わない」

以前なら絶対に口にしない言葉だ。

部下達は驚いたが、嘘ではないと判ったのか暫く考えるように無言で顔を俯かせた。

どれくらい時間が経過したのか分からない。

「.....私は殿の考えに従います」

私の部下であり主筋を務める閻象えんしょうだった。

私が決める事に何かしら色々と言もとい反対の言葉を述べる。

だが、今回に関しては賛成してくれた事に対して少らず驚いた。

「何故、と訊いても良いか？」

「恐れながら天の姫であらせられる夜姫様は殿が先ほど仰った通り

誰にも親しい者が居りません」

「……………」

「その上……盲目では怯えてしまつのも無理はないでしょう」

親しい者もおらず眼も見えないとなれば誰だつて怯える。

「本当ならば怯えている筈ですが、運よく劉備殿の陣に降り立ちました」

献身的な程に介抱されたなら劉備に懐くのも無理は無いと閻象は語った。

「そうでなくても劉備殿に懐いても仕方ありません」

劉備殿は貴方と違い心優しいと言われた。

「一言余計だ」

「本当の事です。話を戻しますと殿の言いたい事は解ります」

そんな夜姫様を劉備から引き離して一人連れて来るなど出来ない。

「くどいようですが私はその意見に賛成です」

下手に引き離せば今以上に不味い、と閻象は語った。

「他の皆様はどうですか？」

「私も賛成です」

閻象の言葉に賛成を表したのは孫堅だった。

私の部下であり総大将の一人でもある孫堅は実に猛将と呼べる実力を誇っている。

その力は部下や仲間として迎え入れれば心強いが反面で敵に回したら恐ろしい相手でもある。

孫堅が閻象の言葉に賛成すると他の者達も納得できる言葉を言われて仕方無いと思ったのか私の意見に従うと言ってくれた。

ただし・・・抜け目が無く宴をしようと言ってきた。

妥協案とも取れるがこの場合は抜け目が無いと言って良いだろう。

宴が開かれたら夜姫様も出席する。

その時、自分達の名を売り覚えてもらおうという算段だろう・・・

ここで断るのも手だが、どうせ直ぐに言って来るのは明白だ。

なら、ここは早めにやっておいた方が良いと判断し了承した。

「では、夜姫様が休まれる天幕と義勇軍の天幕を用意しろ」

『はっ』

部下達は直ぐに取り掛ったが、閻象は一人残り私を見てきた。

「何か言いたいのか？」

「はい。殿・・・貴方様は何か悪い物でも食べましたか？それとも敵に斬られて生まれ変わったのですか？」

「・・・貴様は私に斬られたいのか？」

毎度毎度の事だがこの男は一言余計な上にこと私に関しては容赦なくズケズケと物を言う。

「いいえ。ただ、以前の殿でしたらそのような沈痛そうな顔をしませんし劉備殿を毛嫌いしていたので」

「今でも嫌いだ。しかし・・・夜姫様の事を考えれば握り締めた拳を開き手を結ぶ」

「劉備殿の陣で一体なにが起こったのですか？」

「・・・他言はしない、と約束できるか？」

「貴方様にお仕えしてから一度でも貴方様と交わした約束を私は破った事がありますか？」

質問に質問で返された私だが、直ぐに首を横に振り否定した。

この男が私の配下になってからだが、今までただの一度も他言をした事が無い。

つまり私を裏切るような真似はした事が無いのだ。

ただの一度も……………

「…………夜姫様に助けられた」

私はこいつだけには真実を教えようと思いい口にした。

最後まで聞き終えた閻象は些か信じられない顔をしたが改めて私を見て頷いた。

「左様ですか。それならば納得もいきます」

天の姫…………夜姫様の胸を鷲掴みにした上に顔を引つ叩かれたのですから改心する、とこの男は余計な部分を強調してきた。

「貴様は本当に一言余計だな」

「性分です。それで殿としては夜姫様を見てどう思いましたか？」

「…………美しかった。そして…………とても哀しくて優しい方
と思う」

あの時の夜姫様の姿は美しかった。

それと同時に私を見つめる月の瞳は何処か切なかった。

しかし、私を罵倒する声には温もりが含まれており心が温まった……………

「だが、分からない事もある」

今度は皆で幸せになりましょう。

貴方達は待っていて・・・そうすれば巡り逢えるから。

「夜姫様は過去に何か遭ったのでしょうかね」

輪廻転生は死んでから様々な物に生まれ変わる事を意味する。

前世の記憶は無いのが普通なのだが、あの様子を見る限り夜姫様は記憶があると思える。

「かもしれん。だが、夜姫様の様子を見る限り何も覚えていない」

「となると一瞬だけその記憶が蘇るのかもしれない」

閻象の言葉に私は付け足すように言った。

「若しくは何かしらの出来事が発作で蘇るのかもしれない」

確かに、と閻象は頷いた。

「それで殿はどちらだと思えますか？」

「どちらでも良い。私はただ夜姫様の害を排除するだけだ」

これにまた閻象は眼を丸くさせた。

「本当に変わりましたね。以前などぜひと美しいから妻にしたい

とばかり口にしてたのに」

「ふんっ。あんな自分・・・胸糞悪くなるだけだ」

「過去もまた自分でしょうに・・・」

「煩い。それで分かっていると思うが他言は無用だぞ？」

「分かっております。私もむざむざ殿に斬られたくはないので」

「だったら、少しはその口を慎め」

何時か斬るぞ、と私は言っただけだ。

「性分なので出来ません。では、私は宴の準備をします」

そう言って閻象は出て行ってしまった・・・逃げたと言っても良いな。

しかし、それを追わずに私は部下を呼び夜姫様が着る着物は用意するように伝えた。

「畏まりました」

部下は一礼して天幕を出て行き、私は来るのを待つ事にした。

暫くして部下は戻ってきた。

手には黄緑色の絹で織られた着物がある。

「これくらいの物しか用意できませんでした」

流石に天の姫が着る物は用意できないと部下は言ってきたが私は首を横に振った。

「良い。夜姫様も文句は言わない。わざわざすまない」

それを言われて部下は驚いた顔をしたが、直ぐに一礼して出て行き私は着物を手に馬に乗ると数人の部下を引き連れて劉備の居る陣へと向かった。

私が行くと劉備が出迎え訊ねると夜姫様は未だに目を覚まさないと言われた。

まだ覚めないのか……………

まさか永遠に目覚めないのか？と一瞬だが思ってしまった。

そんな自分を恥じて私は着物を渡した。

それから暫くして典医が来た。

「夜姫様が目覚めました」

だが、皺だらけの顔は何か遭ったと告げている。

直ぐに私は典医が案内した場所へ劉備達と向かった。

夜姫様は急いで用意された寝台の上にいたが、上半身を起こして汗を掻いていた……………

しかも、息が荒い。

何か遭ったと直ぐに察して訊ねようとしたが劉備が先に夜姫様に声を掛けた。

「夜姫様、どうなさいました？」

劉備が訊ねると夜姫様は声の方向を見てから答え始めた。

「夢を見たんです・・・何処か分からない部屋に私は居ました」

鎖で繋がれた自分に近付く男。

背はそんなに高くないが他人を威圧するだけの貫禄があり・・・

「私を・・・汚すんです」

そこへ典医が入り「私が来た時は悲鳴を上げていました」と付け加えた。

私は拳を握り締めた。

夢とはいえ・・・夜姫様を汚すなど言語道断。

人の事を言える身分ではないが、それでも私は鎖で拘束した女を汚すほど落ちぶれていない。

第一夜姫様にはそんな真似をしたりしない。

絶対に・・・・・・・・

劉備は夜姫様を軽く抱き締めて安心させるように言葉を紡いだ。

「ご安心を。この劉備が御傍に居ります」

私は劉備が羨ましいと同時に悔しかった。

私も夜姫様を抱き締め安心させたい・・・・・・・・だが今の私では無理だ。

それでも、何時か必ず夜姫様を安心させられる男になると誓う。

それから劉備は私が渡した衣服を夜姫様に手渡した。

『袁術様は・・・無事ですか？』

私は名を呼ばれ安否を気にする夜姫様の元へ行き膝を着いた。

「ここに居ります」

夜姫様は私の手を握って来た。

温かく少しでも力を入れてしまえば容易に折れてしまいそうな手・・・

そんな手が私の手を掴んだ。

「袁術様・・・ご無事で何よりです」

貴方様は本当に優しい方だ。

自分も殺され掛けたのに他人の私を心配して下さるのだから。

「はい。貴方様もご無事で何よりです」

私は夜姫様に微笑んだ。

見えない瞳でも良いから私の笑顔を貴方に見せたい。

「……………尽きましては今後の事についてお話があるのです。御身体は大丈夫ですか？」

「はい」

私は劉備に視線を移し「話しても良いか？」と訊ねた。

それに劉備は頷いたので私は話し始めた。

「……………」

夜姫様は最後まで無言で聞き続けた。

「夜姫様の事を考えるともっと安全な場所に移動させるべきと判断しました。もちろん劉備殿達も一緒です」

私は最後の言葉に……………嫉妬が込められている事に気付いた。

自分ではない男が夜姫様を安心させられる。

それが狂おしくて我慢できなかった。

声を上げて言いたかった。

私が貴方を安心させたい・・・護ってみせる。

だが、その気持ちを私は抑えた。

あの時・・・助けてくれたのは夜姫様だ。

そんな相手に護るなどおこがましいにも程がある。

もつと強くなり・・・改めて言おう。

「夜姫様。私共も参りますから行きましょう」

劉備が沈黙している夜姫様を説得するように話し掛けた。

「・・・劉備様はご迷惑ではないのですか？袁術様はご迷惑ではないのですか？」

夜姫様は私と劉備に訊ねてきた。

「ご迷惑など・・・貴方様を迎えられて光栄です」

私は何を言うのか、と思いながらも本心を告げた。

「でも、私は何も出来ない上に眼も見えないんですよ？」

自分は迷惑以外の何でも無い、という口調で夜姫様は語った。

「夜姫様。失礼ですが、貴方様はご自分を卑下し過ぎます」

これに私は少し怒りを覚え夜姫様に跪いたまま叱り付けるような口調で喋り出した。

「貴方様は何も出来ないと言いましたが、それは違います。貴方が居るお陰で劉備殿達は今も奮戦しておられる。そして私もまた貴方様に出会い諭された事で眼が覚めたんです」

貴方様には人を良い方向へと導く力がある。

それはとても大事な事だ。

そう・・・とても大事な事なのだ。

「私は貴方様を迷惑などと思った類いはありません」

利用価値がある、とは思ったと正直に私は語った。

「それは私が天の姫、だからですよね？」

「はい。ですが、今はそのような気持ちはありません。この身は全て貴方様の為に捧げます」

「どうして、私に・・・」

「貴方様を・・・」

そこまで言ったが止めた。

いま言うのは駄目だ。

もっと自分を磨いてから改めて言おう。

「いえ。何でもありません。それで夜姫様。御答えは？」

私は無理やり答えを訊ねた。

「……」迷惑……。いえ。どうか、私を連れて行って下さい

お願いします、と夜姫様は頭を下げてきた。

「畏まりました。尽きましては、私の方から送った衣服を着て下さい」

血が付いたそれでは兵たちの眼があるから、と心の中で言いながら頼んだ。

「分かりました。時間が掛りますが、よろしいですか？」

「勿論です。女性が着飾るのは時間が掛りますからね」

「袁術様は……。女性の扱いに長けていますね」

夜姫様は僅かに笑みを浮かべて言った。

「え？あ、いや、その……」

「冗談ですよ」

「夜姫様……………」

思わぬ悪戯に私は夜姫様を少しばかり恨めしく思った。

だが、その笑みを見て皆が破顔して笑い出し私もまた笑った。

嗚呼、やはり夜姫様には笑顔が似合うと思わずにはいらなかったのだ……………」

「では夜姫様。こちらへ」

典医は夜姫様の手を取り人目を離れた。

残された私達はその場で夜姫様が帰って来るまでこれからの事を話し合う事にした。

「では、夜姫様は一番奥の天幕へ移動するという事で」

劉備は私に確認するように訊ねてきた。

「ああ。あそこなら一番、安全な地帯だ。そなた達義勇軍はその天幕の近く。無論私も一緒だ」

一番奥の天幕なら余程の事で無い限りは敵も来れない。

しかし、念には念を入れておく必要があるから後で何かしらの手を打っておかなくてはならない。

「孫堅殿はこの事を御存じですか？」

今度は孫堅の事を劉備は訊ねてきた。

彼も総大将の一人だが私の部下だ。

だが、あの男は私の下で何時までも居る男ではない。

何時か・・・近い日には独立か何かしらの行動を起こす事だろう。

「孫堅にも伝えておいたが、快く受け入れてくれた」

閻象とあの者位だ。

夜姫様と義勇軍を迎え入れても良いと言ったのは。

「そうですか」

「うむ。それからこれは部下からの要望なのだが・・・夜姫様と宴を共にしたいと言っている」

「それは夜姫様に訊かないと何とも言えませぬね」

劉備の言葉に私は頷いたが夜姫様の事だから・・・・・・・・・・

「夜姫様の性格を考えると話せば出ると言う筈だ」

「ですが、夜姫様はまだ起きたばかりですよ」

「それでもあの方の事だ。体調など大丈夫と言って聞かんだろう」

頑固な所もある夜姫様の事だ。

負い目を感じているから、こういふ所で補おうと思っている筈だ。

「そうですね……」

劉備は私の言葉に一理あるのか頷いた。

だが、私の中ではもう夜姫様は宴の話ですれば出ると確信していた。

それから暫くして夜姫様が典医に連れられて帰ってきた。

私が渡した衣服を身に纏った夜姫様は謝罪してきた。

「時間を掛けてすみません……」

「いえ。それでは参りましょう」

私は夜姫様の手を取り馬に乗せた。

「少し揺れますが、我慢して下さい」

「は、はい……」

夜姫様は馬に乗るが初めてなのか少し怯えていた。

だが、私の愛馬は怖がった夜姫様の気を感じたのか優しく鳴いた。

「わ、私、初めてだからゆっくりお願いしますね」

夜姫様は人間に話しかけるように馬に話し掛けた。

対して馬は承知したとばかりに頷きゆつくりと走り出した。

それを部下達が追い掛け、義勇軍達が続く。

「夜姫様、大丈夫ですか？」

私が訊ねると「大丈夫です」と答えが返ってきた。

「それより夜姫様。宴の事・・・本当に良かったのですか？」

まだ目が覚めたばかりなのだから、無理はしない方がと私は言った。

「いいえ。大丈夫です」

「ですが・・・」

「徹夜した事もありますから大丈夫ですよ」

「・・・そう、ですか」

この方に言っても無駄と私は確信した。

「夜姫様は頑固、ですね」

「ええ。一度決めたら梃子でも動かないと子供の頃から言われましてから」

子供の頃からは・・・・・・・・

それから私と夜姫様は陣へ行くまで他愛ない話をして過ごした。

第七幕：夜の舞姫

夜になるうとしてしている時間に夜姫は袁術の馬に横向きに乗って陣ま
で進んでいた。

袁術の横には劉備、関羽、張飛、諸葛亮、典医が居る。

反対側に袁術の部下が居り更にその後ろを義勇軍が付いて来ている
構図だ。

「夜姫様は天の国では“大学”と呼ばれる所へ行っておられたので
すか？」

袁術の質問に夜姫は頷いた。

陣へ向かう間、袁術は夜姫の国……居た世界に興味を前々から抱
いていたので質問する事にした。

もつとも無言で陣まで行くには些か辛すぎるといっのが理由に含ま
れているが……

「はい。4年制で単位を取り論文などを書いて卒業に向けて勉強す
るんです」

「そこは身分などは関係あるのですか？」

諸葛亮が興味津々の様子で訊いてきた。

「いいえ。ただ、学位の差はありましたね」

更に言えば公立か私立か国公立によって金の掛りも違つと夜姫は付け加えた。

「なるほど。夜姫様の場合はどちらで？」

「私の場合は公立です。主に歴史を選考していました」

「歴史ですか。所で、先ほどサークルという物があると言っておられましたが、どんな物なのですか？」

「そうですね・・・具体的に言うならやりたい物を決めて、それ人に勧誘して活動する事ですね」

「夜姫様の場合は何を？」

「演劇です。ですが、部員も少ないですし資金も無いので別なサークルと掛け持ちをしています」

「そうですね。夜姫様の国は私達には無い物が沢山あるのですね」

「そうですね。でも、やはり人が殺されたりする事件はありますし、国によっては長い間戦争を続けている所もあるので・・・」

天の国ともなれば皆が平和で暮らしていると勝手に思っていたがそうではないようだ。

「所で夜姫様。夜姫様は先ほど演劇をしていると仰いましたが、何が御好きですか？」

袁術が暗い顔をした夜姫を気にして話題を切り替えた。

「そうですね……色々あり過ぎて迷ってしまいますが敢えて上げるとすれば……………」

「夜姫様っ」

夜姫は前方から馬の蹄の音がして一時答えるのを止めた。

「……袁紹殿」

劉備が前方から来る見慣れた男――袁紹を見て顔を歪めた。

袁紹はこれまで義勇軍である自分に何かと眼を付けてくれた言わば恩人。

だが、夜姫を袁術の陣に招き入れる事は伝えていない。

何と説明すれば良いやら……………」

「劉備。これはどういう事だ？」

袁紹は激怒している顔で劉備に訊ねた。

「袁紹様。どうなされたのですか？お気が些か荒いですが……………」

夜姫が袁紹の様子を感じて口を挟んできた。

「あ、いや……私は貴方様が袁術の陣へ行くとは聞いておりませ

んでしたので」

「それは先ほど決まった事なんです」

夜姫は袁紹の音がする方向に眼を向けて自分で説明した。

自分が居た天幕を敵に破られて、そこを袁術が助けてくれた。

そして袁術と劉備が意見を言って袁術の陣へ移動する事になったと・
・・・・・

「私が袁術様の陣なら安全と思い劉備様達も一緒に連れて来たんです」

袁紹はそれを聞いて後悔した。

なぜその場に居なかったのだ？

そこに居て夜姫を護れば自分の陣へ来てくれたかもしれないのに、
と・・・・・

しかし、それを声に上げて怒った所で夜姫が考えを変える訳も無いし寧ろ印象を悪くしてしまうと袁紹は短い間に考えた。

それに夜姫の様子からしても劉備同様に何が起こったのか分からない顔をしていた。

劉備と袁術が口裏を合わせたとも一時は考えたがこの2人は水と油みたいな関係で決して交わらない。

となれば何れは陣を追い出される羽目になるだろう。

その時、改めて自分が行けば良いと袁紹は思った。

何より劉備には眼を掛けている。

出来るならば自分の部下にしたいとも考えているのだから、「ここは大しく引くべきと判断した。

「劉備。袁術。夜姫様の身はそなた達に預ける。傷一つ負わせるな」

「言われなくても分かっている」

袁術は憎まれ口を叩くように言った。

「なぜ貴様はそのような態度を取る。子供ではあるまい」

「ふんつ。貴様に関しては別だ」

互いに睨み合い一触即発とも言える雰囲気になったが剣を抜こうとはしなかった。

それ以上に発展すれば夜姫が怒ると2人そろって解かっていた。

だから、口喧嘩に留めておく。

「では、袁紹殿。我らはこれにて失礼する」

袁術は馬の腹を蹴り袁紹の横をすり抜けた。

「袁紹殿。申し訳ありません」

劉備は袁術達が言ってから袁紹に謝罪した。

「本来ならば袁紹殿に伝えなくてはと思っておりまして。ですが、何時またあのような事態になるとも限りませんし時間もありませんでした。言い訳とは思いますが、どうかご理解下さい」

「分かっておる。そなたと袁術が一時は口裏を合わせた、と思っただが・・・そなたはそのような器用にこなせまい」

袁紹は何処か皮肉気に言ってみせた。

「・・・・・・・・・・」

「まあ、私に何の相談も無く夜姫様の陣を決めたのは些か腹に来たが仕方あるまい。まだ時間はあるのだ・・・それに私の見方ではそなた達は何れ袁術の陣を再び出ると踏んでいる」

それに劉備は何とも言えなかった。

「出た後は我が陣へ来い。丁重に持て成すからな」

「有り難きお言葉を・・・・・・・・」

「では失礼する」

そう言って袁紹は自分の陣へと戻って行った。

「殿。袁紹殿・・・少々怒っておりますね」

諸葛亮が去って行く袁紹を見ながら劉備に小声で話し掛けてきた。

「ああ。しかし、何とか解かしてもらえたが・・・これからが大変だな」

袁紹は一時だけ自分と袁術が手を組んだと思っただけらしい。

実際当たりではあるが、出て行く事は考えていない。

共に夜姫を護る為に手を組んでいる。

もし、これが知られたら・・・

「その辺は私にお任せ下さい。それにしても敵は・・・夜姫様の存在を知っているのかもしれないね」

「ああ。二度も我々の陣を襲ったのだからその可能性は極めて高いと見て良いな」

自分達義勇軍は敵から言わせればよく戦う相手と取れるだろう。

だが、自分達を相手にするより総大将達の軍と戦った方が確実に名は上がる。

それなのに二度にも渡り襲ってきた事を考えると夜姫の存在が向こうにも知られている可能性が高いと見て良いだろう。

「殿。この選択は正解ですよ」

諸葛亮は劉備の選択を正解と言い、主人の心を慰めた。

劉備から言わせれば袁紹を騙す形となったから気を病んでいると思っ
っていたのだ。

「ああ。分かっている・・・さあ、我々も追っぞ」

劉備の言葉に義勇軍達は頷き、急いで夜姫たちの後を追いつけた。

袁術の陣に到着した頃には既に夜姫たちは陣内へと入った後だった。

陣の外で劉備は兵に袁術の事を伝えると直ぐに通されたから問題は
無かった。

陣内へと入った義勇軍である劉備達は改めて袁術と比べてやはり“
格”という違いを感じられた。

木の杭が地面に刺さりそれを幾つも囲み馬が侵入できないようにさ
れている兵たちの装備も整えられている。

おまけに食料・・・兵站なども整えられており自分達とは違う所が
嫌というほど強調された気がした。

その中を劉備達は通るのだが兵たちの視線は何処か痛かった。

袁術が招いたとは言え、それは夜姫と言う天の姫が居るから。

・
そうでなければこんな陣へ来れないと眼で言われた気がした・・・

一番奥……袁術の天幕には槍を持った兵が2人左右に別れて立っていたが、劉備達を見ると直ぐに奥へと消えて行き袁術を連れてきた。

「夜姫様が寝泊まりする天幕はあそこだ」

袁術は夜姫の天幕を指差し今度は劉備達の陣は直ぐ近くと教えた。

「それから宴の事だが……夜姫様は良いと仰った」

これからここで暮らすのであれば皆に自己紹介をしなければならぬ、と言ったようだ。

「そうですね……」

「うむ。宴にはそなたらも出てくれ。そうでないと夜姫様も不安だろうからな」

間もなく始まると袁術は言い劉備は兵達に陣へ迎えと命令すると関羽達と共に袁術の天幕へと入った。

既に夜姫はそこに一人で座っていたが、劉備の気配を感じると可憐な笑顔を見せた。

「夜姫様。遅れて申し訳ありません」

劉備は夜姫に遅れた事を詫びた。

「いえ。大丈夫です」

ただ、一人では不安だったと夜姫は語り傍に居てくれと頼んだ。

「畏まりました」

劉備は頷いた。

袁術が右を劉備が左に座り夜姫を挟んだ。

そして諸葛亮と典医がその左右を挟み、関羽と張飛が続く形となった。

それから直ぐに袁術に従う群雄達が天幕の中へと入ってきた。

群雄達は劉備達には見向きもせず夜姫にだけ挨拶をしていく。

夜姫としては我慢ならない物だが取り敢えず何も言わないでおいた。

「遅れて申し訳ない」

最後と思われる男の声がした。

「孫堅様ですか？」

夜姫が入ってきた男に声を掛けた。

「はい。孫文台です。遅れて申し訳ありません」

「いえ。気にしておりません」

謝罪する孫堅に夜姫は首を僅かに動かして問題ないと言った。

そして孫堅は群雄達の中で唯一初めて劉備達にも挨拶をした。

「劉備殿。またもや敵を追い払ったらしいですね？」

「ええ・・・まあ」

劉備は曖昧に頷いたが、孫堅には謙遜しているように見えた。

「そのように謙遜めされるな。貴方の行動は我が軍内でも称賛されているのですよ？」

義勇軍を引き連れて董卓の軍を2度に渡り撃退した。

これは称賛されて然るべきと孫堅は断言した。

「ありがとうございます」

「いえいえ。袁術様。御身体の方は大丈夫ですか？」

劉備から袁術に視線を向けた孫堅は傷の具合を訊ねた。

「問題ない。それより速く席に座れ。そろそろ始めるとしよう」

「はっ」

孫堅は直ぐに自分の席に腰を降ろした。

場所は夜姫から斜め右だった。

「では、これより宴を始めるとしよう」

袁術が手を叩くと部下達が酒の入った壺――“瓶子”を持ち天幕へと入ってきた。

群雄達は杯を持ち瓶子から注がれる酒を受け止める。

袁術の杯にも部下が注ごうとしたが、袁術はそれを止め自ら瓶子を持った。

「夜姫様は酒を飲めますか？」

注ぐ前に袁術は確認するように訊ねた。

「はい。飲めます」

「では……」

夜姫の答えを聞いてから袁術は酒を注いだ。

そして今度は劉備達に自ら注いでみせた。

それに群雄達は驚いたが「流石は総大将」と褒め称えた。

全員に酒が注がれた。

「あの、袁術様。私がやりましょうか？」

袁術は自分で注ごうとしたが、夜姫の言葉に手を止めた。

「夜姫様が？」

「はい。貴方様には護ってもらった恩がありますから」

これ位で恩を返せるとは思っていないと夜姫は言ったが袁術は子供のように笑い頼んだ。

「では、お願いします」

袁術は夜姫の右手に瓶子を持たせた。

少しばかり重いと夜姫は感じながらもたどどしい手つきで持つと袁術が差し出した杯に注いだ。

群雄達は羨ましいとばかりに袁術を見てから夜姫を見た。

瓶子を持ちたどどしい手付きながらも袁術の杯に酒を注ぐ夜姫の横顔は見ているだけで美しかった。

それを肴に酒を飲める事だろうと群雄達の一人は思ったほどだ。

「もう結構ですよ」

袁術が声を掛けて夜姫は瓶子を上を傾ける。

そして夜姫から瓶子を部下が受け取り下がった。

「では、諸君。改めて乾杯だ」

夜姫様が陣へ来た事に。

これからの戦いに。

『乾杯』

袁術が杯を掲げ飲んでから群雄達も杯を掲げて一気に飲み干した。

張飛などはあつという間に飲み干してしまい劉備に軽く叱られてしまったが。

夜姫の方は僅かに口を付けて一息入れた。

「少し強い酒、ですね」

「夜姫様には些か強すぎましたか？」

「多少は。でも、飲めない訳ではありません」

自分のペースで飲めば酔わない、と夜姫は答えまた口に運んだ。

その様子を群雄達は酒を口に運びながら盗見しているのが袁術には手に取るように分かった。

皆、夜姫の姿に見惚れている。

だが、それは単なる見た目だけの話。

自分も前まではそうだった。

『私も、あのような感じだったのだろうか……』

群雄達を見て前の自分に自嘲する袁術は杯を煽り酒を飲んだ。

直ぐに空になる杯に袁術は瓶子を取り注ごうとする。

「袁術様。お酒が無くなったのなら、また注ぎましょうか？」

夜姫が典医に導かれて杯を置くと袁術に問い掛けた。

「え？あ・・・では」

袁術は少しぼうつとしていたが、直ぐに頷きまた杯を傾けた。

典医に補助されながら瓶子を持った夜姫は袁術の杯に酒を注いだ。

「ありがとうございます。それにしても中々注ぎ方が上手いですね」

これは世辞ではなく何となく見ていて判った。

「あちらでは、学費を稼ぐ為に色々と働いていたので」

「そうですね。学費を稼ぐのは並大抵ではありませんまい？」

「ええ。ですが、経験になりますから」

前向きな答えに袁術は感心しながら注がれた酒を味わいながら飲み始めた。

そして夜姫は劉備達に訊ねた。

劉備達もまたお願いすると夜姫は注いだ。

それからまた自分の杯に残っていた酒を飲んだが、張飛がお返しとばかりに酒を注いで来たので飲む事になったが自分のペースは守り続ける。

少しずつ時間を掛けて夜姫は酒を喉へ流し込んだ。

酒を飲むのは久し振りだった。

大学に入学した時の歓迎会と劇団の公演が終わってからの打ち上げの時だ。

最近酒を飲む機会など全くなく不安だったがペースを守れば問題ないと改めて思った。

酒を飲みながら耳に群雄達の笑い声と共に楽器の音色が入って来た。

その時、頭の中に景色が浮かんだ。

何処かの宮廷だろうか？

そこでは宴が開かれており楽器の演奏を肴に大勢の者たちが酒を飲んでる。

自分もまたそこに居たが、一番下座で誰にも話し掛けられず黙々と酒を飲んでいた。

ただし、自分よりペースは速いし量も多かったのが違う所だ。

それに何処か寂しそうな雰囲気もまた違つた。

しかし、酔つた者達が舞を披露しろと言つてきて仕方なく舞い始めた。

両刃で細身の剣を抜き扇を開き音楽に合わせて舞い始める。

何でそんな光景が浮かんだのか……

考えていると音色が耳に入つて来る。

懐かしい音色に思えて夜姫は無意識に杯を置き扇を取り出した。

「夜姫様？」

袁術が何かを感じ取り声を掛けた。

「剣を貸して」

夜姫の眼が……月の色へと変化している。

しかし、まるで魔術に掛つたかのように袁術は言われるままに剣を鞘から抜いて夜姫に渡した。

剣を右手で受け取つた夜姫は扇を左手に持ち音楽に合わせて軽やかな動きで舞を始めた。

袁術達は突然舞を始めた夜姫に驚いたが直ぐに魅了された。

剣で空を切り扇で風を寄せて舞う。

時には苛烈・・・時には繊細・・・時には慈悲・・・

まるで感情を出しているかのように夜姫は舞を続ける。

演奏する者もまた夜姫の舞に合わせてるが如く演奏を続けた。

やがて音楽が終わると夜姫もまた舞を止め一礼した。

暫く誰も言葉も何も出来ずにいたが、一人が拍手すると皆が拍手をした。

「お見事です！」

「素晴らしい舞でした！！」

群雄たちは拍手しながら称賛の言葉を投げた。

夜姫は茫然としていたが、孫堅が近づいて元の場所へと戻した。

「夜姫様。実に見事な舞でした」

袁術が夜姫の舞を心から称賛した。

「いえ・・・ただ、音楽が流れたら身体が勝手に・・・」

「それでも見事でしたよ。皆の者。夜姫様の舞は見事であったらうっ？」

袁術が訊ねると群雄達は頷いた。

それから飲めや歌えの文字通り宴と化した。

それに最後まで付き合う事になった夜姫だが、久し振りに楽しい思
いが出来たと心の中で喜んだ。

第八幕：姫との約束

宴は夜遅くまで続いたが、夜姫が眠くなったのを機にお開きとなった。

夜姫は典医に連れられて先に天幕へと行きそれから皆がそれぞれの天幕へと引き上げた。

最後に劉備が出ようとした時、袁術が呼び止めた。

「少し話がある」

袁術の言葉を断る理由も無い劉備は一回だけ頷くと関羽達を先に行かせ袁術と二人だけになった。

「そなた・・・明日から我が軍と共に董卓軍と戦えるか？」

「はい。ですが私共は貴方様や孫堅殿に比べれば格段と兵力などに関しましては劣ります」

寧ろ義勇軍は義勇軍だけで行動を取った方が良いと劉備は言ったが袁術は首を横に振った。

「それでは色々と面倒だ。そなたらは私がここへ招いた・・・言わば客将だ」

「・・・」

「だが、部下達から見れば夜姫様に付いて来た従者のような存在だ。

もし、そなたらが勝手な行動を取れば部下達の反感を買う」

確かにその通りだ、と劉備は改めて思い直す。

自分達は夜姫の為とは言え袁術に招かれた存在……言わば客将。

招いてくれたのだからそれに担う働きをするのが客将の恩返しとも言える。

だが、袁術の言う通り傍から見れば自分達は夜姫に従う“おまけ”のような存在で決して両手を広げ歓迎する程の者達ではない。

そんな自分達が勝手な行動を取りあまつさえ戦果を上げてしまえば袁術の言う通り反感を買うのは必定だ。

だからと言って袁術の指揮する軍団に従っている訳にもいかない。

もし、そうなれば召使いと思われてあれこれ命令されてしまう。

勇軍達もそう簡単に従うかどうかさえ怪しい……………

特に義弟である関羽は些か自分に対して自信を持ち過ぎている節がある。

その自信は……傲慢不遜と人には取れる程。

確かに関羽の実力は誰もが一目置き、その容貌に皆は圧倒されてしまっ

関羽自身もその実力を知っており誰もが一目置いている事も知って

いる。

性質が悪いのだ。

恐らく義勇軍が一人で行動すれば恐らく関羽や張飛などは単独そうではなくとも何人かを引き摺れ董卓軍を蹴散らしてしまうだろう。

そうなれば必然と怨みを買うのは義勇軍の長である劉備だ。

「ここは大人しく私に従ってくれまいか？」

そなた達を追い出せば夜姫様が哀しむし一人になってしまう。

「前にも言ったが夜姫様を安心させられるのはそなただ。もし、そなた達が居なくなれば誰が夜姫様を安心させられる？」

劉備は今までの袁術とは違うと思っていたが改めて感じた。

以前の彼なら自分を蔑み、こんな言葉を言ったりしない。

だが、今は違う。

そしてここは袁術に従うのが一番と思った。

「分かりました」

「すまない。だが、恐らく二度もそなた達に撃退された董卓軍だ・
・明日は本腰を入れて来るかもしれんな」

董卓自身は袁術よりも部下である孫堅を忌避している。

義勇軍である劉備は夜姫が居るから襲っているような物だろう。

だが、ここに移ったと何れは・・・もう知られているかもしれない。それを考えると明日は真つ直ぐにここへ攻め込む可能性が高い。

そうなれば乱戦となり指揮系統も滅茶苦茶にされてしまう恐れがある。

それだけは避けたい所だ。

「本腰を入れて来ると言う・・・呂布が来ると？」

劉備は袁術の言葉を聞いて誰が来るかと考えた結果・・・呂布が来ると推測した。

「呂布だけが何も奴の手下だけではないぞ」

確かにその通りだと劉備は呂布だけに捉われた自分を恥ずかしく思った。

「“華雄”かもしれん。“胡軫”かもしれん。そなたの言う通り呂布かもしれん。最悪の場合・・・奴等が全員打って出るかもしれん」董卓の配下には袁術がいった3人の人物が脅威と見て良いだろう。

華雄は董卓の軍では都督とくと呼ばれる軍政を指揮する立場に居る。

胡軫に至っては最初は陳郡太守だったが、後に大督護となり司隸校

尉になった。

呂布は董卓の養子にして中郎將に累進し更には都亭候に封じられ“飛將”名まで呼ばれている。

3人ともそれぞれの分野においては実力があるが、武勇に関してもいう事が無い。

「しかし、胡軫は呂布と仲が悪いですよね？」

「そうだ。もし、3人が一緒に来れば呂布と胡軫の仲を突くのが良い」

もし、来るならそこを突けば勝ち目があると袁術は言ったが出来るならば3人一緒には来て欲しくないというのが本心だった。

「どうなさるんですか？」

「何とも言えん。ただ、孫堅も居るからそれ程ではないと思うのだが……」

孫堅は袁術の部下だが実力から見れば彼の方が上だ。

だから、董卓は先ず孫堅を先に撃破すると考えている。

どちらにせよ難しい所だと袁術は言いながらも帰って良いと言い劉備を下がらせた。

一人天幕へと残された袁術の所へ閻象が劉備と入れ変わるように入ってきた。

「何か用か？」

「宴の後始末を。それから夜姫様の事についてです」

「何か遭ったのか？」

夜姫の事だと言われると眼の色を変える自身の主に閻象は眼を細めながら口を開いた。

「今はお休みになられております」

「では何だ」

「そう急かさないで下さい。急かす男は嫌われますよ？」

「煩い。それで何なのだ？」

「はい。先ほど閻者から連絡が入りました」

「・・・報告は？」

袁術は閻者と聞いて眼を細め誰も居ない事を確認した。

閻者を送り込んだのは袁術ではない。

目の前の閻象が独断で行った事だ。

最初こそ怒ったが今はその行いに感謝する。

「間者の報告によりますと敵は夜姫様の存在に気付いております」

「それで？」

何処かで気付いていたかと思っていたので然して驚かず続きを促す袁術に閻象は続けた。

「董卓は是非とも夜姫様を手に入れたいと思っっているようです」

天の姫を自らの懐に入れれば恐れる物は何も無いからだ。

「ふんつ。私利私欲に塗れた男の考えそうな事だ」

「ご自分も前までそうでしたでしょうに……………」

他人事のように罵倒する主に閻象は嘆息しながらも続きを話した。

「それで明日……呂布、華雄、胡軫を出すそうです」

「先ほど劉備とも話したが……来て欲しくない人物が一気に来るとは……………」

嫌な予感……希望ほど無残にも打ち砕かれる物は無いと袁術は改めて痛感させられた気がした。

呂布一人でさえ手間取るというのに3人纏めて来られては耐えられるか自信が無い。

「まったくです。ですが、ここであの3人を一気に……そうでなくとも誰かしら1人を打ち倒せば確実に揺さ振りを掛けられます」

閻象の言葉は確かに一理ある。

3人とも董卓の配下では猛者だ。

その者達を一気にそうでなくとも一人でも倒せば確実に向こうが怯むのは見えている。

「確かにそうだが・・・そなたとしては誰が妥当だと思う？」

「胡軫と呂布は仲が悪いです。貴方様もお考えでしょうが、その2人を先ずは引き裂き個々に撃破するべしと思います」

胡軫は呂布に比べれば武勇においては明らかに劣る。

しかし、それでも個人武勇は眼に止まる位の実力はあるのだが性格が傲慢で短気おまけに嫉妬深い。

これらが混ざり合い部下達の人気は極めて低い。

恐らく胡軫はなぜ呂布と共に参加しなければ？と憤りを覚えている事だろう。

華雄に関しては胡軫の配下だから、呂布との仲介に心を砕く筈だがそこをバラバラにすれば・・・

「確かにその通りだな。そなたが言うとなれば・・・もう出来ているのだろ？」

閻象の性格からしてこれを自分に話すという事は・・・

・

「はい。既に手は打っております」

何でも無いように閻象は言ってみせた。

「抜かりは？」

「ありません」

「大した男だ。それから夜姫様の事だがくれぐれも粗相が無いようにな」

「その言葉貴方様にそっくりお返しします」

相変わらず一言多いし容赦ないと袁術は思いながらも怒りは不思議と起こらなかった。

「何をニヤケているのですか？」

閻象に指摘されて自分の顔に手をやれば・・・微かに顔がニヤケていた。

「いや何でも無い」

直ぐに顔を元に戻して閻象に命令した。

「明日は奴等が来るならこちらも準備をしておけ。孫堅にも伝えておけ」

「御意に。では、片付けをするので天幕から出て下さい」

袁術は頷いて天幕を出た。

夜は星空で広がっており明日は晴れと予感する。

夜姫の天幕を見れば屈強な兵士二人が槍を片手に立ち劉備の陣幕もまた兵たちが立っており夜姫の天幕を黙って見ていた。

「・・・・・・・・」

何故か無性に夜姫の所へ行きたいと思った袁術は静かに天幕へと足を向けた。

「これは殿」

天幕を護っていた兵たちは直立不動で袁術を見た。

「夜姫様は？」

「寝ております。歌声のように安らかな寝息です」

耳を澄ませれば確かに・・・歌声とも取れる安らかな寝息が聞こえてくる。

「入っても良いか？」

「はい、構いませんが・・・・・・・・」

兵たち2人から見れば袁術はこの主だ。

その主が何でこんな許可を求めるような言い方をするのか理解できなかった。

「ここは夜姫様の天幕だ。如何に私の陣とは言え、ここ“だけ”は夜姫様の領土。そなた達は差し詰めその領土を護る衛兵と言った所だ」

なら、その衛兵の許可を得なくては中に入れないと袁術は説明した。

2人は眼を合わせてから頷き合った。

『どうぞ、お入り下さい』

「すまん。それから・・・もし、私が何か夜姫様に対して“変な事”をしようと勘付いたら迷わず取り押さえろ」

寝ている女性の天幕へ入るのだ・・・何をするか自分でも分からない。

それでも入りたいと言う願望は我慢できない。

袁術は自分で解かっていたから敢えて部下に命じたのだ。

部下達は曖昧ながらも頷いたのを確認してから袁術は天幕の中へと入った。

蠟燭は消されているため真っ暗で何も見えない。

『・・・眼が見えない夜姫様にとってはこんな状況なのだろうな』

眼が見えないとなれば辺りは暗闇同然。

しかも以前は見えていたと言うことから性質が悪い。

最初から見えない方がある意味では助かるのだが、とつぜん見えなくなつたというと今まで見えていた物が全て見えない。

これには言い知れぬ恐怖が宿されている。

常人ならば泣いて喚き散らすだろう。

それが当り前なのだが・・・夜姫はそれを微塵も表さない。

寧ろ眼が見えないのにひた向きに前を歩き続けている。

強い娘だと表術は思いながら暗闇に慣れた眼で寝台を探した。

寝台が見え誰かが寝ている事を確認する。

僅かに肩を動かしているから寝ている証拠だ。

足音を立てないように近付いて見下すと・・・・・・・・・・・・・・・・

『まるで赤子だな』

赤子のように無邪気な寝息を立てる夜姫が居た。

銀色と紫色の髪を惜し気も無く曝しており、暗闇でもよく見える。

スー・・・スー・・・スー・・・

寝ている夜姫は袁術が近付いたのにまるで起きない。

袁術は黙って夜姫を見続けた。

明日は呂布達が来る。

そして自分達はそれを迎え討つ。

大勢の血が流れ命を落とす者が続出する事だろう・・・

自分もまた死ぬかもしれない。

これが見納めかもしれないと思ったが、直ぐに否定した。

自分は死なない。

一度は死に掛けた身だが、夜姫に救われた。

血を流す自分に対して夜姫はこう語り掛けた。

『私を護って死ぬるなら本望？・・・死んだら終わりでしょ？生きて私を護り抜いてこそ本望と言いなさいよ・・・馬鹿』

「夜姫様。お約束します」

袁術は眠る夜姫に語る。

「私は生きて・・・例え泥水を啜ろうとも生き続け貴方様をお護り

します」

貴方は生きて護り抜いてこそ本望と言え・・・そうおっしゃった。

ならば、そのように生きて貴方を護り続けましょう・・・

「この身は・・・貴方様だけの為に・・・」

そう言い残し立ち去ろうとした時だ。

「・・・やく、そく・・・だからね・・・」

眠っていた夜姫だが声を発して来た。

起きたのか？と思い振り返ったが起きていない。

・・・夢を見ているのだろう。

まさか自分の言葉に反応したのかとも思ったが。

「やく・・・そくは・・・守って、ね・・・」

「・・・はい。お約束します・・・夜姫様」

眠る夜姫に袁術は笑顔で頷いた。

「良い夢を・・・」

袁術は僅かに顔を緩めて静かにまた天幕を後にした。

「二人とも・・・何があろうと夜姫様を護れ」

『・・・御意に』

兵は袁術の言葉に直立不動のまま頷いた。

そして天幕から離れた袁術は自分の天幕へと戻りながら夜空を見上げた。

とても澄んだ夜空は幾多の星々が輝きを放ち続ける。

「夜姫様は天ではなく・・・月から来たのかもしれない」

この星空が輝きを放つ中でも一際輝くのは月だ。

あの月から夜姫は来たのかもしれない。

もし、そうなら・・・

「いや、止めておこう」

袁術は自分の考えを否定し今度こそ自分の天幕へと足を傾けた。

第九幕：励ましの言葉

董卓が呂布、胡軫、華雄の3人を陽人から出撃させた情報は早朝の内に連合軍の陣内に広まった。

呂布だけでなく胡軫さらに華雄まで出撃するのだから皆は恐れ戦く。しかし、彼等を倒せば・・・そうでなくとも1人でも倒せば名が天下に轟く事は間違いない。

恐怖と巧妙という2つの心が混ざり合いながら皆は戦闘準備に掛った。

袁術の陣もまた同じ事だった。

兵たちは鎧の結び目をきつく縛り戟や槍、弓、弩、盾などの点検をしている。

誰もが恐怖と巧妙の心が入り混ざり合っているが、やはり恐怖の方が強いのだろう。

天に向かって祈りを捧げる者・・・家族から渡された物を握り締める者・・・など様々だった。

義勇軍の方を見れば全員が無言で武器などの手入れをしていた。

彼等は怖くないのか？と訊きたいが、彼等も人間だ。

怖いに決まっている。

しかし、恐怖に打ち勝とうとしているように見えた。

自分達は義勇軍だが、天の姫が降り立ちそれを二度に渡り敵から護り抜いた実績がある。

今回も必ず何があるうと天の姫を護り通す。

そんな気持ちが彼らにはあり無言で居るのだ。

彼等は無言で天幕に眼をやった。

そこは夜姫が眠る天幕だった。

その天幕には夜姫以外の者達が居る。

夜姫を上座に据えて将達が集まっている最中だった。

袁術と孫堅は勿論だが劉備達も居る。

ただし、居るのは劉備、関羽、張飛、諸葛亮の4名だけでどうしても袁術や孫堅に比べれば全てにおいて見劣りしてしまう。

将たちの中にはなぜ義勇軍が？と目くじらを立てる者も居たが、袁術が咳払いをすると慌てて夜姫に視線を戻した。

「夜姫様。今日の戦は呂布が出ます」

袁術は夜姫に呂布の存在を伝えた。

「飛将と言われる呂布ですよ？あの一日を千里で走り切ると言われる駿馬“赤兎馬”に乗っているのですよね？」

夜姫の言葉にはそんな人物を相手に勝てるのか？と暗に問い掛けているのを袁術ならびに劉備は知っていたが敢えて言わなかった。

彼女の言いたい事は解かる・・・だが、ここで逃げる訳にはいかないのだ。

「呂布だけでなく更に胡軫と華雄も出撃しています」

答える代わりに更に2人追加する袁術に・・・

「・・・・・・・・」

夜姫は何も言わなかった・・・言えなかったのだ。

3人とも董卓の配下である将で腕利きの猛者だ。

特に呂布は三国の中でも一番強いと言われる程の実力者で愛馬の赤兎馬もまた名馬として知られている。

「董卓の狙いは・・・貴方様です」

袁術は無言の夜姫に対して董卓の狙いを伝えた。

「私が、天の姫だから・・・ですよ？」

もう嫌になったと夜姫の声には含まれていた。

誰だって天の姫という理由で近付き、気に入られようとしている。

それを夜姫は嫌というほどここに来てから体験しているから董卓が狙っていると言われても驚かなかった。

寧ろ諦めているように感じる。

「夜姫様。お辛いでしようが我慢して下さい。そして願わくば・・・我々に貴方様の加護を」

「私の加護？」

夜姫は袁術の言った言葉が理解できなかった。

「はい。天の姫である貴方様の加護を・・・そうでなくとも励ましの言葉を言っただければ我々は全力で・・・いえ、それ以上の力を発揮します」

袁術の言葉にその場に居た将達は頷いた。

「・・・・・・・・・・」

無言になる夜姫だが、内心では疑問を覚えていた。

『私なんか励ましの言葉で良いの？』

自分はただの大学生で天の姫などではない。

だが、それを言った所で目の前に座る者達は信じないだろう。

それよりも自分が励ましたからと言って必ず生きる訳ではない。
殺される可能性だってある。

それなのに励ましの言葉など掛けた所で焼け石に水だ。

寧ろ・・・彼等を失望させるのでは？という気持ちが強かった。

『どうすれば良いの・・・・・・・・・・・・？』

誰か教えてくれ、と夜姫は助けを乞いたかった。

そこへ・・・また夢で見た光景が頭の中に浮かんだ。

自分の前には大勢の兵たちが直立不動で立ち、自分の言葉を待っていた。

総大将である自分は迷っていた・・・・・・・・・・

自分が何かを言った所で彼等の内・・・誰かは確実に死んでしまう。
・・・無論自分だって死ぬかもしれないが彼等の方が確率的には高い。

死神の手に持たれる鎌で殺されてしまうのだ。

そんな彼等に励ましの言葉など掛けて何になる？

だからと言って何も言わないでおけない。

何を言えば良い？

頭の中に浮かんでくる“昔の自分”と今の自分は同じだった。

ただじつと前を見つめ考えている。

何かを迷っている時は髪を右手で撫でる仕草は瓜二つだ。

考えに考えた末・・・放った言葉は・・・・・・・・

「・・・私が貴方達の魂を抱き締めて上げます。獅子奮迅をした者には私から口付けを差し上げましょう」

ずっと考えて考え抜いて放った言葉はこれだった。

励ましの言葉など彼等に言った所で無意味。

ならば、彼等が勇敢に戦えるように・・・死んでも悔いが残らないような気持ちになれる言葉を放とう。

そう想いあの言葉を言った。

言葉を放つと夜姫の空虚な眼差しが・・・金色へと・・・“月”の色へと変貌し纏っていた気が急激に変化した。

声も先ほどまで怯えていたのが嘘のように凜としており、同時にとても重みがあり説得力があり聞く者を魅了した。

『この気は・・・・・・・・』

袁術はこの気に覚えがあった。

敵に斬られ死にそんな自分へ夜姫が手を差し出して言葉を放った時の気だ。

月の瞳もまた同じだった。

劉備達もまた夜姫の様子が可笑しい事に気付いて近づこうとしたが、夜姫は更に言葉を紡ぎ続けた。

「貴方達の内何人かは・・・兵達も幾人・・・幾万と死んでしまうでしょう。それが戦争と言葉では簡単に言えますが、現実はそのような簡単な物ではありません」

言葉では戦争なのだから人が死ぬのは当たり前、と簡単に言える・・・表せる。

しかし、現実はこの簡単な事ではない。

剣で、槍で、矛で、弓で、斧で、メイスで、ハルバートで、フランベルジュで、銃で、手で、足で、馬の蹄で・・・肉片と化するのだ。

身体から血が溢れ出て大地を赤く汚し、親しい者達の眼からは留め無く涙が溢れる。

そして互いに憎しみ合う。

どちらかが倒れるまで・・・どちらかを倒すまで戦い続ける。

それが戦争なのだ。

「死んでしまえば肉体は滅び何れは消滅してしまいます。親しい者たちは泣き崩れます。そして何れは名すら忘れ去られてしまうでしょう……ですが、魂は何時までも残ります」

肉体は滅ぶが魂は永遠に不滅。

ならば………

「私が戦場で散って逝った魂――“エインヘリヤル”たちは全て抱き締めましょう。そして私の治める都――“グラスヘイムのヴアルハラ”に勝るとも劣らぬ都へと連れて行きましょう」

戦場で死んでしまい不幸と言う者も居れば本望という者も居るだろう。

そんな者達も全て……全員を自分が抱き締め都へと連れて行く。

それが自分に出来る償いだ。

「誓って言います。貴方達が戦死したら……その将としての魂は私が抱き締めて上げます」

恐れても良い……寧ろ怖がりなさい。

生きたいと思いなさい。

故郷に愛しい者が帰りを待っているというのならその為に戦いなさい。

それでも……死んでしまったのなら私が責任を持ち都へと連れて

行きます。

それが私に出来る貴方達への恩返しであり罪滅ぼしだから……

『おおおおお！我らが姫君の為に！我らが舞姫の為に！我らが主の為に！！』

最後まで言い終えた夜姫の頭には兵たちの雄叫びが木霊していた。

兵たちは武器を掲げ自分に対して声を上げて叫んでいる。

……そして戦場へと向かったのだ。

「お……おお……」

誰かが掠れた声で口を開くと連鎖反応の如く他の者たちも口を開いた。

『お……おお……おおおお！！』

皆は口を揃えて手を高々と掲げて雄叫びを上げる。

その雄叫びは出撃した敵軍の最奥にまで聞こえるほど凄まじい雄叫びだった。

敵の最奥にまで聞こえるほど凄まじい雄叫びだから味方の方は大地震でも起きたかのような錯覚した。

「皆の者、聞いたか？我々は例え死んでも夜姫様に抱き締められ都

へと誘われるのだ。例え死んでも悔いはあるまい？何を恐れる？」

袁術は腰を上げ将達に向かって問い掛けた。

「否！何も恐れる物は無い！！」

『何も恐れる物は無い！何も恐れる物は無い！！』

将達は袁術の言葉に叫び返す。

「出陣だ！！」

袁術が剣を抜き入口を指すと将達は勢いよく出て行った。

天幕に残ったのは袁術と劉備だけだった。

「・・・夜姫様」

上座に座り些か顔を紅潮させる夜姫に袁術は声を掛けた。

「わ、私・・・」

夜姫は自分が何を言ったのかよく理解できていない顔をしていた。

月の瞳も元へ戻り雰囲気も戻っている。

その様子を見て2人は安堵した。

「何も言わないで下さい。貴方様の言葉で将達は奮い立ちました。それで良いのです」

例え彼等が死んだとしても彼等はそれを本望とするだろう。

貴方様が抱き締め都へと誘うのだから。

「でも……………」

「夜姫様。袁術殿の言う通りです。貴方様は将達を叱咤激励しました。それに自信を持って下さい」

そして……待っていて下さい。

「私は貴方様を護ります。義勇軍もまた同じです。彼等もまた貴方様の言葉を聞き奮い立っております」

相手が呂布だろうと彼らなら倒せる……討ち破れるだろう。

「夜姫様はここでお待ち下さい。必ず帰って来ますから」

そう言つて劉備は天幕を後にし袁術もまた劉備と同じ言葉を述べて天幕を出て行った。

一人残された夜姫は一体なんであんな言葉を言ったのか？

しかも、ヴァルハラに勝るとも劣らぬ都へと誘うとは？

ヴァルハラは北欧神話に出て来る都だ。

地上で一番見事と言われる宮殿であるグラス Heim……喜びの世界にある。

戦で戦死した者達をヴァルキュリア……戦乙女が連れて来てラグナロク……“神々の黄昏”に備える為に用意されたのがヴァルハラだ。

ヴァルハラとは戦死者の館を意味する。

そんな所に勝るとも劣らぬ都とは一体……

「私は……一体……誰なの？」

誰も居なくなつた天幕に残された夜姫は自分が何なのか分からなくなつた。

“今はそれで良いんだよ。 姫さん”

誰かの声がした。

しかし、誰にも聞こえない。

“今は、大いに悩みな。自分が何者なのか？一体どうしてここへ来たのか？”

大いに悩み考える。

“何れ答えは自然と出て来る。だが、今はまだその時ではないんだ”

その時が来るまでは大いに悩み考え続ける。

“今回もまた無茶をさせるが……姫さんなら大丈夫だ”

彼等が・・・英雄たちが居るのだから。

“俺達はまだここには来れない。だから、あいつ等が俺たちの代わりとなる”

英雄と言われる彼らだが・・・今の彼らでは些か役不足かもしれない。

“だが、姫さんが居ればあいつ等は変われる・・・いや、変わる”

今は2人だが・・・

“後1人・・・いや、後2人は変わる。この時点での話だが”

それはこれからもまた増え続けるという事か？

“あいつらかが変わる鍵は姫さん自身が持っている”

例えて言うと彼等は鍵穴だ。

その閉じられた扉を開くには鍵が必要だ。

“鍵は姫さん自身。少々危ない眼に遭うだろうが姫さんなら大丈夫さ”

理由は・・・

“賭け事に関してはここぞという所で運に恵まれているからな”

声の主は昔を思い出すかのように懐かしい口調になった。

“俺も含めて皆口を揃えてこう言ったぜ”

『姫様と賭け事をしてはいけない。身包み全て剥がされてしまうから』
『ら』

“その通り・・・全員を素っ裸にしたからな”

あれは酷かった、と声の主は笑い出した。

“嗚呼・・・懐かしいぜ。また昔のように姫さんと戯れたいぜ”

皆がそれを願っている。

“あの糞餓鬼が余計な事をしてくれたせいで姫さんの覚醒が遅れたが・・・今度は問題ない”

一度目はあの糞餓鬼と称する者が余計な事・・・愚かな行為をしたせいで無駄に終わったが、今度はその者は居ない。

“姫さんは未だに糞餓鬼を大事に想っているようだが・・・直ぐに忘れるさ”

何故ならここでの戦い・・・連合軍と董卓軍の戦いが終われば・・・
・・・

“三国の時代へと突入するからな。龍の坊ちゃんには契約通り茨の道を歩んでもらうが、それで良いんだ”

しかし、それは既に想定内の事であの契約は言わばそれを確実に歩ませるためであり確認の為でもあった。

“いやはや人間なんて欲の皮が突っ撥ねた獣だと思っっていたが龍の坊ちゃんも例外だな。そこを見込んで落ちた姫さんも流石だ”

恐らく未だに力が完全に芽生えていないから無意識だろう。

だが、それでも誰が一番良いかを見極めるその慧眼・・・見事と言える。

“龍の坊ちゃんは蜀を建国する。そこで『坊や』と出会う。そうすればあんな糞餓鬼なんて直ぐに忘れるさ”

仮にこの舞台に入っ来てても・・・

“しかし、分からないな。どうしてあんな何処にでも居るような凡人を好きになるんだ？姫さんがその気になれば世の男共を全員物に出来るというのに”

声からは信じられない又は趣味が悪いと言わんばかりの色が含まれていた。

よくもまあ、他人の好みに対してこうも口酸っぱく・・・毒を吐けるものだと聞く者は思うだろう。

“まあ、他人の好みは解からないが気を付けるよ？あんな凡人の権化みたいな男を好きになつたんだ。他の野郎共もとい女も含めて黙ってないぞ？”

過去にもそんな事が起こったのだろう・・・声から察するにかなり苦勞したようだ。

“爺なんて『姫様が結婚するなら腹を切る』と言って憚らなかつたんだ。今回もそうなるぜ？いやもつと酷くなる可能性があるな”

それを思うと心勞で倒れそうだと声は言いながら最後とばかりにこ
う言った。

“まあ、頑張ってくれ”

その言葉を最後に声は途絶えた。

それとは別に合戦の合図である太鼓が鳴らされた。

陽人の戦いが始まったのだ。

第十幕：陽人の戦い

董卓の配下である呂布は大地を埋め尽くす連合軍を愛馬
赤兔馬から眺めた。

この呂布……奉先は三国志の中でも最強と名高い武将で通っているが同時に裏切り者としても名が通っている。

この男は前の主……丁原を董卓に唆されて斬り殺し首を董卓の下へと持って来た。

幾ら乱世の世とは言えこれはやり過ぎと声が出ている。

「ふんっ……数で押しに来るしか能が無い者共が」

呂布は赤兔馬から見下しながら鼻で嗤った。

彼は先ほどの言葉でも解かる通り敵を侮る所がある。

それだけの實力を持っているのは事実だが敵を甘く見ると痛い目に遭う。

ざっと見ても自分達の軽く数十倍は居るのに彼は鼻で嗤っている

それを彼以外の者たちは危惧しているのだが……

「俺が怖いのか？怖いのだろうな。飛将と謳われるこの呂布なのだからな」

赤兎馬に跨る呂布を味方の兵たちは畏怖の眼差しを向けている。

彼の発言に誰も文句は言わない。

言えないのだ………

彼は董卓の養子。

それだけでも十分に恐れられているのに実力もまた折り紙付きなのだ。

彼が指揮する直属の配下である五原騎兵团もまた彼同様に武勇に優れている。

彼の養父に当たる董卓は左右どちらでも弓が引ける。

養子である呂布もまた弓術の腕は素晴らしく馬術に関してもまた文句の付けようがない。

弓と馬が上手いという事もあり恐らく遊牧民の出では？と考えられている。

だが、正式な出自が何処か謎だ。

そんな呂布だがその実力が仇となり些か傲慢である。

現に自分達より数十倍も居る連合軍に対してそのような事を言うなど傲慢と言える。

兵たちの士気を鼓舞するのではなく蔑んでいる口調だから傲慢と取

れても可笑しくない。

「ふんつ。たかが遊牧民の出で強がりと言っな」

赤兎馬の隣へ馬に乗った男が現れた。

歳は呂布より上だ。

「何の用だ？胡軫」

呂布は隣に現れた男……胡軫を左眼で睨み据えた。

この男……胡軫は呂布に勝るとも劣らぬ実力を誇っている。

官位も太守から大督護へ更には司隸校尉へと出世する程だ。

ただし、呂布は胡軫を、また胡軫は呂布を互いに毛嫌いしていた。

それは互いに似ているからだ。

呂布も胡軫も武勇の腕は誰もが認める。

しかし、同時に傲慢なのだ。

ただし……胡軫に至っては傲慢の上に短気だった事もあり部下達からの信頼は薄かった……

このように似ている所があるため一種の同族嫌悪という状況に陥っているのだ。

「何の用？別にただ私も敵軍の様子を見に来ただけの事だ」

胡軫は呂布の言葉を鼻で嗤い前方を見た。

「あそこに天の姫が居るのか・・・どんな人物なのか興味が沸くな」

胡軫自身呂布とこの戦でどちらが強いのか競いたい気持ちもある。

しかし、それ以上に連合軍へと降りた天の姫が一体どんな者なのか知りたいという興味の方が強いようだ。

「我が父・・・董卓は天の姫を欲しがっているようだがそんな者が居なくとも俺一人で連合軍など叩き潰してみせるわ！！」

「愚かな・・・たった一人である人数を倒せる者など居ない」

胡軫は呂布の言い放った言葉に呆れ果てていた。

「貴様は我が主である董卓さまの養子だが私は貴様を認めん。武勇に優れただけの男だ。それに董卓様は天下を取る為にも天の姫を欲しがっているのだ」

天の姫を手中に入れればこちらは天が味方するという大義名分が出る。

それを考えれば例え勝っても連合軍は諦めたりしないだろう。

それこそ民達も立ち上がる恐れがある。

そこを考えて董卓は天の姫を欲しているのだが、それを知らないの

か？と胡軫は馬鹿にした。

「貴様がほざくな。俺の武勇に嫉妬して在らぬ噂を流している事は知っておるぞ」

「在らぬ噂とな？馬鹿を申すな。私は本当の事を言っているだけだ。貴様は前の主を裏切ったばかりか今もまた殿を裏切ろうと考えているのだろ？」

「貴様ツ……………」

「まあまあ……………ここは互いに抑えて」

二人の間に割って入ったのは胡軫より少し年下の男だった。

彼の名は華雄。

呂布、胡軫と並び董卓の配下である将だ。

胡軫の部下である彼は何時も主である胡軫と呂布の諍いに頭を悩ませていた。

彼自身武勇に優れてはいるが、2人のように諍いを起こすほど傲慢になれる程ではない。

否……………この2人が諍いを起こすのでそれを止めているだけの事だ。

2人とも主である董卓にとって必要な者だ。

何より今は戦時中。

身内で争う場合じゃない。

敵にここを突かれてはお終いだ……………

『何とかせねば』

華雄は胃が痛み出したがそれを堪え敵を馬上から見つめた。

軽く見ても数十倍。

だが、あの中でも厄介なのは……………

孫文台。

あの男は厄介だ……………

『孫堅は確実に殺せ』

自分の主である董卓は出陣前にこう言った。

『あの男は厄介だ。袁術の部下だが総大将でもある。孫堅を倒せば連合軍には打撃が与えられる』

天の姫も欲しいが、孫堅を殺すのが先決と考えるように董卓は言った。

つまりそれだけ厄介な相手だと董卓は言っているのだ。

『恐らく2人に話しても無理だろうな……………』

この2人に言った所で素直にそれを聞き入れるとは思えない。

自分達の好きなように動くのが2人の性格だ。

例え董卓の命令だろうと言いつつ、幾らでも出来るし、それ以上の戦果を2人はやれるのだ。

となれば自分がやるしかない。

『乱戦に持ち込んでやるのが一番か？』

乱戦に持ち込めば指揮系統は滅茶苦茶に出来るし敵を孤立させる事も可能だ。

いかに孫堅と言えど孤立させれば勝ち目は薄い。

そこを突くしかない。

『孫堅軍は・・・あそこか』

華雄は馬上から孫堅軍は何処か？と探していたが見つかった。

孫堅軍は総大将の一人であると同時に袁術の部下でもある。

そのため袁術軍を探せば自ずと孫堅軍も見つかるのだが・・・

『義勇軍も一緒とはどういう事だ？』

孫堅軍と袁術軍の中にみすばらしい格好をした兵たちが居る。

軍旗もあるが、やはりそれもみすばらしい。

あれは義勇軍だ。

しかし、義勇軍はどの軍からも荷物扱いをされて価値の無い陣を任
されていた筈だが………？

「まあ良い」

華雄は考える事を止めた。

自分が仕留めるべき相手は孫堅ただ一人。

後は呂布と胡軫が争いながら倒して行く筈だ。

ならば、自分は董卓から命令された人物を倒す事に全力を注げば良
い。

ただし2人が真剣で殺し合わないように……孤立し合わないよう
にしなくてはいけないが。

連合軍の方から開戦の太鼓が鳴らされた。

「先手必勝ッ。行くぞ!!」

呂布は右手に持った方天画戟ほうてんがげきを振り五原騎兵団を率いて真っ先に敵
陣へと突入した。

「我々も遅れを取るな!!」

胡軫は呂布に負けまいと剣を抜き部下を率いて突入する。

「・・・私も行くか」

華雄は勝手に突撃した2人に呆れながらも部下達に自分達の狙いは「孫文台」と言い他は捨てるかと命令した。

「董卓さまは孫文台を殺せと言われた。我々はそれに全力を注ぐ。他の将達は捨ておけ。良いな？」

華雄の言葉に部下達は頷いた。

「・・・行くぞッ!!」

華雄もまた剣を抜いて孫文台の旗がはためく陣へと突撃した。

恐らくかなりの血が流れるだろう。

自分も死ぬ可能性だつてある。

だが、董卓の命令を遂行できるのなら仕方無いとも思う。

孫堅軍は胡軫軍を相手にしていた。

しかし、そこへ自分達が来ると知るや迎撃態勢を整えた。

これなら挟み打ちに出来る。

何と言う幸運か。

華雄は幸運に感謝しながらも迎撃態勢が取られ始めた事に気づく。

孫堅軍は胡軫軍を相手にしながらもこちらへ弓矢などを構え狙いを定めている。

そして・・・放たれた。

幾本もの矢が雨となり華雄軍に降り注ぐ。

何本か兵達に当たり怯もうとする。

「怯むなッ。何としても孫堅の首を取るのだ!!」

華雄は先陣を切り部下達を奮い立たせる。

それに部下達も怯む心を叱咤して追従する。

「はあああああああ!!」

獣のような雄叫びを上げながら華雄は雑兵の何人かを斬り捨てた。

しかし、雑兵達は怯む様子も見せずに果敢にも自分へ襲い掛かる。

それを華雄は蚊でも叩き落とすように払いのけて行くが同時に雑兵と言えども侮れないと思いき知らされた。

やがて部下達も突撃し雑兵同士・・・将達の戦い・・・乱戦へと早くも持ち込めた。

『これなら孫堅を倒せる』

孫堅は直ぐに見つかった。

白銀に光り輝く鎧を身に付け赤頭巾を被り腰には古錠刀をさげている。

流石は“江東の虎”と謳われる孫文台。

名前倒れではない実力だ。

「皆の者。孫文台を討ち取れ！！」

華雄は雑兵を葬りながら孫堅へ馬を進める。

敵と味方が入り乱れて誰が誰なのか分からない乱戦。

これなら勝てる、と華雄はもう勝利したと思った。

だが、そんな時こそ無残にも碎かれるのが世の常である。

後もう少しで孫堅に届くという所で矢が頬を掠めた。

『流れ矢・・・ではない！！』

最初は流れ矢と華雄は思ったが、またもや矢が飛んで来た事で自分は狙われていると実感する。

何処だ？

何処に居る………？

敵を倒しながらも華雄は矢を射た敵を探す。

孫堅を倒すのが第一目的だ。

しかし、このままでは自分が先にやられてしまう。

幸い胡軫軍が良い具合に孫堅軍と戦っているからそうは逃げられない。

ならば今の内に邪魔な者を排除するべきだ。

辺りを探していると……居た。

辛うじて見える位の先に居た。

「……女、だと」

華雄は自分を狙っているのが女と知り些か驚いた。

歳はまだ20になったばかりだろう。

銀と紫というこの世の者には無い髪の色をされており瞳もまた見る者を捕えて離さない月の瞳。

その娘はまた弓を引き絞り始めた。

傍らには矢が地面に突き刺さっておりまだ余裕がある。

『あれが天の姫、か』

見る限りあれが天の姫と考えるべきと華雄は戦いながら思う。

着ている衣服も豊かな証であるし容姿と気を見る限りそうだとほぼ断言できる。

彼女は見た事も無い長弓に矢を番えて引き絞り始めた。

そして・・・放った。

空を切り真っ直ぐに矢は華雄に向かって飛んでくる。

他の者が射た矢より鋭く空を切る矢。

まるで流星のように速く見える。

「くっ！！」

辛うじて襲い掛かる矢を華雄は避けるが向こうは次々と矢を射てくる。

その速さがまるで数百人の弓兵と同じに・・・いやそれ以上に速いから堪らない。

『このままではやられる・・・』

短い思考の末決断した。

「このまま押し切って本陣へ切り込むぞ!!」

矢は長距離から攻撃できるのが強み。

ならば接近戦に持ち込んで討ち取るしかない。

これはかなり危険な賭けと言える。

本陣にまで切り込むとなれば嫌でも警護が厳しくなる上に自分達の兵も討ち取られる。

しかし、この状況を打開するにはこれしかない。

華雄はそう思ったのだ。

もちろん孫堅を仕留める事という当初の目的は変わっていないが。

華雄軍は孫堅軍と更に距離を縮め胡軫軍は孫堅軍を押しながら本陣へと進んで行く。

かなり危険な戦いをしている。

そんな中で呂布軍はというと.....

「退け！退け！退けええええ!!」

呂布軍は騎馬隊を駆使し戦場を風の如く疾走している。

騎馬隊の強みは馬の速さを活かした機動力だ。

そのため同じ場所には留まらず戦場を有象無象に駆けて相手を攪乱する。

そして呂布は飛将という名を誇ると同時に愛馬の赤兔馬もまた一日で千里を走ると言われるほど駿馬だ。

その彼等に従う五原騎兵团もまた同じである。

誰も彼等を捕える事が出来ない。

正しく戦場では風なのだ。

「この程度でこの呂布の首を取れると思うか?!」

方天画戟を片手で軽々と振りながら敵を虫を払う如く薙ぎ払いながら嘲笑う。

「ん?」

呂布の右目が一人を捕える。

本陣の方で弓を射る娘だ。

「誰かは知らんが・・・あんな所で矢を射るとは愚かな・・・」

彼にとって戦は男の場。

女が入り込む余地など無いというのが考えだった。

そんな所に女が居る。

しかも裕福そうな衣服に身を包んだ上に矢を射ている。

彼の眼から見れば戦を冒瀆しているに等しかった。

女なららしく陣幕の中で震えている。

『誰だか知らんが自分は場違いだと教えてやるう』

残忍な笑みを浮かべて彼は愛馬の腹を蹴りその娘の方角へと走らせた。

方角は本陣で護りは強固だが彼一人の視点で見れば強固には見えな
い。

あっという間に護る兵たちを血祭りに上げて行き……………
本陣へと突入した。

『姫様を護れ!!』

誰かが悲鳴に近い声を上げる。

しかし、既に遅く呂布の方天画戟の刃は娘の首筋を刎ねようとして
いた……………

所が……………

「な、何っ?!」

呂布は信じられなかった。

自分の方天画戟を素手で止めているのだから。

しかも、自分より遙かに弱い印象を受ける娘に……………

「誰だか知らないけど……我に刃を向けるとは愚かな事を」

娘は月色の瞳を細めた瞬間……消えた。

そして呂布は赤兎馬から落馬した。

皆は驚愕した。

あの呂布が愛馬から落馬したのだから！！

「ぐっ……………」

呂布は直ぐに立ち上がった。

そして視線を娘に向ける。

娘は弓と矢を持ちこちらを見ている。

「たかが落馬した位で動揺するなんて情けない。男として恥なさい」

「貴様……何者だ？」

「女に名を訊ねる時は男の方から名乗りなさい。無礼者が」

娘は何処までも冷めた眼つきで呂布を見ている。

「こっの・・・小娘が!!」

呂布は立ち上がるや否や走り出し娘との距離を縮めると方天画戟を横に薙ぎ払った。

しかし、それを軽やかな・・・そうまるで舞うように娘は避けると空中から矢を射た。

「こんな矢で俺を仕留められると思うか!!」

矢を払う呂布だが第二、第三と次々に矢を射られてからは余裕を早くも無くし始めた。

しかも、その矢が“鋭い”のだ。

今まで受けて来た矢などとは比べようが無いほど鋭く確実に死に至らしめる事が出来る場所を的確に射てくるから性質が悪い。

『この娘・・・何者だ?』

矢を薙ぎ払いながら呂布は娘を見る。

銀と紫の髪を足元まで伸ばし月色の瞳は何処まで冷たい印象を相手に見せつけるが、瞳から逸らす事を許さない強い力を感じさせる。

皆は戦う事を止めて呂布と娘・・・織星夜姫の攻防を見ている。

彼女の弓は見た事も無い。

何よりあの飛将と謳われた呂布を愛馬から落馬させ、あまつさえ一方的に攻撃をしているのだから戦いを止めて見入るのも無理はない。しかし、夜姫の弓が矢を射るのを止めた。

矢が無くなったのだ。

「矢さえなければ弓など恐れずに足りず!」

呂布はまた走り出し夜姫へと突進する。

戟は戈^かや矛^{ほこ}の機能を備えた武器で、両手で持つ物と片手で持つ物の二通りがある。

呂布が持っているのは両手で扱う長戟に分類される。

しかし、彼の長戟は方天戟の一つに分類される方天画戟だ。

本来なら両方に付いている三日月状の刃 - - 月牙が片方にしかない。

これは両手で握り扱う物だが、それを彼は片手で易々と扱える。

もう片方の手で馬の手綱を握り戦場を駆け巡るのだ。

所が現在は両手で方天画戟を扱っている。

つまり彼は本気で戦っているのだ。

しかし、それを嘲笑うかのように夜姫は攻撃を避ける。

それ所か逆に距離を縮めて呂布に平手打ちを喰らわせた。

軽い力だが呂布に対して平手打ちをする女などこの世に居ない。

誰もが啞然とした。

打たれた呂布自身もだ。

「この程度の攻撃も躲す事も出来ないで・・・“飛将”と言われるとは情けないわね」

言う方も言う方だが、それを自ら誇りとしている己もまた情けない。

「貴方みたいな男は飛将なんかじゃない。ただの猪よ。戦場を騎馬で走り回るしか能が無い男ね」

「いつのー!!」

何処までも馬鹿にして蔑む夜姫に呂布は理性を無くし始めた。

それがいけなかったと彼は知る由も無い。

力任せに夜姫を絞め殺そうと方天画戟を捨て両手を背中に回した。

だが、それを舞でもするように巧みに避ける夜姫。

「汚い手で触らないで。汚れるし臭いが付くわ」

「もう貴方と戦うのは嫌。顔も見たくないわ」

そう言つて夜姫はパチンツと指を鳴らした。

何処からともなく大きな太刀……大太刀が現れ代わりに弓は消えた。

弓の代わりに夜姫は大太刀を掴んだ。

柄と鐔の色は濃紺で鞘も同じ色だった。

鞘から無造作に抜いた夜姫は片手で軽々と操り刃を呂布に向けた。

「これは貴方みたいな男を斬るには勿体ない代物よ。でも、この子が血を吸いたいと言つてさっきから聞かないの」

こんな不味そうな男の血でも良いから腹を満たしたいと大太刀は言つたらしい。

「まったく。前から食い意地が張っているとは思っていたけど、こんな男の血を吸わせるなんて主として悲しいわ」

それでも吸わせる、と彼女は言った。

「これで最後よ。死ぬのが嫌なら二度と私の前に現れないで」

貴方みたいな男は嫌いなの。

何処までも冷たい。

そして容赦ない。

こんな言葉を戦場ではない場所で言われたらもう二度と会わないだろう。

それだけ夜姫の放った言葉は冷たく切れ味が鋭かったのだ。

「うおおおおお!!」

呂布は方天画戟を頭上に上げ両手で振り回しながら夜姫に突進した。

これで終わらせてやるならば彼に彼は雄叫びを上げ最後の一撃とばかりに大きく方天画戟を振り下ろす。

「・・・・・・・・・・」

後もう少しで当たる・・・そんな所で夜姫は一瞬で姿を消した。

そして呂布と入れ変わるように居た場所に立つ。

誰もが固唾を飲んで勝敗を見守る中で・・・倒れたのは呂布だった。

いや、倒れそうになったが方天画戟の石突きを杖代わりに何とか立っている。

何度も地面に膝を着いた彼だが、ここだけは譲れないと言う意地もあるのだろう。

震える足で必死に立ち方天画戟を杖にしているのだから。

「ぐっ……ぐっ……」

彼は血を流す腹を見ながら赤兎馬を呼んだ。

赤兎馬は直ぐに駆け付け、主の傷口に自らの口を当てた。

「必ず貴様を殺してやる……」

「……私がそれまで生きていたら、ね」

捨て台詞を残し呂布に対して夜姫の返答は何処か投げ槍とも諦めとも取れる口調だった。

それを彼は疑問に思う事も無く五原騎兵団を率いて戦場から去った。

呂布が去った事もあり他の者たちもまた逃げ始めた。

特に胡軫と華雄は乱戦に持ち込んだ上に敵陣へと向かう途中だったのでかなり苦労しながら戦場を抜けた。

連合軍の将達は何とか呂布たちを撃退できたと言ひ合ひ夜姫へと近づいた。

皆が近づく中で夜姫は一人ポツリと言葉を吐いた。

「私はもう……一度は死んだ身なの。殺すなんて出来ないわ」

夜姫は独り言を漏らすと大太刀に付着した血をビュンと空を切り払い落してから鞘に収めた。

そして・・・倒れた。

かくして陽人の戦い“第一戦”は連合軍側の勝利で終わりを告げた。

幕間：悲しい歌

董卓軍を撃退した私達だが今は別の意味で包囲されていた。

孫堅殿、曹操殿、袁紹殿の3人が私と袁術殿を囲み色々と言ってくる。

「劉備、袁術・・・夜姫様と何があつたんだ？」

3人を代表して袁紹殿が訊ねてきたが、私も袁術殿も何も言えなかった。

何と答えたら良いか分からないのだから答えようがない。

だが、そう言った所で3人が納得する訳もないが。

話を戻すと・・・これが別の意味で包囲されたという事だ。

私と袁術殿は・・・夜姫があのような状態になった所を何度か見ていると3人は判断しこうして質問しているのだ。

だが、当の私たちだって夜姫様がどうしてあんなのか理由は分からない。

分からないが、これで二度・・・いや、四度見た。

一度目はたった一人で董卓軍を殲滅した時。

二度目は袁術殿の天幕内で開かれた宴の時。

三度めも同じく袁術殿の天幕内で私共に励ましの言葉を放った時。

そして四度目……………

呂布、胡軫、華雄の3人が一度に攻め込んできた先ほどの戦い……

- 陽人の戦いだ。

私が指揮する義勇軍は袁術殿の指揮する軍に従する形で参加した。

と言っても私達は然して活躍していない。

翼徳は不満で胸一杯だったが、雲長が窘めてくれたお陰で問題なかった……………

などと考えている間に戦は始まってしまった。

袁術殿の指揮する軍を敵は狙わずに孫堅殿が指揮する軍を狙ってきた。

董卓は孫堅殿を厄介と見ている……そう諸葛亮は言っていたが敵の様子を見る限りその通りだと思う。

孫堅軍は曹操軍と共に董卓軍と一番戦闘を重ねている（私たち義勇軍は外してあるが）軍だ。

特に孫堅殿が指揮する軍は海賊退治などで勇猛を馳せただけあつて一兵一兵の錬度が極めて高い。

また孫堅殿自身も“江東の虎”と言つ二つ名を持つほど勇猛な猛将

だ。

赤の鎧を纏った孫堅殿とそれに従う同じく赤の鎧を纏った兵たちは正に“赤い虎”だ。

この人物が敵となったのだから董卓が厄介な人物と思つのも無理はない。

それと同時にこの方を亡き者にしてしまえば我々……反董卓連合軍の勢いは確実に落ちる。

そこを突く積りか？

もし、そうならば何としてでも阻止しなければならない。

「袁術殿、私共も孫堅殿に加勢しましょう」

私は失礼とは思いながらも袁術様に進言した。

「それは私も考えていた。だが……我々がここを離れたら……誰が護るのだ？」

それを言われて私は言葉に窮した。

袁術殿が居る場所は孫堅殿の所へ加勢しに行こうと思えば直ぐに行ける距離だ。

だが、そこは本陣へと通じる場所でもある。

本陣には……夜姫様が居る。

他にも護衛の兵たちが居るには居るが・・・もし、そこを突かれて
攫われてもしたら私はどの面を人様に見せて生きて行けようか・・・
・・・

「そなたの気持ちは解かるし私より勇敢だ。だが・・・些か後先考
えずに行動する所があるな」

その通りだと私は思わずにはいられない。

過去にも何度か後先考えずに行つた事が何度もある。

その結果はどれもこれも碌な結果ではない。

それなのに何も学んでいない・・・忘れてしまっている。

漢王朝を復興させる為にも、夜姫様を護る為にも、この場は動かず
居た方が良い。

「・・・出過ぎた真似をしました」

「いいや。そなたが言わなくても誰かが言っていたさ」

周りを見てみると袁術殿は言い周りに視線を送ると・・・
・・・

何人かの将達は加勢に行く気満々だった。

所が私の進言を退けたのだから自分達が進言しても無駄と判断した
かのように肩を落としていた。

「夜姫様の言葉は我々に力を与えて下さった。しかし、同時に夜姫様の存在が・・・我々を縛っている」

夜姫様は我々に対して励ましの言葉を送って下さった。

『貴方達が死んだら・・・その将としての魂は私が全て抱き締めて差し上げます』

そう夜姫様は仰った。

空虚な眼差しが月の色が宿った眼差しへと変化し雰囲気も変わった。

見る者を圧倒し声を放てば誰もがその言葉に耳を傾けてしまう・・・そんな力が宿っていた。

そしてこう言い続けた。

『貴方達の魂・・・“エインヘリヤル”は全て私が治める都・・・“グラスヘイムのヴァルハラ”に勝るとも劣らぬ都へ連れて行くと約束します』

エインヘリヤル・・・グラスヘイム・・・ヴァルハラ・・・三つとも分からない。

諸葛亮もこれは分からないと首を傾げていた。

だが、部分的に解釈する事は出来ると彼は言い説明した。

『恐らくエインヘリヤルとは死んだ者たちの事を言っているのです』

よう。そしてグラスヘイムとは夜姫様の居た世界でヴァルハラとは都の事だと思えます』

その都を夜姫様は治めていると言った。

つまりあの方は都を治めるだけの力を有しているという証拠だ。

そしてあの様子からしても戦に出た事がある、という見方もできる。

ただし、これはあくまで諸葛亮が考えた推測にすぎない。

何より夜姫様自身・・・自分が判らない様子だった。

私達を励ました後であの方は戸惑っていた。

あれは自分が一体なにを言ったのか判っていない様子だ。

あの時もそうだった・・・

血を流し仰向けになる袁術殿に膝を着いてあの方はこう言った。

『私を護り死んで本望？馬鹿・・・死んだらそこで終わりでしょ？生きて・・・泥水を啜ってでも私を護り抜いてこそ本望と言いなさいよ・・・馬鹿』

泥水を啜ってでも・・・それだけの体験をあの方はしたのかもしれない。

それに対して袁術殿は血を吐きながらもこの次・・・生まれ変わったらそのように言いますと答えた。

だが、それを夜姫様は否定した。

『貴方が・・・貴方達が生まれ変わる必要なんて無いわ・・・私だけで良いの・・・私だけが受けなくてはいけないのよ・・・』

貴方達を護る事が出来なかった愚かな私にだけ輪廻転生の苦しみを味わうのは。

『貴方達は待っていて・・・そうすれば巡り逢えるから。違つわね・・・私が貴方に・・・貴方達に逢いに来たのね』

そうあの方は言ったのだ。

そしてその方が居る本陣を護る為に私たちは動けない。

袁術の言葉はそういう意味が込められている。

励まされながらも味方に加勢できない・・・何とも言えない。

しかし、孫堅殿を敵は何としても倒そうとしている。

現に胡軫軍と交戦している所へ華雄軍が突撃してきたのだから。

あれでは乱戦となり指揮系統も滅茶苦茶になるし討ち取られてしまう可能性が高くなる。

それでも私たちは動けない・・・

曹操軍と袁紹軍は？と思うが向こうは向こうで大変だった。

「退け！退け！退けえい！！」

董卓の養子にして飛将と謳われる呂布。

彼と彼が指揮する五原騎兵団に数では勝っているのだが押されている。

騎馬を自分の手足のように扱い西軍を翻弄する姿は正しく“飛将”
という名に相応しい。

このままではどうしようもない。

何か手は無いか？と考えている間に孫堅殿が敵に討たれそうになる
場面が眼に入った。

加勢に行ったとしても間に合わないし、行ってしまえば本陣が手薄
になる。

このまま手を拱いて見ているしか出来ないのか？と思った時だ。

……本陣から空を切る鋭い音がしたのは。

振り返って見ると……

「夜姫様……」

夜姫様が天幕の外から出ていた。

手には見た事も無い弓を握り傍らには護衛を命じられた兵が矢を抱え地面に突き刺している場面が眼に入った。

「何をしているのだ。あの者たちは」

袁術殿は護衛を命じた部下達が夜姫様を手助けするように見えたのが軽く舌打ちをした。

夜姫様は兵たちが刺した矢を地面から抜くと弦に矢を掛け弓を引き絞ると狙いを定める時間があつたのか？と問いたくなるほど素早く無造作に放った。

その姿が・・・とても美しかった。

私だけではなく誰もが夜姫様の姿に眼を奪われていた。

しかし、そこへ呂布とそれに従う五原騎兵団が迫っている所が眼に入った。

あのままでは孫堅殿もやられて夜姫様も奪われてしまう。

「姫様を護れ！！」

袁術様は悲鳴に近い声を上げて馬を走らせ私達も続いたが距離は向こうの方が近い。

そして夜姫様の首が刎ねると・・・思ったが、違っていた。

『な、何っ！？』

呂布は驚いていた・・・いや、全員が驚いていた。

呂布の方天画戟を細身の手で受け止めているのだから!!

「・・・誰だか知らないけど我に刃を向けるとは愚かな事を」

氷のように冷たい声で喋る夜姫様だが、直ぐに姿を消した。

同時に呂布が赤兔馬から落馬した。

誰もが啞然とする中で夜姫様は静かに着地し呂布を冷たい眼差しで見下している。

「落馬した位で茫然とするとは情けない。恥を知りなさい」

それに呂布は激怒し夜姫様に斬り掛った。

所が夜姫様は弓矢で攻撃を始め呂布をその場から動かなくさせた。

速過ぎて眼では追えない程だ。

あそこまで速いとなると余程の修練が・・・いや、私たちでは生涯を賭しても無理に達しない。

それなのに夜姫様は弓矢を神速の手捌きで引き絞り放ち続けた。

狙いが定まったのか？と思えるほど速いのに矢は全て呂布に向かっている。

あれが天の姫である夜姫様の力なのか？

いや、それ以前にあの弓はなんだ？

あんな巨大な弓は見た事が無い。

しかし、どんなに良い腕を持つと弓を持つと・・・矢が無くなれば終わりだ。

「矢が無ければ恐れずに足らず！！」

呂布は再び突進をして攻撃を繰り返す。

それを夜姫様は舞でもするかのように避け続けると逆に自ら距離を縮め平手打ちを呂布にした。

呂布自身まさか平手打ちをされるとは思っていないのだろう茫然としている。

そこへ追い打ちをかけるように夜姫様は侮辱の言葉を投げ続けた。

呂布はもはや正気を失っているに等しいほど激怒している。

飛将と謳われた自分があんな小娘に虚仮にされるのだから当然と言えは当然だ。

だが、怒りは我を忘れて見境を無くす・・・

そのためか先ほどのような切れが無い。

あれではただの暴れ者だ。

そう奴を追い込んだのは夜姫様自身だが………

また呂布に近付いた夜姫様は顔面に膝を打ち込み前屈みになった背中へ蹴りを入れ奴を地べたに転ばせた。

「傲岸不遜な男には似合う様ね………」

扇を取り出して顔を扇ぐ夜姫様は美しいと思う同時に戦慄した。

あれが夜姫様なのか？

あんなに優しかった夜姫様は何処へ行つたのだ？

そんな私の考えを置いて行くかのように戦いは……最後に近付いて行く。

「もう終わりにしましょう。貴方を相手にするのは最後よ」

夜姫様は何処からともなく大きな剣を取り出した。

いや、剣なら縦長なのにあれは少し刀身が縦に曲がっているから違う。

見た事も無い。

それを握る夜姫様……弓は何処かに消えてしまった。

鞘から軽々と抜き片手で持ち上げ呂布に切っ先を向けて告げた。

「これで最後。死にたくなければ二度と私の前に現れないで」
貴方みたいな人は嫌いなもの、と夜姫様は最後通告とばかりに言っ
てみせたが呂布は引かなかった。

「うあああああああ！！」

方天画戟を振り回しながら呂布は何も考えずに突っ込んだ。

夜姫様はまた消え呂布が立っていた場所に立っている。

そして呂布は・・・退却した。

我々の勝利だ。

勝利したのだ！！

私たちは急いで夜姫様の所へ行つたが夜姫様は倒れてしまった。

急いで抱き起こし、天幕へと運んだ。

そして典医を呼ぼうとした所で袁術殿と共に呼び出された訳だ。

「答える。劉備、袁術。夜姫様と何があつた？」

袁紹様は無言で居る私と袁術様に訊ねてきた。

「袁紹。貴様は私と劉備にどんな答えを望んでいるのだ？」

袁術様が袁紹様へ逆に質問した。

「どんな答えだと？」

「我々は確かに夜姫様と一番この中では付き合いがある。だが、我々だって何が何なのか解からない。それなのに貴様はどんな答えを我々に望むのだ？」

『・・・・・・・・・・』

これに3人は黙った。

私たちだって・・・いや、私はある程度は分かっているがそれでも未だに分からない事は山のようにある。

それなのに答えると言われてもどう答えたら良いか分からない。

正に袁術殿は的を射た言葉を言っている。

この場合は答えかもしれないが。

「・・・もう良い」

袁紹様は一言だけ言った。

「あんな事があつたので、そなた達なら知っていると聞いたのだ」

「先ほども言ったが私達も知らん。ただ言える事は・・・私は夜姫様を護る。それだけだ」

「それは私も同じ事だ」

袁紹殿の言葉に袁術殿は意味も無いように頷いた。

「そうか。ならば失礼するぞ」

夜姫様が心配だと袁術殿は言い私を伴い背を向けた。

「待て。劉備」

袁紹殿が私を呼び止めた。

「何でしょうか？」

「夜姫様の事で何か分かったら逐一報告しろ」

その言葉には恩を返せという意味合いも含まれていたし、異母兄弟に負けられないという嫉妬心が込められていた気がする。

「・・・分かりました」

その言葉に頷き私は今度こそ背を向けて天幕を出た。

天幕を出て待っていた袁術殿と歩き始める。

「・・・夜姫様は本当に何者であろうな？」

袁術殿は前を向きながら私に訊ねてきた。

「分かりません。ですが、あの動きと口調・・・まるで本人ではない気がします」

「私もだ。私を助けた時とはまるで態度が違う」

確かにその通りだ。

袁術殿を助けた時は苛烈ながらも慈悲の心を持っていたが、呂布との戦闘ではそれが欠片も見えなかった。

それ所か・・・相手を痛めつける事に対して快感を覚えているようにさえ見えてしまった。

「我々に言った言葉もそうだが、夜姫様は無意識に何か動いているのかもしれない」

「そうですね・・・エインヘリヤル・・・ヴァルハラ・・・グラスヘイム・・・」

「エインヘリヤルは魂、ヴァルハラは都、グラスヘイムは国といった所か」

「どうして・・・」

諸葛亮が推測した事を知っているのだ？と思った私に袁術殿は苦笑した。

「そなたに諸葛亮が居るように私にも閻象という男が居る」

閻象殿は主箔を務めている方で、何かと小言を言う人物だと聞いている。

「閻象の推測がそれだが・・・諸葛亮も一緒のようだな」

「はい。ですが、あくまで推測です」

「こちらもだ。聞いた事もないがあの方が治めている都だ・・・素晴らしい所だとは断言できるだろう」

「そうですね・・・」

私はその言葉に頷き夜姫様の眠る天幕へ進み続ける。

天幕に近付こうとすると・・・

「歌？」

袁術殿を見れば耳を澄ませてから歌だと断言した。

“貴方は死んでしまった”

最初に聞こえたのは余りに悲しい声であり悲しい言葉だ。

“勇敢に戦ったのは護りたい女ひとがいるから”

“その女を残し逝ってしまう貴方を悲しみが包み込んでしまっ
・・・”

“でも、貴方の魂は私が抱き締めて連れて行く”

“それが私の出来る唯一の償いにして恩返しだから”

“さあ、私が貴方を抱き締めて上げます”

“そして都へと行きましょう”

“私が、貴方の護りたい女の代わりとなりましょう”

“それが私にできる唯一の償いにして恩返しだから”

“貴方を都へと連れて行ったら私は地獄の業火で焼かれましょう”

“貴方という男^{ひと}をむざむざ死なせた罰を受けましょう”

“そうすることで私自身を罰しましょう”

「・・・悲しい歌だ」

袁術殿は眼を伏せて言い私も頷いた。

この歌は戦場で死んでしまった男を慰める歌なのか？

もし、そうなら・・・悲しい歌だ。

そしてこの歌を歌っているのは誰だ？と思っただが、直ぐに検討は着いた。

「夜姫様、ですね」

この声には聞き覚えがある。

改めて天幕へと急ぐと・・・夜姫様は天幕の外で歌っていた。

瞳の色は月。

しかし、私と袁術殿を見るなり空虚な眼差しへと戻り歌も止んだ。

「劉備、様ですか？」

「はい。大丈夫ですか。夜姫様」

私は夜姫様に具合を訊ね袁術殿は答えを待った。

「大丈夫です。あの、袁術殿も、孫堅殿も無事、ですか？」

「勿論です。それで、あの歌は」

「あれは、むかし子供の頃に見た絵画を思い浮かべて歌ったんです」

聞けば幼い頃に見た戦場に立つ女神を思い浮かべて何となく歌い出したようだ。

しかし、自分が月の色を宿した瞳で居た事には気付いていないらしい……

ましてや自分が呂布を退けたなど知る由もないだろう。

「そうですか。さあ外は寒いですから中へ入りましょう」

私は夜姫様の手を取り天幕へと入れた。

『この方が何者であろうと何が何でも護り通す。それで良いではな

いか』

何者だろうと考えはしたが、この方が何者であろうと護るべき存在である方に変わりはない。

それに何れ答えというのは出てくる。

ならば、その答えが出るまで待つべきだ。

私はそう思った。

幕間・興味がある（前書き）

今度は董卓軍の回想と言えば良いでしょうか？そちらを載せます。

それから、また私の悪い趣味もとい銃器を近い内に出そうと思います。
す。（爆）

彼女と一緒に創作なのでもちろん許しは得ましたよ。

ただ「また出すの？」とまあ愚痴はこぼされましたが。 W W W

幕間：興味がある

戦場から戻った華雄は身支度を整えないまま首都の洛陽らくやうにある城へと入り、出来るだけ早足である部屋へと向かった。

本来ならば自分ではない呂布か胡軫のどちらかが行くべきなのだが、生憎と2人揃って機嫌が恐ろしいほど悪い。

その状態に自分が報告しに行つて下さいなんて言おうものなら自分の首が刎ねるのは明白。

それを解かっていたからこそ、自分が行くのだ。

呂布ならびに胡軫は機嫌が悪いまま自分達の部屋へと戻つて行った。

戦いで疲労した兵たちなどは各々の時間を潰し始める。

「くそつ……こんな浅傷で俺が退却など……」

呂布は鎧を脱ぎ抑えていた部分を手で退かした。

その部分からは血が出ている。

しかし、見た目ほど深くはない。

「あの小娘……何者だ」

誰かに答えを訊く訳でもなく呂布は独白した。

あの弓の腕前……

騎馬に乗りながら弓を射るのは自分の産まれた場所では極当たり前の事だった。

馬を走らせながら矢も射れば立つたまま矢も射る。

しかし、使う弓は極端なほど短くて小さい。

それは騎馬で移動する民族だったから下手に大きな物では邪魔になるという合理的な理由からだ。

ただし馬の骨や皮で作った弓だから威力は申し分ない。

だが、あの弓は自分達が使っている弓より遥かに大きかった。

しかも狙いも素早く射る速さも半端ではない。

おまけに自分の方天画戟を素手で……片手一本で止めるなど女の身では到底できる筈が無い。

それなのにあの娘はいとも容易くやってのけ、あまつさえ自分を赤兎馬から落馬させ平手打ちまでお見舞してきた。

「……胸糞悪い」

呂布はギリツと唇を噛んだ。

それを見て手当てをする者は僅かに怯えたが誰も助けてはくれない。

誰もが呂布の怒りに触れたくないのだ。

『あの女は何者だ……………」』

銀と紫の髪に月色の瞳などこの世の者とは思えない容姿だ。

その上で自分の武器を素手で止めるなど……………」

「あの娘が、天の姫……………なのか？」

もし、そうなら……………」

「……………興味があるな」

自分に対して行った事は許せるものではない。

だが、同時に自分を打ち負かしたという事実は認めざる得ない。

彼は傲慢で他者を見下すくせもあるが、個人の武に関して言うなら文句は無い。

あの娘を個人の武として興味がある。

「……………貴様が何者か興味がある」

呂布は誰に言う訳でもなく一人傷の手当てを受けながらほくそ笑んだ。

その一方で華雄の方はと言うと……………」

「・・・孫堅も討ち取れず天の姫も手に入れる事が出来なかった、か」

臣下の礼を取ったまま自分より遙かに高い席に座る壮年の男の言葉に頷いた。

「はつ。孫堅に致しまして・・・後一步でした」

言い訳だと自分で思いながらも華雄は口に出した。

「そこを邪魔されたというのだな？」

「はい。鋭い矢で大きな弓を持っておりました」

「大きな弓？」

「はい。私たちが使用している弓より遙かに巨大な弓です」

ここで初めて彼は伏せていた顔を上げて報告している人物を見上げた。

ガツシリとした体格は明らかに戦場を駆け巡った証だ。

顎鬚と口髭もまた立派な物だが、声はドスが効いておりまるで無頼の輩と思わせるような声色だった。

また瞳もまた虎のように獰猛な色が惜し気もなく出ているから更にその思いは強まる事だろう・・・

「はつ。それ所か・・・呂布殿が手傷を負いました」

「呂布が？」

男は一瞬だけ驚いた声を上げ周囲の者も同様の声を上げた。

しかし、直ぐに収まる。

「で、呂布はどうした」

「はっ。幸い傷は浅かったのですが、気が荒れて誰も寄せ付けません」

「そうか・・・まあ、仕方ない事であろうな」

「どづいつ事、ですか？」

「そのままの意味よ。あの男は自分の腕に絶対とも言える自信を持っている」

その自信の通り戦場を風のように疾走し敵将を討ち取る。

「だが、その自信の大きさが傲慢を生むのだ」

華雄はその通りだと思わずにはいらなかった。

しかし、と思う。

「その自信が目の前で・・・しかも20を越えたか越えない位の娘に負けたとあっては・・・」

華雄が最後まで言う前に男は頷いた。

「自信も傲慢もそれ所か今まで積み上げてきた全てを破壊される」

だからこの目の前の男が言った事に華雄は納得した。

「それでこれからどうなさいますか？」

「ここは護りに向いていない。だが、このままでは呂布の気も収まるまい」

「仰る通りです。帰る途中で何度も言うておりました……………」

必ずあいつの首を刎ねると……………」

「そこよ。正直言うてわしであろうと今の奴に言えば殺されるだろう」

「何をそのような……………」

言葉ではこう言うておきながらも華雄自身そうなる恐れがあるとは思っていた。

呂布は目の前の男……………養父に対しても遠慮が無い。

彼自身強い。

だが、その強さには傲慢が含まれていると同時に容易く人を裏切るという事も含まれている。

目の前の男に懐柔されて自分を可愛がってくれた前の主を殺したのが良い例だ。

そんな呂布が怒り狂って復讐を決意している所へ撤退だと言おうものなら命の保証は養父だろうと無い。

「ですが、ここに籠るより長安へ逃げて態勢を立ち直すのが良策だと思いますか？」

「その通りだ。しかし、連合軍の方も何やら色々と大変な眼に遭っているようだぞ」

「というところ？」

華雄は意味あり気な言葉に首を傾げたが、自分で考えてみる事にした。

『連合軍は孫堅軍、曹操軍、そして義勇軍しかまともに戦っていない。だが、天の姫が現れてからはどうだ？』

誰もが必死に戦っている。

それはどういう訳か？

安直ながらも答えは直ぐに見つかった。

「天の姫自身の存在が向こうにとっては活力剤とも言えますが同時に毒でもあるのですね？」

「その通りだ」

華雄の言葉に男は満足気に頷いた。

「華雄。天の姫は美しかったか？」

「はい。とても・・・流石は天の姫と納得できます」

「そうか。では訊くが、その様な女子が貴様の前に居たらどうする？」

「やはり男として凛々しく逞しく見せているでしょう・・・」

華雄自身もし彼女がこちらに居れば恐怖など忘れて戦うだろう。

ここを連合軍側に視点を変えるなら、向こうも天の姫を前に自分の格好良い所を見せる筈。

そうすれば近付けるし彼女を娶れるかもしれない・・・という下種な考え・・・ある意味では男として当然とも言える気持ちを抱くだろう。

「所が天の姫が降り立ったのは何故か義勇軍だ」

男の発言に華雄は頷く。

「義勇軍は孫堅軍、曹操軍と比べても勇敢です。ハッキリ言えば他の将達より勇敢とも言えます」

「だろうな。だが、世間体に言えばお荷物としか言えない存在だ」

「はい。そんな所へ天の姫が降りた・・・となれば・・・」

「嫌でも義勇軍への眼差しは厳しくなる。しかし、移動したのだから？」

「はい。袁術の陣に居ました。しかし何故か義勇軍も袁術の軍と共に居りました」

「となれば袁術の下へ身を寄せていると考えるべきだな」

「そうなりますね。理由は分かりませんが、どうお考えですか？」

「袁術は袁家の嫡男だ。だが、器は袁紹に比べれば劣る。しかし孫堅が部下に居る以上は侮れん」

袁術自身より孫堅の方が侮れないのが本当ではあるような響きだが実際そうなのだ。

「さて、話を戻すと義勇軍の下へ降りた天の姫だが周りから見ればなぜ義勇軍の下へ？と思うだろう」

「確かに。私が立場なら怒りを抑えるのに必死ですね」

華雄自身もし連合軍の一将としてその立場に立つたらそう思うだろうと想像した。

そしてこうも思った。

「……在らぬ噂を流したり中には協力を惜しむ者も出るでしょう」
連合軍は一枚岩でない。

誰もがこの乱世で名を上げたいと考えている。

今回の戦も建て前こそ立派だ。

しかし纏まりが無い上に自分勝手だ。

名前こそ連合軍だが実際は烏合の衆に“等しかった”……………

だが天の姫が現れた事から事態は急変した。

皆が勇敢に戦う様になり始めた。

それは天の姫が居るから。

天の姫に立派な……勇敢な自分の姿を見てもらう。

そうする事で自分という存在に気付いてほしいと願うと同時に自分を売り込む。

だが、それ以前に何故？と思うだろう。

なぜ義勇軍の下へ降りたのだ？……………

降りた以上は仕方が無いと思うしかないが……やはり嫉妬する。

自分達より格下の分際である義勇軍に取られたのだから。

心穏やかではない。

つまり彼女の存在は連合軍にとって活力剤であると同時に毒でもあるのだ。

しかも強力で時間を掛けて浸透する毒だ。

この状況――天の姫が義勇軍の下に居続ければ否応なく連合軍には亀裂が入るだろう。

それも取り返しのつかないほど大きな亀裂が入る。

「天の姫を利用し内部を崩壊させるのですね」

確信を得たように華雄が言えば男は首を横に振った。

「いや違う」

「違う?」

華雄はどういう事か分からない顔で男を見た。

「我々は何もしない。何もなくても向こうから勝手に自滅する」

「自滅?しかし、向こうは我々を撃退して勢いに乗っていると思いますが」

「そこよ。勢いに乗る。これは良い事だが、時と場合によっては悪い方角へと行く」

悪い方向へ？

華雄はその言葉が何を意味しているのか考えてみた。

勢いに乗ってこのままここを攻める。

自分ならそうする。

だが、誰が先陣を切るのか、どんな配置をするのか・・・など考えれば色々と問題が発生するのは明白だ。

何より義勇軍を何処まで連れて行くかも考えようによっては出て来るだろう。

連合軍から言わせれば義勇軍は力も何もないくせに天の姫の寵愛を受けていると映る筈だ。

そしてこのまま勢いに任せて進軍し手柄を立てたらどうなる？

腐敗していようと漢王朝は未だに健在だ。

天の姫の寵愛を受け更に手柄まで立てた義勇軍・・・どう考えても称賛するし新しい手駒として使えると思う筈だ。

ならば、ここいらで彼等を追い出すかもしれない。

しかし、そうなれば天の姫もまたどうなるか分からない。

なるほど・・・

「向こうから自滅する可能性が極めて高いですね」

今やっと目の前に座る男の言っている事が理解できた。

何もこちらが手を打たずとも向こうから勝手に自滅してくれる。

ならばここは腰を据えて待つべきだ。

下手に焦ってここを出て行けば、余計に向こうの勢いを良くするだけなのだから。

「だが、何もしないという訳にもいかな」

「どうなさいますか？」

「そうだな・・・暫し嫌がらせ程度に陣を襲い続け奴等の逆鱗に触れるような真似をしろ」

特に義勇軍を称賛するような事をするのが効果的だろうと彼は語ってみせた。

「義勇軍を称賛すれば諸々の将達は余計に怒り義勇軍を嫉妬する」

敵からも称賛されるといふ行為はある意味、味方にとっては悔しいものだ。

それが義勇軍ともなれば尚更と言える。

これを聞いた華雄はこう思わずにはいられなかった。

『我が主ながら何と悪知恵が回る方なのか……』

この目の前で腕を組む男は元々辺境の地に居た武将だ。

更に言えば異民族とも交流を深めもしたし戦もしてその度に戦果を上げて行き、やがては都でも顔が効くようになった。

辺境の役人からやがては都でも顔が効くようになった者が考える事は大抵だが一つの答えに導かれるのは道理と言える。

天下を物にする。

これは何も都に居る者だけが考えているだけではない。

漢王朝は既に名前だけの存在となり威信が辛うじて残っているという感じだが、それもやがては無くすだろう。

何せ王朝は腐敗に腐敗を重ね最早……立ち直る事など万に一つも有り得ないのだから。

この男自身も漢王朝の臣下をしている訳だが実際の所は幼い帝の背に隠れて政を行っているに過ぎない。

だからと言って全て悪いという訳ではない。

先の帝……靈帝には2人の男子が居た。

少帝と献帝という二人の皇子だが、少帝は屠殺家という卑しい出自を持つ何皇后かこうじゅうの産み落とした子供である。

対して献帝は霊帝と先妻である王美人との間に産まれた子だ。

血で全てが決まるとは言わないが世間体の事や将来性などを考える
と献帝を擁立した理由も頷ける。

献帝なら先帝の血をより濃く受け継いでいる筈だし、何皇后のよう
な後ろ盾もまた居ないからこちらが付け入る隙もある。

この男が漢王朝を復興させるなどという無理に等しい夢を持って
いるとは考えられない。

もし、そんな馬鹿げた夢を持っているとすれば宮廷で狼藉の限りを
尽くしたりなどしないのだから。

と言っても学者などを呼んではその話に耳を傾けるなどただの乱暴
者とは言いい切れない節がある。

つまる所・・・未だにこの男の本心という者が華雄自身見えないの
だ。

「どうした？華雄」

「いえ。それでは態勢が整い次第・・・始めるとしましょう」

「うむ。それから天の姫の事だが何か分かり次第報告しろ」

興味があると彼は養子と同じ言葉を吐いたが二人はそれを知る由も
無い。

「御意に」

華雄はそれだけ言うと主である男……董卓に一礼し部屋を辞した。残された董卓は一人だけとなった。

「……孫文台、天の姫、義勇軍、か」

董卓は3つを口にし溜め息を吐いた。

孫文台……江東の虎という異名を持つ通り非常に勇猛果敢な男だ。義勇軍は黄巾の乱で出会ったが、一目で出来る人物だと彼自身は思っていた。

『劉備玄德……噂では王朝の血を引く男と聞いているが良い眼をしている男だ』

この乱世であればどこまで腐り切った漢王朝を復興させようと思心から思っている男など劉備くらいしか居ないだろう。

自分自身は別に漢王朝を復興させようなどという誇大妄想とも取れる考えは微塵も無い。

寧ろ頭からそれを否定する立場に居る。

腐った物は全て根絶やしにしなければ他に類が及ぶ。

これを董卓は知っていた。

仮に劉備が漢王朝を復興させたとしても結果は恐らく変わらないだろう。

最初こそ機能しつつも直ぐに前と同じくなり乱世に逆戻りだ。

宦官もまたこんな状況へと導いた事に対して係わっているが、根元を言えば……………

「……全ては権力と時代という計り知れない“化物”に操られているだけかもしれんな」

権力も時代も自分達では到底操り切れない代物だ。

いや、それ以前に時代がもう漢王朝を必要とせず次世代の王朝を必要としているのかもしれない。

自分自身がその次世代の王朝を築く者になれるかどうかは彼自身・
・分らない。

ただ一つだけ言える事は今の状況を打破し少しでも暴れるだけという事だ。

献帝を擁立し邪魔な者達も排除したが、それだけでは直ぐに滅んでしまう。

だからこそ彼は今を時めく名士などと呼ばれ政を任せている。

自分の役割はあくまで戦う事であり政を行う役割は出来ないからこそ彼等に任せているのだが、やはり武官上りの人間と蔑まされている点は否めない。

ではどうするべきか？

「天の姫を献帝と同じく擁立するしかないな……」

天の姫は名の通り天から来た姫だ。

その姫をこちらに入れてしまえば皆、従う筈だ。

しかし、天の姫は果たして自分に従うだろうか？と思う。

「……わしの手は血まみれだからな」

自分の両手を見て董卓は自嘲した。

産まれてこの方……血を見ない日は終ぞ無かった。

来る日も来る日も喧嘩や戦で血を流してきた身だ。

そんな自分が天の姫に触れて従わせる事が出来るのか？と弱気にも思ってしまう。

「わしも歳か？」

若い奴には負ける気がまだしないと自負しているが時節こう思ってしまう時点でもう歳かもしれないと感じるのは否定できない。

「……まだだ」

彼は自嘲した顔を一変させた。

「まだ死ぬには早い」

人間は必ず死ぬ。

それが何時、何処で、どんな風にかの違いだ。

死というのは誰にも平等に訪れるのだが、彼自身はまだ死ぬには早
いと言った。

「この戦にも完全に負けた訳じゃない。何よりあ奴等の力量を計り
切っていない」

それが終わるまでは死ねない。

自分の悪逆非道は恐らく後世に残り批判され墓も暴かれてしまっ
か
もしれない。

それは覚悟の上だ。

そんな自分をあの連合軍が・・・劉備玄德が・・・孫文台がどう打
ち倒すのか、それを見極めていない。

それを見極めてからでないと死ねない。

そう董卓は思いながらも天の姫が如何なる人物か興味は更に強まっ
た。

第十一幕：姫君を護る為に

董卓軍を陽人の闘いで見事に打ち破った連合軍は勢いに乗っていた。

何せ華雄、胡軫の二人でさえ厄介だったのだ。

それに加えて呂布まで来たのだから堪らない。

しかし撃退した。

たった一人の娘が彼等を撃退したのだ。

もつと正確に言うなら呂布を一人で撃退し残り二人はそれに押される形で逃げ去ったのだが。

だから厳密に言えば連合軍が撃退した訳ではない。

所が何人かは愚かにもこれを忘れ勢いに飲まれている。

このまま一気に攻め込もうという意見さえ出る程だ。

だが油断は禁物と釘を刺す者も居た。

勢いに任せて行くのは良い半面で後先考えずに行くのは危険すぎる。

それを面白く思う筈もなく軍内では不穏な空気が流れ始めて行く。

釘を刺したのは江東の虎と勇ましい異名を持つ孫文台と上司の袁術だ。

この二人は総大将であるが連合軍内で最近はずいぶん浮いていた。

義勇軍を懐に入れたのも理由とされている。

義勇軍には天の姫が居る。

しかも宴を共にしたばかりか寵愛まで受けているというではないか。

他の将達から見れば一人占めしていると見える。

否……一人占めしているではないか!!

明らかに妬みという類いだが、戦場に女が居ない以上は嫌でもそういう類いの感情が否応なく表だって出るものだ。

現に今がそうだ………

「夜姫様を宴に出せたと?」

袁術は自身の天幕で険しい顔を浮かべたまま目の前に立つ人物を睨み据えた。

「出せとは言っていない。出るように頼んでくれと言っているのだ」

目の前に立つ人物は袁術と似た容姿をしており険しい顔など非常に似ている。

彼の名は袁紹。

袁術とは腹違いの兄弟だが性格が似ているのか果ては腹違いなのかは不明だが非常に仲は悪い。

この会話からも互いに棘が剥き出しになっているのが良い証拠だ。

「行き成り来て言われても困る。理由を言え」

袁術としてはこの腹違いの兄弟が非常に憎らしかった。

自身は名家である袁家の嫡男なのだが、袁紹の方が当主としての器があり更に人望に関しても上であるため総大将同士ではあるが袁紹の方が立場的には上だ。

そこが気に入らなかった。

今はそのような事は小さな事だと割り切れるようになったが、こうもあからさまに命令に近い言葉で言われると昔のように腹が立つ。

「理由か。貴様のような男でも解かる筈だ」

袁紹はさも馬鹿にしたような笑みを浮かべ袁術は眉間に皺を寄せた。

周囲の者は一触即発とも言える雰囲気にはハラハラしている。

この二人が顔を合わせて喧嘩が起きなかった日など今まで無かったからハラハラするのも無理はない。

「夜姫様を宴に出して自分を売り込む気か？」

「売り込むとは失礼な言い方だな」

「ふんつ。言い方を変えようと中身は変わらないだろ」

「黙れ。貴様は夜姫様を自分の陣へと入れて自慢気だろうが、私を含めその他の者達は憤っているのだ」

袁術と劉備は天の姫を一人占めしている。

そう連合軍内では言われているらしい。

「劉備への悪評は特に酷い。義勇軍でありながら天の姫から寵愛されている、とな」

他にも数え切れないほど妬みの声が出ていると袁紹は言った。

「・・・それを貴様はどう思っているのだ？」

「正直に言えば妬ましい。だが、あの男には徳があるし実力もある。それを考えれば仕方ないと割り切れる所もあると付け足した。

「貴様は劉備を高く評価しているな」

前の自分は劉備を軽んじていたがこの腹違いの兄弟は最初から劉備に眼を掛けていた。

恐らく同じ苦勞人である事も一理ある筈だが、他にもあると袁術は思っているがそれは分からない。

夜姫に助けられてから袁術も劉備に対して評価は変えているが、最

初から劉備を評価している慧眼においてはやはりこちらの方が上だと思わざる得ない。

「で、劉備は？」

最早この男と話すのを直ぐにでも終わらせたいと考えているのか袁紹は自分が評価している劉備玄德の行方を訊ねた。

「夜姫様を連れて散歩中だ」

董卓軍を撃退してから夜姫は眠りに着いたが直ぐに目覚め今の所は問題なく日常を送っている。

そんな夜姫の日課とも言える行動は散歩だ。

何処に行くかはその日によって違うが、散歩をして少しでも外の空気を味わいたいらしい。

だが、女一人で出歩いては危険という事もあり必ず付き添い役が居る。

何か遭った時の為に典医は常に傍に居るが、護衛役として今回は劉備と関羽が共に居るらしい。

「そうか。貴様に言った所で埒が明かない以上・・・夜姫様自身に頼むぞ」

「それで夜姫様が断れば諦めるのか？」

「あの方の意思を無視して参加させるなど天に弓を引くも同然だ」

諦めると確かな言葉は言っていないが、言葉から察するに諦めるの
だろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

袁術は無言で腹違いの兄弟を見た。

この男は自分より遙かに当主として優れている。

恐らく孫堅を抜かせば曹操と同格の男で天下を争う事になる筈だ。

そんな男もまた夜姫の事に関しては器が小さいとつい思ってしまった
のは自分の陣に夜姫が居るからだろう。

『・・・・・・・・夜姫様は我らにとっては毒でもあるな』

元々連合軍は一枚岩ではなく亀裂が入れば直ぐにでも空中分解する
ような組織だ。

それを夜姫が現れた事で何とか保ったが、亀裂が入るのも時間の問
題かもしれない。

もし、連合軍が分裂したとしても夜姫を護る事に変わりはないのだ
が、目の前の敵を倒すには周りとの協調も必要と痛感される。

『・・・・・・・・この男の言い分を聞くのは癪だが仕方ないな』

それに夜姫の意思を第一に考えるのだから仮に夜姫が断ればそこで
終わりだという甘い考えもまた浮かんだ。

袁術本人としては夜姫を他の将達と会わせたくない。

それは彼女を利用しようとする下種な考えを持っているからであり指摘された通り一人占めしたいからだ。

「……失礼します」

天幕が開き主笥の閻象が入って来た。

「どうした？」

袁術は閻象を見て訊ねる。

「はっ。夜姫様がお帰りになられました」

「そうか」

袁術は座っていた椅子から立ち上がった。

「では、これから訊きに行くか？」

どうせ答えは分かっている事だが。

「ああ。そうする」

袁紹は険しい顔を一变させて穏やかな顔を浮かべた。

『……私もこの男と同じだったのだな』

今の袁紹は以前の自分と瓜二つだ。

以前の自分も夜姫に気に入られようとしていた。

今も変わらないが、純粋な気持ちか不純な気持ちかの違いだ。

閻象も混ぜて三人で天幕を出て散歩から戻った夜姫を迎えた。

だが、ふと足元に視線を送る。

「その犬・・・狼は？」

夜姫の足元には子供より大きな黒毛の狼が寄り添っていた。

狼は袁術達を見て微かに眼を細めて警戒するように夜姫の前に出た。

「この子、とつぜん現れたんです」

現れると直ぐに自分の所へ来て擦り寄って来たという。

「離れようとすると追い掛けて裾を引つ張るんです」

そしてこのまま付いて来たと説明された三人は改めて狼を見る。

狼もまた三人を見上げるが、明らかに警戒心剥き出しで夜姫を護るようになら立っているのが興味深い。

「・・・・・・・・」

ずっと三人を見続けた狼だがふいに視線を逸らすと夜姫の所へと戻

り顔を擦り寄せる。

それに対して夜姫は顔を撫で狼は気持ち良さそうに尻尾を振った。

何とも愛らしい光景だが、狼をここまで懐かせるとは……………

「やはり夜姫様は凄いですね」

袁術は本心からそれを述べた後で……………

「お帰りなさいませ。夜姫様」

迎えの言葉を投げた。

「ただいま帰りました。袁術様」

夜姫は迎えの言葉に花が咲いたように笑った。

こんな言葉と笑顔を見れるのだから一人占めしていると思われるも仕方ない。

現に袁紹などは内心で嫉妬していたのだから。

「誰か、一緒に居るんですか？」

夜姫は狼を撫でる手を止めて微かに気配で袁術以外に誰か居ると感じたのか訊ねた。

「はい。袁紹と閻象が一緒に」

「袁紹様が？」

闇象は分かるがなぜ袁紹が？という風な表情を夜姫は浮かべたがそこから袁紹が話し掛けた。

「こんにちは。夜姫様。相変わらず美しく何よりで」

齒に衣を着せた世辞ではなく本心から美しいと袁紹は言いながら要件を口にした。

「宴へ……………」

夜姫は戸惑った表情を浮かべている。

「こんな非常時と思うでしょうが呂布と戦ったため些か兵たちの息抜きも必要かと思ひまして……………」

口ではこんな事を言っているが、本心では夜姫と近付きたいだけだろうと袁術は決め付けた。

狼もまた袁紹の言葉が表向きと感づいたのか僅かに牙を見せている。

『動物は敏感、か』

狼などを始め野生動物は極めて本能的だ。

しかし、その本能が自分達のように仮面を被らずに生きていられるから何かと勘が鋭い。

これを見る限り何かあると狼は感じたのだろう。

ふと狼が自分を見て何か言えと眼で言ってきたように見えた。

だが、それは自分も思う所があつたので口にする。

「夜姫様。口を挟む形になりますが、嫌ならば嫌とハッキリ申した方が宜しいです。この男に遠慮することなどありません」

「貴様……」

袁術の言葉に袁紹は怒りを剥き出しにしたが、そこを閻象が止めた。

「ここは我が殿の陣です。その陣で下手な真似はしないで下さい」

とても平静な声だが逆にそれが余計な事をするなど暗に言っている。

閻象に視線で礼を述べてから袁術は腹違いの兄弟にこう言った。

「私は夜姫様の事を考えて言っただけだ。この方は我々の荷物と思っている。こんな誘いが出れば無理を通して出る性格だ」

だから自分は夜姫の事を想って言ったただだと強調した。

「劉備よ。夜姫様の様子はどうなのだ？」

袁紹はこの胸糞悪い腹違いの兄弟から劉備へ視線を移した。

「はっ。特に問題ありませんが、典医殿にここは訊くのが一番かと……」

「典医。どうなのだ？」

劉備に言われ袁紹は典医に訊ねた。

「まあ、特に問題はありません。ですが“前の事”も考えるところかと思っております」

前の事を言われ夜姫は顔を伏せた。

「・・・・・・・・・・」

袁紹はそれを見て前の事を気にしているのだなと思う。

前の事とは彼を含め総大将全員と会った時だ。

あの時、夜姫はどういう訳か何かに怯えて取り乱した。

これは恥と言えば恥だ。

今回の宴には総大将全員を呼び出す。

本来なら袁術と劉備は除外したい所だが、それでは夜姫が怯えると判断して呼び出す予定なのだ・・・・・・・・・・

『それを言われてはどうしようも出来ないな』

何に怯えていたのかは不明だが、もしまたあんな事が起きれば夜姫自身の立つ瀬が無い。

それに宴に招待した自分達も恥を掻く。

それは好ましくない。

しかし、このまま諦めるのは嫌だ。

『どうするべき、か……』

袁紹は夜姫が無言で居るため自分も答えを見つげようと考えた。

「あの、宴は何時やるのですか？」

唐突に夜姫は宴の日を訊ねた。

「え？」

袁紹は夜姫の言葉に一瞬だが戸惑いを覚えてしまう。

「ですから、宴は何時やるのですか？」

二度同じ事を訊ねる夜姫に袁紹は慌てて答えた。

「え、あ……明日の予定ですが」

「そう、ですか……出ても良いです」

「夜姫様ッ」

袁術は思わず夜姫に駆け寄って少しきつい声で言った。

狼の方は無言で夜姫に寄り添っている。

「大丈夫なのですか？また前のような……………」

夜姫の肩に手が届きそうな距離で袁術は訊ねる。

「大丈夫ですよ。大丈夫です」

「……………」

袁術は二度も大丈夫と口にした夜姫を心配そうな眼差しで見つめて劉備達も同じように夜姫を見た。

狼もまた夜姫を下から見上げる……………

そして袁紹は宴に出てくれるのは有り難いと思つ反面で無理やり出させた感が否めないのか複雑な気分だった。

「あの、袁紹様。劉備様と袁術様も出るのですよね？」

「え、ええ。勿論です」

「なら、大丈夫です」

また大丈夫と夜姫は言ったが、何処か声が震えている。

「……………では、明日迎えに参ります」

袁紹は痛々しい視線を感じたのか又は自分の行動に嫌気が差したのか早々に立ち去った。

“・・・相変わらず『愚かな』程に優しいな。姫さん”

誰かの声がした。

しかし、誰にもその声は聞こえない。

“まったく。どうしてそこまで愚かな程に優しいんだ？理解できないぜ”

言葉からは本当に愚かだと思っている節があった。

“何を言うか。そこが姫君の良い所でもあるのではないか”

先ほどの声に対して反論する声がした。

だが、これもまた誰にも聞こえない。

“何でてめえが居るんだ？”

“知れた事を。姫君を護る為に来たのだ”

“どうやって・・・なるほど。お前さんにはこちらに幾らでも眷族が居たんだな”

“眷族とは言い方が違う。我の家族だ”

“そうかいそうかい。それで、お前さんとしてはどう思うっ？”

“あの男もまた英雄の一人として数えられるだろう。しかし、自分で決めた割には優柔不断だな”

“ 史書にも優柔不断と書かれていたからそうだろうぜ”

“ そうか。それで貴様としてはどう出る？”

“ そうだな・・・まだそちらには行けないが『黴菌』は近付けないようにしておく”

“ 黴菌とは豪い例えだな。貴様も耄碌したか？”

“ 馬鹿言つな。まだ爺になっていない。ただ、例を上げるなら黴菌だろ？”

“ 確かに。我も出来るだけ手伝うが、生憎とまだ力が出せない。当分はこのままだ”

だから、説明は任せると言った切りその声は途切れた。

“ ちっ・・・面倒くさがり屋が”

もう一人の声は舌打ちをしながらも誰かに話し掛けた。

“ おい、劉備、それから坊ちゃんこと袁術。聞こえるか？”

『 その声は道化か』

『 誰だ？貴様は』

劉備と袁術は同時に声を響めながらも放った。

“ 姫さんは腹を括ったんだ。お前等も腹括れ”

命令口調で喋る道化に袁術は激しい憤りを覚えた。

『 誰だ？ 貴様は。行き成り話し掛けて来て何者だ？ 』

“ 俺は道化。劉備とは前に自己紹介をしている”

袁術は直ぐに劉備に視線を寄こし劉備は視線で答えた。

『 本当です。この方とは声だけです。知り合いと言えます 』

『 誰だ？ こいつは 』

“ だから道化だと言っているだろ。この坊ちゃん親父が”

『 貴様……… 』

“ 怒るな。野郎を怒らせても嬉しくない”

何処までも暢気とも言える言葉に袁術は眉間に皺が寄るのを覚えたが、何とかそれを見られないようにした。

『 ……私と劉備に何をさせたい？ 』

“ やつと俺の話聞く気になったか。要件は簡単だ。姫さんを護れ”

『 元より夜姫様を護る所存だ。今さら何を言う 』

鼻で嗤った袁術に対して道化は気にした様子も無く言葉を放った。

“んな事は当たり前だ。姫さんの胸を鷲掴みにしたんだ。責任は取れ”

さもないと爺に八つ裂きにされるぞ、と言われた袁術はその爺とは何者だ？と思つたが敢えて訊かない事にした。

“明日、宴に姫さんとお前等が出る。その時は必ず左右を固める。誰の手も触れさせるな”

『しかし、酌をされる時はどうすれば良いのだ？』

自分達が開いた宴の時は皆が挙つて夜姫に酌をした。

更に言えば彼女もお返しとばかりに酌をしてくれた。

これは恐らく向こうにも知られているから同じことをすると思われ
る。

“その時はお前等で酌をして阻止しろ”

『それでは私と劉備は悪役とされるな』

“当たり前だ。お前等二人には悪役になつてもらつぞ”

姫さんを護る為に、と道化は言った。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

袁術はこれに無言になつた。

“何だ。怖気づいたのか？”

小馬鹿にしたように道化は訊いてきたが、袁術は鼻で嗤った。

“馬鹿を言つな。この身は一度死んだ身だ。夜姫様に助けられて今を生きている”

その夜姫を護れるのなら喜んで悪役になってやろうと袁術は断言した。

“ほおう・・・勇ましい言葉だ。劉備はどうだ？”

『この身は漢王朝を復興させる為にあるが、夜姫様を護る身でもある。それに私はそなたと契約を結んだ身だ。今さら悪役になった所で問題ない。それ所か箔が付くというものだ』

“いやはや流石は劉備玄德だ。姫さんが無意識にだが・・・あなたの下へ降りたのは慧眼の賜物だな”

乾いたような温いような笑い声を上げながら道化は最後とばかりに締め言葉を放った。

“しっかりと姫さんを護れよ。そうすれば姫さんから褒美が貰えるかもしれないぜ？”

そう言った切り声は途絶えた。

二人は顔を見合わせて微かに頷き合った。

それは夜姫を護る為に悪役になろうという契約だった……

第十二幕：姫君の過去

天の姫こと夜姫が勝利の宴に出るといふ噂は忽ち各陣内に広まった。

しかし、同時に悪い噂もまた広まってしまった……

『劉備と袁術は二人揃って天の姫を一人占めしている』

『二人は毎夜の如く宴を開き天の姫の寵愛を受けている』

などと当て付けに等しい誹謗中傷の類いであり二人から言わせれば根も葉もない取るに足らない噂と割り切れる。

ただし配下の者はそうではない。

特に義勇軍から言わせればこれは余りに酷過ぎる噂だ。

自分達は確かに天の姫である織星夜姫と連合軍の中では一番付き合いが長いと言える。

だが寵愛など受けていない。

ただ挨拶をされたり短い会話をするだけだ。

それをこんな風に言われるのだから怒るのも無理は無い。

無論そこには夜姫自身をこのように利用する怒りも含まれている。

寧ろそちらの方が強いだろう。

「義兄者。もう我慢できねえ！あいつ等を叩き潰そうぜ！！」

義勇軍の長であり王朝の血を引くと言われる劉備玄德に唾を吐く勢いで怒りを打ち明けているのは彼の義弟である張飛。

字を翼徳で酒に強く力もまた強い。

豪傑と言つ名が相応しい男だが、些か思慮に欠けており怒りに任せて行動する部分がある。

今がそれだ。

日に日に酷くなって行く噂に彼はもう我慢の限界だった。

「翼徳。何度も言うが我慢しろ」

劉備は与えられた陣幕の中で筆を走らせながら義弟を戒めた。

「しかし義兄者っ」

「我慢しろ。私たちがここで怒りに任せて行動したら夜姫様はどうなる？」

「そ、それは………」

劉備の言葉に張飛は言葉を濁らせた。

「我々が怒りに任せて行動すれば即座に追い出される。そして夜姫様は……」
「一人ぼっちになる」

劉備は筆を止めて義弟を見た。

「夜姫様は私達に見せていないが本当は心細いのだ。眼も見えない上に誰も知り合いが居ない。挙句の果てに今は乱世だ」

こんな状況と環境なら泣きたくなる。

それなのにああも毅然としているのは迷惑にならない為だ。

「それでもあの方は我々の荷物になっていないかと何時も不安を抱いている。それを我々自身が壊したらどうなる？」

「それは……………」

「今は袁術殿が我々を保護しているが、我々が怒りに任せた行動を取ったらもう庇い切れない。そうなれば夜姫様はおるか袁術殿にまで害が及ぶ」

恩を仇で返す気か？と更に問う劉備に張飛は肩を落とした。

「…………分かったよ。だが、義兄者はこのままで良いのか？」

「むろん良くない。しかし、今の我々には何の力も無い」

今は耐えるのだ。

耐えて耐えて耐え忍び好機を待つのだ。

「翼徳よ。竜はなぜ沼の淵に潜んでいるか知っているか？」

「何で沼の淵か？」

行き成りの質問に張飛は困惑し義兄が言いたい事を考えた。

だが・・・彼には答えが見つからなかった。

「こんな言葉がある」

劉備は静かに口ずさんだ。

“ 竜が沼の淵に潜むのは何のため時期を待ち天に昇らんが為である ”

「どついう意味なんだ？」

まったく理解できないと訊ねる義弟に劉備は今の状況を言いながら説明した。

「耐え忍べば何れは好機が来るという意味だ」

今の状況では何をしても駄目だ。

だからと言って何もしない訳ではない。

「今は耐え夜姫様を護り切る。それが使命だ。そして時が来れば我々も表に出れる」

それまでは耐え忍ぶのだ。

「まるで儒教の学者みたいだぜ」

「ふっ……そうか。しかし、ふと別の職業に就いていれば？と考える時はある」

武将ではなく別の人生を歩んでいたら自分はとうだっただろう……

「……義兄者」

「すまん。弱音を吐いてしまったな」

「いや……俺の方こそすまねえ。それはそうと夜姫様の眼はどうなるんだろうな？」

「分からん。見える時もあるが……あの時の夜姫様は別人だ」

確かにと張飛は同意した。

陽人の戦いで見たがあその時の夜姫は劉備の言う通り別人だと思う。

誰か……別の人物と違ってしまっただけで雰囲気から全てが違っていた。

「義兄者。夜姫様は本当に誰なんだろうな？」

「分からん。夜姫様自身もそれが分からないのだ」

他人である自分が分かる訳ないと言い劉備は筆を持ち直して竹の紙

……竹紙ちくしに文字を書き始める。

張飛はそれを見ながら夜姫が何者なのかその本人も分からないのであれば自分達が分からないと諦めの嘆息をした。

その一方で夜姫は典医、関雲長、袁術の三人に黒い狼を引き連れて散歩をしていた。

狼は夜姫から離れようとせずまるで護るかのように寄り添っている。

「その狼、夜姫様に懐いておりますね」

関羽は狼を見下して夜姫に言う。

「昔から動物には好かれるんです」

犬と猫は当たり前で果ては蛇や蜥蜴までと些か気持ち悪い生き物にまで好かれると言うからどうなのだろうか？

「そうですね。しかし一体どこから来たのでしょうか？」

この地域に狼は居る筈だが、狼と言う動物は群れを成して行動するのが普通だ。

所がこの狼は一人だ。

見る限りまだ若いから群れから離れ一人で新たな群れを作ろうとしていたのだろうか？

「貴方は何処から来たのかしらね？」

夜姫は狼に訊ねるが答えは返って来ないのが当たり前だ。

しかし、狼は夜姫に視線を向けて顔を左手に擦り寄せるだけだった。

「所で夜姫様。今夜の宴ですが・・・本当に良いのですか？」

袁術はここで今日の夜に開かれる宴を口にした。

彼から言わせればあれは袁紹の策略だった。

夜姫の優しさに付け込んだ性質の悪い策略と些か被害妄想的な捉え方だが強ち間違いいはないから誰も口を挟まない。

「大丈夫ですよ。それに・・・私はその程度でしか皆さんの役に立てませんから」

「またそのような事を・・・貴方様は私を変えて下さった。そして劉備の力にもなっている。それをどうやって役立たずと思うのですか」

「でも、私は戦えませんし何も見えないので・・・」

「それは・・・」

袁術は夜姫の言葉に何か言おうとしたが、何と云えば良いか分からずに沈黙する。

『こんな時に何を言えば良いんだ？』

事実を言った所で記憶が無い彼女を混乱させるだけだ。

それを考えると何を言えば良いんだ？と思ってしまっ。

「私は、何も出来ない女です。だから私で皆が喜ぶなら構いません」

「……夜姫様」

何と云えば良いか分からない袁術は更に困惑してしまっ。

「……私は何も出来ないです。だからこそ、宴に出て皆が喜ぶならそれで良いんです」

それだけ言っ夜姫は天幕へ狼を連れて典医と共に入っ行き、残された袁術達は何と云えば良いか分からないで無言だっ。

天幕へと戻っ夜姫は典医に促され簡素な寝台に腰を下ろした。

「何か飲物を取っ来ます」

典医が去り夜姫と狼が残された。

「私っ駄目な女ね……」

夜姫は一人になっ事で独白した。

「昔からそう。何時も誰かに迷惑を掛けている……あの男^{ひと}も私のこんな所が嫌で去ったのね……」

狼は夜姫の独白を訊きながら左手を舐めた。

「貴方は私をどう思う？眼も見えないで豪華な服を着て何もしない女だと蔑む？」

左手を狼の頭に置き撫でながら問い掛ける。

左手首には白い包帯が巻かれている……が、それを見た者は居ないし見せない。

「私って何なんだろう……本当に私って誰なんだろう……？」

何処までも暗い表情の上に暗い口調で独白する夜姫を狼は憐みの眼差しで見つめるしか出来なかった。

「姫君……貴方は何も出来ない女ではありません」

誰かの声があったが、夜姫には聞こえなかった。

「あの小僧は貴方を最初から愛していなかったのです。ただ、利用して価値が無くなったから貴方様を捨て……殺そうとしたんです」

ギリツと怒りで歯を食い縛る音がした。

「我が力不足ゆえ貴方様を慰められず齒痒いのです。ですが、どうかここは耐えて下さい。必ずや我らが再び貴方様を都へと連れて行き……」

今度こそ皆で幸せになりましょう。

「貴方様は幸せになる権利があります。そして貴方様は何も出来な

い女ではありません”

貴方様は素晴らしい女性だ。

“ 我のような者にも深い愛情を注いで下さり養って下さった。慈愛に充ち溢れた方です。それを他の者も理解しています”

だから、決して何も出来ない女ではない。

“ 寧ろあの小僧こそ何も出来ない輩です。貴方様の背に隠れ利用した拳句に貴方様を殺そうとした”

憎んでも憎み切れない男こそこの言葉が相応しいのだ。

“ しかし、今は今夜の宴ですね。我も行きますが、恐らく『害虫』共は貴方様に近付くでしょう”

貴方様は虫を引き寄せる甘い蜜を持った花だ。

その淡くて甘い蜜の香りは何処までも届き虫たちを引き寄せる・・・

だが、それは余計な虫・・・害虫も引き寄せてしまう。

外見は棘のある花だが実は脆いのだ。

だから足の先が僅かに触れただけで貴方様は崩れ落ちてしまう。

そう・・・“あの時”のように・・・

“忌々しい餓鬼が・・・我らの姫君の御心を利用したばかりか姫君を傷つけ負って”

今回はその忌々しい餓鬼は居ないが、別の害虫という名の下種がいる。

そいつらが夜姫に近づくのは何としても阻止しなければならぬ。

“少々・・・手荒いですが今出来るだけの事を致しましょう”

道化には力が無いと言ったが僅かにあるのだ。

ただ、これは万が一と思い取っておいた。

言わば保険であり非常用なのだ。

“この場合は致し方ないな”

そう言っただけで済むとした時だ。

“・・・やっぱりあったんだな”

また誰かの声がした。

この声は・・・

“来たのか”

“まったく・・・何が俺に任せるだ。非常用とは言え持ってたんじやねえか”

片方の声は何処か乾いた声で袁術と劉備に話し掛けた道化の声だった。

道化は片方の声に対して咎める口調だが、もう片方は涼しい声で返した。

“本の僅かだ”

“それでもあるんだろ？ たつく・・・で、何をする気だ？”

“姫君を護る為に少々・・・寝てもらおうとした”

“それはやるな。宴があるんだ”

“知っておる。だが、出させん。行けば害虫共が近寄ってくる”

“それを阻止する護衛は2人いる”

“・・・たった2人で何が出来る”

“心配するな。姫さんが見込んだ男だぞ？”

道化は納得いかない声を説得するように言ってみせた。

“・・・信用できるのだな？”

“今まで姫さんが俺らの期待を裏切ったことがあるか？”

質問に質問で返される形となったが、片方の声は長い間をおいてか

ら答えた。

“ 無い ”

“ だろ？ だつたら姫さんを信じろ ”

陳腐な台詞だと道化は自嘲しながらこうも言った。

“ それに虎も出る。 虎ならまだ害虫共には気づかれていないから安心だ ”

陽人の戦いにおいて獅子奮迅した虎だ。

害虫共などその爪と牙で引き裂いて紙くずにしてしまつたらうと道化は言いながら締め言葉にこう言った。

“ あいつは獅子奮迅の戦いをした。 ご褒美をくれてやろうぜ ”

“ あれで、 たつたあれだけで褒美だと？ 馬鹿を言つな。 あれ位の戦いで褒美など勿体ない ”

片方の声は道化の声に反発する。

“ 姫君などあれ以上の戦いを幾度となくしたのに褒美はおるか労いの言葉も無かつたではないか ”

“ 仕方ないだろ。 “ あの野郎ども ” が馬鹿で阿呆だつたんだから ”

“ そつは言つが幾ら馬鹿で阿呆だろつとあれだけの手柄を立てたのだ。 普通なら与える筈だ ”

言葉から察するに相当な手柄などを上げたようだが、その見返りは何も無かつたらしい。

もし、それが本当ならばこの声が反発するのも無理はない。

荒げる声に対して道化の声は至って冷静だった。

“それを分からないから姫に滅ぼされたんだよ”

“今にして思えば当然の報いだな”

道化の言葉に片方は怒りを沈めて納得する。

“命がけで最後の戦いを勝ち抜いた姫さんに対する褒美が騙し討ち&国外追放だ。当然の報い所かもつとしても良い位だろ？”

“そうかもしれん。しかし、その国外追放によって我は姫と出会えたから何とも言えんな”

“まあ、他の奴等もそう言うかもな”

“それで何の用だ？まさか我を咎めるだけの為に来た訳ではあるまい？”

“まあな。お前さんに協力しようと思ってきた”

“ここでは力が無いのではないか？”

“姫さんが居た世界に行つて席を下ろしたから大丈夫だ”

ただし、ここには来れないと道化は付け足す。

“そなたはそこが強みだな”

声は羨望の色を混ぜて道化に言った。

“『境界線』が何処にもない。何処にでも行けるし何処へでも住める”

“ここでは出来ないがな”

“それでも強みには変わらない。それで宴には出すとしても・・・何か手は無いのか？”

“納得したんじゃないのか？”

“した。だが、我等にも何か出来る事はある筈だ”

“新入りが姫さんの寵愛を受けるのが気に入らないって顔だな”

どうやら片方の声は気に入らない顔をしているらしいが、見えないから想像するしかない。

“この程度で内部崩壊を起こすような人の集まりに姫君の寵愛を奪われてなるものか”

“男の嫉妬は醜いんだぜ？”

“ほざけ。ならば問うが女の嫉妬は醜くないのか？”

“女の嫉妬は好きな相手に対する愛情の裏返しだからな”

“男とて同じ事。しかし、そなたの「元恋人」は姫君に対して相当な嫉妬を宿しているようだったな”

何かある度に姫君に刃を向けて襲ってくるのだから、と声は言い道化を攻めるように言い続けた。

“あの女か。まあ・・・向こうは俺があいつを捨てたと見えたんだろうな”

“実際は向こうがそなたを捨てたのだから？”

“ああ。俺が戦に出ている間に他の男と出来た。帰って見たらあいつが他の男と裸で仲良く結婚用に買った寝台で寝てたんだ”

それが原因で別れたと言うらしいが何とも・・・

“酷い結末だな”

言葉とは裏腹に心底面白がっている・・・

道化もそうだが相当な性格の持ち主である。

“別に良いさ。踏ん切りが着いたからな。それに今は上さんと娘も居る”

“未だに驚いているぞ。貴様がまさか妻子を娶った事にな”

“俺も焼きが回ったかもしれないな。とは言え、何故か姫さんに嫉妬を燃やすんだよな。あの女は”

“それは貴様があの女を捨て敵側だった姫君へ寝返ったからだろ”

“姫さんはとんだ逆恨みを買った訳だ”

“自分で蒔いた種なのに随分と他人事だな”

“俺に直接的な被害は来てないからな”

“まったく・・・所で稚^{ちゃ}は読み書きを覚えたか?”

“まだヨチヨチ歩きを始めたばかりで覚える訳ないだろ”

“姫君など赤子で読み書きを出来たのだろ?”

“それは親馬鹿全開の爺が言った戯言だ”

“あの老龍か。もし、この状況を見たらどうするかな?”

自分達が傍に居らず周りは血に飢えた獣で一杯という状況に・・・

“何も言わずに周囲を焼き尽くすだろうな。それこそ『ソドムとゴモラ』みたいにな。何せ姫さんの恋人になりそうな輩を全て左遷と
かしたんだからな”

それ位はいとも容易く迷わずやる、と道化は言ってみせる。

“ 我也同じ気持ちだが・・・そこまでなりたくはないな ”

“ 誰だってあそこまでなりたいとは思わないさ ”

“ そうだな。それで何か我らに出来る事は無いか？ ”

“ 今の『段階』では無理だ。まあ姫さん覚醒したら・・・お前も力が一時程度は戻るだろうぜ ”

“ 今の状況は姫君にとっては苦痛であろうな・・・ ”

“ 仕方無いさ。これも全ては姫さんの為だ ”

“ とは言え、姫君の事を見る度に悲しくなる ”

“ 感傷的な男だな。しかし、姫さんなら大丈夫さ ”

何せ姫なのだから、と根拠がまるで無いのだが納得してしまう力がある発言を道化はした。

“ そうだな。 ”

“ ああ。それじゃ姫さん・・・少々寝てくれ ”

「 あ、あれ・・・？ 」

夜姫は何だか身体が嫌に重いと感じた。

しかも何だか身体が熱くなり出して来た・・・

そして……………

寝台に倒れた。

“暫くは寝かせる、か”

“ああ。何か出来ないかと？とお前は言っただろ。だから、寝かせた”

“我を止めたくせに……………”

“そう言うな。これには理由があるんだよ”

“理由だと？”

“直ぐに分かるさ”

“…………まあ、良い”

声は少し間をおいてから言つと夜姫に語り掛けた。

“申し訳ない。姫君。しかし、これも全ては姫君の為なのです”

“まあ、半分は俺らの為でもあるがな”

道化の言葉に片方は何も言わなかった。

言えなかったのかもしれない。

“さて、俺は帰って上さんと娘に家族サービスをしてくるぜ”

そう言い残して道化は消え去った。

残されたのは寝台に倒れ眠る夜姫とそれを見守る狼だけだった・・・

「夜姫様。お水を・・・夜姫様っ」

典医は水が注がれた杯を持って天幕の中へ入ったが、寝台に倒れる夜姫を見て杯を捨て駆け寄った。

息はしているが、身体が熱い・・・

「誰か。誰か来て下さい！！」

典医の叫びに急いで傍に居た兵が入って来る。

「直ぐに水と薬を持って来て下さい。それから劉備様と袁術様にも連絡を」

兵たちは直ぐに天幕を出て水と薬、劉備と袁術を呼ぶ方に別れて動いた。

『夜姫様！！』

劉備と袁術が真っ先に天幕の中へ駆け込んだ。

それを見た狼は閉じていた眼を開けたが直ぐに閉じる。

二人が冷静ならこの狼の様子を見て何かあると思うだろうが、生憎

と冷静ではないから分からない。

「典医。夜姫様はどうなさったんだ?!」

袁術が典医に掴み掛る勢いで詰問した。

それに対して典医は冷静に状況を説明する。

誰もが取り乱しているのだから典医である自分は冷静でなくては、
と思っっているのだ。

「私が来た時には寝台に倒れていたんです。息はしておりますが身体が熱いのです。原因は判りませんが身体を冷やします」

「分かった。何か我々に出来る事はあるか？」

「宴がもう直ぐ始まるのでしたらこの事を伝えて下さい」

典医は夜姫が倒れたので宴は中止と暗に言っていたが、それは恐らく無理だろうと何処かで思っていた。

今回の宴は夜姫が出るからこそ意味のある宴なのだ。

その夜姫が出れないと知れば激怒するのは明白であるが、典医の立場から言わせれば熱を出した娘を強引に出させるのか?と問いたくなる。

「分かった。納得させる」

袁術は典医の言いたい事が解かりながら何かを決意した顔で頷き勇

んで天幕を後にした。

「私も・・・・・・・・・・」

劉備が天幕を出て袁術に付いて行こうとしたが、袁術はそれを止めた。

「そなたは夜姫様の傍に居てくれ・・・私では無理だから」

自分自身を納得させるように言う袁術に劉備は無言で頷き天幕へ引き返した。

それを見てから袁術は宴が開かれる腹違いの兄弟・・・袁紹の天幕へと足を進める。

袁紹の天幕へ行くと既に宴の準備は出来あがっていた。

中央の席が恐らく夜姫でその隣に袁紹が座るといふ形をしている事に些か不快感を抱きながら袁術は中に居る袁紹に声を掛けた。

「夜姫様はどうした？」

袁紹は夜姫が居ない事に首を傾げてみせる。

やけにご機嫌だなと思うが夜姫が自分の陣へ来るからだろうとその時は思い答えた。

「夜姫様は倒れた。だから、今夜の宴は中止だ」

「何？倒れた？どついう事だ？」

「言った通りだ。夜姫様は倒れた。理由は分らんが熱を出している。だから、今夜の宴は中止だ」

「貴様・・・嘘ではないだろうな？」

袁紹は腰を上げて袁術に近付きながら言葉を放った。

「我らに夜姫様を近付けまいと嘘を言っているのではないか？」

「馬鹿を申すな。そこまで落ちぶれていない」

「ふん。果たしてそうかな？私が貴様を差し置いて袁家の当主となつた事を未だ根に持っているくせに」

「昔の話だ。それより夜姫様は本当に倒れたのだ。だから宴は中止しろ」

「ここまで用意して中止しろと言われて出来ると思つのか？」

「では、夜姫様に無理を通して来いと言う気か」

怒を孕み袁術が言えば袁紹は涼しい顔で告げた。

「そこまで言っておらん。ただ、今さら中止は出来んと言っただけだ」

そついつのを無理に通して来させると言つのだ、と袁術は言いたかった。

しかし見れば僅かだが酒臭いし顔も赤い……

「宴も始まっていないのに飲んだのか」

だから、ここまで強引とも言える態度を取っているのかと今更になつて袁術は納得した。

それ以外にもここまで用意したのに中止と言われても困ると言う理由もあるだろう、とは思うが。

「貴様には関係ない。それから宴は予定通り開くぞ」

この状態では無理、と判断した袁術は引き下がる事に決めた。

今この男に何を言おうと無理だと思つし他の者に理由を話せば納得してもらえると袁術は確信していたのも引き下がる理由であった。

袁紹の天幕を出た袁術はそのまま夜姫の天幕へと戻つた。

ここに居る理由は無いし何より夜姫がどうなつたのか気になる。

「失礼する」

断つてから中に入ると寝台から上半身を起こした夜姫の姿が眼に入つた。

「夜姫様。身体は大丈夫ですか？」

直ぐに駆け寄つて訊ねると夜姫は「少し重いです」と控え目に答え

「袁術様。袁紹様は何と？」

劉備が袁術に訊ねるも彼は無言で肩を竦める。

これを見て劉備達は「無理」と判断できた。

「あの、もう宴はやるんですか？」

「もう準備は出来ておりました。ただ、貴方様の身体を考えると・・・」

「私なら大丈夫ですよ」

「しかし・・・」

「せっかく宴の準備をしてくれました。行かなくては相手に失礼ですし袁術様達が怒られてしまいます」

「私たちの事はどうでも良いんです」

「いいえ。どうしても良くないです。行きましょう」

些か強い口調で言う夜姫に袁術は困惑し劉備達を見るが彼等もまた夜姫の頑固な態度に困惑している。

「行きましょう。袁術様。私なら大丈夫ですから」

もう一度だけ夜姫は言った。

折れる事は無いという気持ちだが前面に押し出されており説得は無理と判断した袁術は仕方無いと思う。

「分かりました。ただし、典医がこれ以上は無理と判断したら直ぐに帰る。それで良いですね？」

「はい。分かりました」

「では馬の用意をして参ります」

袁術は重い腰を上げて天幕を出て馬の準備を命じた。

『・・・頑固な性格なのだな』

自分より他人を優先し一度決めたら断固としてやり遂げようとする態度に袁術は些か苦笑を禁じ得なかった。

ただし、嫌という訳ではなくその自分より他人優先という所に惹かれた。

だが、同時に悲しくも思った……………

第十三幕：狼の名前（前書き）

ここで北欧神話のキャラを出します。

まだまだこれからドンドン神話のキャラを出しますが、作者のお気に入りが北欧神話なので………

次は彼女が好きな神話のキャラを出す予定ですが。（汗）

第十三幕：狼の名前

夜姫は袁術の馬に乗り袁紹の陣へ向かっていた。

「・・・・・・・・」

袁術は夜姫を横抱きにした状態で馬に乗っているが時せつ下を見る。

下には狼が離れず付いて来るが馬は怯えもしない。

一匹だからか・・・または害が無いと判断したからか・・・・・・・・

どちらにせよ良いと彼は納得した。

今はどうやって夜姫を護り抜くかだ。

彼の予想では袁紹が主導権を握って居る筈だ。

それは彼の陣で開かれるのが一つ理由に上げられる。

彼の陣で開かれるという事は彼が主で他は客人となるのだ。

これだと自分と劉備は端に追いやられる可能性が極めて高い・・・

そうなれば夜姫は孤立してしまう。

『どつすれば良い・・・・・・・・？』

答えは自分で見つけるしかないが誰かに助けを求めたかった。

しかし答えを見つげる前に着いてしまった。

「ようこそ。いらっしやいました・・・夜姫様」

陣の入り口には袁紹が待つており迎えて来た。

顔は少し赤いが先ほどに比べればマシとなっているから恐らく水でも飲み風に当たって酔いを醒ましたのだろう・・・

「こんばんは。袁紹様」

夜姫は袁術の手を借りて下馬してから袁紹に挨拶した。

「まだ皆は来ておりませんが、どうぞこちらへ」

「あの、この子も一緒に良いですか？」

狼も良いかと袁紹に訊ねると彼は狼を一瞥した。

「・・・」

狼は袁紹を見上げたが警戒心剥き出しで夜姫に何かあれば即座に噛み付く勢いだ。

「構いませんよ。しかし、その狼は夜姫様に懐いておりますね」

今も護るように立っているのだから・・・

「お留守番を言っても聞かないんです。貴方はどうして私に付いて

来るの？」

夜姫は狼に訊ねるが狼はただ夜姫の左手を舐めるだけで答えない。

「さあ、どうぞ中へ」

袁紹は僅かに苦笑しながら夜姫たちを天幕の中へ招き入れた。

「どうぞ座って下さい」

夜姫を上座に座らせて自身はその横に座ろうとしたが、袁術がまるで横取りするかのよう座った。

「私は夜姫様の護衛だ」

涼しい顔で腹違いの兄弟に言い隣を見れば劉備が既に座っている。

そして夜姫の前には狼が座るといって完璧な防御態勢が出来あがった。

これでは入れないと判断した袁紹は仕方無く・・・かなり自分を抑えてその隣へと腰を下ろした。

「袁紹様。この場で言っておきますが、私がこれ以上は無理と判断したら夜姫様を連れて帰ります」

典医は誰も・・・将達が来ていない事を幸いに袁紹へ言った。

「夜姫様は無理を通して来たんです。ご了承くださいませね？」

半ば典医と言う立場を利用した脅しと言える言い方だが袁紹はそれ

を言われてはどうしようもないので頷くしか出来なかった。

そうこうしている内に将達が入って来た。

皆は袁紹に挨拶をしてから夜姫に挨拶をしたのだが・・・左右を固める二人には嫉妬と憎悪の眼差しを向けて来る。

ここでも一人占めにする気か？！

というような眼差しを受けるも二人は決して引こうとしない。

そんなピリピリした雰囲気は夜姫には伝わったのだろう・・・僅かに怯えていた。

それを感じ取った狼は夜姫に擦り寄り怯えを緩和させようとする。

それからドンドン将達は入って来た。

その中には乱世の奸雄と畏怖されている曹孟徳が居た。

曹操の左右には彼の忠実なる部下にして従兄弟でもある夏侯惇と夏侯淵が同行している。

「こんばんわ。夜姫様」

曹操が声を掛けると夜姫は虚ろな瞳を上げた。

夏侯惇と夏侯淵は初めて間近に見る夜姫の容姿に眼を奪われながらも狼が居る事に驚く。

狼が人に懐くなど殆ど有り得ないのだ。

それなのに狼は夜姫の膝に顔を乗せて心地良さそうに尻尾を振っている。

所が曹操が声を掛けると狼は警戒心丸出しで曹操を睨んだ。

「その狼はどうしました？」

曹操は狼を見ずに夜姫に訊ねた。

「散歩中に付いて来ました」

簡潔ながらも説明する夜姫に曹操は納得するように頷いた。

「そうですか。流石は天の姫ですね。動物まで懐かせるとは……

……

「……」

夜姫は無言で下を向き狼を撫でた。

まるで曹操と会話をするのさえ怖いと言う印象を受ける。

実際その通りなのだ。

曹操と会話している間も彼の内心とでも言えば良いだろうか？

その声が聞こえて来るのだ。

『相変わらず可愛いのう・・・寝台の中ではどのような姿かそそられるのう』

『二人に護られているが何れは・・・・・・・・』

などと本人の意思など関係なく頭に聞こえて来るから性質が悪く夜姫は今すぐにでも逃げ出したい気分だった。

それでも左右に劉備と袁術が居るから残れる。

『耐えるのよ・・・ここで耐えないと迷惑が掛るんだから・・・・・・・・』

夜姫の心の声が聞こえたのか狼はスリスリと夜姫に甘えながら瞳は曹操を食い殺すかの如く激しい怒りで燃えていた。

「では、これで・・・・・・・・」

曹操は狼を一瞥して離れ夏侯惇と夏侯淵も夜姫に一礼してから離れ自分達の席へと腰を下ろした。

それから次に孫堅が現れた。

「遅れて申し訳ありません」

先ず袁紹に詫びてから夜姫と袁術に詫び自分の席に腰を下ろした。

孫堅の席は劉備の隣となり夜姫とも近い位置となったが曹操の席は離れている。

これに曹操は眉を顰めたが直ぐに消して今の席に甘んじた。

「では、皆が揃った所で始めるとしよう」

袁紹は部下が持つて来た瓶子を取り夜姫の席へ行くと片膝を着いて杯に注ごうとする。

「酌なら私がやる」

注ごうとした所を袁術が止めに入り瓶子を取り上げようとするがそれを袁紹は拒んだ。

「ここは私の陣だ。ならばこの私が夜姫様の杯に酒を注ぐのが礼儀と言う物だ。子供みたいに駄々を捏ねるな」

「私を子供扱いするか」

「ああ。すると。そなたは身体が大きな子供だ」

「貴様……」

互いに火花を散らし合うも夜姫が勘で袁術の手を取り戒めた。

「袁術様。袁紹様の言う通りです。ここは袁紹様に注いでもらいませう」

「ですが……」

「では、2杯目から注いで下さい。その次は劉備様で」

「・・・分かりました」

こう言われては下がるしかないので袁術は渋々ながらも手を退けたが眼だけは袁紹を睨んでいた。

『夜姫様に何かしてみろ。貴様を殺してやるからな』

半ば腹違いの兄弟に対する怒りを混ぜた色だが、こればかりは仕方ない。

群雄達もこの二人の仲が悪いのは承知しているので何も言わないが疲れるとは思った。

袁紹が夜姫の杯に注ぎ終わると他の者達もまた酒を注ぐ。

狼の方は何も言わずにいたが夜姫の杯を見つめている。

「貴方も飲みたいの？」

視線に気づいたのか夜姫は狼に訊ねた。

狼が杯に鼻を押し付けて飲みたいという風に仕草をして夜姫に教えると夜姫は自分と一緒に飲もうと言った。

「そのような事をしなくても直ぐに杯を・・・」

袁紹は狼みたいな動物が夜姫と杯を共用するなどと言おうとしたが夜姫はそれを謝辞した。

強くは言えないのか袁紹は諦めて乾杯をする事にした。

「今夜は我が陣へ来てくれて礼を言う。先ずは陽人の戦い・・・我等が勝利した。だが、董卓本人は生きているし呂布達も健在だ」

これを言われて群雄達は厳しい顔をする。

戦いには勝利したがまだ一度だけだし董卓も呂布も健在だ。

まだ浮かれるのは早い。

「しかし、今宵は・・・勝利の宴として酒を飲み酔おう」

今宵だけはと袁紹は言い静かに杯を掲げた。

「董卓を討ちこの国に平和を取り戻そう。乾杯」

『乾杯』

袁紹が杯を掲げて飲むと群雄達も飲んだ。

夜姫の方は少量・・・舐める程度に抑えて残りを狼に渡した。

狼は酒を直ぐに平らげてしまう。

その豪快な飲みっぷりに張飛などは「良い飲みっぷりだ」と褒め称える程だ。

「では、夜姫様・・・」

袁術が空になった杯に瓶子で酒を注ぐと今度は夜姫だけが飲み干す。

「何だか少し強い、ですね」

「確かに。もう少し少なくて注ぎますか？」

「いえ。大丈夫です。この子も居ますから」

狼の頭を撫でながら夜姫は言いながら思い出したように言った。

「そう言えば……貴方の名前を決めてなかったわね」

狼は頭を撫でられて眼を閉じていたが、開けて夜姫を見た。

夜姫は狼の顔を両手で撫でながら名前を考えたが良い名前が思い浮かばない。

『何か良い名前はないかな……』

幼い頃から動物に好かれたが名前を考えた事は無い。

それは動物を買う事が出来なかったからだが。

その時……頭に光景が浮かび上がった。

何処かの山だろうか？

そこに自分は居て弓矢を持っていた。

そして足元には狼が血だらけで倒れている。

狼は血だらけでありながらも自分を牽制するように睨むが、自分はそれを怖がりもせず片膝を着いて傷の手当てをしたのだ。

それから狼を膝に乗せ頭を撫でながら自分はこう言った……

『貴方の名前は……』

「……“フェンリル”……貴方の名前はフェンリルよ」

狼はパツと顔を上げて夜姫をマジマジと見つめる。

群雄達は聞いた事が無い名前に首を傾げるが夜姫は知らずに言葉を紡ぎ続けた。

「その強靱な身体はどんな物でも縛る事は出来ず、その賢い頭脳は全知全能の神さえも時に凌駕する。そして誰よりも家族思いな狼……」

何故この名前にしたのかは夜姫自身からなかった。

フェンリルとは北欧神話に出て来る魔狼だ。

魔神ロキの長男で弟と妹にヨルムンガルド、ヘルが居る。

誕生した時は普通の狼だったが日に日に力を増して行き神々は彼を拘束する事を決め三回に渡り拘束を試みた。

先ず“レージング”と呼ばれる鉄鎖で試みたが失敗し続いて倍の強度を誇る“ドローミ”で同じように試みたが失敗してしまう。

三回目に“スレイプニール”と呼ばれる魔法の紐で拘束しようとしたが用心深い彼は誰かの右腕を差し出せと要求した。

そこで軍神である“ティール”が右腕を差し出した。

それから彼をスレイプニールで縛るとこれは無理と直ぐに察しティールの右関節から食い千切り一矢報いたが結局は拘束されたのだ。

しかし、神々の黄昏においては自由になり主神である“オーディー”を丸飲みにした。

だが、その息子であるヴィザールによって倒されるといふ運命を辿る……

その狼の名前をこの狼に夜姫は名付けた。

「気に入った？」

眼が見えないので狼がどんな顔をしているのか分からずに訊ねる夜姫に狼は鼻先を押し付けた上に尻尾を振り乱し喜びを示した。

「喜んでおりますよ」

袁術が狼を見て夜姫に伝えると彼女は嬉しそうな顔になった。

「良かった……今日から貴方はフェンリルよ」

狼……フェンリルを撫でながら夜姫は言い右手で杯を持ち口へ運んだ。

その様がまるで獵犬を伴い酒を飲む狩獵の女神に見えたのは錯覚だろうか？

“名前を貰えたな”

誰かの声がしたが誰にも聞こえない。

“うむ。親から貰った名前だが改めて姫君から頂戴した”

別の声がした。

しかし、こちらにもまた聞こえない。

“これで先ずは一步だな”

“ああ。だが・・・忌々しい小僧が居るな”

“そいつは放っておけ。どうせ何もしない。今はな”

“何れは姫君を毒する奴だ。今の内に我が食い殺しても良からうか？”

“駄目だ。そいつにも色々と働いてもらうんだ”

“ちつ。こんな男は居るだけで姫君を毒すると言つのに・・・目障りだ”

“我慢しろ”

“・・・そちらはどうだ？”

別の声は面白くない口調で訊いた。

“今の所は問題ない。とは言え「外野」が煩いな”

“どついう事だ？まさか……………”

声は何か思い当たる節があるのか僅かな動揺を見せる。

“来る、という可能性は捨て切れない”

それに対してもう片方の声は冷静に判断した声で返す。

“まったく……貴様は厄介事を姫君に全て押し付けてばかりだな”

“否定できない”

“それで来ると思うか？”

“高いな”

“その時、姫君はまた目覚めるか？”

“目覚めるな。ここに來てから目覚めたんだ”

“そうか”

ただ頷くだけの声にもう片方は……………

“姫さんと暴れられて嬉しいか？”

“ 勿論だ。 姫君と共に戦場を駆け巡れる・・・昔のようにな”

“ あん時はお前以外にも居たな。 護衛と斥候を兼ねた奴等が”

“ その通りだ。 とは言え今は我一人だ”

“ 一人で大丈夫なのか？”

“ 我を誰と思っている。 我は”

“ 言つな。 長たらしい名乗りは嫌いだ”

“ 貴様が我を馬鹿にするような事を言うからいけないのだ”

“ 怒るなよ。 怒ると頭が禿げるぞ？”

“ 煩いつ。 それはそうと手は打ったのか？”

“ いや全然”

“ 無責任にも程があるぞ”

“ 今からやる”

如何にもその場凌ぎ的な返答だが、声はそれで良いと頷くように言った。

“ では頼むぞ。 我は姫君の傍に居る”

“ 食つのは禁止だが噛む程度は良いぜ”

それだけ言うと声は消えた。

夜姫たちに視線を戻そう。

夜姫は自分のペースを守りながら酒を飲んでいる。

酌は袁術と劉備の二人が独占しており群雄達は明らかな嫉妬の瞳を向けているが、二人はそれを甘んじて受け入れている。

道化に悪役になってもらうと言われたからだ。

しかし、群雄達の方はそうではない。

毎日のように夜姫と会って話もしているのに、ここでさえそれを独占している。

これは我慢できない。

一人の群雄が意を決して夜姫に近付いた。

「天の姫。私の酌を受け取ってくれませんか？」

「酌なら私がやる」

群雄の言葉を袁術が退けたが群雄は引かなかった。

「袁術様。失礼ですが貴方様は毎日のように天の姫と顔を合わせて話をしているのではないですか？それなのにここに来て我々に天の姫と話す事を邪魔するのですか」

これに対して袁術は反論しようとしたが、夜姫が杯を差し出した事で未遂に終わった。

「注いで下さい」

「夜姫様」

袁術が咎めるように口を挟むが夜姫は「大丈夫ですから」と言い袁術を抑えた。

きつと自分の事で彼が責められるのが我慢できなかつたのだらうとは安易に予想できる。

彼にとっては嬉しい限りだがこれで“例外”が出来てしまうと恐れた。

事実それは的中した。

群雄の一人が夜姫に酌をしたので瞬く間に他にも自分の酌を、と言いつつ寄り始めてしまう……

袁術と劉備の二人がそれを上手い具合に阻止しようとするが当の夜姫本人が無理を承知で受け取るから性質が悪い。

「夜姫様。あまり飲むとお身体に……」

典医が夜姫に言うがそれでも夜姫は大丈夫と言って聞かない。

何人の酌で酒を飲んだのか分からない。

ただ自分のペースを守りつつ飲んでるがやはり飲み過ぎているとは自覚していた。

それでも止めない。

『私にはこれ位しか出来ないんですもの……』

自分のせいで袁術と劉備が連合軍内で浮いた存在になるのは嫌だ。

いや……もうなっている。

それは先ほどの群雄の言葉で判った事……

ならば、これ以上は何としても阻止しなければと夜姫は思い無理を通しているのだ。

人はそういうのを自己犠牲と呼ぶし愚かと断罪する者も居る。

正しくその通りなのだ。

「夜姫様。私の酌を受け取り下さい」

曹操が夜姫の前に座り瓶子を差し出してきた。

狼……フェンリルが唸り声を上げて曹操を威嚇する。

「フェンリル……」

夜姫はフェンリルを宥めようとするがフェンリルは尚も唸り続けた。

それ以上近付けば許さないという雰囲気醸し出し牙と爪を前に出し更に牽制する。

「これは怖い。この狼・・・フェンリルは私を警戒しています」

曹操は怖がった振りをしているが、視線は射抜くようにフェンリルを睨み据えている。

高が狼ごときが邪魔をするなという目線だがフェンリルは怯みもしなかった。

寧ろもはや我慢の限界と言える状態だ。

「フェンリル。止めなさい」

夜姫がまた宥める声を出す駄目だった。

とは言え夜姫自身・・・フェンリルの行動には助かっていた。

今もまた曹操の声が聞こえて来て恐怖していたのだ。

酌などされようものならどうなるか分からない。

それを阻止するようにフェンリルが唸るから助かる。

しかし、表向きは宥めるのだ。

「・・・孟徳。今回は止めておけ。天の姫も些か顔が赤いし護衛のフェンリルもそなたが酒臭いと顔を顰めているのだ」

聞き慣れない・・・しかし、力強い男の声が聞こえた。

「あの、どなたでしょうか？」

夜姫は誰なのか分からず訊ねた。

「これは失礼しました。私の名は夏侯惇。曹猛徳の部下にして従兄弟です。以後お見知り置きを」

『夏侯惇と言えば隻眼の将にして曹操の右腕だった男ね・・・』

夏侯惇・・・字は元讓りょうと言ひ曹操が挙兵した時から従い続けた武将である。

14歳の時に師を侮辱され殺したと言われる荒い気性の持ち主であるが、常に学問の師などを同行させるなど勉強熱心で金があれば人々に分け与えるなど慎ましい性格の持ち主でもあると夜姫は大学で調べた事を思い出した。

「私は織星夜姫です。夏侯惇様の事は天の国で知っております。お会いできて光栄です」

「私を知っていたとは嬉しい限りです。眼が見えずに大変お辛いとは思いますが、どうか気をシツカリと持って下さい。それからくいようですが我が主にして従兄弟である曹猛徳が大変失礼な真似を致しました」

そちらのフェンリルにも、と夏侯惇は頭を下げた。

「我が主が貴殿の姫君に失礼な事をしてすまなかった。許せ」

フェンリルは夏侯惇の様子を見て牙と爪を戻す事で誠意を示した。

夏侯惇はそれを見てから未だに諦めようとしなない曹操を強引に連れて元の位置へ戻る。

それを見てからフェンリルは夜姫の膝に顔を乗せた。

「フェンリル。駄目でしょ？人に対してあんな事したら」

夜姫は軽くフェンリルを怒ったが内心では助かったと礼を述べた。

フェンリルの方は夜姫の膝に顔を沈めながら尻尾を振り勝ち誇ったように曹操を見やる。

俺の勝ちとばかりにニヤリと犬歯を見せて笑ったのは気のせいかな？

しかし、それを見た曹操は怒りの視線を向けるがフェンリルは何ともない様子で欠伸をした。

それからも宴は続き帰る頃にはもう夜中近くとなっていた。

第十四幕：総大将の頼み（前書き）

どうも最近はや術が主人公とも言える立場に立ち劉備が脇役になっております。

まあ、この編では彼の方が目立つんですが・・・どうなるんだか・・・

第十四幕：総大将の頼み

宴が終了する頃には既に夜中になり夜姫も微かに酔っていた。

しかし完全に酔った訳ではない。

意識はシツカリしているし足取りも問題ない。

だが、陣へ帰れない状態だった……

「夜姫様。もう夜も遅いですし今宵は我が陣へお泊り下さい」

顔を赤くした袁紹は夜姫に酒臭い息を吐きながら懇願するように頭を下げた。

夜姫が帰れない理由とは袁紹が止めているからに他ならない。

「好い加減にしろ。夜姫様は疲れているのだ。早く帰させる」

「疲れているならここへ泊るべきだ。わざわざ貴様の陣へ帰らなくても我が陣へ泊り明日、帰れば良い」

袁術が言えば言い返し駄々をこねる。

身体が大きな子供だ。

自分に言った言葉を今ならそっくり返せると袁術は思いながら別の事を言った。

「貴様の場合は夜姫様を帰さないから駄目だ」

「貴様が言うか。夜姫を独占するばかりか寵愛されている貴様が！
！」

袁紹は赤い顔を袁術に向け怒鳴った。

「貴様は私が当主になったのを嫉んでいるのだろ？」

「昔はな」

怒鳴る袁紹に対して袁術は涼しい顔で答えるが逆に袁紹の気を逆立たせた。

「嘘だな。貴様是我が当主になったのを嫉んでいるんだ。だから夜姫様を独占しているんだ」

明らかな決め付けであり嫉妬だが、袁術は尚も冷静な態度を取り続ける。

「私をどう言おうと構わないが、夜姫様は連れて帰るぞ。それで良いですね？夜姫様」

「え、ええ……やはり慣れた場所の方が寝易いので」

「夜姫様っ」

袁紹は夜姫の発言に怒っていた顔をいきなり泣きそうな顔へと変化させた。

“今度は泣き落としかよ。つくづく酒癖が悪い男だな”

誰かの声がしたが誰にも聞こえなかった。

「この袁紹の陣が気に入らないのですか？」

「い、いえ。ただ、宴の後片付けもありますし先ほども言った通り慣れた場所の方が眠り易いのです……………」

「どうか今宵はこの袁紹の陣にお泊り下さい。袁術ばかりに寵愛を授けず私にも貴方様の寵愛を……………」

「別に寵愛など……………」

「いいえ。しております。先ほどの宴でも貴方様は袁術の酌ばかり最初お受けになっていたではありませんか？」

「それは……………」

「好い加減にしる。貴様は酔っているんだ。誰か、袁紹はもう休む連れて行ってくれ」

袁術は自分の陣ではないが、このままでは不味いと判断し近くに居た兵に命令して袁紹を夜姫から引き離れた。

それを見て嘸み付く一歩前まで我慢していたフェンリルは気を沈めた。

そして袁術を見た。

彼もまたフェンリルを見た。

『ああしなければ・・・そなた噛んでいただけ？』

眼でフェンリルに訊ねるとフェンリルは無言で首を縦に振った。

つまり袁術がああ言わなければ袁紹はフェンリルに噛まれていたのだ。

となれば袁術は恩人となるが、そんな事を知らない当の袁紹は・・・

「何をするっ。私は貴様等の主人だぞ?!その主人に何をするか!」

「殿。ここは抑えて・・・」

兵たちは袁紹を宥めながら夜姫に謝罪して連れて行った。

「まったく。何時からあいつはあんなに酒癖が悪くなったんだか・・・それはそつと夜姫様。お怪我は?」

「ありません。ただ、袁紹様つて酒が強くないんですか?」

「いいえ。寧ろ強い方です。ですが、飲み過ぎだと思われます」

それから夜姫と一緒に酒を飲めた事が嬉し過ぎたのかもしれない。

しかし、それを言わないでおいた袁術は劉備と一緒に夜姫を左右から護衛する形で袁紹の陣を出た。

帰り道の中で馬に揺られながら夜姫は眠気を覚えた。

『やっぱり飲み過ぎたわね』

ペースは守つて来たがやはり酒が回ると眠くなつてしまつ。

しかもそれなりに強い酒は久し振りに飲んだから尚更と言えた。

「……やはり飲み過ぎたようですね」

袁術が夜姫の様子を見て言つてきたので夜姫は頷いた。

「夜姫様。何度おなじ事を言えば私は良いのですか？貴方様は決して何も出来ない女ではございません」

袁術は少しばかり厳しい声で夜姫に言った。

「……」

しかし、夜姫は無言で答えない。

それでも袁術は語り続けた。

宴の件もそうだが、この娘は自分の意思を余り強く出さないし言わない。

幾ら酒に酔つたとは言え強く帰りたいと言えば袁紹だつて渋々ながらも身を引いた筈だ。

それをああも優柔不断とも言える口調で言うからああいう状態になったのだと袁術は言いたかった。

「夜姫様。貴方様は私を改心させ劉備の力になっている。それだけでも凄い事です。それなのに貴方様はご自分を過小評価し続けている。もう少し自分に自信を持って下さい」

最後の方は懇願に近い声だった。

それを聞き終えてから夜姫は言葉を放った。

「・・・私は何も出来ないんです」

「どうしてですか？」

「それは私が・・・だから、です」

小声で聞こえない位に小さな声で何かを言った夜姫に皆は首を傾げた。

しかし、声には諦め、絶望、虚しさなどといった負の感情が込められていたという事は感じる事が出来た。

「夜姫様。私は貴方様の過去を知りません。むろん劉備達も」

袁術の言葉に劉備達は頷いた。

だが、関羽、張飛、典医に至っては夜姫が孤児である事を知っているから全て知らないと言う訳ではない。

「貴方様が過去に何をされて来て、どんな人生を歩んで来たのかわりません。ですが、これだけは言えます」

袁術はここで少し息を吸った。

そして言葉を紡いだ。

「貴方様はとても繊細でありながらも頑固で・・・愚かな程に自分を犠牲にしてまで他人を護ろうとする優しい方です」

「袁術様・・・・・・・・・・」

夜姫は首だけを袁術の声がした方角へ向けた。

「私はこれまで自分は選ばれた者だと思っておりました。袁家の当主にも当然嫡男である私になると思っていました。が、当主には妾の子である袁紹がなり私はなれませんでした。お陰で色々嫉妬しました」

「・・・・・・・・・・」

「劉備も義勇軍として馬鹿にしていましたし貴方様を美しいから妻にしたいと思えました。ですが、今は違います。今は貴方様だけを護り助ける事に喜びを覚え未来を見えています」

「私に、ですか？」

「はい。何れ貴方様は天の国へ帰られる事でしょう。それが何時の日かは判りません。ですが、貴方様が天の国へ帰るまでは私と劉備で貴方様を護ります。それが出来れば私は自分の未来がより良いと

思っています」

「どうして、ですか？」

「貴方様はご自分を愚かな程に犠牲にしている。それを見ていると胸が痛くなります。この乱世ではそんな生き方をしていれば直ぐに死んでしまうのに貴方様はその生き方を貫いている・・・それが私には羨ましい」

その貴方を助ける事が出来れば自分もまた何かが・・・未来が明るくなる」と袁術は言い続けた。

「ですから貴方様もご自分を余り犠牲にせず過小評価しないで下さい。我々の事は安心して下さい。これでも力がありますから」

「その通りですよ。夜姫様」

劉備が馬を袁術の隣に行かせて袁術の馬に乗る夜姫に言った。

「私も義勇軍の長です。義勇軍だから袁術殿に比べれば力は劣りませんが自分に来る火の粉は払い除けられます。ですからどうか私たちの為に自分を犠牲にせず労わって下さい」

「・・・ありがとうございます」

夜姫は二人の温かい心の籠った言葉に涙が出そうになった。

あの時・・・自分に誰も声を掛ける者は居なかった。

もし、そんな時に彼等のような者が傍に居ればどれだけ良かっただ

ろうか？

だが、今は彼等が傍に居る。

必死にそれを彼女なりに護りたい一心でやった事だが、彼らには不要だったらしい。

だからと言って彼等は彼女から離れない。

自分が帰るまでは傍に居て護り続けてくれると言ってくれた。

ならば自分もまた彼等のように強くなろう。

もう二度とあんな自分には戻らない為にも……………

「私、明日から頑張ります。何を頑張るかは自分でも分かりませんが…………頑張ります」

「その意気です」

夜姫は暗い声から僅かだが明るい声になった。

それを聞いた袁術は満足気に励ましの言葉を投げ劉備もまた投げた。

やはり彼女には元気のある声で居て欲しい。

そう彼等は思いながら陣へと戻った。

陣へ戻った夜姫は直ぐに自分の天幕へフェンリルと共に入り寝台に横になる。

フェンリルの場合は寝台の下であるが。

「お休み。フェンリル」

寝る前に自分の胸に鼻を擦り付けるフェンリルの頭を撫でてから夜姫は深い眠りへ旅立った。

それを見てからフェンリルは身体を丸くさせて寝た。

その一方で袁術の陣では………

「董卓に動きがあるだど？」

「はい。どうやら我々……連合軍に亀裂を入れるようです」

椅子に座りながら袁術は片膝を着いて報告する閻象に訊ねた。

「亀裂、か……狙いは我が軍と他の軍を分裂させることか」

「それもあります。ですが、義勇軍の方も向こうは高く評価しているようです。天の姫が降り立ったのも理由として上げられますが」

「そつか。貴様としてはどう思う？」

「正直に言えば……亀裂が少しでも……もう入っている亀裂に鑿を打ちつけてしまえばもはや修復は不可能と言えます」

連合軍はもう亀裂がほんの僅かだが入っている。

袁術・劉備の軍と他の軍の間に。

もし、そこへ更なる力を加えたら粉々に砕け散り修復は不可能になっってしまう。

「やはり夜姫様は我々にとって毒でもあるな」

「はい。しかし、貴方様は例え毒だろうと・・・身体が蝕まれようとも夜姫様を護り続ける積りでしょう？」

「無論だ。あの方を護り抜くと助けられた時に決めた。しかし、今の段階で連合軍がバラバラになってしまえば向こうの思う壺だ」

「その通りです。近い内に向こうはこちらへ戦を仕掛けてきます」

「と言うと？」

「亀裂を入れる為に義勇軍を狙う積りです。それに対して義勇軍は奮戦し頃合いを見計らって敗退します。その時に義勇軍を称賛する」

それによって元からあった感情を強くさせて追い出す気だ、と閻象は言った。

「そうか。となれば・・・劉備達は出ないようにさせるか」

「恐らくそれだけでは無理でしょう。張飛殿や関羽殿は武勇の腕に絶対的な自信を持っております。それを敵も知っておりますから挑発します」

「そうなれば出る、か」

「恐らく。そうならば向ここの思つ壺になります」

「……難しいな」

袁術は腕を組み唸った。

閻象の言う事は全てが理に適っている。

張飛も関羽も武勇の腕は連合軍内でも随一だ。

しかし、立場が義勇軍である上に関羽などは傲慢な所もある。

張飛は些か思慮に欠ける。

敵はそこを突いて来る積りだ。

そうならば閻象の言う通り二人は直ぐにでも敵陣へ斬り掛る事だろう。

それこそ敵の思惑だとも知らずに。

「何か良い手は無いものか……」

「ここは本人達に直接言うのが一番ではないでしょうか？」

「本人達に？」

「はい。殿が地べたに頭を擦り着けて頼めば出来ると思います」

「貴様は私に地べたへ擦らせたいのか？」

「いいえ。ですが、それだけ誠意を見せればあのお二方も考えられると思います」

「・・・分かった」

地べたに頭を擦り着けるのは嫌いだが夜姫の為だと思えば我慢できる。

いや、するしかないのだ。

「直ぐに劉備達を呼べ」

「分かりました」

閻象は頷いて天幕を出た。

天幕を出た閻象は袁術が居る天幕を一度だけ振り返ってから義勇軍の天幕へと足を運んだ。

『本当に・・・変わられたな』

以前の主人なら自分が何を言おうと激怒して聞く耳を持たなかったのに今回を始め最近はちゃんと人の話を聞いてくれる。

やっと自分の努力が実を結んだなどとは思っていない。

全ては一人の娘がやり遂げた事だ。

『織星夜姫様・・・貴方様は我が殿の恩人です』

人間として誤った道を歩もうとしていた彼をあの娘は改心させて正しい道へと誘ってくれた。

感謝してもし切れない。

今回も夜姫の事を考えて袁術は義勇軍に頼む気だろう。

悪いとは思わない。

寧ろそれが誇らしいとさえ彼は思っていた。

そう思っている内に義勇軍の天幕へと到着した閻象は断つてから天幕の中へ入った。

中に入ると都合よく劉備達は揃っていた。

「これは閻象殿。何か用ですか？」

劉備は自分を見るなり腰を上げた。

「殿が貴方達にお話があると云っております」

「私達に？」

「はい。どちらかと言つと関羽殿と張飛殿にですが……………」

「私と益徳に？」

関羽は自慢の顎鬚を撫でながら義弟の張飛を見た。

「また何かしたのか」

「何もしてねえよ」

疑問形を付けずに決め付けた口調で喋る関羽に張飛は居心地の悪い顔で答えた。

「董卓の件でお話があります」

「董卓の……ですか？」

諸葛亮が白い扇を扇ぎながら油断ならない眼で閻象を見た。

「はい。詳しい話は我が殿自身が教えますからどうぞ」

閻象は皆を連れて袁術の天幕へ連れて行った。

「殿。劉備殿達を連れて参りました」

閻象が天幕へ入ると袁術は腰を上げて劉備達を出迎えた。

「袁術殿。董卓に動きがあったのですか？」

「そうだ。向こうは……」

袁術は劉備の質問に頷き事の次第を話した。

「なるほど……流石は董卓、と言った所ですね。頭が良い」

諸葛亮は皮肉を交えた褒め言葉を口にする。

「その董卓はそなた達を狙う。それにそなた達は相手にする。だが、それをされては向ここの思う壺だ」

「お話を聞く限り、そうですね。それで私達は何をすれば……」

「何もしないでくれ」

袁術の言葉に劉備達は驚いた。

「董卓はそなたらを出汁にして連合軍を壊滅させる気だ。それは避けなければならぬ」

「それはそうですが……」

「何故、それなら命令せずに呼んだのか？と言いたいのだな」

袁術の指摘に劉備は頷いた。

「命令すれば確かにそれで済む。しかし、それでは完全にそなた達を止める事は出来ないと判断した」

それを言い袁術は椅子から立ち上がると地面に両手を着いて頭を下げた。

土下座である。

「え、袁術様?!」

劉備達はとつぜん土下座した袁術に面食らったが彼は言葉を言った。

「頼む。ここは何もしないでくれ。そなた達にとっては活躍の場を奪われる事になるだろうが・・・全ては連合軍の・・・いや、夜姫様を護る為だ。どうかここは私に免じて敵の挑発に乗らず耐えてくれ」

額を地面に擦りつけて袁術は言い続けた。

「関羽、張飛。そなた等は武勇の腕に優れている。それは認める。だが、些か自分の腕に自信を持ち過ぎている。それを敵は突いて来る。それでは駄目なのだ。お願いだ・・・敵の挑発に乗らないでくれ」

全ては夜姫様を護る為だ、と袁術は言い切った。

「・・・・・・・・」

劉備達は土下座し懇願する袁術に何とも言えなかった。

まさかここまで人間が短い時間で変わるものとは驚きである。

良い方向へ変わったのだから良しであるが、流石に土下座までされると引いてしまう。

何と答えたら良いかと考えている間も袁術は土下座をしている。

「劉備殿。貴方様は夜姫様を護るのですよね?」

唐突に閻象が劉備に質問した。

「その通りです」

当たり前のように劉備は答えた。

「ならば、ここは殿の頼みを聞いて下さい。これは確かな事です。仮に貴方様が殿の頼みを無視したら義勇軍は追い出されてしまいます。そうなれば夜姫様は一人になります」

生憎と我が殿では夜姫様を安心させられないと閻象は容赦なく言い切った。

仮にも主人の前でこうもバツサリと断言する臣下などそう居ないのだが、閻象はそれを平気な顔でやってのけた。

「貴方様は夜姫様を護ると仰った。ならば・・・それを実行して下さい。関羽殿と張飛殿も理解しましたね？」

関羽と張飛に確認するように閻象は訊ねた。

二人にとって袁術が土下座した事は驚きを隠せなかったが、同時に自分達の欠点を言われて些か腹が立ったのも事実だ。

だが、否定できないから袁術が言った事は正しい。

「断っておきますが、私も殿も貴方達の武勇は買っております。ですから誤解の無いように」

「雲長、益徳。分かったな？」

劉備は閻象の言葉に続いて義弟二人に訊ねた。

訊ねたと言つよりは半ば強制と言える口調だ。

「関羽殿、張飛殿。殿は夜姫様を護り漢王朝を復興させる夢があるのです。それを義弟である貴方達は助ける所か踏み潰す積りですか？」

止めの一撃とばかりに諸葛亮が言う。

それを言われては何も言えない。

いや・・・それ以前に二人にとって劉備の言葉は絶対だ。

その劉備がこう言うのだから従うしかない。

『承知した』

些か納得できない所はあるが仕方ない。

「ありがとう・・・ありがとう・・・」

袁術は額を上げて礼を述べる。

額には土が付着しているが彼は気にせず何度も礼を述べた。

それを見て関羽と張飛は些か納得できない気持ち薄れていくのを覚える。

第十四幕：総大将の頼み（後書き）

張飛の字である「益徳」を「翼徳」と書いてしまったので修正します。

第十五幕：雨と姫君

翌日から劉備が指揮する義勇軍は戦に出ない事になった。

理由は劉備自身が教え義勇軍はそれを聞き入れた。

だが、中にはやはり出たいと言う者も居たのは言うまでもない。

「ああ……くそつ。何で戦に出れないんだよ!!」

大柄な身体を椅子からはみ出した形で座り瓶子ごと口へ運ぶ。

ゴクツ、と豪快な音を立て口元から僅かに漏れた酒が立派な虎髭を濡らす。

それを裾で拭き取る仕草が実に男らしいが粗野にも見えてしまうのは容姿だけのせいではない。

男の名は張飛。

字は益徳で劉備の義弟である。

愛用する武器は“蛇矛”と呼ばれる代物で柄が長く先の刃が蛇のように曲がっている事から名付けられた。

これは義兄である劉備と桃園で誓いを立てた時に授かった品だ。

彼にはこれが宝物だった。

これを片手に戦場を駆け敵将を上げて義兄である劉備を助けたい。

その一心でこの戦いにも参加したのに出れない。

彼が苛立つのも無理はなかった。

「夜姫様を護る為とは言え・・・胸糞悪いぜ」

「益徳。声に出すな」

天幕が開けられて一人の男性が中に入り張飛を戒めた。

立派に手入れされた顎髭が特徴的な男・・・関雲長だった。

劉備の義弟にして張飛の義兄である。

「だがよ、夜姫様が居なければ俺たちは戦えるんだろ？」

「そうだ。だが、袁術殿の言い分は尤もだろ。それに我々にも欠点がある」

自分は傲慢でお前は思慮だと関羽は口にする。

「それは知ってる。しかしそう簡単に直せるものじゃないだろ」

「それはそうだが、酒で気を紛らわせるのは感心できないな」

「こんな時は酒でも飲まないとやってられねえよ」

「・・・」

関羽は義弟である張飛の言葉に無言で圧力を掛けた。

彼の言いたい事は判っている。

織星夜姫の存在が自分達の行動を抑制しているのだ。

ハッキリ言えば彼女の存在は……………

「邪魔、だな」

「夜姫様がか？」

張飛は瓶子を左手で持ちながら訊ねた。

「……………あの方が居る為に我々の行動は抑制されている」

「そうけどよ……………さっき口にするなど言ったのに自分で言っ
てど
うするんだよ」

「すまない……………どうも、今日は気分が悪い」

関羽は息を吐いて額に手を当てた。

「俺もだ。あーあ、夜姫様がここから出ていけば俺達も戦えるの
になー」

彼は思わず言ってしまった。

これが彼の思慮に欠ける所だ。

カラン・・・・・・・・

乾いた・・・棒が落ちる音がして二人は天幕から出た。

「あ・・・・・・・・」

可愛らしい、少しでも力を入れれば折れてしまうような弱い声でした。

二人は何を言えば良いか分からないでいる。

目の前に立つ人物は先ほど邪魔と言っていた人物に他ならない。

立っていたのは夜姫だったのだから。

夜姫は空虚な眼差しで二人を見つめている・・・だが、震えている。

『聞かれていた』

瞬時に二人は悟った。

「や、夜姫様、あ、あの・・・・・・・・」

関羽は夜姫に一步近づいたが、それに気付いた夜姫は一步後ろへ下がる。

「わ、わたし・・・・・・・・」

「夜姫様、あ、あの言葉は・・・・・・・・」

張飛もまた瓶子を左手に持ったまま酒臭い息を吐きながら先ほどの言葉を説明しようとした。

「……ごめんなさい」

夜姫はそれだけ言うと走り出した。

二人はその後を追いかけてしようとしたが出来なかった。

背を向けて走り出した夜姫の瞳から……真珠が出るのを見てしまったから……

『……』

去ってしまった夜姫の背を見ながら二人は立ち尽くす。

関羽の足元には夜姫が落としていった棒がある。

それを関羽は拾おうと身を屈めたが、手に取れなかった。

「……」

自分がこの棒を手にとって良いのだろうか？

関羽は自問自答する。

先ほど夜姫の事を「邪魔」と言ってしまった。

彼女がここに来てからというものの自分達の行動は大きく抑制された

“ 姫さんが邪魔、か・・・あの糞共と同類なのか？”

もし、そうなら・・・

“ とんだ見かけ倒しの英雄様だな。女を泣かせるのが英雄なら立派な英雄だが、な”

何処までも皮肉を込めて声は二人を蔑んだ。

それでも声は二人に聞こえないから幸いと言えるか？

“ 爺が居たら直ぐにでも殺すだろうな。とは言え、ここに居るのはあいつだけ・・・果たしてどうなる事やら・・・”

それだけ言うと声は途絶えた。

そこから場面は夜姫の方に変わる。

『・・・夜姫様が居なくなればな—』

『邪魔、だな・・・』

夜姫は何処をどう走ったのか分からないでいた。

しかし、それでも走り続けていた。

眼が見えないから転んでしまう事が数度もあった。

それでも彼女は走り続けた。

一刻も早くあの場から逃げ出したかったのだ。

今朝、彼女は少し遅めに起きた。

フエンリルは未だに寝ており起こさないようにして天幕から出た彼女は典医などを探そうとしたが、思い直し偶には一人で歩こうと思いい行動した。

一人で歩いているとまるで自分一人だけしか居ないという錯覚を覚えるが、逆にそれが懐かしい気持ちで心が幾分か安らいだのも事実である。

そんな彼女だったが、ふいに声がしてそちらへ足を運んだ。

誰かの天幕だろうか？

声には聞き覚えがある。

劉備の義弟である関羽と張飛の声だ。

今にして思えば彼等二人と話した事はそんなに無い。

良ければ話してみようと思いい天幕へ行こうとした時に……聞いてしまった。

聞こえてしまったのだ。

彼等の言葉を……

『夜姫様は……邪魔だな』

『あーあ、夜姫様がここを出て行ったら戦えるのになー』
そう聞いてしまった。

『私が……邪魔、私が居なくなれば……』

無意識に首に掛けた指輪を握り締める。

その間も会話は続いていく。

やがて彼女はそこから離れようと遅くも理解した。

しかし、そこで棒を落としてしまい二人を天幕の外へ出してしまふ。
二人の驚いた声が聞こえ、何を言えば良いか判らずに戸惑ってしま
い、彼等もまた戸惑った。

「や、夜姫様、あ、あの……」

関羽が取り繕うような声を出すと同時に近付く気配を感じ一歩下がる。

何故……下がったのか？

恐らく怖かったのだ。

また……何かを言われるのが。

「や、夜姫様、あ、あれは……………」

張飛もまた謝罪の言葉を口にしようとする。

それを自分は阻止した。

聞きたくない。

聞きたくなかった。

謝罪の言葉など。

寧ろ自分が謝るべきなのだ。

だから……………」

「……………ごめんなさい」

夜姫は足を止めて謝罪した。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……………」

何度も何度も夜姫は謝った。

誰も居ないのに、謝り続ける。

空虚な瞳からは絶え間なく涙が溢れ出て大地を僅かに濡らした。

そして膝を着いて泣きながら謝り続ける。

雷雨の音が聞こえた。

ポツ・・・ポツ・・・ポツ・・・ポツ・・・

雨が頬に当たり、一気に土砂降りの雨が降り出す。

まるで彼女が流す涙だ。

絶え間なく溢れ出す涙。

そんな雨の中でも彼女は泣きながら謝り続けた。

許しを乞うた。

先日、自分は頑張ると誓った。

それなのにもう謝罪の言葉を口にしてしまつとは……………

「ふっ・・・くっ・・・ふえ……………」

涙が止まらず必死に止めようとするが、駄目だった。

そして彼女は雨が降る中・・・倒れてしまった。

倒れた彼女に容赦なく雨は降り注ぎ体温を低下させていく。

だが、その雨が彼女には心地よかつた……………

『あの時』、と同じね・・・あの時も雨が降っていたのだから
あの時も自分を容赦なく雨は打ちつけて体温を低下させて死へと誘
った。

『今度は・・・ちゃんと連れて行って・・・もう、死んで良いや・・・』

そう願う夜姫は意識を手放した。

「・・・雨、か」

自分の陣を馬に乗り一人で進んでいた孫堅こと文台はとつぜん降り出した雨に眉を顰めながら天幕へ戻ろうとはしなかった。

別に雨が降ろうと関係ない。

今回の見回りは理由と言える物は無い。

ただ少しでも見回りをして部下達が問題を抱えていないか調べているというのが表向きの理由と言える。

雨が降る中で馬を進めていると、ふいに馬が鼻先を前に出した。

「どうした？」

孫堅は馬に訊ねながら前を見ると誰かが倒れているのが見えた。

銀と紫が上手い具合に混ざり合った髪には見覚えがある。

「夜姫様っ」

急ぎ馬の腹を蹴りそこへ行き夜姫を抱き起こす。

「夜姫様。どうさないました？」

声をかけるも返事はなくグツタリとしている。

頬を叩くと僅かに呻いたからまだ生きてはいる事は確認できた孫堅は急ぎ馬に乗せて天幕へと戻った。

天幕へ戻った孫堅が夜姫を抱いている事に部下達は驚いたが孫堅はそれを尻目に指示を出す。

「直ぐに温かい食べ物と布に衣服を用意しろ」

指示を出してから孫堅は夜姫を自分の天幕へ連れて行き寝台に寝かせた。

「こんなに濡れて・・・涙まで流していたのか」

見れば夜姫の臉は僅かに赤いし水滴を少し舐めてみると塩の味がしたから涙を流したんだと判断できた。

「殿に何かされたのか？」

自分の主人である袁術に何かされたのか？と一瞬だが思った孫堅だが直ぐに自分の考えを否定した。

今の袁術は夜姫にそんな事はしない。

となれば劉備か？と思うが劉備もまたそんな男ではない。

では誰だ？と孫堅は思ったがそこへ部下が来たから思考を一時中断する。

「殿、夜姫様はどうですか？」

「起きん。そなた、今から袁術様の所へ行き連絡してくれ」

「分かりました。しかし・・・綺麗な方ですね」

「ああ・・・娘もこれ位お淑やかな性格ならな・・・」

部下は孫堅の愚痴とも言える言葉を敢えて聞かなかった事にして天幕を後にし袁術の陣へと向かった。

その袁術は劉備と共に関羽と張飛を尋問という名の暴力を振っていた。

「この馬鹿者が！！」

バキツと音がすると同時に僅かな血が白い天幕を赤く染める。

殴られたのは関羽だった。

その横では張飛が唇から血を流して座り込んでいる姿が見えた。

恐らくこれを見れば何が遭ったんだ？と誰もが首を傾げる事だろう。

しかし、諸葛亮、劉備、閻象は激昂する袁術とは対照的に至極冷静だったが、逆にその冷静さが激昂する袁術よりも遙かに恐ろしい印象を与える。

「貴様等は馬鹿だ。夜姫様が居なければ戦えるだと？愚か者！夜姫様が居るからこそ他の兵達は奮い立ったのだ。それを自分達のように戦えると思っていたのか？貴様等のように皆が強い訳じゃない。この傲慢に満ち溢れた愚か者共が！！」

関羽をまた袁術は殴った。

かれこれも数十分以上は関羽を殴り続けているから袁術の手も限界を迎える。

「殿。もうそこ等辺で……」

閻象が血で汚れた袁術の手を止めた。

「離せ！この愚か者を殴らんと私の気がすまん！！」

「それは私も解かっております。ですが、この二人は劉備殿の義弟です。ここは義兄である劉備殿に最終処罰は与えるべきかと思いません」

閻象はやんわりとした動きで袁術を止めたが、戦う者から見れば見事に彼の動きを止めていると直ぐに判る。

「ええい離せ！こいつを殴らんと気がすまん！離せ！！」

ジタバタと暴れる閻象を尻目に劉備は関羽と張飛を冷たい眼差しで

見た。

夜姫には一度さえ見せた事が無い冷たい瞳に二人は固唾を飲み込み言葉を待つ。

「二人とも。いま決める。この場で私に斬り殺されるか、それとも自ら命を断つか」

『！！』

この言葉に二人は唾然とした。

まさかそこまで言われるとは思ひもしなかったのだろうが、それこそこの二人の欠点を物語っていると云えるだろう。

「私は夜姫様を実の娘と思っている。その娘と思っていた方を義弟二人に蔑まされたのだ。親として見過ごす訳にはいかん」

劉備の言葉に皆は驚いたが、今にして思えば劉備の行動などは夜姫を護る事に直結しているがその態度はまるで娘を護る親のようにも見えたと今になって納得した。

「さあ、決める。私の剣で殺されるか、自分で命を断つか」

劉備が鞘から剣を抜こうとした。

眼には迷いが見えないから本気だと二人には判った。

「あ、義兄者つ。ま、待ってくれ」

張飛が劉備に駆け寄り勢いで彼に懇願するように口を開いた。

「あ、あれは……………」

「言い訳は無用だ。しかも謝る相手が違う。しかし……申し開きなら聞いてやる」

せめてもの慈悲だろう……劉備はかたい声で言い張飛はそれでも聞いてくれると判り喋り出した。

関羽の方は覚悟を決めたのか腰を据えている。

「確かに夜姫様に言った言葉は……否定できねえ。夜姫様が居るから俺たちは戦えないんだと思ったんだ」

「私もです。義兄者」

関羽が張飛の言葉に頷いた。

「私も夜姫様が居なければ、と思いました。確かにあの方は我々に力を与えてくれた。だが、同時に我々を縛る“鎖”でもあります」

「それに俺は酒を飲んでいて、それで……………」

『言い訳だな』

誰かの声がして皆は振り返ったが、誰も居なかった。

しかし、天幕がずれたのは確かだ。

下を見たら黒い狼……フェンリルが居た。

『言い訳だ。この愚か者が』

フェンリルが人語を話したので皆は驚いたがフェンリル自身は気にしていない様子で喋り続けた。

『貴様等は姫君を鎖と称したが言語道断。あの方の事を何一つ知らない馬鹿共が姫君を愚弄するな』

「しゃ、喋れるのかよッ」

張飛が驚きフェンリルを見るが彼の方は氷のように冷たい眼差しを向けた。

『我を誰と思っている？我が名はフェンリル。姫君の従順な下僕にして獲物を何処までも追い掛けて仕留める魔狼だ。その我に貴様ごとき餓鬼が口を開くな。胸糞悪い』

「が、餓鬼だと？」

張飛は狼であるフェンリルに餓鬼呼ばわりされて怒りを覚えたがフェンリルは言い続けた。

『我から見れば貴様を含めた人間など年端も行かない餓鬼だ。しかし、貴様の場合は赤ん坊だな。酒に溺れ思慮に欠ける。だからこんな展開を自ら作り上げたのだ』

そこの偉そうに髭を生やした男も、だとフェンリルは鬨羽を見た。

『貴様も偉そうな髭を生やしているが貴様の傲慢を象徴しているよ
うなものだ。この猪のような餓鬼と同類だ』

「失礼だが、そなたはどうなのだ？たびたび夜姫様を護る為とは言
え将達に喧嘩を売る真似をしたではないか」

関羽はフェンリルの一方的な言葉に憤りを覚えながら言い返した・
・だが、フェンリルは鼻で嗤った。

『姫君が無事なら構わん。我の役目は姫君に近付く男共を一匹残ら
ず喰い殺すのが役目だからな』

「では、この軍が崩壊しようとは構わないと？」

『我には関係ない。それに栄光と衰退は国にとって当たり前だ。こ
の漢王朝もまたそうだ。ある意味では董卓という男が出て来るのも
それを物語っていると思うが？』

これに皆は黙った。

フェンリルが言っている事は的を射ているのだ。

国が栄えて衰退する事は当たり前で何時までも栄えることなど有り
得ない。

そして漢王朝は衰退の道を辿り続けており董卓の様な男が出て来る
時点でもはやそれは末期だと物語っている証拠だ。

『話を戻すが、我は貴様とその男を許さん。この場で・・・貴様等
二人を喰い殺す』

そう言うやフェンリルは牙と爪を見せて関羽と張飛に跳び掛ろうとした……だが、寸での所で止まった。

“ 止めておけ。 姫さんが怒るぞ ”

誰かの声がした。

この声は……………

「 道化か？ 」

劉備が声に訊ねると声の主は頷いた。

“ おいフェンリル。 もう少し冷静になれよ。 その二人を食ったって 姫さんの悲しみは癒えないぞ ”

『 また貴様か。 我は姫君を悲しませる者は誰だろうと許さん。 ヴィザーツに敗れ息絶えようとした我を助けた姫君は恩人だ。 その恩人を悲しませる者は敵だ。 そしてこの二人は姫君を悲しませた。 我に喰い殺されて当然だ 』

“ そうだが止めておけ。 姫さんはそれを望んでいない。 それにそいつらはまだ戦う身だ。 俺らに代わって、な ”

まだ自分達は来れないからこいつらはその間の護衛役という名の“ 繋ぎ ” だ。

『 こんな欠点だらけの者が護衛役を務められるとは到底思えんな 』

何処までもフェンリルは関羽と張飛を蔑み二人は何か言おうとしたが何も言えなかった。

“欠点があるから人間なんだよ。まあ……こいつらの行いは許せるもんじゃないが。殺すな”

『それでは私の気が治まらん』

“それでも抑えろ。それより姫さんを探さなくて良いのか？”

『姫君の居場所など当に知っておる……江東の虎の巢だろ？』

「孫堅の陣に夜姫様は居るのか？」

袁術がフェンリルに訊ねた。

『居る。そしてもう直ぐその部下が来る』

夜姫が孫堅の陣に居る事を伝える為に。

“髭の餓鬼と魚の餓鬼、お前等……姫さんに言った言葉に後悔しているか？”

道化は関羽と張飛に訊ねた。

『している』

二人は頷き劉備達に頭を下げた。

「義兄者、私が軽率だった。殺すなら殺してくれて構わない。だが、

その前に夜姫様へ謝罪させてくれ。それから私を殺すなら殺してくれ」

「俺もだ。義兄者。頼む、どうか夜姫様に謝罪してから俺らを罰してくれ！」

二人は袁術が彼等にしたように土下座した。

「・・・良いだろう。もし、夜姫様がそなた等を許すならそれで良い。許さないと言ったら殺す。それで良いか？フェンリル殿」

劉備はフェンリルに訊ね彼は二人を見てから頷いた。

『良いだろう。この餓鬼どもはそなたの義弟だ。そなたがそれで良いなら構わん。ただし、姫君が許しても我は許さん。何かしらの罰は与える』

「分かっております」

劉備が頷くと、まるでそれが合図だったかのように天幕に兵が入って来て孫堅の部下が来た事を伝えた。

「通せ」

「失礼します」

孫堅の部下は天幕に一同が揃っている事に些か驚きながらも要件を伝えた。

「直ぐに行く」

「では、私が先導します」

袁術が答えると兵は一礼し天幕を出て行き、また彼らだけが残ったが直ぐにまた彼等も天幕を出た。

袁術、閻象、劉備、関羽、張飛という順番で馬に乗り兵が先導し進むがフェンリルは関羽と張飛をまるで狙っているかのように隣を歩く。

そして時たま馬を刺激しては彼等を落馬させようとする。

食い殺せないが、これ位はせめてものばかりに行動だ。

本当なら馬ごと彼等を食い殺したい気持ちを抑えている証拠であるから劉備達は何も言わなかった。

もう雨は止んでいるが・・・夜姫の雨は未だに止んでいない。

それを袁術達は感じながらも孫堅の陣へ馬を進めた。

幕間・江東の虎と月の姫（前書き）

更新が遅れました！！

レビューを書いてもらったお陰でお気に入り登録数などが多くなり
嬉しいです。wwww

ですが、どうも最近はやっと書けなかったので遅れました。（汗）

幕間：江東の虎と月の姫

私は自分の寝台で眠る娘……織星夜姫様を見ていた。

規則正しい寝息を立てながら眠る夜姫様は私の娘より少し年上だが夜姫様の方が年下に見えてしまうのは性格のせいか？

まだ本の数回しか話した事はないが可憐という言葉が似合う性格であり容姿だとは判る。

誰に対しても礼儀正しく、相手が誰だろうと自分が世話になっている者を侮辱されたら怒る。

だが、時節……分からない行動を取る時もあるし、とてつもない行動を取る事もあるのは未だに判らない。

一緒に陣に居る劉備殿と袁術様も判らないのだから離れた陣に暮らす私には尚の事だ。

しかし、こんな娘なら眼に入れても痛くないほど可愛い……溺愛するだろうなと思ってしまう。

私の娘は女だてらに腕っ節が良い。

それこそ下手な男よりも強いから親としては悲しい事だ。

渾名が“弓腰姫”という女として悲しい渾名を持っているから自ずと想像できる筈だ。

小さい頃に何か欲しい物はあるか？と訊いた時など……

『男物の衣装に剣と弓が欲しい』

と言ったのだ。

あんな風に育てた覚えなど無い。

それなのにどうしてあんな娘に育ったんだ？

上に兄が二人いるからその影響が強いのかと思ってしまっが、それでも女らしく教育した。

それなのにどうして……

溜め息を吐かずにはいられない。

夜姫様を見れば尚更だ。

きつとこの方を娘として儲けた父親は誇りに思っていただろうな。

こんなに綺麗で大人しく相手を立てる娘だ。

何れは何処ぞへ嫁にやらなくてはと思いつながらも溺愛する事だろう。
・私ならそうする。

と自分の考えを片隅へ置いて私は夜姫様が何故あんな所で一人いたのか考えた。

何時もなら護衛として誰かが居るし典医も居る。

それなのにあの時は居なかつた事は疑問だ。

しかし、幾ら考えても答えは見つからない。

「う．．．ん？」

夜姫様は空虚な眼を開けて当たりを見回す。

「気が着かれましたか？」

私が声をかけると声のする方向へ視線を夜姫様は向けて掠れた声で訊ねてきた。

「そん、けん様、ですか．．．．？」

「はい。一体どうなされたのですか？雨の中で倒れておりましたが．．．．．」

「．．．．．」

私の問いに夜姫様は無言で答えなかつた。

しかし、何か良からぬ事が遭つたんだとは無言で理解できる。

「お話し出来ないのなら良いですよ。先ずは着替えましょう。それでは風邪を引いてしまいます」

私が指摘すると夜姫様は可愛らしいくしゃみをした。

それだけで何で自分の娘は……とついつい比べてしまう。

悪い事だと思いながらも比べてしまうのは男親の心理と言うものか？

下らない事を考えるのは止めて私は腰を上げた。

「私は出て行きますので、ご自分で着替えは出来ますか？」

生憎と私の陣に女は居ない。

いや、何処の陣にも居ないからこういう事は夜姫様一人で行ってもらうしかない。

まさか私や部下達にうら若き女性の着替えを手伝わせる訳にもいかないからな。

「大丈夫、です。あの……ありがとうございます」

夜姫様は去ろうとした私に気付いたのか呼び止めて礼を述べてきた。

「いいえ。礼を言われる程ではありません」

私は見えないのに苦笑して天幕から出た。

もう雨は止んでいたが、地面は抜かるんでおり少しでも力を抜いたら足を取られそうだ。

「殿……袁術様達が参りました」

部下が袁術様達が来た事を伝えに来て前を見れば馬に乗った袁術様

達が見えたと同時に一直線に走って来る黒い狼……フェンリルの姿も見えた。

フェンリルは疾風の如く私の横を通り過ぎて夜姫様の居る陣へ入ってしまい、軽く夜姫様の悲鳴が聞こえたが直ぐに「貴方だったの」と安堵の声が聞こえてくる。

「主人想いな狼ですね」

私は下馬する袁術様に話すと袁術様は「そうだな」と険しい顔で相槌を打った。

「どうかなさったんですか？」

見れば劉備殿もまた険しい顔だったが、義弟である関羽殿と張飛殿は顔が痣だらけで沈んでいるではないか。

「夜姫様はその陣か」

袁術様は私の背後にある天幕を見て訊ね私は頷いたが「ただいま着替え中です」と言い入るのを待たせた。

「そうか。孫堅。夜姫様の御身体に何か異常は？」

「いえ。ただ、雨の中で倒れていたので軽くくしゃみはしました」

「……雨の中で、か」

「何か心当たりがあるのですか？」

袁術様の口ぶりから私は指摘したが袁術様は無言で関羽殿と張飛殿を顎でさした。

「この愚か者が原因だ」

「愚か者、ですか……?」

どういふ事かサツパリ判らない私に劉備殿が近付き「義兄である私から全てお話します」と言ってきた。

立ったまま私は劉備殿の話聞いたが最後まで聞き終えた時は怒りで震えていた……

「……些か、お二方を買ひ被り過ぎましたかね」

私は厳しい眼差しを関羽殿と張飛殿に向けて重い声で言った。

夜姫様が足手纏い……夜姫様が居なければ戦える……居なくなれば……

この二人は夜姫様をそう言ったらしく、運悪くそれを本人に聞かれてしまったようだ。

だから、あんな雨の中で一人倒れていたのかと納得するが怒りの方が強い。

「貴方達は夜姫様を何だと思っているのですか？」

私は二人に訊ねたが、答えを言う前に言葉を放った。

「夜姫様は天の姫です。しかも眼は見えない上にたった一人。その夜姫様を追い出すような言葉を放つとは呆れ返ったものが言えませんね」

夜姫様は天の姫で本来ならばこんな血みどろの乱世に来るべき方ではない。

だが、どう言う訳か来てしまい眼が見えない上に共も友人も誰も居ないという状況に陥ってしまった。

それでも前を向いてひた向きに生きようと・・・私たちの邪魔にならないようにしているのにこの二人は邪魔者扱いする言葉を言った。

これは武将云々よりも男として恥ずべき事だと私は断言した。

『・・・・・・・・』

二人は何も言わずに顔を俯かせた。

「孫堅様、着替え終わりました」

天幕の中から控え目に私を呼ぶ夜姫様の声が聞こえ私は直ぐに天幕の中へ戻る事にしたが、一度だけ振り返り袁術様達に待つように眼で言った。

「誰かとお話していたのですか？」

夜姫様は私が渡した赤い生地を主体とした服を着て寝台に腰を下ろした状態で訊ねてきた。

その足元にはフェンリルが座り私を見上げているが敵意は感じられない。

「はい。袁術様達が貴方様を探しに来ました」

「……関羽様と張飛様も一緒、ですか？」

「はい。夜姫様、どうなさいますか？」

「どう、とは……？」

「ここは私の陣。もし、貴方様が会いたくないと言うのなら追い返します」

出来るなら会わせたくないとは思っていた。

夜姫様は娘とそんなに歳は離れていないからついつい娘と見てしまふ。

まだ殆ど会話らしい会話もしていないのだが、夜姫様を見ていると父性本能とも言える感情が出て来るのだ。

例えば言うなら娘を泣かせた男が謝りに来たとしよう。

その男を父親が見たらどうする？

私なら即座にその男を追い出す所か殺す。

娘を泣かせた者は誰だろうと許さない、というのが私の中にある父親としての考えで夜姫様にはその感情を出してしまうのだ。

「どうなさいますか？」

「・・・入れて、下さい」

フェンリルが顔を上げて夜姫様をマジマジと見つめるが、明らかに「入れさせたくない」と言う眼でそれが印象的だった。

「・・・宜しいのですか？」

私は確認としてもう一度だけ訊ねると夜姫様は頷いた。

「入れて下さい。私も言いたい事があるので」

「・・・分かりました」

私としては出来るならば入れたくない気持ちだが夜姫様本人の頼みを無視する訳にもいかないので仕方なく了承した。

天幕から出て袁術様達を入れるが関羽殿と張飛殿は止めた。

「もし、ここで夜姫様をまた愚弄するような事を言ったら・・・この陣から生かして帰さない、と言っておきます」

もはや父親としての気持ちだったが、それはそれで良いと開き直る。

関羽殿と張飛殿はこれに驚いたが直ぐに了承してくれた。

そして中に入る。

夜姫様はフェンリルを撫でながら虚ろな瞳で関羽殿と張飛殿を見て、二人もまた夜姫様を見たが直ぐに土下座をした。

『申し訳ありません!!』

声を張り上げて額を地面に擦りつけて二人は夜姫様に謝罪の言葉を口にする。

「夜姫様、俺が、俺が悪かった。あ、あんたを足手纏いなんて言ったのは取り消す!!」

「夜姫様。私も貴方様を邪魔などと言って申し訳ない。私がどうかしていた・・・どうか許して下さい」

二人はそれからも思い付く限りの謝罪を口にするが誰も喋ろうとはしなかった。

それは二人の犯した事が余りに大き過ぎたからかもしれない。

フェンリルは二人の謝罪を聞いても敵意を剥き出しにしているが、夜姫様は何を考えているのか分からない空虚な瞳で二人を見つめていた。

一体なにを考えているのか・・・

「夜姫様、失礼とは思いますが意見を言わせて頂きます」

袁術様がここで夜姫様に話し掛けた。

「何でしょうか・・・?」

「恐れながらこの二人は自分を過大とも言えるほど自己評価しております。だからこそ、こんな失礼を通り越して貴方様を侮辱する言葉を放ったんです」

その通りだと私達は頷き続きを聞く。

「ここはこの二人に何かしらの罰を与えるのが良いと思われませう」

「罰、ですか？」

「はい。本来ならば極刑を与えても良いです。ですが、貴方様はそれを望んでいないんですよ？」

「・・・はい。それに、私が邪魔と言うのも頷けます。だって、私が居なければ劉備様達も戦えるんですもん」

「それも一理あると言えます。ですが、義勇軍は私を始めとした軍に比べて貧弱です。仮に戦えたとしてもこの二人のような豪傑を除いて後は殆どが戦死し壊滅してしまいます」

それを鑑みれば夜姫様は兵達の命を救っているという事になるが、この二人はそれを知らない・・・気付かなかつた。

「それをこの二人は気付かず他の者も自分達と同じ強さを持っていると慢心した。それで兵達が死んだらどうなるか・・・」

「・・・」

最後まで袁術様は言わずに夜姫様もまた訊かなかった。

「夜姫様。確かに貴方様は戦においては何も出来なはずし、彼等の行動を止めている部分もあります。ですが、決して貴方様は邪魔ではありません。私はそう思っております」

袁術様はそう言ってから罰は何にしましょうと訊ねた。

「・・・不問にする、というのは・・・」

「夜姫様。お気持ちは理解できますが、それではまた同じような事が起こり得ます。それを阻止する為にもここは何かしら罰を与えなくてはいいけません」

「そうです。何より義兄である私が不問など許しません」

劉備殿がここで口を開いた。

「私は、夜姫様・・・貴方様を娘のように思っております」

「私を娘？」

「はい。恐れながら私はまだ子を儲けた事はありません。ですが、もし、貴方様のような娘を持ったら・・・と思うとこの二人の行動は義兄として、父親として許せません。ですからここは罰を与えたいと思います」

「夜姫様。殿は信賞必罰は当然と考えておられます。私もその意見に賛成ですが」

諸葛亮殿もまた口を開いた。

「信賞必罰があつてこそ人の世界というのは出来ているのです。特に軍ではそれが顕著な程に必要なのです。もし、これを不問にしたらまた次の者が出てしまう恐れがあります」

それを防ぐ為にも罰を与えなくては示しづかかないと諸葛亮殿は実
に的を射た言葉を放った。

「・・・・・・・・・・」

夜姫様はそれを聞いて無言となり何かを考えている様子だったが、
恐らくどんな罰を与えるのか考えているのだろう。

私なら極刑を与えても良いと思うが、それでは戦力が低下してしま
う事を考えると命までは取らないが厳しい罰を与えるのが望ましい
と思った。

フェンリルもまた夜姫様の言葉を待っているかのように夜姫様を見
続ける。

「・・・・・・・・では、罰を与えます」

夜姫様の眼が変わった。

空虚な瞳が金色の色へ・・・月の色へと変化した。

あの瞳は・・・・・・・・

「関雲長、張益翼。そなた達二人に罰を与える・・・顔を上げよ」

夜姫様の声もまた先ほどまでの声と違うが、誰もが口を開けないでいた。

名を呼ばれた二人はまるで糸で操られる人形のように顔を上げたが顔が、身体が吹き飛んだ。

何があつたのか分からなかったが二人の方を見て分かった。

二人の顔には“赤い花”が咲いていたのだ。

「これが罰よ。少々力を込めたから・・・7日間ほどは消えないわ」
何処へ行こうとその痣が見える、と夜姫様は言った。

つまり戦に出る時もこの赤い花を敵に見せる訳で、ある意味では女に叩かれたという事を知らせるという事だ。

これはかなり厳しい。

罰と言えば痛くて酷いものと想像するが、これもまた男から言わせれば酷い罰だと言わざる得ない。

「袁術、劉備。これで良しとしましょう。良いわね？」

夜姫様は二人を呼び捨てにしなからこれで終わりと告げた。

「で、ですが・・・」

袁術様が食い下がろうとする。

「私は良いと言ったの。侮辱された私が許すの。それで良いわね？」
強い口調で同意しろと夜姫様は求め袁術様は仕方ないとばかりに頷いた。

劉備殿もまた自分が言っても無理と判ったのか夜姫様が言う前に頷き従うのだが、フェンリルだけは違っていた。

「フェンリル。私はこの二人に侮辱されたけど、こんな侮辱は何時もの事でしょ？」

フェンリルの毛を撫でながら夜姫様は月の瞳で見るが、フェンリルは納得できない顔をしている。

「貴方の気持ちは嬉しいわ。でも、これ位で怒って極刑にしていたら切りが無いわ。それに私自身が良いと言ったのよ。それを部下であり家族である貴方は納得できないの？」

両手でフェンリルの顔を固定して訊ねる夜姫様にフェンリルは二人を一瞥してから小さく頷く事で納得した・・・ように見えた。

「良い子ね。さあ、これで終わり。帰るわよ」

夜姫様はそれだけ言うと寝台に倒れた。

一体なにが何なのか分からない・・・だが、今の状況は把握できる。

「袁術様。今宵は、私の陣にお泊りになられますか？」

「・・・そうする」

袁術様は夜姫様を寝台に優しい手付きで寝かせてから関羽殿と張飛殿を見て冷たい言葉で言った。

「・・・夜姫様の寛大な御心に感謝するんだな」

第十六幕：堅牢と奇抜

江東の虎という異名を持つ孫文台の陣。

彼の陣は主人である袁術の陣からさほど離れていないが馬の足では、
だ。

人の足で行くとかかなり離れている距離で何かあれば支障が来す恐れ
がある故に袁術の腹心と言える閻象は袁術の陣に居た。

本来なら袁術の共として行こうと思ったが、もし不測の事態に陥っ
た事を考えて居残りとして陣に留まったのだ。

それは正解だった。

「そうですか・・・殿は孫堅殿の陣で泊りますか」

その閻象は孫堅から派遣された兵の話聞いて相槌を打った。

「はい。明日には天の姫と共に帰るとの事です」

「分かりました。もし、何か殿が失礼な事をしたら遠慮なく罰して
下さい。鞭で叩くなり素っ裸にして縄で縛るなりそちらに好きなよ
うに罰して結構です」

それは部下としてどうなのだ？と問いたくなるような言葉に兵は適
当な相槌を打つ事で誤魔化し閻象に一礼し陣を出た。

「・・・はあ」

閻象は一人になると嘆息した。

「殿にも困ったものだ」

袁術に仕えてから早数十年。

どれだけ袁術の我儘とも言える言動を戒め頭を悩ませた事か……

しかし、今は頗る良い方向へ進んでいる。

「夜姫様の存在が殿にあれだけ影響を与えると、な」

織星夜姫……義勇軍の陣へ降りたもとい落ちた彼女の存在はこの陣を始め多大な影響を及ぼしているのは明白だ。

特に袁術が受けた影響は計り知れない。

最初こそ美しいから、天の姫だから、とあからさまな言動を繰り返すその度に自分が戒めたものだが今はそんな感情がまったく無い。

「やはり平手打ちされて改心したんだな」

女性の胸を布越しとは言え鷲掴みにしたのだから平手打ち所かもっと酷い事をされても当然と考えていた。

しかし、そのお陰でああいう性格になったのだから御の字と言えるが失礼極まりない事をしたのだからキツチリとそこ等辺は埋め合わせという罪滅ぼしをしてもらおうが。

それはそうと・・・・・・・・

「董卓軍は果たしてどう出るか・・・だな」

董卓軍は未だに健在だ。

こちらの方が兵の数は多いが質で言えば向こうの方が上だ。

呂布とその配下は優れた騎馬戦術を誇っている。

騎馬を討ち取るのは容易ではないが幾つか方法はあるにはある。

とは言っても落馬させたから容易に討ち取れるか？と問われると何とも言えない。

どうするべきか・・・・・・・・

思索している閻象だったが、背後から気配を感じて気を背後へ向けた。

「誰だ？」

『・・・・・・・・私です』

閻象は天幕の外から聞こえた声で潜り込ませた兵・・・間者だと判り声を響めた。

「・・・・・・・・董卓軍の様子は？」

『呂布が負った傷は深くないのかまた出陣します』

天の姫にやられたのがよほど頭に來たのか必ず首を討ち取ると意気込んでいるらしい。

「華雄の動きはどうだ？」

華雄は胡軫の配下に居る副将だが軍を纏めているのは華雄の方だ。

胡軫は武勇の腕がある・・・しかし、人望に欠けるから兵達を掌握するには無理なため華雄がそれを補っている。

彼から見れば華雄の方が兵達に与える影響は大きいと踏んでいるから問者には華雄を重点に調べると申しつけていたのだ。

『ハツ。董卓と何やら頻繁に話し合っております』

「董卓と？二人だけで、か」

『はい。ただ・・・都を捨てる云々を話しているとは噂程度ですが広まっております』

「都を捨てるだと？・・・なるほど、そういう事か」

閻象は都を捨てると言う事に疑問を覚えたが、直ぐに納得したように頷く。

今の都・・・董卓たちが居る所は洛陽だ。

“周”の時代に生きた王である“平王”が戦乱で荒廃した鎬京・・・

・長安から都が移され政治経済の中心地となり都城が出来たのが始まりである。

だが、長安に比べて防衛に関しては良くない。

本来ならば直ぐにでも引き払い長安へ逃げるべきなのだが生まれ育った土地を捨て長安へ移動するとなれば並大抵の事ではないし民達もそれを嫌がるだろう。

しかし董卓なら強引にやりかねない。

それは予想できるが他は予想できない。

彼は堅牢な策より奇抜な策を好む。

理由は相手の予想を外させ度肝を抜くのだ。

『何を考えている……………?』

この時に閻象は何か嫌な前触れが胸を走る気がした。

それは現実と化するのはまだ先であるが。

場所は変わり孫文台の陣に移る。

「困った子ね……………」

夜姫は自分から離れようとしなない黒い毛の狼……フェンリルの毛を撫でながら嘆息した。

この陣に来てからフェンリルは片時も離れようとしなない。

何処かに行こうものなら付いて来て留守番を言い渡しても言う事を聞かないのだ。

今もそうだ。

孫堅に皆へ夜姫を紹介したいという事で宴を開くと誘ってきたのだ。

それに夜姫は頷いたが、フェンリルはそれを拒否するように首を横に振って袁術がそれを伝えた。

それを知った夜姫は「じゃあ、お留守番して」と言うがフェンリルは嫌だと首を横に振る。

押し問答がかれこれ小一時間ほど続き宴の準備が出来てもいけない状態なのだ。

「フェンリル。ここは私達の住んでいる陣じゃないのよ。宴に行きたくないなら大人しく留守番していて。ね？」

夜姫は撫でるのを止めてフェンリルに頼むが、フェンリルは首を横に振り夜姫の膝に深く顔を埋めて夜姫を嘆息させる。

夜姫自身も行かせない気であるのが丸分かりだ。

「どうして貴方は我儘なの？」

フェンリルに問うが彼が答える訳も無く、ただ夜姫を見上げるだけだったがその瞳は逆に夜姫に問いを投げているように見えた。

『なぜ貴方はそこまで自分を押し殺すのですか？』

と問い掛けているように見えるのが不思議だ。

「夜姫様。この状態では仕方ありませんから、また後日で良いですよ」

見かねた孫堅が夜姫に言うが、夜姫はそれを拒否した。

「ですがもう宴の準備は出来ているのですよね？」

「ええ・・・まあ・・・」

それ以前にもう始まっているのだ。

関羽と張飛は夜姫に叩かれた痕を残す顔で宴に行っている。

それは孫堅がまだ行けないので部下達の相手をさせる為に劉備がした事だが、二人から言わせれば周囲に恥を公表させるようなものだった。

何せ女の手で叩かれた痕が鮮明に残っているのだから誰に叩かれたかは自ずと知られてしまう。

しかも他人の陣だから酷いものだが、それだけの事を二人はやったのだと本人も自覚しているからこの場は良しとしよう。

「もう宴の準備が出来ているなら行かなければなりません。私を紹介すると皆に言ったのですよね？」

「ええ、ですが、貴方様はまだ起きて間もない。やはり今日は止めておきましょう」

「私は……」

夜姫が何か言おうとする前にフェンリルが顔を上げて唸り出した。

袁術達もそれに釣られて天幕の垂れ幕を上げて外を見て様子を見るが何も無く、ただ松明が立てられているだけだ。

しかし、フェンリルには何かが見えるのか唸り声を続けて夜姫を護るように立った。

「どうしたの？フェンリル」

フェンリルを大人しくさせようとするが、彼は言う事を聞かずに吠え出した。

「……夜姫様。少々お待ち下さい」

孫堅は袁術と劉備に眼で合図し天幕を出て周りを確かめるが、やはり誰も居ない。

それでもフェンリルが警戒しているのだから何かが来る……来て
いる可能性が高いと思う。

「……孫堅。宴に出ている将以外の兵達は？」

袁術は孫堅に低い声で訊ね孫堅もまた低い声で答えた。

「それぞれの場所に配置しており酒などは飲んでいません。それに何か起これば直ぐに誰かが私へ連絡して来る筈です」

それが来ないという事は……………

「既に何者かが侵入してきた、と考えるべきですね」

劉備が腰から剣を抜いて辺りを警戒しながら二人に告げた。

「天幕へ戻り夜姫様を警護する。孫堅、そなたは兵達を集める」

「御意に」

孫堅は頷いて兵達を集めに向かった。

袁術と劉備は周りを警戒しながら夜姫の居る天幕へと戻ったが、先ほどまで唸っていたフェンリルが大人しく夜姫の膝に顔を埋めているのを見て驚いた。

「さっきまでこの子ったら唸っていたのに大人しくなっただんです」

夜姫はフェンリルの頭を撫でながら虚ろな瞳を二人に向けて説明した。

「何だったんでしょうね……………?」

袁術がフェンリルを見ながら訊ねるが劉備は何となく察しがついた。……いや、袁術も劉備を見たから互いに察しがついたらしい。

『謀つたな』

夜姫が断固として宴に出ると言っただけで聞かないからそれを阻止する為に唸ったのだ。

そうする事で兵達は集まり夜姫はここから動かない・・・となれば宴には出れない事になるから阻止できる。

フエンリルを見ているとそんな考えが浮かぶ。

それから少し経ってから孫堅が屈強な部下を引き連れて戻ってきた。

「遅くなりました。何かありましたか？」

孫堅は袁術に詫びながら訊ねるも袁術は首を横に振って何も無かった事を伝える。

「そうですか。部下達にも様子を確認させましたが、特に異常はありませんでした」

「となればもう消えたのかもしれないな」

フエンリルの一芝居と考えながらもこの場は取り敢えず誤魔化そうと袁術と劉備は決めて適当な相槌を打った。

「ですが、油断は禁物ですね。ここはやはり・・・」

「そうだな。孫堅、すまんが今宵の宴に夜姫様は出れん」

「何者かが侵入したのかもしれないというのに夜姫様を宴になど出

せませんよ。どうぞ、お気遣いなく」

二人の思惑など知る由もない孫堅は頷きながら連れてきた部下達に天幕の周囲を見張れと命令を下した。

部下達の肌は荒波の中で育ったためか浅黒く体格的にも並みの雑兵より屈強だったが、それが頼もしい印象を受けるし実力も申し分ない。

この兵達と孫堅自身の実力が董卓を恐れさせるのも無理は無いと袁術は思いながら何れは自分から独立すると思っていた。

証拠など無いが、この乱世だから自分の領土は自分で護りつつ増やす事を考えると独立するのも一つの選択肢と言える。

誰かに仕えるのも良いがそれでは日の目を見れずに終わる可能性も高い。

孫堅は自分に仕えている身だが、長男達も居る事を考えると何時まで仕え続けるか袁術自身判らなかつた。

『・・・この戦いが終わったらどうなる？』

ふと彼はこれからの事・・・董卓を倒した後を考えてみた。

董卓を倒せば再び漢王朝の力が戻るといふ簡単な事は起こらないのは平民でさえ判っている事だ。

漢王朝は既に民達から見れば悪なのだ。

宦官に血筋関係で役職に就く者たちが繰り広げる派閥争いから始まったが、董卓の登場でそれは末期だと物語る事になった。

その董卓を倒したら連合軍は自然と解散になるが、夜姫はどうなる？

今は自分が保護しているが、本来なら劉備が彼女を保護しているのが正確である。

しかし、夜姫を自軍へ引き入れたいという気持ちは連合軍の将たち全員が持っているし董卓もまた同じ事だが恐らく漢王朝にもこの情報伝わっているかもしれない。

『・・・“耳だけ”は良いからな』

現漢王朝を支配しているのは董卓であるが反乱勢力は自分達を含めて幾つもあるが、その中には宦官も居る。

その宦官達は権力に対して飽くなき欲望を持っていると同時にどうやってか知らないが隠している情報も知っているのだ。

恐らく金などを掴ませて間者を放っているのだろうが夜姫の存在を知れば自分達の手駒とするのは明白だった。

奴等から夜姫を護るには今の劉備では不可能であると断言するしかない。

かと言って自分が表だって劉備を擁護するとまた将たちから悪態を突かれる・・・

しかし、と彼は思った。

『夜姫様を護る為なら構わない』

道化とかいう謎の人物にも言われた。

夜姫を護る為に自分と劉備は悪役になつてもらつ、と………

恐らく夜姫が都へ帰るまで自分達は悪役を演じなければならないが、それで夜姫が無事なら構わないと袁術は思った。

そして思考を中断し夜姫の天幕へと戻つてみると彼女はフェンリルの頭に手を置きながらスヤスヤと寝ていた。

「やはりまだ疲れていたのですね」

劉備が夜姫を見ながら小声で言った。

「そうだな。しかし、綺麗な寝息だ」

劉備の言葉に袁術は頷きながら夜姫の寝息に心が安らぐ気持ちだった。

「本当ですね……それに比べて何で私の娘は………」

孫堅が二人の言葉に頷いたが、途中からは自分の娘を言い始め二人を驚かせた。

「そう言えば、そなたには長男と次男の他に娘が一人いたのだったな？」

「はい。ですが、兄の影響が強いのか男勝りな性格でして……何であんな性格に育ったのかと思わずにはいられません……」
嘆息しながら語る孫堅は娘の性格に難ありと告げている。

「私は子を持った経験が未だに無いが、子を持ってどうだ？」

「愛おしい存在です。そして自分の血を受け継ぐ次世代という感じですね」

孫堅は袁術の言葉に産まれたばかりの我が子を抱いた感覚を思い出すように語り夜姫を見た。

「夜姫様のご両親もきつと夜姫様を愛おしく育てた事でしょう」

そつでなければこんなにも優しい性格でない訳がないと断言する孫堅に二人は頷くが……

“それがまったく違うから世の中不思議だぜ”

誰かの声がするも誰にもその声は聞こえなかった。

“姫さんの両親は姫さんを愛していなかった。それ所か憎んで殺そうとしたから酷い話だ”

“それは誠か？”

また誰かの声がするも誰にも聞こえなかった。

“ ああ。だから、爺が姫さんの両親役なんだよ ”

かつて酒の席でこう語ったらしい。

『 私の両親は私を心から憎悪し隙あらば殺そうとしていたわ。それこそ湖で溺れた時なんて助けようとせよとせずによ。どうかこのまま溺れ死んでくださいと願っていたからね 』

酒を飲みながら昔話をする彼女の瞳はとても暗く先が見えない程に暗かったらしい……………

“ ……なぜ姫君を憎みあまつさえ殺そうとしたのだ？ 仮にも我が子だろ ”

信じられないと片方の声は言う。

“ 我が子だろうと平気で殺す親だって居る。それは見ただろ？ この腐った世界でな ”

声の主は酷くこの世界に失望している感じだったが否定できない面がある。

“ 確かに……………神でさえ我が子を殺そうとした事もあるのだからな ”

“ その通りだ。だが、姫さんほど酷い目に遭った女もそう居ない ”

実の親からは殺され掛けて、身も心も捧げて忠誠を誓った相手には利用されるだけ利用されて殺され掛けた、更に好きな相手にも同様の目に遭わされたのだから……………

“なぜ姫君だけが、と思う。姫君ほど優しい方は居ないだろうに……”

“それが姫さんの運命、と言えばそこで終わりだ。まあ、そんな道を歩んで来たからこそ好かれるんだけどな”

“それもそうだな”

“で、さっきのあれは芝居か？”

“そうだ。まだ起きたばかりだというのに宴になど出では身体に毒だ”

まったく悪びれた様子を見せない口調に片方は嘆息した。

“それを聞いたら姫さんは怒るぞ”

“知られなければ問題ない。違うか？”

“いや……世の中知らない方が幸せってやつもあるからな。とは言え劉備と袁術は何となく気付いているようだな”

“劉備の方は学が無いと聞いていたが、生き残る為の術は心得ているようだな”

“それが無ければ蜀を建国もとい奪う事なんて出来ないさ”

その通りである。

劉備玄德は蜀の王であるが元々は益州の地方官にして蜀の礎を築い

た劉焉りゅうえんの息子である劉璋りゅうじやうから奪い取ったものだ。

国を奪うには学などが必要であるが、それは人心を掴むなど様々な分野で求められるが劉備にはその学というものが無い。

それなのに蜀を奪い29年間も維持できたのは生き残る術と言つものを心得ていた証だ。

“その言い方だと学が無くても人は生きていけると言っているように聞こえるが？”

“実際その通りだぜ。学が無くても人間は生きていける。姫さんだって学はあるがそれ以前に経験や本能で生きて来たんだ”

“老龍から教育されたのだから？”

“されたが、やはり生まれ持ったの才能が強い”

“そうか。流石は我等が姫君だ。ああ早くまた貴方様と戦場を駆け巡りたいです”

昔のように・・・馬に乗る貴方様を追い掛け襲い掛かる敵を爪牙で切り裂き噛み砕いて血の雨を降らしたい・・・

“そう焦るな。まだ先はあるんだ”

“待ち遠しいな”

“俺もだ。なあに先はあるが・・・また直ぐにでも血の雨を降らせろ”

何か近く起こるような言葉を投げながら声は互いに笑い出した。

それが酷く幼くて純粹に聞こえるが、何処か恐ろしい笑い声にも聞こえたのは気のせいだろうか？

第十七幕：この身は姫君に

陽人の戦いが終わってから早十日が経過した。

連合軍は呂布たちを一度は退けたから今回は討ち取ってみせると意気込んでいるのだが彼等は致命的な事を忘れている。

呂布達もとい呂布を退けたのはたった一人だ。

たった一人の娘――織星夜姫と言う娘が呂布を退けたのであって彼等は何もしていないと言える。

現在、連合軍は再び攻撃を仕掛けてきた董卓軍と戦いを繰り広げていた。

今回も呂布、華雄、胡軫の三人は来ているがどうも様子が可笑しく将たちは疑問を覚えざるえない。

何せ呂布と胡軫はどういう訳か大人しいと思えるほど攻撃が弱いのだ。

以前なら疾風のように戦場を駆けこちらを蹂躪したというのに今回は華雄が主役と言わんばかりに炎のように苛烈な攻撃を仕掛けて来る。

しかも、袁術・孫堅・劉備の軍隊に、だ。

呂布と胡軫はそれを援助する形だが逆にそれが怖い。

「・・・・・・・・・・」

袁術は敵の軍団と自分達の軍団が戦っている様子を見ながら部下の閻象が言った言葉を思い出していた。

『敵は我々を孤立させる積りです。また孫堅殿を亡き者にしようとしています』

これは頷けると袁術は閻象の話聞いた時に思った。

自分と劉備は連合軍内で妬まれているから自分達を中心に攻撃して頃合いを見計らって引き揚げればこちらの仲を引き裂く事ができる。ならば自分達を執拗に狙うのも頷けるというものだ。

「皆の者、何としても護り切るぞ。そうしなければ・・・“我等が姫君”は欲の塊に蹂躪されてしまうのだ!!」

袁術は他の者たち・・・袁紹たちにも聞こえるように叫び兵達を鼓舞した。

これで彼は他の将たちから恨まれるだろう。

何せ夜姫を我等が姫君と称したのだから自分達の姫だと公にしているようなものだ。

それを聞いたたら嫌でも妬みの視線を袁術に向けるが、それこそ袁術が望んでいた事なのだから良しである。

『これで良い。これで奴等は私を恨む。しかし、劉備達には向かな

いだろう………』

彼はずっと考えていた。

それは夜姫の身の振りだった。

董卓を倒したら連合軍は解散となるが、その時に誰が夜姫を連れて行くかという問題が浮上するのは眼に見えているから焦ったが冷静に考えると一つの答えが見つかった。

自分だけが悪者になれば良い。

その答えが見つかったからは行動が速かった。

自分が悪者となるような行動は実に簡単でこんな何気ない一言でも将たちから反感を買うのだから。

現に腹違いの兄弟である袁紹などこちらを睨み斬り殺す気が見え見えだったから他の将達も同じだろう。

それに満足しながら袁術はどうも呂布と胡しんの動きが怪し過ぎるので隣に居る閻象へこう言った。

「背後の兵達に警戒を強めるとっておけ」

「御意に。しかし……本当に宜しかったのですか？袁紹殿を始め殿を殺そうと皆が睨んでおりますよ」

「それで良いのだ。それより急げ」

「・・・はっ」

閻象は間をおいてから頷くと急いで馬の腹を蹴り陣の背後へ向かった。

『本当に良かったのだろうか？』

馬を走らせながら閻象は自分の主が行った行動に疑問の余地を持たざるえなかった・・・というのも袁術はこれまで・・・改心する前など致命的な手を何度も打って来た過去がある。

今度の手もまた致命的な手であると閻象は思うのだ。

何故か？

それは袁術の急速とも焦りとも言える行動にあるのだが、これは袁術だけに責任を問うていてのではない。

袁術は夜姫の為なら自己犠牲を厭わないという以前からは信じられないほどの性格になった・・・これは良い事であるが彼はただの男ではないから困るのだ。

彼は袁家の嫡男であり総大将の一人でもあるからここで下手に他の者と矛を構えた感じになるとこれからの事に支障を来たす。

それを彼自身が知らない訳ないのだが、やはり夜姫の事を考えてあも前が見えない行動を取ったのかもしれない。

この戦い・・・董卓を倒せば連合軍は解散となるが漢王朝の復権が叶うのか？と問われたら否である。

恐らく本当の意味で乱世は董卓が倒れた後であると閻象は考えており、そんな中で夜姫が狙われるのは当たり前と言えば当たり前だ。

そうなると彼女を護るのは今の所だが袁術本人と劉備になるが、二人揃って恨みを買えば余計に危なくなると彼は考えた結果・・・敢えて自分を犠牲にしたというのが妥当な答えか。

『良い事ではあるのだが、もう少し私に相談をしてから行動して欲しいものだ』

自分は袁術を一番に考えている部下と自負を持っているし周りもまたそう思っているのだから、もう少し自分に相談してくれても良いと思ってしまうのは当たり前だ。

しかも、こういう大事な相談なら尚更で良い歳した大人なら判るだろうに・・・

『身体だけは大きくて中身は子供、か・・・袁紹殿の言葉はある意味当たっているが袁紹殿もまた似ている所があるからな』

腹違いでも血は争えない、というのが現状だなと閻象は思いながら背後に構えさせた兵達の所へ向かった。

背後にも兵達は居るが前方に比べれば数的には少ないし陣形なども甘い部分があるから、ここを突かれたら・・・それこそ戦場を風のように疾走する騎馬隊ならあっという間に後方から挟み打ちに出来る。

袁術が背後を警戒させるのも判るがもう一つの理由もある。

袁術の陣には一人の娘が黒い毛の狼と共に居る・・・天の姫こと織星夜姫だ。

戦が始まれば皆が出てしまい手薄になる。

現に夜姫は数人の護衛だけで護られているのが現状で・・・もし、背後を突かれてしまえば夜姫もまた危険に曝されてしまうから彼が背後を気にする理由も頷けるのだ。

閻象が来ると兵達は顔を向けて一礼してきた。

本来なら身体ごと向けるが、顔だけを向けていざとなれば直ぐに対応できるようにしている積りなのだろう。

「こちらに問題は？」

閻象は背後を護る兵達の

「ありません。夜姫様の陣も今の所は問題ありませんが、どうかなさいましたか？」

「ここを突かれたら後方と前方から挟み打ちにされる。どうも敵の様子が可笑しいのだ。だから、それを殿は怪しいと思ったのだ」

それを聞いた兵達はなるほど納得し夜姫の居る天幕へ視線を向けた。

「殿は変わられましたね。これも夜姫様の仁徳ですね」

「そうだな・・・ん？敵襲！！」

閻象は頷いて前を向いたが、遠目からだ馬に乗った兵達がこちらへ突っ込んで来るのが見えたので迎撃態勢を取らせた。

「皆の者なんとしても護り切るぞつ。そうしなければ我々は終わりだ！何より夜姫様を護らなければ我等は男として失格だ！！」

腰から剣を抜いた閻象は兵達に怒鳴り士気を鼓舞し敵をしてみる。

人数は砂埃で判らないが大人数と見て良いだろう。

下手に見積もって痛い眼遭うのは御免だが、大人数と見積もって討てる敵を討たなかったのも御免であるが。

『砂埃で眼を攪乱する、か・・・董卓がやりそうな事だな』

董卓はこれまで自分が知る限り奇策を用いており例を上げるなら“^{せいぎょつ}西羌”との戦いだ。

この西羌は中国西北部に住んでおり度々だが漢王朝に逆らい戦いを挑む事があった。

董卓はその者達と若い頃は知り合いで宴などを共にしていたとも聞いている。

しかし、王朝に任せ始めると彼等とも戦うようになったのだが、ある戦で彼と彼の軍団は数万もの敵軍に囲まれてしまった。

数万相手に戦い切り抜けるのは厳しいし援軍が来るまで籠城するに

も食料が少なくなつて来て、このままでは飢えと戦いで全滅してしまつという事態に陥つたのだが董卓は魚を取る振りをして川を堰き止め水を溜めた。

そしてその止めた堰の下を全軍で潜り抜け包囲から脱出すると堰を戻し敵が追撃できないようにし無事に帰国したのだ。

この時の戦で六師団の内五師団は敗北したのだが董卓の軍だけは大きな損害も無かつた………

この例で判ると思うが彼は人が思い付かないような策を弄して戦つのだが、独創的な部分だけでなく兵法書の戦い方も知っている。

ある戦では上官に兵法書通りの戦いを促したが上官はそれを退けて臨機応変に戦い大勝し彼の戦い方を的を射ていないと言つた事もあるのだ。

話を戻すと彼……董卓は兵法書も読み武勇にも優れ異民族からも恐れられると同時に尊敬されるという異例の男なのだ。

その男ならこんな策を考えるのも頷ける。

『……難しいな』

閻象は砂埃で前がまつたく見えない事に焦りを覚えた。

これでは敵がどれだけの数で、どれだけの装備なのか、どんな陣形なのか判らないし援軍を呼ぼうにも向こうは向こうでこちらに合わせたように激しい攻撃をしてきたから無理に近い。

『・・・不味い。不味いぞ。これならもう少し兵を増やすべきだったか』

背後を疎かにし過ぎたとは語弊があるかもしれないが、せめてもう少し兵を増やしておけば良かったと後悔する。

だんだん砂埃と共に馬の蹄音が近くなってくるが正確な数は把握し切れない。

それが兵達の恐怖を駆り立てるのか閻象に言われた言葉を忘れ逃げ出したい衝動になっている・・・

「・・・何をうるたえているの？貴方達」

ふと声がして振り返ると夜姫が黒い狼・・・フェンリルを従えて立っていた。

「夜姫様。ここは危ないですから、どうぞ中へ・・・」

閻象は夜姫を天幕へ戻そうとしたが瞳の色が月の色になっているのを見て続きを言えなかった。

『この眼は・・・』

何度か聞いた事がある・・・夜姫は時々だが月の瞳をする、と。

纏う空気もまた違い何処か張り詰めている気がするのはいのせいだろっか？

「・・・砂埃で正確な数を誤魔化す・・・小手先の策ね。とは言え

中々の頭でもあるけど甘いわ」

フェンリルと夜姫が言うとフェンリルは兵達の間を走り抜けて息を大きく吸い出すと・・・吐いた。

まるで突風のように砂埃は消えて行き馬の尾に縄で縛った木を引つ張る敵兵が見えたのだ。

数は多くなく今の兵力でも十分に対処できる。

敵兵は突然の突風に啞然としながらも、もうこの手は使えないと把握するやそのまま突撃を開始した。

恐らく砂埃を上げて敵陣に突っ込み縦横無尽に駆けて混乱させる積りだったのだろうが、もう駄目だと判るやそのまま突撃する・・・

「・・・勇敢ね。でも、同時に愚かでもあるわ」

そう言つて夜姫は両手を掲げた。

光が包まれると同時に細長い棒が夜姫の手に握られたではないか。

何だ、あれは？

と誰もが思う中で夜姫はその棒の尻を肩に当てると半円が描かれた金属部の中に手を入れ、その中にある小さな突起を引いた。

轟音が鳴り馬に乗っていた敵兵の一人が頭から血を流し後ろに倒れ馬もまた轟音に驚き暴れ出し統制が執れなくなる。

「全員、敵を馬から引き摺り降ろして仕留めなさい」

まるで將軍のように夜姫は厳しい声で兵達に命令し兵達はそれを聞いて本当の將軍に命令されたように急ぎ足で敵軍に突っ込み馬から引き摺り降ろして敵兵を討ち取った。

「や、夜姫様、貴方様は……………」

「これで背後は問題ないわ。袁術に言いなさい。背後は問題ないから前方に力を注ぎ敵兵を討ち取れ、と」

「え、あ、あの……………」

「何をしているの。速く行きなさい。敵は待つてくれないわ」

行かないなら自分が行くと言いそうな勢いに閻象は急ぎ馬の腹を蹴って袁術の所へ向かった。

「あれが夜姫様か？」

閻象は夜姫の変わり様に驚きを隠せないまま袁術の所まで行き、袁術に事の次第を伝える。

「……………そうか。全員、前の敵だけに集中しろ。後ろは“我等が姫君”が撃退して下さった。我等も負けてられないぞ！！」

「おお！！！」

と袁術は兵達の鼓舞をしてから閻象に顔を向けた。

「そなたは引き続き夜姫様の護衛をしる。戦いが終わったら私も行く」

「御意に。その時にお話をしましょう」

夜姫様の事を……

「無論だ。そなたも何れは知ると何処かで思っていたからな……」

「……では」

閻象は一礼し再び背後へと戻った。

背後では夜姫が先ほどの棒を持たずに大太刀を鞘に収め地面に突き刺して仁王立ちしており傍らにはフェンリルが控えている。

まるで將軍だ。

何万という軍を率いて戦況を見守り指揮する將軍に見える。

「夜姫様、ただいま殿に伝えて参りました」

「それで袁術は何と？」

「我等も負けていられない、と仰っております」

「そう……閻象」

「はっ、何でしょうか？」

閻象は馬から降りて夜姫に近付いた。

「私を、貴方は・・・軽蔑する？」

「軽蔑、ですか・・・？」

とつぜん言われた言葉に閻象は眼を丸くしながら訊ね返す。

「ええ。こんな女だてらに剣を握り戦場に立つ私を貴方は、袁術達は軽蔑する？」

「いえ。ただ、いきなりの行動でしたので驚きました」

「・・・そう。軽蔑、しないの・・・」

「いけませんか？」

夜姫の言葉に閻象は何か疑問を感じて訊ねると彼女は顔を向けて閻象を見た。

月の瞳は真っ直ぐに自分を見ており汚れ一つ無い澄んだ瞳だ。

「・・・何で私を軽蔑しないの？私は・・・いえ、何でも無いわ」

さっきの言葉は忘れて、と夜姫は言いました顔をそむけた。

「所で夜姫様、少し話を訊いても宜しいですか？」

閻象は夜姫の様子を不審に思いながらも話題を変えた。

「……話しなさい」

「では殿を……我が主である袁術様をどう思われますか？」

「袁術を？ そうね……私の胸を鷲掴みする位の強引さは良い所ね
そこが良い所なのか、と突っ込みたい閻象はそれを留めて訊ねる。

またこの話を聞いた兵達はギョツとしたが、閻象の睨みで聞いていない振りをした後で口止めされるのは眼に見えていた。

閻象は気を取り直し話を続ける。

「殿は董卓を倒した後で起こるであろう事を想定し自分を悪者にしようとしております」

「自分を悪者？」

「はっ……貴方様を護る為にご自身を悪者に仕立て上げようとしているのです。私は何の相談もされませんでした。その事に関してどう思われますか？」

「それはいけないわね。貴方に相談しないなんて……何より私を護る為、というのが気に入らないわ」

「……」

「私は、私は……自分がかつて戦ってきた事を正しいと思っていたわ」

夜姫は空を見上げて独白を始めた。

「でも、それは間違っていたわ……私は間違っていた。ううん……ただ“利用”れただけだったの」

利用されただけ？

「どういう意味ですか？」

「そのままの意味よ。皆……私を利用したの。そして用が無くなつたから捨てられたの……身も心も捧げたのに、ね」

「それは……」

閻象は言おうとした。

それは誰かに利用された揚句に裏切られたのか、と……

「私は死なず部下達が死んだわ。私は、大切な部下達を護れなかった……そして部下達の汚名返上に長居時間を掛けてしまった」

フェンリルが悲しそうな瞳で夜姫を見上げ夜姫はフェンリルの顔を撫でながら独白を続けた。

「……この子達の力も借りて汚名を返上したけど時間を掛け過ぎたわ。そして蔑まされ続けたわ。それこそ……」

何か言おうとしたが、またしても夜姫は言うのを止めた。

まるで言いたくない様子であるが、言わなくてはならないと言う気持ちも含まれている複雑な様子だった。

「夜姫様、貴方様がどんな人生を送ったのか私ごとき人間には理解できません。ですが、これだけは言うておきます」

殿が命がけで貴方を護ると誓ったのなら私もまた貴方様を命がけで護ると誓いましょう。

「部下であるから、という理由もあります。ですが・・・貴方様を見てそう誓いたかったのです」

宜しいですか？と閻象は訊ねる。

「・・・私を護って貴方に何か得があるの？」

「単なる自己満足ですね。ですが、自己を満足させられない者に他人を満足させられないと考えているので良いのです」

「・・・変わった男ね。でも・・・嫌いじゃないわ。そういう男は」

眼を見ずに夜姫は言い続け閻象もまた敢えて何も言わずに片膝を着いて頭を垂れた。

『この身は貴方様の為に捧げましょう・・・』

第十八幕：姫からの報酬（前書き）

おお、もう何時の間にか二週間も更新をほったらかしにしていた！！

申し訳ありません・・・一応一週間に一話の更新を目指しますが、
3,000字がよくて関の山な感じです。（汗）

第十八幕：姫からの報酬

背後からの奇襲が失敗に終わるや否や敵は退却して行った。

どうやら背後の奇襲が失敗するか成功するかで攻撃を続行するかどうかを決めていたらしいがどうも解せない。

何で袁術、孫堅、義勇軍しか攻撃せず自分達には攻撃して来ない……？

と他の将たちは思ったが退却する時に敵が彼等を褒め称えた事そんな疑問は打ち消され代わりにドス黒い嫉妬という気持ちが沸き起こった。

敵から称賛されるという事はそれだけの実力を誇っていると取れる。

実際の所だが孫堅と義勇軍は自分達より勇敢に戦っているし最近では袁術もまた何が遭ったのか目覚ましい活躍をしているではないか……一つの答えが出て来るのは短い時間だった。

やはりこれは天の姫が寵愛しているから。

何度目の答えだと思つかもされないが彼等から言わせればそういう一つの安直ながらも有り得る答えを導くのだ。

性質が悪いと言えば性質が悪いのだが、この場合は間違いではないしかと言って当たりとも言えない複雑な状況である。

戦場と言う女とは縁が無い場所もまた複雑であるからそうなのだろ

うが………

「……胸糞悪いな」

反董卓連合軍の総大将の一人であり総大将の中の頂点に立つ男・
・袁本初は天幕の中でギリツと唇を噛み爪を噛んだ。

唇を噛んだ後で爪を噛むのが癖だが、これをやるという事はそれだけ頭に來ている証拠で誰もこの状態で居る彼には近寄らないようにするのが暗黙の了解である。

「くそ……何故だ？何故……夜姫様はあんな出来そこないの袁術に寄り添う………」

また唇を噛んだ後に爪を噛み袁紹は理解できないとばかりに端正な顔を粘土みたいに歪ませた。

彼の腹違いであるが弟である袁術は妾の子である自分とは違つが、自分に皆は当主としての器があると押しつけて袁家の当主になった。

妾の子と蔑まされ若い頃は荒れたものだが、今はこうして反董卓連合軍の総大将である彼だが……やはり未だに袁術との仲は悪い。

それは袁術が色々と突っ掛かって來るのも原因であるが逆に彼もまた意趣返しとばかりに応じるのも原因でありどっちもどっちなのだ。

そんな袁術だが自分に比べれば遙かに劣る存在で取るに足らない道端に転がる石の一つと彼は捉えていたが今は違つ。

今は……八つ裂きにしたいほど彼に嫉妬を抱いている。

『何故だ・・・なぜ夜姫様は袁術などに寄り添う・・・私の方があ奴より優れている。孫堅もそうだ。なぜ袁術に従う？私に従えばもっと活躍できる場を与えてやると言っのに・・・』
極めつけは彼の人物だ。

自分と同じく遊侠の道歩んだ男――劉備玄德。

彼は自分と同じ遊侠の道を歩み弱者を助ける男であり漢王朝復興を目指している。

袁紹を始めとした者から見れば出来る訳が無い夢と見えるが、それでも彼はそれを成し遂げようとしており袁紹も評価していた。

それなのにどうだ？

今は袁術に従っている。

何故だ？

以前なら水と油の関係で決して交わる事は無かったのに・・・今は交わっており共に歩んでいる。

彼の予想では時期に袁術の下を離れてまた旅に出る。

そこに夜姫も従うかどうかは不明だが、もし一緒ならば自分が面倒を見ようと買って出る予定だ。

劉備自身の他にも関羽、張飛、諸葛亮という豪傑と知者が居る上に

天の姫まで加わるのだから嬉しい悲鳴を上げたい。

それが・・・どうも可笑的い。

可笑的いというのも袁術が見るも変わり始めているのだ。

その上劉備もまた自分から離れて袁術に従い夜姫もまた袁術を支えている・・・ように彼には見える。

それが我慢できないのだ。

かと言って無理に自軍へ引き込めば諸々の将から責められるのは眼に見えているから強硬手段など言語道断である。

それでも・・・

「胸糞悪いな」

そう言わずにはいられない嫉妬を抱かずにもいられない。

「殿。またそのような事を・・・」

天幕が開き入って来るのは男が一人だった。

年齢は袁紹より年上で如何にも他人に媚び諂う容姿をしているし声もまたそういう印象を受ける。

「何しに来た。“郭かくと”よ」

袁紹は天幕に入って来た男・・・郭かくとを見て歪んでいた顔を更に歪

ませるが郭図は笑みを浮かべたままだった。

この男――郭図は字を公則と言い靈帝の時代に鐘？・荀？・荀攸の三人と共に潁川の俊才として高く評価され地方の計吏――会計の官使となつた後に中央へ推薦された人物である。

「殿。そのようにお怒りになられても事態は変わりませんよ」

郭図は如何にも媚びるような笑みを浮かべて袁紹に話しかけるが逆にそれが他人の神経を刺激するという事を彼は知らないでいる。

「何の用だ？」

袁紹は眉を更に顰めながら訊ねる。

「天の姫様ですが、袁術殿に何か惹かれる物があるのではないでしようか？そつでなければあのような方に寄り添う事はない筈です」

「あいつに惹かれる物？あるのか。そんな物が」

袁紹にとって袁術に惹かれる物は無い。

寧ろ欠点だらけの人間と言う考えを持っており郭図の言葉は理解できなかつた。

「あるからこそあの方に寄り添っているのではないかと。もしくは余りに見過ごせない方だからこそ寄り添っているのかもしれないですね」

「どつという事だ？」

「そのままの意味です。女性というのはああいう情けない男にはついつい世話を焼きたがるものと聞いた事があります」

「それなら頷けるな」

画に描いたような欠点だらけの駄目人間である袁術に世話を焼きたがる。

これには袁紹も納得できるのか頷いた。

「それで・・・それを言う為に来た、という訳じゃないんだろ？」

「はい。周りもそうですが・・・義勇軍を疎ましく思い始めました」

「・・・・・・・・」

袁紹は無言で椅子に座り込んだ。

義勇軍はその名前通り義によって集まった者達だ。

普通なら感動する所だが今の世は乱世だ。

義の為に集まるとは考え難い・・・何か企んでいるのでは？と考え
てしまう。

何より彼らの中には乱世の先駆けとも言える黄巾の残党が居るのも
怪しまれる原因であるが、何も彼等だけが黄巾の残党を自軍に取り
込んでいる訳ではない。

曹操などは自身の親衛隊……“青州兵”なる精銳は黄巾軍約三十万人と非戦闘員約百万人から精銳を選び作り上げた。

袁紹自身も黄巾の乱に参加した兵を取り込んでいたりするからこれだけで劉備達を責めるのはお門違いと言える。

しかし、彼等は身分が高いのに対して劉備は身分が低い事が原因でこども煙たがられているのだ。

「殿。どうさないますか？ここは將たちの話を聞いて義勇軍を追い出しては如何でしょうか」

「それで夜姫様も義勇軍に付いて行ったらどうする？」

言い出しつぺの自分が袋叩きにされるのは眼に見えているから袁紹は鼻で嗤ったが郭図は笑わなかった。

「それは無いでしょう。何せ天の姫ですから時流を見る事には長けている筈です」

「というと劉備には付いて行かない、と？」

「はい。劉備に付いて行っても何の利点もありません。寧ろ危険で一杯です。そんな人物に果たして付いて行くでしょうか？私なら付いて行きません」

自信満々に郭図は言うも袁紹はそうではなかった。

確かに彼の言う事には一理あるも夜姫は自分達が想像する以上に行動力がある上に突拍子もない行動を取る事があるから確信が得られ

ない。

何よりこの男が言った事を実行したとしよう。

仮に成功しても劉備達が自分の下へ来る保証は無い。

誰かに取られてしまう恐れがあるし夜姫が天の国へ帰る可能性だつてあるからどちらかと言えば危険な確率が成功する確率より高い気がする。

そんな危険を犯してやる意味があるのか・・・無いと袁紹は思う。

焦りは禁物だと自分に言い聞かせたが、やはり郭図の言葉も捨て難いと思ってしまう。

失敗する確率の方が高い・・・だが成功すれば自分にとって計り知れない益を齎すのは言うまでもない事が彼の決断を鈍らせた。

“優柔不断とは聞いていたが・・・本当に優柔不断だな。 姫さんが嫌うタイプ1だな”

誰かの声がするも誰にも聞こえなかった。

しかし、この場合は良かったのだろうか・・・袁紹本人が聞こえなかったのだから。

「殿、どうなされますか？」

郭図はこの目の前の男が優柔不断である事を嫌というほど身に染みて体験しているから強い口調で訊ねた。

この策……策と果たして呼んで良いのか分からないが、これは彼にとつては自信作と言える物だから却下されたくない一心で強く訊ねたのだ。

「そう、だな……」

袁紹が決めようとした時である。

「失礼します。殿、お話があります」

中に入つて来たのは如何にも武勇に秀でたという顔つきで見る者が見れば「何処ぞの將軍か？」と直ぐに察するであろう体格と風格である。

そして一緒に入ってきた男もまた同じである。

「何の用だ？ “顔良”^{がらうら}、“文醜”^{ぶんしゆう}」

この二人……顔良と文醜は共に袁紹の軍内でも勇猛であると評されている。

どちらも武に関して右に出る者は居ないと言われているだけあつて兵達の信望は偏狭のきらいがある為か余り無い。

特に顔良に到つてはそれが顕著に出ているし文醜に到つては用兵がとてでもないが上手いとは言えないのが原因で兵達からは敬遠されている。

それでも武に関しては引けを取らないから袁紹はこの二人を高く評

価しているのだ。

「はっ。恐れながら義勇軍など引き込まなくとも天の姫だけをこちらへ入れれば良いと思われませう」

顔良が膝を着いて袁紹に言う。

「しかし、夜姫様は劉備を敬愛している模様だ。その男を引き離せば悲しむ」

「何と弱気な事を。そこを殿が慰めれば良いのですよ」

今度は文醜が援護するように言う。

「お二方の言う事は射しております。ここは殿の男を見せる時です」

郭図が止めの一撃とばかりに言うと袁紹は腰を上げた。

「馬を引け。顔良ならびに文醜よ。供をしる」

『御意に』

二人は片膝を着いたまま頷き袁紹が出て行ってから付いて行き愛馬に跨り袁術の天幕へと向かう。

「殿、天の姫は夜姫様と言うのですか？」

顔良が馬に乗り右側を護るように進みながら袁紹に訊ねる。

「ああ、そうか。そなた等は宴に出ていないのだったな」

袁紹は二人が夜警で出ていない事を思い出し謝罪してから説明する。

「織星夜姫という。年齢は20代だ。それから眼が見えない事を忘れるな」

「眼が、見えないのですか？」

「ああ。しかし、弱気を見せない・・・強い方でもある」

袁紹はこれを言う時にもし、自分が彼女の傍に居れば・・・という願望が少しだけ込められていた。

“ そういう所をチラツとさり気なく見せれば姫さんも好くんだがな”
また誰かの声がするも聞こえなかった。

「そうですか。是非とも会ってみたいです」

「夜姫様は誰に対しても会おうし挨拶もする。それこそ雑兵だろうとな」

それを聞いた二人は是非とも会いたいという気持ちを更に強くさせ一刻も早く行きたいと言う衝動に襲われるも袁紹の進みに合わせた。

それが普通なのだが二人にとっては我慢比べに近い状態だったらしい。

袁術の天幕に到着した三人は近くの雑兵に袁術に会わせると言うが

雑兵は何かを隠すような素振りを見せる。

「何を隠している」

文醜が腰から剣を抜いて雑兵の喉仏に当てた。

「言え。何を隠している」

「そ、そそそそ、それは……………」

「言わんと……その首が胴と泣き別れになるぞ」

「ひ、ひい!!」

雑兵は悲鳴を上げて履いていた服の部分が湿り出した。

「文醜。もう良い。言わぬなら行けば良いだけだ」

袁紹が本当に斬りそうな文醜を止めて馬を進めて後もうっしろという所まで行った時だ。

『や、夜姫様、ど、どうか、止めて下さいっ』

『どうして逃げるのよ。私は貴方に報酬を与えようとしているのよ』

『で、でしたら……え、遠慮しておきます……………』

『夜姫様、ここは抑えて下さい』

『そうですよ。夜姫様。袁術様が勿体ないと言うのですから……………』

・・・』

『貴方達は黙ってなさい。私はこの胸を鷺掴みにした男に言っているのよ』

胸を鷺掴みにした・・・・・・・・・・？

誰が・・・袁術が・・・誰の・・・夜姫の・・・胸を・・・

“鷺掴みにした？！”

袁紹は居ても立ってもいられずに馬を走らせて天幕まで行くと勢いよく入った。

「袁術！！！」

「なっ！袁紹！！貴様無礼だぞ！！！」

袁術はとつぜん現れた腹違いの兄弟に驚きながらも直ぐに怒鳴ったが袁紹も負けていなかった。

「黙れっ。この無礼者が！！！」

袁紹は周りに劉備と孫堅が居るにも関わらず唾を吐く勢いで袁術を責め立てた。

「貴様という男は・・・よりもよって夜姫様の胸を鷺掴みにするとは・・・・・・・・！！！」

「何で貴様が知っている！！！」

「煩い！貴様みたいな男と腹違いとは・・・もう我慢ならん。この場で斬り捨ててや・・・」

「馬鹿な事を言わないで」

今にも腰から剣を抜きそうになった袁紹だが袁術を護るようになつた夜姫が立つた事で阻止された。

「袁紹。ここは入るな、と兵に言われなかった？」

夜姫は空虚な眼差しではなく月の瞳で袁紹を射抜いた。

「あ、その・・・」

「何を言いに来たのか知らないけど出て行きなさい。私はこの男に報酬を与えるの」

そう言つて夜姫は振り返り袁術の顔を両手で固定した。

頭一つ分もある袁術を下から手を伸ばし固定する夜姫は楽器のような清らかな声で袁術に言う。

「袁術・・・私の報酬を受けなさい」

「い、いえ・・・そ、それは・・・」

真正面から顔を固定されて命令された袁術は頷きそうになつた気持ちを叱咤し断ろうとした。

「私からの報酬を断るの・・・益々あなたに報酬を与えなくなったわ」

クスツと何処か大人びいた笑みと声を漏らす夜姫に袁紹は別人を見るかのような気持ちだった。

それとは正反対に袁術は夜姫に顔を固定されているため身動きが取れないでいる。

そして夜姫の顔が近付いていく所で・・・・・・・・・・

「うわっ」

袁術が地面に尻もちを着いて夜姫は忌々しそくに眉を顰めた。

「フェンリル。貴方は私の邪魔をする気？」

二人の間に入ったのは黒い毛を持つ狼・・・フェンリルであった。

フェンリルは無言で夜姫を見上げて首を横に振る。

『駄目です』

そう言わんばかりに首を横に振るフェンリルに夜姫は眉を更に顰める。

「私は貴方の主人よ。そして貴方は下僕。下僕は下僕らしく主人の言う事を聞きなさい」

それでもフェンリルは首を横に振る。

「・・・私に逆らうの。なら・・・覚悟しな・・・」

最後まで言う前に夜姫はクラツと身体を揺らすと倒れた。

それを劉備が支えた事で終わった。

「た、助かった・・・」

袁術は顔を赤くさせながら息を整える。

「殿、大丈夫でしたか？」

孫堅が袁術に問い掛けるが若干・・・棘が含まれているのは気のせい
いか？

「あ、ああ。それより袁紹。何の用だ。兵にはここへ近付けさせる
など命令した筈だ。それなのに何故ここに来た」

袁術は袁紹に弱みを見付けられないようにとばかりに強気な態度を
取って見せるが先ほどの姿を見られては台無しであるのに・・・

「・・・何でも無い」

しかし袁紹は思いもよらずに何も言わなかった。

そしてこの場は罰が悪いのか背を向けて天幕から出て行った。

『何が何だか分からん。しかし後で問い詰めるとしよう』

そう袁紹は馬に跨りながら決意し部下二人が居る所まで戻った。

第十九幕：姫君の力を（前書き）

新年明けましておめでとございます。

ただ今、彼女と蕎麦を啜りながらぐるナイを見していますが面白いです
ね。w w w

去年は色々とあつて皆様も大変とは思いますが、今年が良い年である事を願います。

第十九幕：姫君の力を

袁術の腹心である閻象は戦いを終えた後すぐに主人である袁術の下へ行き夜姫の事で訊きたい事があった。

しかし、どういう訳か・・・曹猛徳の所へ来ていた。

というのも彼が呼び出しを受けたのだ・・・曹猛徳直々に。

『どついう事だ？曹操殿は我が殿を取るに足りない人物と言っていたのに・・・・・・・・・・・・・・・・』

閻象は曹猛徳の考える事が理解できずに疑問を何度も頭の中で浮かべては消して行ったが明確な答えを得ずにいられなかった。

答えを出す前に曹操の陣へ到着し中へ入れられて更に焦りは募るがもう手遅れだった。

「おお、来たか。閻象殿」

天幕から出て来た一人の男・・・曹猛徳。

乱世の奸雄と渾名され北の大国である魏を僅か一代で築き上げたばかりか帝を擁しようと考えている彼の性格を見事に射ている名と言える。

「これは曹操様。わざわざ貴方様が直々に迎えてくれるとは感謝の極みです」

閻象は油断ない眼付きを隠し臣下の礼を取り頭を下げた。

この男に臣下の礼を取るのには癪と言えるが下手に騒動を起こすのも御免被りたい故に取る。

「頭を上げられよ。今日は貴殿に訊ねたい事があつて呼んだのです」

「私に、ですか？」

頭を上げた閻象は分からない顔をしたが本当は何となく察していた。

「左様。まあ、立ち話もなんですからどうぞ中へ」

曹操は温和な笑みを浮かべて彼を天幕の中へ入れるが閻象はその笑みが狡猾な笑みに見えており警戒心を更に強くさせる。

天幕の中に入ると彼の腹心であり片腕である夏侯惇元讓と弟分である夏侯淵が寛いでいた。

「さあ座られよ」

「失礼します」

閻象が腰を下ろすと曹操も腰を下ろした。

「それで私に訊きたい事とは？」

「そなたの主人である袁術だが、連合軍内で浮いているのは知っているだろ？」

「ええ。天の姫であらせられる織星夜姫様の寵愛を一人占めしている、からですね」

「その通り。しかし・・・最近はお備も一緒に一人占めならぬ二人占めと言われておる」

皮肉気に曹操は笑うが閻象は笑わずに神妙な顔だった。

「確かに・・・連合軍内で言えば我が殿とお備玄德殿が夜姫様の寵愛を受けていると見える事でしょうがそれは違います」

「違う？」

曹操はどういう意味なのかと閻象に訊ねた。

「恐れながら夜姫様は一人の男に寵愛を授けるような方ではありません。寧ろ我々全員に寵愛を与える方です。しかし、軍内が自分のせいで乱れる事を悲しんでおられます」

「とうとう？」

「はっ・・・関雲長殿と張益翼殿を御存じと思われませんが、何か変わった様子を見ませんでしたか？」

「あの豪傑二人に・・・そうだな・・・両頬に見事なまでに花が咲いていたな」

曹操は左右を固める夏侯惇と夏侯淵に確認でもするように見ると二人は頷いた。

「確かに・・・誰に殴られたのだ？と疑問に思ったが・・・そうか、夜姫様に叩かれたのか」

夏侯惇が訊ねると閻象は頷いて続きを話した。

「その通りです。お二方の名譽を考えて言つのを憚りましたがこの際ですから言っておきましょう」

閻象は意を決して話した・・・振りをする。

「お二方はご自身の武術に自信を持っておりますが行き過ぎたのです」

故に夜姫が居る為に満足な戦いを出来ないと嘆いた拳句に邪魔と口走った。

「何と・・・」

曹操は驚いた顔をするが夏侯惇に到つては冷静であつたが良く見れば「やはり」という顔を微妙に浮かべていた。

彼は曹操の肩腕だが名将と呼べる器ではないが、武術に覚えはあるし暇さえあれば講師を呼んで勉強するなど熱心である。

何より曹操の忠誠心は極めて高く人を見る眼もあるのは確かだ。

だからこそ関羽の傲慢な所も知っていたのだろう。

そうであれば「やはり」という微妙な顔も頷ける。

「それを夜姫様に聞かれてしまい我が殿を始め劉備殿の怒りも買ったのです」

一時は二人を殺そうとしたとも閻象は打ち明けて曹操を驚かせた。

「しかし、夜姫様はそれを許しました。お分かりですか？」

「・・・身内争いは控えよ、という事だな」

曹操の言葉に閻象は重く頷いた。

「そうです。ですが何の罰も与えないのは信賞必罰を信条とする劉備殿も許しませんし我が殿も許しません。ですから、ああいう罰を与えたのです」

「確かに男から言わせればあのような罰は手厳しい・・・天の姫も中々ですね」

夏侯惇は面白いとばかりに頷くが曹操はそうではなかった。

「夏侯惇よ。あの二人は豪傑だ。その豪傑が女子に平手打ちをされたとあつては余計に不味いのではないか？」

「恐れながら殿。私はあの二人を見くびってはおりません。殿の様に高く買っている訳でもありませんが・・・それでも劉備玄德に従う者達。天の姫の罰であり劉備玄德もそれで許したならもうこの話は無しと思えます」

「うーむ・・・夏侯淵よ。そなたとしてはどうだ？」

「はつ。私も夏侯惇殿と同じ意見です」

「そうか。して閻象よ。夜姫様はそれからどうさなつたのだ？」

「今回の件で夜姫様は今回の件で深く御心が傷ついたので……このように連合軍内で身内争いを続けるようならば……」

「何だ。続きを申せ」

曹操は閻象のもつたいぶつた態度とも言える様子に些か苛立ちを見せながら続きを促した。

「……天の国へ帰られると申し上げました」

それに対して閻象は少しドスの効いた声で言ってみせる。

「天の国へ帰られる、だと……」

曹操が信じられない様子で言い夏侯惇と夏侯淵もまた信じられないという顔つきだった。

夜姫はここへ来たのは落ちたというのが劉備達の説明だったのにこれはどういう事だ？

「後で判った事ですが、このような乱世に来るのは本来ならば無いと夜姫様は言われました」

天は地上で起こる全てを見ながらも力を貸す事は禁じられていると閻象は説明した。

「それはどちらかに力を貸せば確実にその方を勝たせるだけの力があるからです」

それでは駄目という事で力を貸さない・・・ただ見ているだけと傍観主義になつたらしい。

「しかし、このような乱世では泣くのは民。それを夜姫様は我慢できなかつた様子でして地上へ下りたらしいです。ですが、供も連れない所か何も準備しないで来たので眼が見えなくなつてしまつたのです」

「なるほど。で、どうして天の国へ帰られると言つたのだ？」

「はい。董卓という人物を倒す為に皆が一致団結して戦つていたのに自分が現れてからは身内で争うような事態になりました。更には邪魔者扱いされた事が原因です。ですが、どちらかと言えば我々が夜姫様を巡り露骨な身内争いをするのが原因ですね」

口から出まかせを言い続ける閻象だが、彼等にとっては真実と映つたのだろう。

神妙な顔つきで押し黙っていた。

実際の所だが夜姫を巡り連合軍内で身内争いとも言える事が起こっているのは事実だから否定できない。

「・・・分かつた」

曹操は重々しく頷いた。

「これより我が軍は袁術殿と劉備の味方となろう。先ほど他の將たちからあの二人を追い出そうと誘われた」

「やはり、そういう動きがありましたか」

「うむ。二人を追い出し夜姫様をそれぞれの陣に住まわせて誰が良いか決めさせようとしていた」

だが、と曹操は区切った。

「これを知ってはそんな真似は返って自分の首を絞める羽目になるから止めよう」

「英断でございます」

「うむ。話はもう終わったが、今宵は酒でも飲まんか？」

「せっかくのお誘いですがこれより殿とお話があります故に……ですが、今度来る時はまた夜姫様について何かお話を持って参りましょう」

「それは嬉しい申し出だ。こちらも夜姫様の味方になるのだから色々話を聞きたいのだ。色々とな」

何か含みのある言葉に閻象は表情を変えないで心の中で言った。

『……本性を見せたな』

曹操が夜姫に執着しているのは閻象には判っていた。

否・・・誰もが夜姫に執着しているのは判っていたがその中でも強大な力を誇る曹操も欲しがらるだろうと閻象は勘付いていた。

しかし、この言葉を聞いて勘は真実となった。

「ではこれで失礼します」

閻象は曹操達に礼を言ってから天幕を後にした。

「・・・どう思う？元讓」

袁術の“飼犬”が居なくなってから曹操は夏侯惇の字を言い訊ねた。

「そうだな・・・何処までが嘘かは判らないが、天の国へ帰る可能性はあるという事は分かったな」

夏侯惇は顎鬚を撫でながら答えた。

「で、どうするのだ？閻象にはああ言ったがあちらの誘いは断るか？」

「まさか。あちらとも渡りをつけつつ向こうとも渡りをつける。どちらに転んでも大丈夫なようにな」

「流石は殿。やる事がすげえや」

夏侯淵が兄を慕うように素直な感情を出すと曹操は心地良さそうに椅子に背を預けた。

「わしはこれから天下を取る。その為にも夜姫の力は必要だ」

天の力が必ず勝利を齎すならば余計に欲しいと思うのは一武将として当然の考えと言える。

「帝はどうする積りだ？」

夏侯惇が訊ねると曹操は意地の悪い笑みを浮かべた。

「帝は帝だ。蔑ろにはせん。ただ、邪魔をするなら・・・病死してもらおう」

「恐ろしい男だ。そして天の姫もそなたのような男に見染められて憐れだ」

「何を言うか。天下を取る男の妻になるのだ。光栄と思うが？」

「その割には怯えていたではないか。おまけにフェンリルもそなたを警戒していた。動物は正直だからな・・・そなたの邪な気持ちを知ったのだらう」

「高が狼ではないか。群れで行動し弱い物しか殺さない下種な獣だ。その点だが虎は孤高にして誇り高いがな」

「狼が群れで行動するのはそれだけ家族的な意味合いが強い事だ。そして群れで行動し弱い物を選ぶのも確実に仕留められるからだ。実に効率的な集団と思うが？」

「相変わらずわしのいう事とは真逆の事を言うな」

「性分だ。で、これからどうする？」

「閻象が来るのを待つ。それまではあの二人を追い出す方に顔を売る」

「と言つても劉備は諦めないのだから？」

「無論だ。あの男を始めとした者達は全員を我が配下にしたい。関羽と張飛はその筆頭だ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

これを言われた二人は面白くない顔をする。

関羽と張飛・・・劉備に仕える豪傑二人だが、こちらだつて曹猛徳に仕える者だ。

それなのに向こうを高く評価しているような事を言われては面白い訳が無い。

「そなた等も高く買つておる。しかし、劉備は・・・龍だ。今は沼などに棲んでおるが何れは天に昇り我が霸道に盾つく男となるう」

そうなる前に自分の部下にすると曹操は言った。

「龍、か。ではそなたは何だ？鳥か？」

「いいや。虎に翼を生やす。虎は虎らしく地べたを這い蹲るが・・・わしは天下を制する。だからこそ夜姫と言つ“翼”が必要なのだ」

「なるほど。まあ、俺は貴様の部下だから全力を尽くして天の姫をこちらへ引き入れるようにする。しかし、天の姫を悲しませたりするなよ？」

もし、そうなれば天に弓を引くも同然と夏侯惇は釘を刺すように言ったが曹操は高笑いで答えた。

「天に弓を引くならば引いてみせよう。我が霸道は天も貫き何れは全てを物にしてみせようぞ」

“誇大妄想も程々にしろ。この馬鹿餓鬼が”

誰かの声がするも誰にも聞こえなかった。

“天に弓を引いて貫く？馬鹿だな・・・唾を吐いた所で地上に戻って来るんだ。矢だって落ちるぜ。そして最後には自分に突き刺さるんだよ。あんたはそういう「運命」なんだよ”

運命・・・この言葉ほど一人一人の人生を狂わせておいて冷たく絶望させる言葉は無いだろう。

“まあ、俺も人の事は言えない身だ。しかし・・・姫さんは天も貫き月を手に入れた”

天よりも至高にして絶対的な地位を持つ月を手に入れたのだ・・・夜姫は。

“あんたが仮に天を手に入れても姫さんを手に入れる事は出来ないしさせない”

彼女は彼女の物であり自分達の物でもある。

だが・・・誰か一人が彼の女性を物に出来ると言つのならば・・・

“あの平凡を画に描いて従兄弟の影に隠れた地味な坊やだ”

従兄弟が余りに素晴らしい功績を立てた事からまるで表とは縁が無い男が夜姫を独占できる。

“まったく人の好みほど分らない物は無いぜ”

それでも夜姫があを男を好いたと言つのならば自分は全力で応援する積りだ。

“とは言え・・・爺達が大人しくする訳ないよな・・・”

何せ赤子の頃から読み書きを教えたりしたのだから夜姫とは一番付き合いが長いと言つて良いだろう。

そして我が子・・・孫と思えるほど溺愛している。

“幾ら可愛いとは言え恋を邪魔するのは大人気ないぜ”

これまで何度も夜姫の恋を尽く握り潰して邪魔してきた男だから・・・もし、会えば即効で・・・

“八つ裂きにするだろうな・・・「姫様を誑かしおつて!!」とか言つて”

とてもじゃないが付き合い切れぬ。

だが、夜姫の為とあれば仕方ないなと声は自分を納得させるように
言々と途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6881u/>

月の姫と英雄たち

2012年1月1日02時48分発行